

自我を手に入れた少女 達の翼

わんたんめん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボロボロになりながらもただ平和を願って戦い抜けたMS達。

目がさめると自身が人間の肉体を持ち、再び戦火の中へと放り込まれた。

艦娘の皆との出会い、深海棲艦との戦いを通して、彼女達は何を見出し、どう向き合っていくのか――

自我を手に入れたしまった彼女達が行く末は、果たして――

目次

第9話	散策	81
第10話	疑念	88
第11話	発令!!トラック泊地強襲作	96
戦!!		96
第12話	準備、そして告白	103
第13話	強襲!!トラック泊地攻略作	111
戦!!		111
第14話	強襲!!トラック泊地攻略作	119
戦 II		119
第15話	強襲!!トラック泊地攻略作	136
III		136
第16話	強襲!!トラック泊地攻略作	145
戦!!		145
IV		145
第1話	私の名前はヒロ・ユイ	32
24		32
第2話	発見	37
第3話	記憶、そして始動	44
第4話	邂逅	49
第5話	原因	55
第6話	決断	64
第7話	介入	74
第8話	連行	74
キャラ設定		1
お気に入り1000人突破記念		1
7		1

第26話	230	信頼	238
第22話		絶望、襲来	203
第23話		魔の5分間	212
第24話		絶望、再来	219
第25話		月はいつもそこにある	
第17話		祝勝会	154
第18話		陰謀	166
第19話	176	発令、AL/MI作戦	
第20話		残留	187
第21話	194	陽光、TRANS-AM	

第35話	322	進撃、アイアンボトム・サウ	
第34話		カムラン半島にて II	
第33話		カムラン半島にて	311
第32話		鎮守府での日常	302
国			288
第31話		初めての建造、初めての外	
第30話	267	暴走(笑)	276
第29話		始動、佐世保鎮守府	
第28話		着任	257
!?			246
第27話		提督が鎮守府に着任します	

	ンド!!	——	331	第44話	考察、それに伴う不安
	第36話	戦いを呼ぶ者	348	452	
	第37話	怒れる瞳	360	第45話	救援要請
	第38話	S・E・E・D／そのまなざし	380	第46話	作戦は一刻も争う
	しの先には——	——	392	第47話	ガンダム10機確認
	第39話	戦火の先に	485		
	第40話	First encounter	495	第48話	新たなる目標
	enter	——	408	第49話	スウェンとシーブックのそ
	第41話	真実。それは時に鋭い刃	504	の日暮らし	
	に——	——	420	第50話	胎動
	第42話	これからへの選択	429	第51話	激突!!霧の艦隊!!
	第43話	本当の強さとは——	536	第52話	胎動するゼロ
442				第53話	霧の艦隊、その正体、未だ

568	第 5 4 話	不明
	対話の始まり 	552

キヤラ設定

ヒイロ・ユイ（ウイングガンダム）

容姿 『東方プロジェクトシリーズ』より『十六夜 咲夜』で、むすんだおさげを解いて、髪を後ろに腰あたりまで下ろしている。

瞳は緑色、髪色は白に近い銀色。身長はおおよそ165cm。服装はEW時のヒイロ・ユイのようにジーンズにジャケット。前が閉められたジャケットの下は濃い緑色のタンクトップを着ている。

特技はこれといってないが、料理といった家事全般を一流レベルでこなすことができる。言語も堪能であり、基本的にはなんでも喋れる。

基本的に苦勞人。他のMS達や艦娘達、または大本営に振り回されている佐世保鎮守府の提督。

一応、メインの主人公である。ときおり天然ジゴロのようなセリフを言っただけ艦娘達を赤面させる。無論無自覚である。

アムロ・レイ（HIEEEガンダム）

容姿 『インフィニットストラトス』より『篠ノ之 箒』であり、モチーフキヤ

ラとこれといった変更点はない。つまり外見は篠ノ之 箒そのままである。

しかし、性格はどちらかと言うと千冬さん寄り。

身長は175cmと、女性としては高身長。みんなの頼れるお姉さんでありストツパー役でもある。たまに開発になると暴走する時がある。

最近まで実はニューハイパーバズーカを持っていなかった。(42話参照)

服装はロンド・ベルの男性用制服。

フェネクス・ベルナル(ユニコーンガンダム3号機)

容姿 『ひぐらしのなく頃に』より「竜宮レナ」であり、最初の途中参戦キャラ。外見はモチーフキャラとこれといった変わりはない。身長は168cm、『NT-D』と呼ばれる特殊なシステムを搭載しており、それが発動するとアームド・アーマーXCが展開し、サイコフレイムが青く輝いて、目からハイライトが消える。

割とひ弱な部分があるがやると決めたら最後までやる気概を持ち合わせている。

服装はUC0096年時の連邦軍のパイロットの服装。

アリス・スペリオス(EX-Sガンダム)

容姿 『緋弾のアリア』より「レキ」をモチーフとしている。しかし、モチーフキャラと比べて肉体的な部分かなり違っており、謂わば、「成長したレキ」といつても過言ではないレベルになっている。

身長は180cm。胸、腰回り、尻とでるところは出て、締まっているところは締まっているため某まな板軽空母が見たら血涙を流すレベルである。

容姿は明るい緑色の髪色に赤と水色のオッドアイとなっている。しかし、『ALICE E』使用時には両方赤くなる。ただ、このALICEはMS時代の最終決戦時にパイロット達と一緒にメインコンピュータも脱出させてしまったため、補助システムレベルに落ち着いている。使用時に目が赤くなるのはその名残。

機械的な反応をしがちだが、どうにか表情を表に出そうと頑張っている。(本人談)
ガロード・ラン(ガンダムDX)

容姿 『戦姫絶唱シンフォギア』より「雪音クリス」をモチーフとしている。

基本的には明るく、人当たりのいい性格をしているが、ときおり人が変わったかのように清廉な雰囲気を出すときがある。ただしそのような雰囲気の際は大抵本人にはその時の記憶はない。

身長は165cm。人当たりの良い性格ゆえか、割と駆逐艦に好かれている。

最近、武装面で難があることに気づいたのか武装を新たに作った。

服装はパイロットのガロードのいつもの格好。

刹那・F・セイエイ(ダブルオーライザー)

容姿は『戦姫絶唱シンフォギア』より「風鳴 翼」をモチーフとしている。

口数は多くはないが、喋る回数が少ないわけではない。

近接戦闘術では佐佐保鎮守府の中で右に出る人はいない。

GN粒子をふんだん使うトランザム状態時には目が金色に輝く。

身長は170cm。たまにガンダムの単語を聞くと体が勝手に反応してしまう時があるのが悩み。

ハイネ・ヴェステンフルス（ハイネ専用デステイニーガンダム）

容姿 『戦姫絶唱シンフォギア』より「天羽 奏」をモチーフにしている。

MS時代の記憶が無いため、ある意味一番の最年少。だが、元々のセンスが高かったのかかなりの戦闘力を有している。

姉御肌だが兄貴肌だかはわからないが艦娘達からは大方好かれている。

感情が爆発したりすると『SEED』が発動し、目からハイライトが消え、戦闘力が爆発的に向上する。

身長は173cm。服装はザフトの赤服である。

キラ・ヤマト（フリーダムガンダム）

容姿 『インフィニット・ストラトス』より「シャルロット・デユノア」をモチーフにしている。

佐世保鎮守府内で一番機械に詳しい。ただいわゆるソフト面がメインなため、肉体労働はそれなりに苦手。体力もそれほど無いようで、運動を心がけている。ハイネが自分に何か恨みでもあるんじゃないかと勘違いしていた早とちりさん。

身長は169cmで、服装は地球連合の青い制服。

シーブツク・アノー（クロスボーンガンダムX1改）

容姿 『Fate/Apocrypha』より赤のセイバーことモードレッド

金髪のを髪を短くポニーにまとめた女性。基本的にガロード程ではないが明るく振る舞い、みんなから頼られる存在になる。

武装は近接攻撃に特化しているため、刹那と一緒にペアを組んで仕掛けることが多い。彼女が羽織っている『ABCマント』は入渠すると復活する。

MSの時は海賊部隊、『クロスボーン・バンガード』にいたが、およそ海賊らしくない振る舞いや言動に時々驚かられる。

服装はキンケドゥ・ナウの私服姿。

スウエン・カル・バヤン（ストライクノワール）

容姿 『緋弾のアリア』より神崎・H・アリアのツインテールを銀色にした髪色。

MS達の中では一番身長が低く、駆逐艦より少し大きい程に落ち着いている。

その身軽さを生かして相手を翻弄していく戦闘スタイルが得意。

MSのころはコーディネイター憎しの部隊に入っていたが、ある女性との出会いでコーディネイターにも色んな人がいることを学び、改心した。

普段の言動もかなり大人びているため、駆逐艦からはかなり一目置かれている。

特に某暁型一番艦からはかなりライバル視されている（勝手に）

本人は一切気にも留めていない。

服装は地球連合の制服を灰色がかった黒色に染め上げた服装になっている。

お気に入り1000人突破記念

始まりはヒイロに当てられた一通の手紙であつた。

手紙の封を切り、内容を読み上げるヒイロ。

「……大淀さん、『観艦式』とは一体……?」

手紙に書かれてあつたのは大本営から佐世保鎮守府に対し、観艦式を行つて欲しいとの通達であつた。

観艦式という聞きなれない言葉にヒイロは大淀に尋ねた。

「観艦式というのは端的に申し上げておくと、軍事パレードですね。」

精強な海軍の力を行進して見せることにより味方の指揮などをあげる、そんな意味が込められています。」

「軍事パレードですか……。艦娘達を海の上で演習させたりするパフォーマンス、といったところでしょうか?」

「概ね、そのような認識でよろしいです。しかし、ここ、佐世保鎮守府は土地を借りて作られたもの。そのお礼も兼ねて、一般の人々もここに入れることになっていきますので、軍事パレードというより……。」

「お祭り・・・ですかね？」

「お祭り・・・ですか。」

大淀の言葉にヒイロは考える素ぶりを見せる。

観艦式自体はいつでも構わないとの内容のためヒイロは大淀やアムロ達と共に観艦式について話し合うことにした。

観艦式の通達を受け取ってから一週間、艦娘達の間で観艦式の噂がまことしやかに伝わっていた。ちなみに特にバラしそうな青葉には間宮券で先に手を打っておいた。

「それじゃあ、だいたいの案はまとまりましたね。これから大変になりますね。色んな意味で。」

「艦娘の皆にとつて貴重な経験になるといいな。」

アムロがはにかみながらこれからの観艦式について期待を込めた口調で語る。

それに釣られ、ヒイロも表情を笑顔にする。

「なりますよ。私達でさえ貴重な経験になると思っているんですから。」

艦娘達は講堂に集合していた。ヒイロから招集の命令が下ったからだ。

最近、観艦式についての噂が広まっているため若干そわそわしている雰囲気の中、講堂のステージにヒイロが現れる。

艦娘達がいつものごとくヒイロが見えた同時に敬礼をする。

そして、ヒイロが合図を出して座らせる。

「えっと、今回集まっていたのは特に作戦という訳ではないです。」

艦娘の間ですこしばかりの期待の入った様子がヒイロの目に入る。

「……でもある意味大事な作戦なのかな……。」

ヒイロがそんなことをいうと、今度は困惑の様子が艦娘達で広がる。

「……この佐世保鎮守府は一般の敷地を借りて建てられています。借りている以上、わたし達は何かしらの礼をここに住んでいる人達に返さなければなりません。というわけですね。」

「今回、佐世保鎮守府では『観艦式』を決行します。」

艦娘達の間でどよめきの声がちらほら上がる。しかし、それは主に駆逐艦や軽巡洋艦であつて、空母や戦艦といった身体的に大人びている者たちはそれほど驚いた様子は見受けられない。

そんな中、質問を行うべく手を挙げている艦娘がいた。

「はい、赤城さん。なんででしょう。」

「皆さまへのお礼のために観艦式を行うのは納得ですが、その詳しい内容は決まっていますでしょうか？」

「詳しい内容としては、大雑把に一言で表すとお祭りですね。」

「お祭り、ですか？」

「うん。お祭り、みんなにも馴染みのあるものでもあるんじゃないかな？」

「お祭りですか!!雪風、わたあめを食べてみたいですっ!!」

お祭りというワードを聞いて、雪風を筆頭に駆逐艦の皆から様々の要求が出される。

しかし、さすがに状況が状況だったため、ヒイロは手を鳴らして、一回駆逐艦を落착させる。

「はいはい、静かにしてください。確かにお祭りというのは食べ物売りに出す屋台があります、その屋台を出すものは、皆さんが企画してください。」

「わたし達が、ですか？」

赤城が意外そうな顔をしながら、ヒイロに聞いた。

ヒイロは指を4本立てながら説明を続ける。

「そう、一グループ、四、五人で作って、企画書を作成して私に提出してください。それを私や企画の審査員が吟味したのち許可が降りた企画が出品が許されます。」

「その審査員というのは誰が務めるんだ？」

長門が企画の審査員について問うと、ヒイロは講堂にいたアムロ達に視線を向けながら答えた。

「そうですね、アムロさん達にやってもらいます。よろしくお願いしますね。」

ヒイロがアムロ達が任せろと言わんばかりの領きを見ると説明を続ける。

「出品についてですが、特に制限はありません。何か必要なものがあればこちらでできる限りの手配はします。企画の審査も過ぎたものでなければ基本的に許可は下ろすつもりなので皆さん、どんどん企画を考えてください。」

「提督、観艦式本番はいつやるのかしら。」

「おおよそ、1ヶ月後です。ちなみに観艦式までの間は出撃、および遠征はしませんので、皆さんは有意義に時間を使ってください。」

加賀が開催の時期を聞くとヒイロは手早く答えた。

「それじゃあ、皆さん頑張ってください!!」

そこからしばらくの間書類仕事は違う意味での忙しい日々が続いた。

ヒイロの言う通り、数人のグループを作った艦娘達は企画を考え、ヒイロ達審査委員会に提出した。期間が少ないため、基本的には却下はしないつもりだったが――

「夜戦の実演体験って……これ絶対川内ちゃんですよね。」

「悪いが却下だな。なるべく食べ物にしろと言っていたはずなのに……。」

アムロが頭を抱えながら、次の企画書を目に通す。

ヒイロも企画書を審査しながら、隣にいたキラに声をかける。

「あ、キラ、例の件はどうですか?」

「二応、皆知っていいようなものはリストアップしたよ。ソースはカラオケだけど。」

キラは素晴らしいながらヒイロから買ってもらったノートパソコンを立ち上げ、ある曲を流す。

「提督、歌を歌うんですか？」

大淀はヒイロがいつのまにかそんなことを考えていたことについて驚きの表情を挙げている。

「せつかくですからね。何かやってみるとしてこう言うお祭りの雰囲気には合うと言えば歌を歌うこと、つまりライブかと思ってるね。」

「一番曲の雰囲気にこれがいいと思うんだけど・・・。」

「・・・祭りで歌うのであればこれはいいと思う。」

刹那がキラの選んだ曲に好意的な態度を示す。

「この曲でいいとしてだれが歌うんだ？私やキラ、そしてアリスは裏方だが・・・。」

「刹那、やってみねえか？」

誰が歌うかについての話しをしようとした矢先にハインが刹那を誘いつつ、名乗りをあげる。誘われた刹那は――

「私か？・・・分かった。」

「お、サンキュー。」

意外な表情をしながらだが、快諾してくれたことにハイネは感謝を述べる。

「歌う人は手早く決まったな。あとはベースやドラムの演奏者の方か。」

「あ、じゃあドラム、私がやります。」

「速いですね。前からやりたかったんですか？」

フェネクスが手早くドラムに立候補した。アリスがその理由を問うと、

「いや、ヒイロはこの提督ですからね。なるべく目立つところで演奏してもらった方がいいと思って。」

「そんな気はきかせなくていいんですけどね……。それじゃあ、私含め、残りはベースとかギターですね。」

「あ、ちよつといいか？」

ヒイロがライブについての話しを終えようとしたとき、ガロードが手を挙げた。

「どうかしました？」

「いや、やってみたいことがあってな。」

ガロードは自分がやってみたいと思っていたことをのべた。

それを聞いたヒイロ達は――

「ふむ、となるとだいぶ時間に問題が出てきてしまうな。ベースと違って、音に繊細さが求められる代物だぞ、それは。」

「しかし、ガロードがやりたいのであれば特に止める気はありませんがね。」

「この手の楽器を入れるとなると……だいたいこのあたりでしか入れられないよ?」

キラは音楽を早送りにし、あるところで止めて、再度音楽を流す。

そこはちょうど最後のサビの直前、つまり曲のボルテージがほぼ最高潮に達している部分であった。

「やっぱそうなるか……。まあ、音楽聴いてて私もそこにしか入れられないなって思ってたけどよ。」

ガロードは納得した表情をした。ガロード自身がそう思っていたなら話は速くなる。

「となると、あとは練習の時間をできる限り確保することですが、夜……. しかないですね。」

「……俺と利那はカラオケ行けば練習できるけどよ。ヒイロ達はどうか考えたって専用の部屋がいるよな……。」

「それ以前に楽器の運搬の問題もある。レンタルできるところはあるのか?」

「それは事前に確認済みだよ。楽器屋さんに問い合わせて、何とか確保はしてあるから。」

「仕事が速いな。」

アムロがキラの仕事の速さに感心を示しているとヒイロが一つ付け加える。

「あ、キラ。一つ追加でガロードのをお願いします。」

「わかったよ。追加で頼んでおくね。」

「それで、バンドグループの練習場の確保はどうする？」

「妖精さんに頼んではいかがでしょうか？」

大淀の意見にヒイロ達の視線が注がれる。

「妖精さんって、そんなこともできるんですか？」

「ええ、そういうことに長けた妖精さんがいます。私達の間では家具職人さんと呼ばれています。」

「・・・そいつに頼めば防音室作ってもらえるのか？」

「ええ、できると思えますよ。」

「すげえな妖精さん・・・。」

ハイネが万能すぎる妖精さんの技術力に目を見開く。

「それじゃあ防音室の確保はその妖精さんに任せましょう。」

ヒイロがそういつて会議を閉めた。

そこから約1ヶ月の間、ヒイロ達は多忙な日々を送った。

艦娘の皆にもライブのことは一言も話してないため様々なことを慎重に行わなければならなかった。

さらに日中は艦娘達の企画の手伝いと文字通り寝る間も惜しんで作業やら練習を行い、何とか実用段階までこぎつけることができた。

観艦式当日、佐世保鎮守府内には1ヶ月ほど前に告知したとはいえ、とても多くの見物客が佐世保鎮守府を覆い尽くしていた。

艦娘達が考えた屋台は大好評で最終的に売り切れになる屋台がほとんどになるほどであった。観艦式は最高の盛り上がりを保ったまま時刻は日が沈み、暗くなりかけていた。

そんな観客達が今いるのはこの観艦式のためだけに作られた特設ステージだ。(妖精さん作)

「こ、これほど多くの人達に来てくれるとは……。」

ヒイロはステージの裏方で観客の多さに圧倒されていた。

ちなみに服装はさすがに提督用の軍服である。

「ま、それほど期待をかけてもらえてんだろ。こりゃあ失敗できねえな……。」

ヒイロのそばにいたハイネ含めて、歌うメンツは若干緊張した面持ちをしている。

「ハイネ、こういうのは最初が肝心だ。飛ばしていけよ。」

アムロがハイネの肩を叩きながら励ましの言葉をかける。

「ああ、分かった。最初さえどうにかなればあとはノリで何とかなるだろ。アムロ達も

気をつけてくれよ。」

「そうだな。こちらにも細心の注意を払う。キラ、プログラムのチェックはどうなってる？」

「待ってね、あと少し。各スポットライトの動作チェック確認よし、機械の動作不良も確認されず……。システムオールグリーン、いつでも行けるよ!!」

『こちらアリスです。目視によるチェックも問題ありません。スピーカーにも動作不良は確認されず。』

アリスのチェック終了を告げる報告を皮切りにヒイロ達の目が気合に満ちる。

「……あとはこちらのミツシヨンをこなすだけか。」

「おいおい刹那。んな作戦に臨むような姿勢じゃなくて楽しんでいこうぜ!!せつかくのお祭りなんだからよ!!」

「……そうか、そうだな。」

ハインの言葉に表情が硬くなっていた刹那に笑顔が灯る。

「さて、そろそろ時間ですね。みんな全力で行きましょう!!」

『おうっ!!』

ヒイロ、刹那、ハイン、ガロード、フェネクスがそれぞれ配置に着くと、ステージを覆っていた垂れ幕が開かれる。

垂れ幕が完全に上げられると同時に観客達の歓声がヒイロ達に浴びせられる。最初にマイクを手持っていたヒイロが代表として挨拶をする。

「皆さん、佐世保鎮守府の提督、ヒイロ・ユイです。今回はこの観艦式に集まっていた皆さん本当にありがとうございます!! 私達がこうしてやっていけるのも皆さんのおかげです!!」

そしてささやかながらライブという形でお礼をさせていただければと思います!! 皆さんにとつてこの一時を楽しんでいる頂ければ我々にとつては感無量です!! それでは聞いてください。」

ヒイロがマイクを置いて、ベースを手持つとBGMが流れる。

ヒイロ達が歌うはとあるアニメの主題歌、主人公が手に宿した能力は超電磁砲^{レールガン}、瞬間移動を駆使する変態に四苦八苦しながらも日常を謳歌したり、またまた友人達に降りかかる火の粉を払うために『自分だけが持つ超電磁砲』を放つ。

ヒイロ、ガロード、刹那、フェネクスが奏でるバックミュージックにマイクを手持つたハイネが歌い始める。

ハイネの力のこもった歌声は祭りの雰囲気や曲調も相まって一瞬で観客達を虜にする。観客達はハイネに対し、歓声や身振り手振り声援を送る。

(へえ、悪くないな。こーいうの。)

ハイネは内心、自身の気持ちが高ぶっていくのを感じていた。

自身の歌声に観客達がとても楽しげな表情を浮かべている。さながら気分はアイドルだ。

そして、曲の一番が終わりに差し掛かったところ、ベースを弾いていた刹那がおもむろに前に出始める。観客達の中には刹那に対し訝しげな視線を送る。

しかし、その視線はすぐさま驚きのものに変わる。

ハイネが一番を歌いきったまさにその瞬間、マイクを真上に放り投げた。

観客の視線が投げられたマイクに注がれている間、刹那はハイネにベースを預ける。

「頑張れよ。」

「ああ。」

ただ一言ずつ言葉を交わし、ハイネはヒイロ達バックミュージックに加わる。

そして、重力に従って落下してきたマイクを刹那はしっかりとそれでいて丁寧に掴み取った。

そして、刹那の勇ましい歌声が会場に響き渡る。

先ほどのマイクパフォーマンスの効果もあって訝しげな視線を送っていた観客も拍手喝采を刹那に送る。

刹那の歌う二番も観客達は手拍子等で声援を送る。

刹那もハイネと同様、心の中で高揚感を抱いていた。

(歌か……。確かマイスターの刹那・F・セイエイも誰かの歌を好んでいた気がするな……) そんな事を考えながら歌を歌っていた。そして、刹那が歌う二番も終わり、曲は少しの間間奏に入る。

しかし、そこで突如として、スポットライトの光が落とされ、ステージは闇に包まれる。観客達は揃って動揺の表情を顔に浮かべるが、曲はまだ続いていることに気づくとステージに再び注目の視線を集める。

そのタイミングでスポットライトの光が一つだけ明かりと灯す。その麓に居るのはガロードだ。しかし、手に持っているのはベースやマイクでもなく、茶色い木で作られた瓢箪のような形の上に4本ほどの弦が張られているヴァイオリンであった。これまでの音は一線を越す代物の登場に観客達は目を見開いている。気づけばヒイ口達のバックミュージックは消えていた。そこからはガロードの独壇場だ。ヴァイオリンを肩に乗せ、頬で挟むように持つと右手に持つ弓で、ハイネや刹那の歌声とは全く違う繊細な音を響かせる。

ガロードの演奏に圧巻される観客達、声を上げる所か動くことさえ許されないような雰囲気吞まれる。

そして、ガロードの演奏が終わりを迎える。ガロードはさながらオーケストラの指揮

者のように観客に対して礼を行う。その瞬間狙いをすましたかのようにスポットライトが再度点灯される。ヒイ口達のバックミュージックが復活すると同時に刹那とハイネが二人一緒に最後のサビを全力で歌いながらガロードの前に躍り出る。演出の素晴らしさに圧倒された観客達は歓声を上げながら、曲は最高潮を迎えた。

最後の一節を歌い終え、バックミュージックも弾き終わると観客達はヒイ口達に惜しめない拍手を送る。

ヒイ口達のライブは大成功を収めたのだ。

ライブが終わった後、観客達は余韻に浸りながら鎮守府を後にし、静寂が辺りを包んだ。

「あー、終わったー!!」

「ライブ、大成功だったな。」

「ええ、あそこまでうまくいくとは思いませんでしたが。」

ハイネが達成感からか、床に寝そべる。アム口とヒイ口はライブの手応えを感じながら、笑みを浮かべる。

「はい、お水。お疲れ様。」

「すまない。ありがとう。」

「お、サンキューな。」

「悪いな。ありがとな。」

キラがハイネや刹那、ガロードの三人に水を配る。

「何とか滞りなく終わって良かったです……。つてあれ？」

「アリス? どうかした……?」

アリスが無言で指差す先には艦娘の皆が駆け寄ってきていた。

思わず驚いた表情を浮かべるフエネクス。

「えっ?! み、みんなどうしたの?!」

「提督、さっきのライブ、感激しましたー!!」

ヒイロが驚いた口調で艦娘達に聞くと吹雪が代表として答えた。吹雪達の手には共通として食べ物があった。おそらく彼女たち自身が屋台で作ったものだろう。

「これ、余り物ですけど作っただけです!! よかったら食べてくれませんか!!」

そういい、たこ焼きやらかき氷やらそれぞれが今回の観艦式で作ったものをヒイロたちを手渡した。

「あの、今回の観艦式、とっても楽しかったです!!」

「……そう、ですか。それならこちらも頑張った甲斐がありました。」

たこ焼きを口に頬張りながら吹雪に対して笑顔を向けるヒイロ。

艦娘たちに作ったものの感想を問われたりしているうちに時間過ぎていった。

ヒロ口たちの観艦式は大成功という形で幕を下ろすのだった。

第1話 私の名前はヒロ・ユイ

とある宙域、ある大破したMSモビルスーツが力なく漂っていた

(・・・やれやれ、不運もついにここまで来ちゃったか・・・)

そのMSの名は《XXXG-X01W》ウイングガンダム

その姿は無残なもので、胴体だけがある、達磨にも等しい状態だった。

(・・・最後の最後まで、散々な扱われ方だったなあ・・・)

《オペレーション・メテオ》の遂行の為に、他の4機と共に地球に降下したのに魚雷を当てられたり、自爆させられたり、挙げ句の果てに敵の指揮官を守るために身代わりにもさせられた。

(・・・ああ、でも、悪くはなかったなあ・・・)

そこで思考を止め、意識は闇へと落ちていった。

(あれ・・・ここは・・・?)

意識を覚醒させ、起き上がり最初に見たのは、

(知らない天井・・・。ってあれ、私は確か・・・)

「あ、起きた。君、大丈夫？」

記憶を辿ろうとしたところで、隣の人物に目が入る。

髪色は黄色がかった黄色で、肩まで下ろしており、中性的な顔立ちをしている。

「・・貴方は・・？それと、ここは・・？」

「その前に、一つ、聞いていい？」

「えっ・・あ、はい。」

質問を質問で返されたので一瞬、言葉がつかまるがなんとか答えることができた。

「君は、モビルスーツという言葉、知ってる？もしくは、ガンダム。」

「っ!？」

突然の驚きに答えが出てこない。なぜ知っている、そんな言葉が心の中から出てくるが、こちらの心中を察したように

「あ、別に変な意味とかないから、ただの確認だよ。」

「確認・・？」

「あ、自己紹介がまだだったね。僕の名前は、キラ・ヤマト。」

そして、前世、って言うのかな・・とりあえず、僕にはもう一つ名前があるんだ。」

「もう一つの名前・・？」

「フリーダムガンダム。それが、僕の兵器としての名前。君にもある・・よね？」

最後は自信なさげにに聞くが、その目は確信していた。素直に言うしかなさそうだ。

「ウイングガンダムです……。」

ガチャツ

そう名乗った瞬間、ドアを開く音がした。

「キラ、様子は……大丈夫なようだな。」

「うん、今起きたばかりだから、状況はよくわかってないようだけど……。」

「仕方がないだろう。私達も同じだからな。」

「あの……キラさん……この人は……？」

入ってきた女性は黒髪をポニーテールにして、腰近くまで伸ばしており、女性にしてはかなり高い身長を持っていた。

「この人は、アムロ・レイ。僕も含め、君と同じ境遇の人だよ。」

「同じ境遇……?となると貴方も……?」

「HIIーッガンダム、もとい、アムロ・レイだ。よろしく。」

「さて、唐突な質問で申し訳ないが、君はこの状況について、なにか知ってることはないか?」

「・・・わかりません・・・気づいたらここにいましたので・・・」

「そうか・・・やはり、ハイネとガロードしか情報を持っている者はいないか・・・」

「ハイネとガロードって・・・誰ですか？」

「それは俺たちのことだよ。」

声が出た方向を見ると、二人の女性が立っていた。

一人は白よりの銀という、さながら雪の色合いの髪を部分的に腰まで降ろしている女性、
もう一方は、とにかく明るいのが、第一印象になりそうな、オレンジ色の髪を持つ女性だった。

「戻っていたのか、二人とも。ちゃんと、獲れたのか？」
「おう、バッチリだぜ。・・・そっちのアンタも元氣そうで良かったぜ！」

「えっと、ウイングガンダムです・・・。」

「私はガロード、ガロード・ランだよろしくな!!」

「俺はハイネ・ヴェステンフルスだ。よろしく。」

一通りの自己紹介をした後、ウイングは少し、ハイネの方を見ていた。

「ん？俺の顔に何か付いてるか？」

「あ、いえ、大したことではないんですが：ハイネさんの髪型、なんだか羽みたいだな：

と。」

「だろ!!アンタもそう見えるよな!!」

「な、お前まで言うのか!? そんなにそう見えるのか!？」

「鏡があつたら、手っ取り早いけど・・・」

「無いものは無いからな。仕方がないな。」

満場一致の意見に少し気になり始めたハイネを尻目に、ウイングはほかに気になつていたことを聞く。

「あの・・・皆さんの名前は、もしかして、自身のパイロットの名前をもじつたものですか？」

「もじつた、というより、そのままと言つたほうがいいな。ここにいる者は、まあ、ハイネは別だが、皆、自分自身のパイロットから名前を拝借させてもらつている。」

「ハイネさんは、皆で付けたんですか?」

「いや、俺は覚えてたんじゃなく、もらつたんだ。」

「もらつた・・・?」

「戻つたぞ。」

他の者とは事情が違う様子の子のハイネに疑問が湧くが、新たに部屋へ入つてきた人物に思考が中断される。

「刹那か、調子はどうだ？」

「問題ない、期待以上の成果だ。」

「あの・・貴方もガンダム何ー」

「私がガンダムだ。」

「・・・はい？」

突然の発言にかける言葉が出てこないウイング、他の面々は、ため息をついたり、吹き出すのを耐えていり、既に笑っていたりなど様々な反応をしている。

当の本人は目線を逸らし、少し恥ずかしげに、

「・・・忘れてくれ。」

「え、あ、はい。」

「恥ずかしいなら言わなきゃいいのに・・」

「体が勝手に反応するんだ・・いや、この場合、口か？」

ともかく、起きたのか、よかった。」

そういい、微笑みを顔を浮かべる彼女。それを見たガロードは驚いた様子だ。

「・・お前、笑うんだな。」

「意外か？わたしだって、嬉しいことがあれば笑う。」

「まだ、名乗ってなかったな、刹那・F・セイエイだ。」

「ウイングガンダムです。あの、さっきのは然程、気にしてないので。」
 「・・・そう言ってくれると助かる。」

ひと段落ついたところで、アムロがウイングについて話し始める。

それは自分の名前についてだ。そもそもウイングが目覚める前、名を変えようと言い出したのもアムロである。

理由はまだ、ここがどういった場所かどうかもわからないのに自分のMSとしての名前を言っても良いのかという、懸念からであった。

「なるほど、確かに迂闊に私達の名を言う訳にはいきませんね。でしたら・・・。」

頭に浮かんでくるのは、5人のガンダムパイロット達の名前。だが、名前をあげていつている中に違和感を感じた。それは、気をつけていなければ気づくことはない、とても些細なこと、だが、見つけてしまった違和感は徐々に大きくなっていく。

(どうして、私は、他のガンダムパイロットの名前を知っているの?)

デュオ・マックススウェル

デスサイズならいい、

トロワ・バートン

ヘビーアームズも分かる。

でも、なんで、どうして・・・
カトル・ランバール・ウィナー
 サンドロツクと

シエンロンも知っているの・・・?

張五飛

なんで、どうしてと、疑問を浮かべるが、答えがでることはない。

「しつかりしろ!!大丈夫か!？」

「あ・・・れ?」

体が揺らされる感覚と聞こえた声で、意識を取り戻す。目の前にいるのは、刹那だ。肩に手をかけているから、彼女が自分の体を揺らしていたのだろう。

「大丈夫? 顔色が良くなかったから焦ったけど・・・」

「あ、はい、す・・・すみません・・・」

他の5人が心配そうに自分を見つめる中、一息ついてウイングは決断する。

「あの、私、決めました。知ってる名前はいくつかありましたが、この人の名前を使わせてもらいます。」

その人は、自分にはたくさん酷いことをしてきたが、それは、全部コロニーのためだつてわかっている。だから、これはちよつとした、復讐。

あの人より、素直になれたらいいなという願望をつけて。

「私の名前は、ヒイロ・ユイです。」

ウイング、もといヒイロ・ユイは新しい道を歩み始めた。

第2話 発見

落ち着いたところで、ヒイロは現状確認のため、アムロに質問をする。

とはいえ、ヒイロ自身、感じる暑さから大体の予想はついていた。

「そういうえば、ここはどこなんですか？」

「気候や生えている樹木から推測したに過ぎないが、ここは赤道付近の島だろう。」

赤道付近の島であれば、この暑さは納得できる。そう思っていると、何処かから音が鳴る。皆の視線が音源に集中する。

「・・・悪い。私だ。腹が減ったみたいだ・・・」

「そういうえば、もうそんな時間か。」

気づけば、太陽はすでに沈みかけ、空は橙に変わっていた。

時刻はおおよそ5時を回った頃だろうか。

「ヒイロ、立てるか？」

「ええ、そもそも損傷自体もありませんしね。」

アムロに促され立ち上がり施設と思われる廃墟を後にした。

「この建物・・・一体なんなんですか？」

「そういえばそうだな。キラさん、どうなんだ？」

ヒイロの疑問にハイネも乗っかってくる。廃墟には何やら港のような雰囲気を感じる。漁港か、それに準ずる何かだろうかと、思っていたが

「ここは、僕とアムロさんが調べた限り、どうやら鎮守府っていう施設らしいよ。」

「ちんじゆふ？なんだそれ。」

「すまない、それについては、調べることができなかった。だが、他にも艦娘と深海棲艦、という言葉もあったな。」

「その・・・カムムス？とシンカイセイカン？のことは？」

「かろうじて見れた資料からは、艦娘は過去に沈んだの艦艇が女の子の姿になった者を指すらしい。」

「沈んだ艦艇が女の子に・・・？それって、私達もそのカテゴリーに入るということですか？」

自分達に共通している点は、元々、兵器であったことだ。であれば、女性の身になったのも頷ける

「ああ、その線で間違いないはずだ。」

「なら、深海棲艦とはなんだ？」

「そっちは、戦争で亡くなった人の怨念が人の形となって、実体化したものらしいよ。」
「らしいってことは、確証は取れてないんだな。」

ハイネの言葉にキラはうなづく。

「それと、深海棲艦には、妨害電波を発するようで、従来の機器では、通信がろくにできないそうだな。」

「それって、国と国との連絡も取れていないっていうことですか？」

「そう考えるのが妥当だな。ついでにいうとシーレーンも滅茶苦茶にされているようだ。」

紛争の世界となっている現状に苦い顔を隠しきれない面々だが、刹那が根本的な部分について聞く

「そもそも、なぜそこまで後手に回る？各国にもそれぞれ軍隊があるはずだが・・・。」

「深海棲艦にはイージス艦などの兵器は通用しないらしい。」

「その理由はなんですか？特殊なバリアが張られていた、とかですか？」

「正確に言ってしまうえば、通用しない訳ではないんだけど、単純にサイズに差がありすぎるんだ。」

サイズ差がありすぎるといふことは深海棲艦はかなり巨大なのだろうか？

「深海棲艦の大きさは人と大してかわらないんだ。でも、火力は元の戦艦と変わらない。つまり、戦艦の機能とかそのものをそのまま人の形に押し込んだ形になっているんだ。」
「それが、20、30と徒党を組んでやってくるのだから、結果は見るまでもないだろう。」

さながら、その様子は象に群がる蟻のようだ。しかも、蟻は一匹一匹が象と同等、もしくはそれ以上とくれば、どうしようもない。

パチパチと燃える火を囲んで、ヒイロ達は焼いた魚や取った果物を食べていた。

「こう・・新鮮ですね、今までもものも言わない機械だった私達が食事をするっていうのは。」

「そうだな。・・これが生きている、ということなのかもしれないな。」

「そういえば、ハイネさん、「ハイネでいいよ。別にヒイロより年上って訳じゃないし。」
「そうだな、ヒイロ、皆のことをさんずけしなくていい。ハイネの言う通り、皆年上って訳じゃないからな。」

ハイネの割り込みにアムロや他の者からも賛同されたヒイロは素直に改めることにした。

「それじゃあハイネ、貴方の名前は貰ったと言っていましたけど、どういうことなんですか？」

「ああ、そのことが、まあ、大したことじゃないんだがな．．。」

食べていた果物を口に押し込み、神妙な面持ちで話を始めた。

「俺はな、もともとペーパープランの機体だったんだ。」

第3話 記憶、そして始動

意識を覚醒させると、そこは光のささかない真つ暗闇だった。

あれ、ここは・・・？

思考を始めると、まず自分が考えることができるということに気づく。

なぜこうなったか、慣れない頭でなんとか、捻り出そうとするが、

まず、俺は誰なんだ？

自分のことが分からない、それどころか、何も分からない。混乱しかけて、発狂しそうだ。おもわず叫び叫びそうになったその時、

「おや、こんな所で人に会うとは、そんなこともあるのだな。」

突如として、聞こえた声に驚き、振り向く。

「驚かせてしまったかな。私としては驚かせるつもりはなかったんだけどな。」

「だ・・・れ・・・？」

たどたどしく目の前の人物に対して問いかける。

「私はただの死人・・・と言いたいところだが、それでは君は納得しないだろうね。ギルバート・デュランダルだ。」

そう名乗ったギルバートはまだ名も持っていないハイネをまじまじと見て、

「ふむ、なるほど、君はあの計画のか……。」

一人納得した様子で自分を見つめるハイネは声を上げる。

「知って、いる、のか……。俺の、こと……。」

「そうだね、君の存在は知っていた、と言っておこう。」

「なあ、アンタ。俺は、死んだ、のか？」

「いや、君は生まれたんだよ。命あるものとしてね。」

予想外の答えにハイネの目は驚きの表情を出す。

「どう……。いう、ことだ？」

「私もかなり驚いているよ。だけど、君の後ろから出ているその翼は見間違いはないな。」

そう言われ、自身の後ろを見てみると、真っ赤な赤が基調とし、橙色の部分がある機械的な翼があった。

「君の名前は、デステイニーガンダム。運命の名を持つガンダムだ。」

「デステイニー……。運命……。」

自分の名前を聞いた途端に、体が引つ張られる感覚が出始める。

その感覚に促されるまま、ハイネはギルバートに問う。

「なあ、俺はこれからどうすればいいんだ？」

「それは、君が決めることだ。君の、君自身が思うがままに、自由に生きてみるといい。」
「・・・そうかい。」

そう言い残し、落ちてゆく意識を身を委ねる。ギルバートはその背を見送る。

「ハイネ・ヴェステンフルス。名を問われたら、そう言ってみるといい。」

その言葉はハイネに届いたが、返すことはできなかった。

ハイネの話を聞いた後、寝ることにしたヒイ口達、しかし、一人寝付けない者がいた。

（ハイネ・・・やっぱり、君は・・・ザフトの・・・。）

キラはハイネについて、ある程度予想はついていた。元々ザフト生まれだったからか、フリーダム^キのパイロット^ラの友人が着ていたからかは分からなかったが、彼女が着ている服がザフトの、しかもアカデミーと呼ばれる兵士の養成学校で優秀な成績を残した者だけが肩を通すことの許される赤服であることも気づいていた。

（どうしよう・・・）

もし、仮にハイネにザフトのことを言っても、信じてくれるだろうか？

「キラ。」

「え、刹那・・・起きてたの？」

自分に背をむけながら、話しかけられたため、驚いているキラをよそに刹那は言葉を続ける。

「迷っているのか？」

まさしく寝耳に水のような発言にキラの目が見開かれる。

「凶星のようだな。大方、ハイネのことか？」

「う．．．実は．．．」

刹那に言い当てられたのを皮切りにキラは自分が気づいていることをすべて話した。

「だそうだと。皆。」

「え．．．？」

「はあ、何か妙に落ち着きがないとは思ってましたが．．。」

「ヒ．．ヒイロ!？」

呆れたような表情で自分の顔を見るヒイロ、続けてアム口も起き上がる。ヒイロ同様、キラの落ち着きのなさが気になっていた。そして、

「まったく、知ってんなら言ってくれよな。」

「ハ．．ハイネまで!？」

一番状況的に聞いて欲しくない人物に聞かれていた事実キラの顔は真っ赤になる。

「どうして・・・。」

「ハイネのことを聞いた後、君の妙に忙しない様子が気になってな。寝るのは建前で観察させてもらった。まあ、刹那があんなストレートに切り込むとは思わなかったが・・・」

「まあ、しかし、俺とキラが同じ軍のMSとは思わなかったな。」

「恥ずかしさのあまり、どんどん身が縮こまるような錯覚を覚えていたキラだったが、

「ハイネは、僕に対して、なんとも思わないの?」

「なんとも、というか、少し察しが悪くないか?」

ハイネにそう言われ、キョトン、とするキラを見かね、アムロがキラに告げる

「ハイネはペーパープラン、つまりMSだったころの記憶は一切ないんだぞ。君がそのザフトと何があつたかは知らないが、少なくとも彼女が君に悪感情を抱くことは無いと思うぞ?」

「ま、アムロの言う通りだぜ、だから気にすんなよ!」

「ハイネ・・・ありがとう。」

「丸く収まったみたいですね。」

「ああ、特にこちらが行動を起こさなくても問題はないと思っていたがな。」

「ああいう光景を見るのは嫌いなんですか?」

刹那が目を見ると、ハイネとキラが仲睦まじく握手している光景が目に入った。

「いや、むしろ好きだな。この光景をみるのは。」

刹那が笑顔を浮かべている中、ヒイロはとある疑問がうかんだ。

「あれ、ガロードは？」

「彼女なら寝ているぞ。」

刹那が指を指すその先にはスヤスヤと寝ているガロードがいた。

「ええ〜・・・寝落ち・・・ですか・・・。」

苦笑いを浮かべるヒイロであった。

翌日の朝、登り始めた太陽の光でキラが目を覚ます。

「ん・・・？朝・・・？」

覚醒し始めた意識の中、海岸にだれかがいるのを見つける。

「ガロード・・・？」

どうしてそんなところに、といいかけたが、昨日ガロードとはまるで違う、柔らかく、儂げな雰囲気と言葉が詰まる。

「・・・来ます。」

「・・・何が来るの・・・?」

「貴方がたと、運命を共にする者が。」

本当にガロードかと疑わざるを得ない程の雰囲気キラをおもわず彼女に問う。

「君は・・・誰?」

しかし、その疑問はいきなり響いた轟音にかき消された。

その轟音はさながら雷のような。

「っ・・・何だ!?!」

音に気づいたアムロが飛び起きたと同時に3人も轟音に気づく。

「なんだよ!?!今の爆音!?!」

「キラ、何かありましたか!?!」

ヒイロに聞かれたキラは、咄嗟に聴こえてきた方角を見る。

そこには黒いナニカの集団に追われている、6人の少女達の姿があった。

第4話 邂逅

「あ、あれは、戦闘・・・ですか!」

「そう考えるのが普通だろう!!」

ヒイロ達がいる島からおよそ数キロ、そこで二つの勢力が戦っていた。

否、もはや戦いと呼べるものではなかった。弱い者をいたぶり、逃げ惑う様子を見て楽しむ、一種の見せしめ。

全体的に黒い印象を覚える20近くの部隊がボロボロの6人ほどの艦娘と思われる部隊を追っていた。

「あれが、艦娘と深海棲艦・・・!」

「怨念、というのは納得が行くな・・・。奴らからは、憎悪しか感じない・・・!!」

「なんだよ・・・あれ・・・!?!許さねえ・・・許さねえぞ、深海棲艦!!」

「待てよガロード!!闇雲に突っ込んだら救えるもんも救えねえぞ!!」

怒りに身を任せて突入しようとするガロードをハイネが取り押さえる。

「ガロード、気持ちは分かる。だが、ここで無闇に戦闘に介入すれば、混戦は必至だ。それに、こちらの優位性も失うことになる。そうだな、ヒイロ?」

「・・・現状、相手はこちらに気づいている様子は見受けられません。ですが、工夫もせずには攻撃しても、刹那の言う通り、こちらの有利を棒にふることになります。」

「じゃあ、どうすんだよ・・・!!」

ヒイロは一問置いて、自分が咄嗟に考えた作戦を伝える。

「了解した。そのミツシヨンプランで行こう。」

「ヒイロ、行けるの?」

「大丈夫です。私が造られたコンセプトは強襲離脱がメインですから。」

そういうと、ヒイロは今なお、生きようと戦っている艦娘らに目を向け、声をあげる。

「皆さん、行きますよ!!」

「了解!!」

ブースターを蒸し、再びに戦火に身を投じた。

近くに砲弾が着弾する。至近弾だろう。さつきからそればかり、運がいい、というより、

(遊ばれてんだらうな・・・)

いつもの遠征から帰ってくれば、そこに待っていたのは多数の深海棲艦が自分達の鎮守府を占拠していた。

咄嗟にお荷物になるであろう資材を投げ捨てて、今まで逃げてきたが、他の5人も含め、既に疲労は限界を超えている、燃料も補給をろくにしていなため、すつからかんに等しい。

「天龍ちゃん．．前に島が．．．。」

「はっ、こんな状況でなきや、ありがたかつたんだがな．．。」

後ろを見ると、自分達を見て、笑っている深海棲艦の顔が見えたが、怒りを沸かす気力もない。

「あ．．．流れ星．．？」

隊の一人がそんなことをいい、空を見ると、6つの流れ星が見えた。

その流れ星は上へと登っている。

最期にいいものが観れたな、そんな風に思っていると、不自然だ。そんなことが頭に浮かぶ。理由を探していると。

「．．．流れ星は上に上がるものだったっけ．．？」

「つ．．!? そうりやあそうだ!! じゃあ、アレはなんだよ．．!?」

「なんでも．．いいのです．．．。」

「電いなづま!？」

電と呼ばれた少女は流れ星を虚ろな目で見る。

「もしあれが本当に流れ星なら・・聞いて、欲しいのです・・!!」

「お願いなのです!!みんなを、助けてええええ!!」

叫んだ。ありつたけの声で叫んだ。本当は心の中では分かっている。あれは、流れ星ではないと、これはただの気休めだと、だがそれは、本当に流れ星となるだろう。

それは、

『任務了解。これよりそちらの部隊を援護します!伏せて!!』

彼女の願いが叶うからだ。

流れ星から突如として放たれた山吹色の閃光は今まで自分達に攻撃してきた深海棲艦を飲み込み、大爆発を起こした。

爆風と閃光に必至に堪え、目を開くと、目の前に二人の女性がいた。

「動けるか?悪いが、まだ敵は残っている。今うちに退避するぞ。」

「ヒイロ!!後は頼むぞ!!」

言われるがままに、空を飛ぶ二人の女性について行く。一瞬、後ろに目をやると、自分達と深海棲艦の間に立ちはだかる人達がいた。

その人達は光る棒のようなものを構え、瞬く間に残った深海棲艦を倒していった。

「す・すげえ・。」

「ヒイロのバスターライフルが想像以上に刺さったか。」

「あ、あの!!」

電は飛んでいる一人の女性、アム口と刹那に声をかける。

「なんだ?」

「あ、ありがとうございます!!」

精一杯の感謝のの気持ちを込めた礼をアム口と刹那は笑顔で答える。

「少し、恥ずかしいな。」

「だが、悪い気持ちはしないだろう? 貴方も。」

「まあ、そうだな。・・刹那、島に戻ったら、持ってきて貰いたいものがあるだが、構

わないか?」

「問題ないが、何を持ってくるんだ?」

「そうだな・・薄い緑色に修復の二文字が書かれたバケツだ。」

「・・なんだ、それは?」

刹那の素直な感想にアム口はまあ、仕方がないか、というような顔を浮かべた。

第5話 原因

「ふう、終わったのかな・・・？」

深海棲艦を二通り倒して、一息つく。周りを見る限り、キラ達も倒し終わったようだ。

「ヒイロのバスターライフル、すごい威力だったね・・・。」

「一応、あれでも出力は抑えてる方なんですよ。大体50%といったところですが。」

「す、凄えな。装弾数とかは幾つなんだ？」

「ええと、最大出力だと、腕についてあるカードリッジ含めて、9発です。」

「ああ、それ、カードリッジだったのか。ということはチャージする必要はないんだな・・・。」

ガロードがなにか物欲しそうにバスターライフルを見つめていると、

「・・・あげませんよ!?!私からこれを取ったら、サーベルとバルカンしか残らないんですけど!?!」

ヒイロにバレて、慌てて顔を晒す。すると、キラから声をかけられる。

「ねえ、ガロード。君は僕たちが戦闘に気づく前に言った言葉、覚えてる?」

戦闘が終わってからキラは気になることがあった。それは、ガロードが見せた、いつ

もの彼女からかけ離れた雰囲気を持った、もう一人のガロードとも呼べるような貌。返答の種類によっては問い詰める必要のある問いをガロードは、

「ん？そんなこと言ったけ？私は戦闘に気づくまで寝てたとおもうんだけど・・・」

知らない、と答えた。だが、その言葉に嘘はない。そもそも、キラは第一印象で嘘はあまりつかない性格だと思っていたのも相まって、

「そっか、ならいいや。僕の聞き違いだったかも。寝ぼけてたしね。」

「お、おう。そうか。」

今回はキラは引くことにした。だが、それでガロードに対する疑念が晴れた訳ではない。い。

島に戻って来たヒイロ達を待っていたのは刹那だった。

「艦娘のみんなの様子はどうですか？」

「問題はない、とは言い難いな。武装はまだどうにかあったが、それより目が引くのは彼女らの体についていた無数のアザだな。」

「アザ・・・？深海棲艦につけられたものですか？」

「・・・断定はできない。彼女達から直接話を聞かない限りはつきりとしなないことだろ

う。」

「そうですか……。ところで今艦娘の皆さんはどこへ？」

刹那はこつちだと言い、歩き始める。その方向は、

「あれ、こつちつて、鎮守府の方か？」

「ああ、彼女達に聞いた所、どうやら、鎮守府は艦娘達が集まる施設のようだ。装備を直す設備もそこにあるようだ。」

「通りで居住スペースのような場所が多いと思えば、そういうことでしたか。」

鎮守府に向かう道の途中、ヒイロはこれからのことについて話し出す。

「これから、どうしましょう。」

ヒイロの言葉にダンマリになるキラ達。とはいえ、若干、呆れたような顔をしている。

「ひとまず、彼女らの話しを聞こう。それからでも遅くはないだろう。」

「お前、ちよつと、先のこと見過ぎじゃねえか？」

「そ、そうですか？」

「ガロードの言う通りだと思うよ。確かに先のことを見据えるのはいいと思うけど、そうした時、突然のことに対応できなくなるよ？」

「なんつていうんだっけか……。あ、思い出した。『明日は明日の風が吹く』だ。そんな感じでもいいんじゃないか？」

「明日は明日の風が吹く、ですか。いい言葉ですね。」

廃墟という名の鎮守府に着いたヒイロ達、刹那に案内されてたどり着いたのは、所々、破損している箇所はあるが、かろうじて部屋として対面を保っている広々とした空間だった。そこにアムロと艦娘達の姿があった。

「よし、来たか。」

「アムロ、ここは？見たところ大分広い部屋だけど・・・」

「食堂のようだ。向こうにキッチンが見えるだろう。」

アムロが刺した方向を見ると、確かにキッチンがあった。ポロポロという点を除けばだが。席に着いて、初めて艦娘の姿を見ると、包帯などで隠されてはあるが、様々な箇所には貼られている。中には三角巾を付けているものもいて、痛々しさいやでも伝わってくる。苦虫を噛み潰したような感覚を心の中で感じていると、

「まずは、助けてくれて、ありがとな。」

隊長格と思われる少女、天龍がヒイロ達に対してお礼をする。

「あのままじゃ、そのうち皆、海の底だったろうよ。」

「本当に間に合って良かったです。ですが、どうしてあの様な状況に？」

「・・・大体、5、6時間程前だったか、俺たちは遠征任務を終えて、帰って来ている途

中だったんだ。」

彼女たち遠征部隊、天龍、龍田、暁、響、雷、電は遠征から帰ってくる時に自分達がいいた鎮守府が深海棲艦に襲撃されているのを見た。

瞬時に逃げることを決断したが、敵の艦載機に見つかり、半殺しにされた、とのことだった。

「それで、その時に、そのアザが？」

「……これは、違うんだ。」

「違う……？ どういうことなんだ？」

アムロが理由を聞こうとすると、暁たちがかなり怯えるような表情を見せる。

「……わかった。深くは詮索はしない。ただこれだけ聞かせてくれ。それは、深海棲艦に付けられたものか？」

この問いに暁たちは首を振った。つまり、それは、

(あまり、当たって欲しくない予感が当たったか。)

アムロは彼女達のアザの正体の見当はほぼついていた。理由は仮にアザの正体が深海棲艦の攻撃とすると、少なくとも火傷のあとが付いていなければ説明がつかない。しかし、アザには火傷のあとが一切見当たらなかった。これが意味するのは、

(彼女達は誰かに暴行を受けていた・!!)

第6話 決断

現在、ヒイロ達は食糧調達をしていた。刹那とアムロは海で釣り、

キラとハイネは鎮守府で艦娘の面倒を見て、ヒイロとガロードは果実採取をしていた。

そして、アムロから聞かされた、艦娘が暴行されていた可能性があるということ。

「ガロードはどう思いますか？」

「・・・アムロが言っていたことか？もし、それが事実なら私は正直言って許せねえな。」

ガロードの手に力が入る。それ以上力を込めると血が出て来そうだ。

「ですよ・・・。あんなちいさな子供に暴行するなんて。」

「つても、まだ確証したわけじゃないけどな。今、とりあえずアイツらのメシの調達しろ？」

めざとく高い木に成っている果実を見つけると、登ろうと木に手をかけるが、

「あ、わたしが登りますよ。ガロードは下で待っていて下さい。」

そう言い、手早く木を登り、果実のある所にあつという間に着き、ガロードがおお、と感嘆の声をあげる

「ガロード、行きますよ。」

「OK。いつでもいいぜ。」

静かな海が見える場所、海岸にある岩場を足場にして刹那とアムロが自作の釣竿（針をつけた糸を棒にくくりつけて作った超簡易式）で釣りをしていた。

「静かだな・・・。」

「ああ。」

ただひたすら待つ。魚がかかるまで。

「釣れないな・・・。」

「ああ。」

刻々と時間は過ぎてゆく。

「釣れるのか・・・?」

「・・・ああ。」

「待て、今の間はなんだ。流石に見過ぎせないんだが。」

「餌に問題があるかもしれない。」

「話・を・そ・ら・す・な。」

はあ、とため息をついて刹那に話始める。

「はあ、この前はあれほど採れていたのに・・・」

「いや、この前をこのくらいだったぞ?」

まさかのカミングアウトにアムロは絶句する。

「じゃ、じゃあお前はどうかやってあの量の魚を・・・?」

「決まっている。こうだ。」

ドボンツ、という音と共に刹那は飛び込んだ。一瞬、言葉を失ってしまい、かろうじて出した言葉が、

「馬鹿なのか!?!」

一方、キラ達は天龍達の面倒を見ていた。

「大丈夫?見たところ、君が一番酷いらしいからね。」

「う、うん。大丈夫。こ、このくらいどうってことないわよ!」

「意地を張つちや駄目だよ。骨にヒビが入ってるんだから。」

「ピイツ!?!」

キラは一番怪我が酷かった艦娘、暁のヒビが入った腕をつついて、強制的に言うことを聞かせる。

突かれた暁は尋常じゃない痛みから涙目になる。

「ほら見たことか。とりあえず、君は安静にしてて、分かった？」
「はあい……。」

立ち上がり、ほかの艦娘達の様子を見に行こうとした時、ハイネが声をかける。

「あ、ハイネ、どうだった？」

「からつきしだ。キズ薬になりそうなのは一つもありやしねえ。」

「そう……やっぱり、どうしようもないか……。」

暁の腕のヒビはアムロが板と布で応急処置は為されているものの、それ以外の天龍達の傷は手付かずとなっている。

早く適切な処置を行わなければ、傷口から膿が発生し、最終的に死に至る可能性も上がってくる。

「早く、ここを出る目処を立てた方が良いかもね。」

「ああ、それには賛成だ。だがどの道、それ相応の食糧を準備しなきゃ、どうしようもねえよ。」

ヒイロ達はこの無人島から脱出しようとしている。前までは現在地を知ることができなかったため、出ることができなかったが、

天龍達からヒイロ達の現在地の情報を得ることができたことである程度のプランを

立てることができた。

場所はトラツク諸島、今で言う、チューク諸島から20、30キロ離れた島らしい。

無人島から脱出できたのち、目指すのは大本営、ないしは横須賀鎮守府、そこで天龍達を保護してもらおうというのがヒイロの提案だ。

とりあえず、出来ることをしようと、天龍達の方がに向かおうとした時、

ガタツという、物音が響いた。その音は天龍達には聞こえなかったが

「・・・ハイネ、聞こえた？」

「ああ、聞こえたぜ。」

気づかれないように、音源へと近づく。そこには、キラ達を見て驚いている手のひらサイズ程のちいさな小人がいた。

「え、こ、これは・・・？」

「小人、だよな。」

『あ、あの!!』

困惑していると、小人から声をかけられた。驚くハイネに対し、キラは落ち着いて小人の話しを聞く。

「えっと、話しは聞くけど、まず君の素性を教えてくれないかい？」

『妖精さんです!!』

「ようせい？妖精って、あの妖精か？」

ハイネは背中に半透明の羽が生えているファンタジーによくある妖精を思い浮かべる。キラも同じような想像をしたが今は置いておく。

「君はどこから来たの？」

『工廠です。そこで他の妖精と一緒にいました。』

「工廠、調べてない場所だな。」

「おい、なにやってんだ・・・って、妖精さんじゃねえか。」

「えっ、その名前で通ってるんだ・・・。」

「俺とキラは今から工廠を見てくるんだが、大丈夫か？」

「・・・分かった。」

何か、言いたそうに見えた天龍だったが、キラは気にしなかったことにしたが、

「何かあったら、ヒイロかアムロに言っつてね。そろそろ戻ってくると思うから。」

「ああ、ありがとな。」

天龍の言う通り、キラ達と入れ違いで、ヒイロとガロードが帰ってきた。

「あれ、キラとハイネは？」

「工廠へ向かった。って、だいぶ取ってきたんだな。」

「そりゃあ、おおよそ三日分だしな。これぐらいの量にはなるさ。」

「・・・そうか。」

天龍の微妙な反応に怪訝な感情を抱いたヒイロは彼女に聞く。

「どうかしましたか？」

「・・・いや、なんでもない。」

「話せることなら話した方がよいぜ。」

ガロードにも見透かされたと思った天龍は観念して話すことにした。

「・・・俺たち、戦わずに逃げてきただろ？でも、向こうには戦っていた奴もいたんだろ？
なあって思ってたな。」

「情けねえよなあ。本来、戦わなきゃなんねえつうのに、敵を見たとき、思わず足がすく
んじまった。」

「んじや、お前、自分の選択に後悔してんのか？」

「あ・・・？後悔・・・？」

「正直な思い言ってる良いか？私は、今お前をすごくブン殴りたい。」

ガロードの怒りのこもった声に天龍は目を白黒させる。

「は、はあ!!?なんでだよ!？」

「お前の言った言葉はなあ!!私達のお前達を助けたいって言う思いを侮辱してんだよ

!!」

凄まじい剣幕で天龍に掴みかかる。そして、龍田達を指差し、

「それになあ!!お前はあいつらの笑顔まで侮辱するのか!!」

天龍が目を向けると、そこにはかつての鎮守府では笑顔を見せる余裕すらなかった彼女たちが、屈託のない笑顔を浮かべる様子が見えた。

「お前は、今のアイツらの様子見て、自分の判断が間違っていたって言えんのか!!」

ガロードの怒りに何も言い返すことができない天龍。そして、我に帰ったガロードは天龍を掴んでいた手を離す。

「・・・悪い、カッとなった。」

ガロードはバツの悪そうな顔をする。だが、天龍は黙りこくったままだ。

やらかしたか、と自己嫌悪に陥りそうになった時

「・・・わねえ・・・!!」

「俺は、判断を間違つてちやいない!!」

涙ぐんだ声でガロードに向かって叫んだ。

「・・・へへ、お前がそういうなら、私も怒った甲斐があるものだけ。」

「まあ、ほとんど言われてしまいました。私もガロードと同意見です。せつかく助けたの後悔だの何だの言われてしまうと、助きたい甲斐がありませんね。」

「その、悪かった。」

天龍はヒイロとガロードに頭を下げる。

「貴方に分かつて貰えれば、私はそれ以上を求めませんよ。」

「同じくだけ。」

ヒイロとガロードは天龍に笑顔を向ける。

「とはいえ、本当に懸命な判断だったと思いますよ。変に意気込んで突っ込んででも無駄死にするだけです。」

「うぐっ・・・。」

ヒイロからの辛辣な言葉に天龍の心は大破しそうだった。

第7話 介入

「うん、これくらいあれば少なくとも三日は保つかな。」

目の前には、大量の果実と魚。ヒイロは魚がこれほど取れるとは思っていなかったため、アムロにその訳を聞くと

「刹那が乱獲した。全く、無茶をする……。」

ため息をつきながらずぶ濡れの刹那を見る。

(たぶん、潜ったんだろうな。)

皆で気づいていながら、暗黙の了解、つまりスルーを決めてこれからの方針をヒイロが話す。

「では、これから日本列島、もっと詳しく言えば、横須賀鎮守府へ向かいます。最短三日で着く予定ですが、途中、深海棲艦からの襲撃は必至でしょう。」

「もし、敵と接触した場合、主に迎撃するのは、私達がやる。天龍達は食糧の運搬をメインに置いてくれ。」

天龍達から威勢のいい、了解の返事が返ってくる。

「君たちは我々がかならず守り通します。では、出航します!!」

目指すは横須賀鎮守府、そう意気込みヒイロ達は大海原を出航した。

「そういえば、アムロ。天龍ちゃん達の装備、いつ直したんですか？」

「ああ、それは……」

アムロいわく、修復の二文字か書かれたバケツをかけたら瞬く間に損傷が再生したらしい。天龍達に聞いたら、そのバケツは『高速修復剤』というそうだ。

「修復に使えるだろうとは思っていたが、まさか、あそこまで速いとは……」

ヒイロは次に目に入ったのはちいさな箱を抱えているキラの姿だった。

「キラ、その箱は……？」

「ああ、これ？これは……」

キラが箱の蓋をあけると、中から妖精さんが複数人出てきた。しかし、妖精さんの存在を知らないヒイロや刹那は驚きを隠せない。

「それは……人……なのか？」

「妖精さんっていうらしいよ。艦娘の装備にくっついていてる時が大半らしいんだけど、中には工廠っていう建物にいる種類もいるんだって。」

「工廠……か。なるほど、人の気配がしたのに見当たらなかったのはそのためか。」

「妖精さんですか……可愛い顔をしてますね。」

指で妖精さんの顔をつつついてみると、ガロードから声がかかる。

「お〜い。ヒイロ、龍田がなんか呼んでるぞ?」

「あ、はい。わかりました。」

飛ぶ高度を下げ、会話ができる距離まで近づく。

「ごめんなさいね〜。お取り込み中だったかしら〜?」

「いえ、別に構いませんよ。どうかしましたか?」

「えっと、横須賀まで三日かかるって言っていたわよね?」

「ええ、まあ正直おおよそなので誤差はあるでしょうけど・・・。」

「別にそれは構わないのだけれど、寝る場所はどうするのかしら?」

龍田のその質問に天龍を含めた艦娘があ、という顔をする。

「それは・・・行き当たりばったりが答えになってしまいます。暫定的な地図は分かりますが、詳しいことはさらさらわかりませんので、どうしても、区切りの良い場所で北上を止めて、寝床となる島を見つなければなりません。」

ヒイロはそういうい、天龍達に頭を下げる。

「ごめんなさい。こういうことは言っておくべきだったんでしょ〜?」

「別に気にはしないんだけどなあ・・・。」

思いもよらなかった反応にヒイロは驚く。

「え、気にならないんですか?」

「普通、作戦を始めると三日以上かかるなんてザラにあるからな。寝る時は寝るけど、多少寝なくてもそんな気にならねえよ。」

「そ・・・そうですか・・。」

余計な心配事でしたか。そんな風に思い、ホツとするヒイロだった。

そんな彼女らの航海は途中、深海棲艦に発見されることが何回かあったが、その都度ヒイロ達が秒殺するという、比較的安全に三日間を過ぎ、目的地へ進むことができた。

そして、転機は4日目に起こる。

変わらぬ海を進んでいたヒイロ達、食糧も底が見え始め、刹那がまた素潜りを画策し始めた頃、ガロードがある一点を見つめていることに気づく。

「ガロード？どうかした？」

最初に気づいたのはキラだ。前も感じた、儂げな気配がガロードからした。

次点でアムロと刹那だ。

そして、ガロードが、言葉を紡ぐ。

「向こうから、貴方がたが求めるものがあります。」

キラは一度見たため、驚きはしなかったが、ほかの5人は突如としたガロードの変わりように驚きを隠せない。

「お、おい、どうした？なんか、へんなものでも食ったか？」

「いや、この変わり方・・・さながら、人格そのものが変わったような・・・!」

「この感覚・・・君はニュータイプか・・・？もしくは、それに準ずるナニかなのか？いや、それ以前に、君は何者だ!」

ニュータイプ、それは宇宙世紀にて、ジオン・ズム・ダイクンが提唱した思想『ジオニズム』において、存在が予言された、人類の革新とも呼べる者たちの総称である。

ガロードはアムロの質問には何も答えず、一方的にヒイロ達に告げる。

「私と言えるのはこれだけ・・・。まず、彼女が自分自身のこと気づく必要があります。」
フツ、と消えた気配と共にガロードの体が重力に従い落ちて行く。

「つ!?ガロード!!」

刹那が咄嗟にガロードの手を掴み、事なきを得るが肝心の彼女は目を閉じたままだ。

「だ、大丈夫ですか!」

ヒイロがガロードの口元に手を当てる。幸い、息はしっかりとっている。

「良かった・・・失神しているだけのようです。」

「・・・しかし・・・ガロード、いや彼女と呼ぶべきか？一体何者なんだ・・・？」

「・・・なんつーか、こう・・・。いつものガロードとは真逆の性格だったよな。」

「・・・本人に聞くか？」

「多分、ガロード本人に聞いても分からないと思う。」

キラのその言葉に疑問符をあげるアムロやハイネ、だが、ヒイロは気づいた。

「キラ。貴方、ガロードが前にもこのような状態になったの、知っていましたね？」

「え、見たことあるのか!？」

「そうなのか？キラ。」

キラは天龍達の救援を行う前、ガロードが先ほどの状態になっていたことを告げた。そして、その後、ガロード本人に聞いたが、知らないと言われたことも。

キラが話し終えたと同時にガロードが目を覚ます。

「ん……？あれ、私、寝てた？」

「……ああ、休むか？」

「いや、大丈夫。それより、なんか、あつちに行かなきゃなんない気がするんだ……。」

ガロードは素晴らしい、先ほど、見ていた方角を見つめた。

「わかりました。あつちに進めばいいんですね？」

「……ああ。頼めるか？」

ヒイロは自分たちの異常を察して止まっていた天龍達に伝えるため高度を下げ、進路変更の旨を伝える。

そして、彼女が示した方角へ進むと、見えてきたのは、

「・・・あれ、低気圧かな・・・？」

海の上にポツンと、暗い場所がある。その上には真つ黒な雲が立ち込めており、瞬時にその下で雨が降っていることが分かる。

ヒイロ達が雨雲を避けようとした時、

「・・・待て、艦娘だ!!」

刹那が叫んだ。よく目を凝らして見てみると、二人の艦娘が雨の中を駆け抜けているのが確認できた。

一人は傷だらけで立っているのもやつとの状態だ。

もう一人はその傷ついた艦娘を抱え、必死に水上を駆け抜けている。

しかし、その先には深海棲艦が待ち構えている。

「不味い!!彼女達があぶない!!」

雨の中を抜ければ間違いないく、敵の艦載機が彼女達を襲うだろう。普通なら間に合わないだろう。普通なら。

(私なら間に合うかも・・・!!確か、アレは構造上、人体で行っても問題ないはず・・・!!)

ここで少し話しは逸れるが、ヒイロ、もといウイングガンダムが強襲離脱型と言われる所以は主に二つだ。

強襲の部分はヒイロがもつバスターライフル、そして、離脱の部分は、

「私に向かいます!!みんなは後から来てください!!」

ヒイロはバスターライフルのつけたシールドを背中に装着させ、背中のウイングを広げると、さながら鳥の姿に変形した。

「へ、変形機構を持っていたのか!?!」

アムロが驚愕の声をあげるのを他所にしてヒイロは豪雨の中に突入した。

「速っ!?!」

「あれほどのスピード・・。強襲離脱型とはよく言ったものだ。」

「私達も続くぞ!!」

アムロ達もヒイロに続き、襲われている艦娘の救援に向かう。

「くっ・・・いよいよ不味くなってきたわね・・!!」

「瑞鶴!!もういいのよ、私を置いて、逃げて・・!!」

「そんなこと、できるわけじゃないじゃない!!」

頼みの綱であった低気圧の抜けての奇襲も対処され、いよいよ、万事休すかと思われたその時、目に入った、いや目に入ってしまった。自分に向けて放たれている魚雷。それも二本。

(タイミング最悪・・!?)

寄りにもよって目を離れた瞬間を狙われるとは、衝撃を覚悟して、目をつむった。鳴り響く爆音。耳には嫌という程衝撃はきたが、体には衝撃は一切来なかった。不審に思った瑞鶴が目を開くと、

「ま、間に合った……。大丈夫ですか？」

「え、あ、うん、ありがと……。？」

目の前に立っていたのは、シールドを構えたヒイロだった。

ヒイロはシールドで魚雷を防いだ。若干嫌な記憶が頭をよぎったが、どうやら問題なく防げたようだ。

「……ターゲット、ロックオン……!!」

ヒイロは敵を確認すると、すぐさまバスターライフルを構える。狙うは頭にタコのような触手が生えている深海棲艦、空母ヲ級。

「攻撃開始。」

バスターライフルから放たれる山吹色の閃光はヲ級もろとも敵の艦隊を消滅させた。残りは敵艦載機だけだが、それは、アムロたちが駆けつけて、すぐに殲滅された。

「な、なんなのよ……。あんた達……!!」

「い、一瞬で敵艦隊が消滅……。!?!」

瑞鶴とその姉、翔鶴はヒイロ達に対して、警戒感を露わにする。無理もないだろう。

いきなり現れて、深海棲艦を倒してくれたのはいいが味方と決まったわけではない。「私達は、トラック泊地の残存部隊です。」

第8話 連行

「トラック泊地の残存部隊……？それじゃあまるでトラック泊地が墜とされたみたいなのじゃない。」

「残念ながら事実です。詳しい事は彼女らから聞いた方が速いでしょうけど。」

無事、戦闘を終えたヒイロ達は助けた艦娘、翔鶴と瑞鶴に事情の説明を行っていた。

トラック泊地が陥落したこと、そして、自分達はそのトラック泊地の残存部隊であること。

瑞鶴と翔鶴は天龍達からの説明でそれがすべて事実であることを察した。

「ところで、あなた方の所属はどこですか？」

「は？横須賀鎮守府だけど……？」

ヒイロはそのことに喜んだが、束の間、アムロから通達が入る。

「ヒイロ、5キロ南西から艦娘が4人こちらに向かっているが、どうする？」

「それは、多分、吹雪達ね。警戒しなくていいわよ。」

「同じ所属の艦娘か？」

「うん。それで、ヒイロだっけ？なんで私達の所属を聞いたの？」

「彼女達の傷を見てどう思いますか？」

瑞鶴は天龍達の傷を軽く見る。そこら中に傷がつけられて痛ましくなっている。あまり直視できるものでもなかった。応急処置はある程度は施されているが、専門的な処置も必要のようにも見える。

「……専門的な治療が必要だと思っわ。」

「そう思ってくれるのでしたら、話は速いです。結論から言わせてもらおうと我々を大本营、ないしは横須賀鎮守府へ連れて行ってもらいたいのです。」

「……ごめん、それは私が決めれることじゃないわ。旗艦は吹雪だし……。」
瑞鶴が目をやると、アムロが見つけた4人の艦娘がすぐそばまで来ていた。

巫女服やセーラー服などの衣装を身につけた艦娘達はヒイロ達を警戒しつつも瑞鶴と翔鶴に駆け寄る。

（あの一、天龍さん？）

ヒイロが天龍に小さく話し掛ける。

（誰が吹雪か、わかりますか？）

（ああー、うるさいのが金剛、さっぱりしてんのが北上、デレデレなのが大井、残ったのが吹雪だ。）

(あんな子供が旗艦を!?)

ヒイロが驚いていると、セーラー服を着た中学生のような少女、吹雪が話しかけてきた。

「あ、あの。瑞鶴さん達を助けていただき、ありがとうございます!!」

「素晴らしい、ヒイロに敬礼をした。」

「えっと、成り行き、でしたので。で、ですよね?」

ヒイロは同意を求めたが、アムロ達は第6駆逐隊の方を見ており気づいていない。

(マジですか・・・)

諦めて、吹雪の方に顔を向ける。

「それと、トラック泊地が陥落した、というのは、本当なんですか!?!」

「悪いけど、本当だ。俺たちは遠征の帰りだったんだが、その時にはもう奴らの巣窟だったよ。」

天龍の言葉に吹雪は悲しい顔をした。

「そう・・・ですか・・・。そのことは大本営には?」

「言っていないな。通信機もお陀仏になってたんでな。」

「なら、早く伝えないと・・・」

「その時になんですが、我々のことも報告してもらえませんか?」

「わ、わかりました。」

吹雪が通信を始めた。話しこんでいたが、しばらくすると、終わったようでも再びヒイ口達の方を向く。

「提督からもっと詳しい話しを聞きたいとのことです。ご同行願えますか？」

「それは、願ったりかなったりです。お願いします。」

数時間後、吹雪達に連れられ、ついに横須賀鎮守府にたどり着いた。

「ここが横須賀鎮守府・・・かなり広いな。」

「でも、やっぱり軍事施設っていう感じはあまりしないね。」

しばらくしていると、視界の左に写っていた崖が開く。どうやらハッチのようだ。

吹雪達がそちらに向かうのを確認して、ヒイ口達もそれについていく。

「中は思ったよりハイテクですね。」

「すまない、所属している君たちはともかく、天龍達の艦装はどこに置けばいいんだ？」

アムロが吹雪達に声をかけると、ピンク髪で横髪をおさげ風にまとめた女性が答え

「それでしたらこちらの方に持ってきてください。」

「よろしく頼む。」

「ええ、任せて下さい。」

「そういい、天龍達を連れて、その場を後にした。」

「アムロさん。私達はこっちですよ。」

「ああ、今行く。」

アムロが向かおうとしたその時。

「えっ……アムロ……?」

ヒイロ達ではない、誰かの声が出た。声のした方向を見ると、オレンジ色のショートカットに青い眼を持った女性がいた。

その女性はアムロの視線に気づくと、そそくさと逃げるようにどこかに行ってしまった。

(彼女からした感覚……まさか……な。)

ヒイロ達は横須賀鎮守府の秘書艦、長門に連れられ、提督の元へ連れられていた。

そして、明らかに今まで通ってきた扉より、高級感溢れる扉をくぐる。

そこには『司令室』の札がかかっていた。

長門が扉をノックすると、中から、入れ、と声がする。

長門に連れられるまま入るとそこに一人の男性が立っていた。

「提督、件の6人、連れてきました。」

「ああ、ありがとう。長門は下がってくれ。少し、込み入った話しになる。」

提督から言われると、長門は敬礼をし、司令室を後にする。

「立ち話もアレだから、座ってくれ。」

提督に促され、ヒイロ達は用意されていた椅子に腰掛ける。

「さて、まずは瑞鶴達を助けてくれてありがとう。感謝する。」

と、深々と頭を下げた。

「いえ、こちらはほぼ通りすぎりでしたし。こちらが感謝したいぐらいです。」

ヒイロがそう話しをきると、提督は神妙な顔をし、話しを始める

「・・・では、本題にはいるのだが、本当にトラック泊地は堕ちたのか？」

「天龍ちゃん達から聞いたことでよければ、私達が知っていることをお伝えします。」

「ああ、構わない。」

「ですが、申し訳ありません。一つ、条件があります。これを飲んでいただければ、すぐに教えます。」

ヒイロがそういうと、提督は驚いた顔をする。

「と、言っても条件は簡単です。天龍ちゃん達を専門の病院に連れて行って欲しい。それだけです。」

提督は今度は拍子抜けした顔をする。

「……もつときつい条件を提示すると思いましたが？」

「あ、ああ。」

「では、よろしくお願いします。」

「素晴らしい、話しを進めようとしたところで、提督が口を開く。

「そういうえば、君たちはこれから住むところなどはどうするんだ？」

「……まあ、野宿とかしながら、ですかね。」

「良かったら、ここに残っていかないか？助けてくれた礼だ。」

提督からの提案にヒイロは、

(……おや、向こうから来ましたか、こちらから引つかかる予定だったんですけど……) アム口達を見ると、別に構わないという視線が帰ってくる。それを見たヒイロの答えは一つ。

「でしたら。お世話になるとしましょう。」

こうして、ヒイロ達は横須賀鎮守府の一員となったのだった。

第9話 散策

提督からあてがわれた部屋でヒイロ達は暇をもてあわせていた。

しかし、アムロの姿はそこにない。気になることがあるといつて、部屋から出ていったのだ。

「暇、ですわね……。」

「外でも回ってくるか？アムロのように。」

「それも悪くはないかもな。」

「けど、どこを回るの？そろそろ日が沈んじゃうけど……。」

キラの言う通り、日は沈みかけ、空がオレンジ色に彩られている。

外からは艦娘達が訓練している様子がときおり見え、様々な声が聞こえる

「海の近くを見て回るだけでいいんじゃないでしょうか？誰かしらはいると思いますけど……。」

「そうだな。それに世話になるのなら最低限、顔と名は覚えておかなければならないしな。」

ヒイロ達はそういい、部屋を出ていった。

埠頭では先ほどの部屋とは打って変わり、とても静かだった。

心地よい風が海から吹き、心が落ち着く感覚がする。

談笑をしながら歩いていると、反対方向から人影が走ってくる。

「あれ、吹雪ちゃん？」

人影の正体は吹雪だった。服装がジャージだったため、おそらくトレーニングをしていたのだろう。

「あ、ヒイロさん。トラック泊地の天龍さん達の方には行かなかつたんですか？」

「これ以上彼女達に関わる訳にもいきませんからね。とりあえず提督さんに誘われてここに所属することになったよ。よろしくね。」

「えっと、他の皆さんも、ですか？」

「まあな。よろしくな!!」

ガロードが笑顔で吹雪に答える。吹雪も釣られて笑顔になり、

「はい!!よろしくお願ひします!!」

敬礼をガロードに返す。

「ところでなんだが、トレーニング中なのか？」

「はい!ちよつとでも赤城先輩に近づけるように毎日やってるんです!」

「そうか、頑張り屋なんだな、吹雪は。」

ハイネがそう言うと、吹雪は顔少し赤らめ、

「そ、そうですね？ありがとうございます。」

「だが、適度に休息は取っておいた方がいい。顔に少し疲労の色が見える。」

「え!?そ、そうですね!？」

「過度な訓練は自分を余計に傷つけるだけだ。」

「わ、分かりました。」

刹那の言葉に吹雪の気持ちは少し沈む。それを感じ取った刹那も困った顔をしてしまふ。

「・・・別にやるなど言ってる訳ではないんだが・・・すまない。少し言葉を選ぶべきだったか・・・」

「えっ!?あ、いえ、こ、こちらこそすみません!？」

なんか謝り合戦が始まりそんな空気を察してか、キラとガロードが言葉を挟む。

「刹那が言いたいのは、メリハリをつけてやって、つてことだよ。休める時に休んで、やる時はやる。そうじゃないと、本当に潰れちゃうよ?」

「ま、そういうことだ。吹雪が使ってる砲台とか魚雷もメンテとかなんにもしないとそのうち壊れるだろ?それとおんなじさ。」

「なるほど・・・。」

吹雪が感嘆の声も漏らさず。

「と、いうことだから、夕飯でも食べに行きますか？そろそろその辺りの時間ですよね？」
「はい！」

吹雪の顔に再び笑顔が戻る。それを見たヒロ達はそばにある草むらに目を向ける。
「そういうことだ。アンタも一緒にどうだ？パラッチさんよ？」

ガロードがそういうと、草むらをかき分けて艦娘が一人出てきた。その艦娘はピンク色のポニーテールに手にカメラを持っていた。その艦娘の名は青葉である

「ば、バレてましたか……。ちなみに、どこから？」

「部屋を出た時からだが？心配が分かりやすかった。」

「始めからじゃないですかー!？」

刹那の言葉に打ちひしがれる青葉、

「あ、青葉さん!?またネタ探しですか!？」

「そりゃあそうですよ!何やら新しい子が参入するという噂を聞きつけて、私が動かないはずがないでしょう?」

「ようするに、アンタは取材しに来たってことか?」

「もちろんです!!あ、ちなみに私は重巡洋艦の青葉です。以後お見知り置きを!!」

元気な言葉と共にヒイロ達に近寄る青葉、その手にはメモ帳とペンが握られている。ここでヒイロ達に質問の嵐を浴びせさせるつもりだろう。

「それじゃあガロード、頑張つてね。こういうタイプ、かなり時間がかかると思うから。」
ガロードを除くヒイロ達は吹雪を連れてその場を後にする。予想外の反応にガロードはすつとんきような表情を上げることしかできない。

「誘ったのはガロードだろう。その責任は取るべきではないのか？」

「え、ちよつ、刹那あ!？」

「ぼくたちはこれから夕飯を食べに行くからね。取材はまた今度でお願いね。」

「ご愁傷様。ま、割り切れよ。」

「は、計りやがったなあ!？」

ガロードの悲痛な叫びと共に青葉の質問の嵐がガロードを襲い、結局ガロードは夕飯にありつくことはなかった。のだが、見かねたとある軽空母が作ってくれたため、事なきを得ることができた。

時間は少し遡り、アムロは工廠に向かっていた。目的は先ほどのオレンジ髪的女性だ。工廠に着くと、たまたま手が空いていたらしい艦娘、夕張に声をかける。

「すまない、キミ。少しいだらうか？」

「え？いいけど・・・って、貴方は・・・アムロ・・・でしたっけ？」

「アムロ・レイだ。今日からここで世話になることになった。よろしく。」

「軽巡洋艦の夕張です。よろしくね。それで？何か私にご用かなにか？」

「ああ、少し人探しをな。特徴は・・・」

アムロはその探し人である女性のことを伝えると、夕張は

「あー、その人なら向こうにいましたよ。多分、装備のメンテの手伝いをしてたと思うけど・・・。」

「そうか、すまない、ありがとう。」

「いえいえ、そういうええお知り合いなんですか？」

「いや、そういう訳ではない・・・。同郷、と言えいいのか・・・？」

「同じ出身とかですか？」

「そうだな。そういう言い方が一番いいのかもしれない。ともかく、教えてくれてありがとう。」

アムロは夕張に別れを告げ、その女性の元へと向かった。

少し経たないうちにそのオレンジ髪の女性は見つかった。

さつきは遠目から見たためよくわからなかったが、その女性は髪をショートカットに

しており、服は心なしか、ロンド・ベルの制服に似ていた。具体的に言うところ、
長が着ていた服だ。

女性がアムロに気づくと緊張した面持ちになる。

「・・・何か私にご用ですか？」

「・・・別にそれほど緊張しなくていいぞ。確かにアムロとは名乗ったが、あくまで名乗っただけだ。本人ではない。」

「でも知ってはいるんですよ？」

「・・・その口ぶりだと、君も宇宙世紀出身か？」

「・・・はい、RX-10、ユニコーンガンダム3号機。他の皆さんにはフェネクス・ベルナル。そう名乗っています。」

第10話 疑念

「フェネクス・・・か。少し聞きたいことがあるんだが、構わないか？」

「はい。私なんかでよければですけど・・・。」

「君は、何年に作られたんだ？」

「宇宙世紀0096です。」

「なら、第二次ネオ・ジオン抗争は知っているんだな？」

「・・・もしかして、アクシズのことですか？」

フェネクスにそう言われるとアムロは少し目を瞑り、こう話す。

「私のMSとしての記憶はサイコフレームの輝きに包まれたところで終わっているからな。気になってしまっただけ。」

「・・・結論から言えば、アクシズは進路を変えて地球は救われました。後に世間はこのことをアクシズ・ショックと呼んでいます。」

そう言われ、アムロはホツとした顔をする。だが、フェネクスの次の言葉に再び険しい表情に戻る。

「ですが、ヒールガンダムのパイロット、アムロ・レイとネオ・ジオン総帥、シャア・

アズナブルの消息は絶たれたままです。」

「……それは、本当なのか……?」

「……残念ながら、事実です。」

「そうか……。」

アムロは少し、悲しい表情をしたが、すぐに表情を戻し、フェネクスに向き直す。

「ありがとう。教えてくれて。」

「貴方は、やっぱり、Hi-ルガンダムなんですな。」

「ああ、そういえば名乗ってなかったな。その通りだ。」

アムロは軽く自己紹介を済ますと、ふと気になったことを話す。

「そういえば、君はいつから横須賀鎮守府ここに?」

「えっと、4日、5日程前からです。」

「それは、気づいたらここにいたのか?」

アムロにそう聞かれると、フェネクスは突然、顔を青くし、

「……ごめんなさい!!そろそろ夕飯の時間なので……!!」

と逃げるように工廠から走って逃げてしまった。

「お、おい!?!」

制止の声も届かず、フェネクスを見失ってしまったアムロは行き場のない手を戻す。

「何か触れて欲しくないところに触れてしまったか・・・」

「あ、あの・・・。」

反省しているアムロに一人の艦娘が声をかけた。その艦娘は紫がかった髪をストリートにしており、ときおり見せる仕草から幼いながらも妖艶さがにじみ出ている。

「君は・・・？見たところ駆逐艦の子か？」

「睦月型二番艦の如月といます。あの、フェネクスさんとはお知り合いなんですか？」

「まあ、同じ出身、と言った所か。自己紹介がまだだったな。アムロ・レイだ。」

他の5人と共に今日から世話になることになった。」

アムロがそういうと、如月はああ、と何か思い出したような声を上げる。

「もしかして、フェネクスさんと同じ、MSの方ですか？」

如月のこの言葉にアムロは驚いた表情をする。

「なっ!?! どうしてそれを!?!」

「フェネクスさんがMSのことについて教えてくれたんです。最初は信じられなかったけど、あんな凄い戦いを見てしまったら・・・。」

(そういえば、フェネクスはここにきた経歴を教えてはくれなかった。彼女の預かり知らない所で聞くのは気が引けるが・・・)

如月の言葉にアムロは先程のフェネクスが喋らなかつたことを如月は知っている

踏んだ。

「・・・フェネクスのこと、教えてくれないか？」

「フェネクスさんのこと、ですか？」

「ああ、彼女がここにきた経歴を。」

アムロがそう聞くと、如月は少し考え、

「分かりました。あれは、一週間程前、ウエーク島の攻略に向かった時のことです。」

響く轟音、鳴り止まぬ敵艦載機のエンジン音、如月はそんな地獄のような戦場に来ていた。戦局ははつきりいつて劣勢、撤退もやむなしと思われる状況だったその時。

重く、太い、腹に響くような重低音な音が聞こえた。戦艦の主砲の出す爆音とはまた違う、重い音。

それはたつた一筋の光線、紫電を纏ったそれは今まで猛威を振るっていた敵の航空機の編隊に風穴を開けた。10機、20機は落とされただろうか。中には掠めただけで墮とされた機体もあった。

再び、重い音が空に響く。今度は一発だけではなく、2、3、4。

中には八つ裂きにされ、原型を留めない程斬られたりなどで深海棲艦を殲滅すると、如月達に目を向ける。その目は虚ろで生気をまるで感じない。

「ヒッ!?!こっつ、こっつち見てないっ!?!」

誰かが悲鳴を上げる。先程の惨劇にも等しいものを見せられては、無理もないだろう。

フェネクスは如月達を見て少しすると、ブースターを蒸す。

「く、来るクマ!!弾幕張るクマ!」

旗艦である軽巡洋艦 球磨の声に続き、主砲で弾幕を形成する。だが、フェネクスはそれを余裕だと言わんばかりの機動ですべて避ける。

フェネクスが目の前に迫り、もう駄目だ、と目を瞑ったその時。

如月の真横で爆発音が響く。それと同時に煙で視界が塞がれる。

「ケホツケホツ、な、なに・・・?」

むせながら目を開くと目の前にアームドアーマーDEを自身の前に持ってきているフェネクスがいた。あたりに敵の艦載機の破片が散らばっているのを見ると撃ち漏らした敵艦載機が特攻を仕掛けてきたのを察することができる。つまり、目の前にいるフェネクスは、

「・・・もしかして、守ってくれた・・・の?」

如月がそう眩いた瞬間、フェネクスの体が電源が切れたかのように脱力し、海面に落ちる。展開していたフレームは元に戻り青い光は見えなくなった。

「と、止まったクマ・・・?」

「そ、そう見たいニャ・・・。生きた心地がしなかったニャ・・・。」

皆、安堵の息を吐く。フェネクスの放ったプレッシャーから解放されたのか、腰が抜けて動けないという艦娘もいるなか、如月はフェネクスに駆け寄る。

血色は良く、気絶しているだけのようだ。

「ねえ、球磨さん、この人、連れて行けませんか?」

如月の言葉に球磨は若干、嫌な顔をする。

「え、マジで?」

いつも語尾についている『クマ』が抜けるレベルで驚いているようだ。

それは置いておいて、如月は先程の自分の状況を伝える。

それを聞いた球磨は渋々と言った顔で、

「・・・分かったクマ。でも、またさつき見たいに暴れられるとどうしようもないからしっかりと面倒見るクマ。球磨達も手伝うクマ。」

「多摩達もかニャ!?!」

「ふふん、一蓮托生クマ!!」

そういう球磨はフェネクスの肩を担ぐ。だが、思ったより重かったようでもバランスを崩し、『クマー!?』という叫び声と共に海に顔面を叩きつけた。

見かねた多摩達が手伝い、如月達は帰路へとついた。

如月の話を一通り聞いたアムロはある疑問が出てきていた。

（フェネクスは装甲にサイコフレームを使っているのか・・・？だが、色がアクシズの時とは違う・・・。）

疑問はとりあえず、頭の隅に置いておき、如月に別の質問をする。

「君はフェネクスからMSのことを聞いたんだっけ？他に何か聞いてないか？」

「えっと、あ、一回だけ、フェネクスさんの展開していた装甲について聞いて見たんです。そしたら、『暴走するとそうなる。』って言ってました。」

（暴走・・・？一体何のことなんだ・・・？）

フェネクスに対する疑問は解消するどころか、増えてしまったが、如月にお礼をいい、アムロも食堂に向かった。

第11話 発令!!トラック泊地強襲作戦!!

夕飯を食べ終え、部屋で一夜を過ごしたヒイロ達。

その次の日の朝、皆揃って早く起きてしまったため、暇を持て余していると、

部屋のドアをがノックされる。一番近くにいたヒイロがドアを開けると提督が立っていた。

「どうかしましたか?」

「朝早くからすまない。少し、私についてきてくれないか?」

それと同時に鎮守府の館内放送で全ての艦娘が講堂に集まるように、と知らせられる。

「・・・トラック泊地のことか?」

刹那がそう聞くと、提督は黙って頷く。その反応にヒイロ達の顔に緊張が疾る。

部屋を出たヒイロ達は提督に連れられ、講堂に足を踏み入れる。そこには既に艦娘達が一堂に会していた。

鎮守府で主に通信を担当している艦娘、大淀に促されて、壇上に立っている提督の後ろに立つ。

一番先頭に立っていた長門の「礼っ!!」という勇ましい声とともに全ての艦娘が提督に対し、敬礼をする。提督も敬礼で返し、艦娘達は敬礼をしていた手を下ろす。

「まずは朝早くから集まらせてしまつてすまない。今回集まつてもらつたのは緊急事態が発生したからだ。」

提督の言葉で艦娘達の間でざわめきが起こる。事情を全く知らない艦娘は周りと確認しあつたりしているが、ある程度知つている吹雪や翔鶴あたりは緊急した面持ちをしている。

「今日、大本営からの通信で、トラツク泊地が陥落した事実が判明した。」

艦娘達からどよめきの声が挙げられる。不安など様々な感情のこもつた声も聞こえたが、提督は一度、手を叩き艦娘達をなだめる。静かになつたことを確認した提督は話を続ける。

「大本営はこの事案に対し、急遽、トラツク泊地奪還作戦を発令した。既にいくつかの鎮守府は作戦行動を開始し、トラツク泊地周辺海域の掃討にあたつている。そして我々のやることだが、大淀、頼む。」

ここで提督から大量のプリントを持っている大淀にマイクが渡される。

「はい。今回、この奪還作戦で我々に課された任務は、最終目標であるトラツク泊地に居座る深海棲艦の姫級、もしくは鬼級に強襲を仕掛け、これを撃破することです。」

(つまり、敵本拠地を叩き潰せつてことですか・・・)

「これに伴い、知っている者も多いと思うが、新たにこちらの6人が仲間に加わる。彼女らはトラック泊地からの生還者をここまで連れてきてくれた。彼女らの加入は我々の作戦成功の手助けとなってくれるはずだ。自己紹介を頼めるか？」

ヒイロ達が呼ばれたのもこれを兼ねてのことだったのだろう。確かにヒイロ達の顔合わせにもいい機会だろう。

「ヒイロ・ユイです。よろしく。」

「アムロ・レイだ。よろしく頼む。」

「刹那・F・セイエイだ。」

「キラ・ヤマトです。よろしくお願いします。」

「ハイネ・ヴェステンフルスだ。ハイネって呼んでくれ。」

「ガロード・ランだ。よろしくな！」

各々が自己紹介を済ますと、提督が話しを進める。

「では、これより、編成を伝える。構成は連合艦隊とし、第1艦隊旗艦を伊勢とし、日向、扶桑、山城、翔鶴、瑞鶴の6名。」

「「はい!!」」

提督に名を呼ばれた艦娘は敬礼をしながら立ち上がる。

「続いて、第2艦隊旗艦を鳥海に任命し、摩耶、古鷹、加古、長良、時雨の6名。とする。そして、ヒイロ君達だが、いきなりで申し訳ないが、出撃してもらっても構わないか？」

提督の言葉に再び、どよめきが起こる。異例の大抜擢にも等しい扱いにヒイロは少し戸惑う。

「あの・・・よろしいんですか？いくら吹雪さん達からは聞いているでしょうけど、貴方から見て、我々は完全に未知のモノ、兵器なんですよ？」

「それでもだ。我々、人類は深海棲艦に打ち勝たねばならない。そのためならば、どんなものからでも力を借りたい。」

提督の目からは決意が滲み出ている。ヒイロは皆に見えないように小さくため息をつき、

「・・・分かりました。その任務、受けさせていただきます。」

「・・・ありがとう。」

提督は艦娘達に向き直り、激励の言葉を送る。

「出撃予定日はおおよそ3日後だ。それまで各員は英気を養っておくように。では解散
!!」

解散が宣言されてから、人が減り、まばらになり始めた講堂を出るヒイロ達。

そこに再び提督が声をかける。

「ヒイロ君。先ほども言ったが、受けてくれてありがとう。」

「いいんですよ。それよりも、何か他にあるんですか?」

ヒイロの言葉に提督は神妙な顔をする。

「これは、君たちだけに話す内容だ。艦娘の皆には、関係のないことだからな。」

トラック泊地はどうやら、ブラック鎮守府だったようだ。」

聞きなれない言葉にヒイロ達は疑問符をあげる。

「ブラック鎮守府?なんだそれ?」

「艦娘に対して、暴力を振るったり、過酷な遠征任務を課したりして使い潰しにしている鎮守府のことだ。ひどいことだと、ろくに補給も与えない、などということもあるらしい。」

当たって欲しくなかった事実にはヒイロ達は顔を顰める

「そう・・ですか。調べて頂いてありがとうございます。」

「・我々としても情けない限りだ。前々から黒い噂はあったのだが、確固たる証拠がなくてだな・・。」

すまない、と頭を下げる提督に対し、

「謝るんなら、俺たちじゃなくて、天龍達にしてくれ。被害を受けてるのはアイツらなん

だからさ。」

「そう、だな。忘れてくれ。」

「なあ、そのトラック泊地の提督はこっちに避難してたりすんの?」

「い、いや、そういう報告は受けていないが・・・?」

妙にいい笑顔のガロードに若干恐怖を感じつつ答えた提督だったが、ガロードのこめかみに青筋が立っていることに気づき、激怒していることを察する。

「なら捕まってるのか?なあ、アムロ、トラック泊地の提督は生きてると思うか?」

「まあ、指揮官だからな、悪いようにはしてないとは思うが・・・。」

「なら良かった。ちよつと思いつきりブン殴りたくなつたから、行き場がなくなるところだったぜ。」

「ガロードお前ナイスアイデアだな!!俺もこの行き場のない怒りをどこにぶつけようか探してたところだったんだよ!!」

ガロードの考えにハイネが便乗する。焦つたヒロとアムロがやめておけと忠告する。続けてキラも何かガロード達に対して口を開く、が。

「駄目だよ、ガロード。せめて、拘束して海に沈めるぐらいにしてあげないと。」

「真顔で何を言っているんだ・・・!?ガロード達よりひどいぞ!?!」

まさかのキラの寝返りに驚きを隠せないアムロ。

「さて、冗談はさておき。提督さん、後は何かありますか?」

(・・・本当に冗談だったのだろうか・・・?)

キラの発言に対し、そう思った刹那であったが、話が進まなくなるので口には出さなかつた。

「いや、特にはない。それじゃあ、後は3日後まで準備を頼む。」

提督と別れたのち、ヒイロ達はこう心の中で呟いた。

(準備って、なにをすればいいんだ?)(二)

特に装備の確認もする必要がないヒイロ達はまた暇を持て余すのだった。

第12話 準備、そして告白

トラック泊地の奪還作戦に向けて、艦娘達の訓練に励む声が鎮守府中に響く。

特に出撃する第1、第2艦隊の気合の入れようはかなり高い。

そんな中、ヒイロは、

「間宮さん、野菜のカット、終わりましたよ。」

そういい、調理をしている艦娘、間宮のそばに置く。

受け取った間宮は申し訳なさそうな口調でヒイロに話す。

「あの、本当にいいんですか？手伝ってもらって・・・。」

「いいんです、暇でしたし。それに、間宮さんもあの人数の分を毎日作るのは大変でしょう？自分の時間、取れてます？」

「どう・・・でしょうか・・・？まあ、誰かしらいつも手伝ってくれますからそれなりにあると言えませんが・・・。」

間宮は慣れた手つきでヒイロが手頃にカットした野菜を鍋に放り込む。

「あ、すみません。そののへらを取ってもらえますか？」

「これですね？はい。」

へらを間宮に渡すと、ヒイロはトースターを確認する。中で焼き上げられているパンに焦げ目が軽く着いたのを確認し、取り出す。それを手早く皿に乗せる。

「自分の時間は取れるだけ取っておいた方がいいですよ。料理が趣味、というのであれば別に構いませんが、女性の趣味と言えばやはり服でしょうか？その割烹着も十分お合いです。たまにはご自分をコーディネートしてみるのもいいんじゃないですか？間宮さんはお綺麗です。いろいろ似合うと思いますよ？」

そういうと間宮はどうやら恥ずかしかった様で顔を真っ赤にして顔を晒した。思わず調理を失敗するところだったが、そこは長く料理をしていたからくる慣れで立て直した。

間宮の反応に少し気になったヒイロだったが、問題ないと判断して次の調理に移った。

「お、やってんなあー。」

「見たところ、砲撃訓練かな？」

ハイネとキラは艦娘達の訓練場に来ていた。水上を滑り、主砲を構えて、トリガーを引き、放たられた砲弾は用意された的に吸い込まれるように直撃する。

その様子からかなりの練度を積んでいることが分かる。

訓練していた艦娘は一度切り上げる様で岸に近づいてくる。

「ん？君たちは・・・。」

「あれ、アンタは確か・・・第1艦隊の・・・？」

「伊勢型二番艦、日向だ。こうして自己紹介するのは初めてだったな。今回の作戦はよろしく頼むよ。」

日向は笑顔でハイネに握手を求めた。ハイネとキラはそれに応じ、差し出された手を握る。

「お一人で訓練をなさっていたんですか？」

「まあ、そうなるな。午前の訓練は少し前に終わって、時間もあつたからな。」

そういうと、日向は何かを思ひ出したようにキラ達に問いかける。

「あ、そうだ。せっかくだ。君たちのことは瑞鶴達からある程度聞いてはいるのだが、具体的に他にどんなことができるんだ？」

「他のこと・・・ですか？」

「・・・分かりやすく言うと、得意分野見たいなものだ。例えば、第2艦隊の摩耶と鳥海は対空防衛を得意としている。誰かしら得意なことはあるからな。聞いておきたいと思つてな。」

「あー、たしかに得手不得手を知っておけばフォローとかしやすくなるもんな。」

ハイネがそういった時、キラの中で疑問が生まれた。

「あれ、でもそれってどちらかと言うと、旗艦の役目なんじゃ・・・？」

日向は苦笑いをして、キラの質問に答える。

「伊勢は・・・ああ、私の隣にいたポニーテールの奴だ。あいつはズボラな所があつてな。私がやっておかねばすつぽかすのが大半なんだ。」

「く、苦労してるんですね・・・。」

「まあ、慣れてしまった自分がいるがな。・・・話しがそれてしまったな。」

「あ、すみません。そのつもりはなかったんですが・・・。えっと、僕が得意にしているのは、一対多の戦闘ですね。」

「俺は基本的になんでもできるぞ。そつなくできる程度で器用貧乏になりそうだけだな。」

「ふむ・・・わかった。ありがとう。」

日向は感謝の気持ちを述べると、キラ達にこんな提案をする。

「そうだ。これから昼なんだが、君たちも一緒にどうだ？親睦を深める意味合いでな。」

「え、いいんですか？」

「ああ、他の艦隊の人との顔合わせも兼ねてな。」

「おお、それはいいな。」

キラとハイネは日向に連れられ、食堂へと向かった。

「そういえば、他の4人はどこにいるんだ？」

「確か、ヒイロは食堂、アムロ達は工場だったか？」

「ふむ、そのヒイロはまだ誘えるが、他の3人は無理、か。」

「まあ、いいんじゃないか？ なんかアムロは気にかけている奴がいるみたいだし。」

ところ変わって工場ではアムロ達、3人が来ていた。

「あれ、アムロさん？ それに貴方達は・・・、ガロードさんと刹那さん？」

「おう、確か、フェネクスだったか？ よろしくな。」

「・・・。」

刹那はフェネクスの顔をじっと見つめている。

（なんだ？ 彼女から威圧感を感じる・・・？ 彼女自身の応対からは感じないが・・・どういうことだ・・・？）

「あの、どうしてここに？」

フェネクスはアムロに工場に来た理由を問う。アムロは少し気恥ずかしく、

「中々言いにくいのが、暇になってしまったな。なにか出来ることはないだろうかと思っていたところ、ここに行き着いてな。まあ、要は手伝いだ。忙しいんじゃないのか

「?ここのところ。」

「そう・・・ですね。大規模作戦が近いというのもあつて装備のメンテ要請もだいぶありますし・・・。明石さんも夕張さんもあんな感じですよ・・・。お願いできますか?」

フェネクスが脇目を振ると、栄養ドリンクを片手に装備のメンテを行なっている明石と夕張が目に入る。

「ガロードと刹那は彼女たちのほうへ向かつてくれるか?」

二人は分かった、と返事をして、明石達の方へ向かつて手伝いを始めた。

アムロもフェネクスのそばに腰掛け、装備のメンテを始めた。

最初こそ、少し手間取ったが、慣れてくるとトントン拍子で作業が捗った。

そしてしばらく経つと、唐突にフェネクスが口を開いた。

「あの、アムロさんはサイコ・フレイムを使っているんですね。」

「・・・唐突だな。どうかしたか?」

「貴方は、その、サイコ・フレイムが怖いって、思ったことはありませんか?」

「怖い?まあ、技術的にオーパーツに等しい代物だから何が起こるか分からないからな。そういう意味では怖いかもな。」

「やっぱり・・・ですよ・・・。」

フェネクスはそういうと乾いた笑いをする。だが、その直後、アムロはフェネクスと

は対照的な本心からの笑みを浮かべる。

「だが、その何が起こるか分からない代物のおかげでアクシズを押し戻せた。色々な不確定要素が合わさった結果かもしれないが、それは事実だ、私はそう思っている。物は使しようだ、とは良く言ったものだ。」

「物は使しよう……?」

フェネクスは驚きの表情をあげ、アムロの言葉を反芻する。

「確かに訳が分からない代物を扱うのは最初こそはかなり抵抗がある。」

だが、一度コツを理解してしまえば後はそれを繰り返せばいいだけのことだ。

まあ、そこまで行き着くまでには手探りで見つけなければならぬ。特に、私と君に搭載されてあるサイコ・フレームはな。」

「えっ!?! どうして、それを……!?!」

驚愕の色に染まるフェネクス。アムロは如月から聞いたと答えた。

そのことに少し苦い顔をするフェネクス。

「そう……ですか……。まあ、黙っててとは言ったものの、あんまり強制気味じゃなかったからなあ……。あ。」

フェネクスは何かに気づいた声をあげると、

「あの……もしかして、暴走していたことも……?」

「・・・ああ。聞いた。なんなんだ？暴走した、とは？普段の君からはそのような感じはあまりしないのだが・・・。」

「あまりつていうことは・・・やっぱり感じるんですか？」

アムロはフェネクスの指摘に、

「正直に言うとな。君とは別に、かどうかは分からないが突き刺さるような気配を感じる。さながら、私が目の敵にされているような感覚だ。」

アムロがそう伝えると、フェネクスは暗い顔をする。そしてか細く言葉を発する。

「実は、わたしには、NT-Dというシステムが搭載されているんです。」

「NT-D・・・？ニュータイプに関連する何かか？」

「・・・表向きは『ニュータイプ・ドライブ』と呼ばれています。でもその実態は・・・ジオン・ズム・ダイクンが提唱したニュータイプ理論を完全に根絶するために作られた代物。『ニュータイプ・デストロイヤー』なんです。」

「ニュータイプ・・・デストロイヤー・・・!？」

フェネクスのその言葉にアムロは言葉を詰まらせる他なかった。

第13話

強襲!!トトラック泊地攻略作戦!!

I

NT-D・・・それはニュータイプや強化人間が発する感脳波に反応して発動するシステムである。発動すると、一時的に爆発的な推進力などが得られるらしいとフェネクスはいう。

それだけであればただの強化モードで済むが問題があった。

制御に失敗すると、システムに飲み込まれ、感じた敵意を徹底的に破壊する獣になってしまうらしい。

つまり、如月から聞いていた『暴走』というのはこのNT-Dのシステムによるものだろう。

そこまで理解がついたところでアムロは疑問が湧き出た。

「そのNT-Dが原因なのは分かったが、それが作動する要因になったのはなんなんだろう?」

「えっと、あまり覚えていないのではつきりとはいえませんが・・・おそらく深海棲艦の放った恨みやらにあてられたからかと・・・あの時、ニュータイプでもない私が分かっってしまうぐらいでしたし。それをNT-Dが勘違いを起こしたからだと・・・」

「つまりは誤作動か?」

「おそらく・・・。」

アムロはそうか、と呟くと、フェネクスにこう語りかける。

「フェネクスはそのシステムを制御できる自信はないのか?」

フェネクスは暗く、諦めの表情をしたまま答える。

「そう・・・ですね。はつきり言ってしまうえば、ないです。事実、そのせいで私は出撃を自粛しています。みんなに迷惑かけられませんし・・・。それに、怖いんです。もし、あんなことの繰り返しになったら、私は・・・。」

そこまで言って、俯いたフェネクスを見たアムロは一つ、ため息を吐いた。

「・・・確かに怖いかもしれない。だが、いつまでもそうやって目を背けたままでは、気づけることも気づけなくなるぞ? すまないが、出てきてくれないか?」

「えっ・・・?」

アムロが声をかけると、隠れていたらしい如月が出てきた。

「き、如月ちゃん!?! どうして・・・!?!」

「盗み聞きするつもりはなかったんだろう?」

アムロがそういうと、如月は驚いた表情をしながら頷いた。

しかし、何か意を決した表情すると、

「あ、あの!!さっきフェネクスさんが言ってたことなんですけど・・・確かに最初は怖かったです・・・。暴走していたって言うのも納得しました・・。」

言われた言葉にフェネクスは悲しい顔をする。事實は時に残酷である、だが。

「でも、貴方はそんな状態だったのに、如月を助けてくれました。特攻してきた戦闘機を身を挺して。だから、詳しいことは分からないけど・・。」

「貴方なら絶対できると思っています。如月はそう信じています。」

如月は最後にありがとうと言い残して、恥ずかしそうに工廠を後にした。

フェネクスは信じられないと言った表情のまま固まっている。

「彼女の艦隊は君が仕掛けてきたと勘違いをして迎撃をしたそうだが、彼女を守ることを優先したそうだ。つまり、君は無意識だったとはいえ、NT-Dに打ち勝っていたんだ。」

補足のような説明を聞いたフェネクスは自分がNT-Dを使って人を守れていた事実自然と涙を流していた。

「私は・・・変わる事ができるでしょうか?」

「・・・それは私が言えることじゃない。だが、やってもいないのにできるできないを決めるのは考えが早急すぎだと思う。まずは何事もやってみなければわからないと思うぞ?」

「そう、ですね。 できるだけやってみようと思います。」

「人は、無限の可能性を秘めている。それは艦娘だって私たちだって例外ではない。私はその人の可能性を信じている。あの人のようにな。」
アムロ・レイ

「人の・・・可能性・・・。」

「おい・・・なんかいい雰囲気になってるのはいいんだけどよ・・・作業、終わってんのか？」

『あ。』

和やかなムードになっているところにガロードの一声で現実を引き戻される。

思わず間の抜けた声をあげるアムロとフェネクス。

「こちらはもう終わっているのだが・・・。」

「ご、ごめんなさい!!すぐ取り掛かりますので・・・。」

「おいおい、私達には頼んでおいて自分たちはやってねえとか、ちよつと納得行かねえんだだけど?」

「・・・ぐうの音も出ないな。」

「ま、手伝うから別にいいけどな。これでチャラだぜ?あの後大変だったんだからな。」

「あの後・・・? ああ、青葉からの取材を押し付けた件か。」

「まったく、飯が食えねえって言われた時は焦ったぜ。」

「……あの後どうしたんだ？ 私達が食べ終わってからのかなり後に戻ってきた気もするが……。」

「あれ、言っただけ？」

「部屋に入ってくるなり、すぐにベットに入ってたからな。不貞寝したのだな、と思っただが……。」

自分の記憶を確認したが、まあいつか、と思考を止め、刹那の疑問に鳳翔という軽空母に作ってもらったと答えた。

「ああ、鳳翔さんですか。それなら良かったですね。あの人の作る料理も美味しいですからね。」

「つつてもなんかお酒のつまみみたいなものが多かったけどな。」

それを皮切りに装備の点検に移るアムロ達、次々と装備を手に取り、確認してゆく。壊れている備品があれば予備のパーツと交換をしてゆく。微妙な部分は明石や夕張に聞くなどをして、万全の状態へと整える。作業は円滑に進んでいき、30分程ですべての装備のメンテナンスを終わらせることが出来た。

「ふう、やっと終わったー……。」

フェネクスは肩が凝ったのか腕を伸ばして軽く伸びをする。

「ふう、アストナージの気持ち少し分かった気がするな……。刹那、ガロード、すまな

いな。こっちの不手際で余計な手を煩わせてしまった。」

「いいって、いいって。えっと、フェネクスだったな?」

「え、はい。そうですけど・・・?」

ガロードはフェネクスに笑顔を向け、刹那は柔らかな視線で見ると、

「まあ、頑張れよ。アンタにとってそれはかなりきついことなのかもしれないけど、中には散々、貴方は死ぬ運命だっていわれて、それを全部乗り越えてきた男もいるからよ。」

「人は、簡単に変えることができる。だが、変わろうとする意志がなければ、それを成し得ることができないのも事実だ。」

「もしかして、聞いてたんですか?」

「まあ、な。でも、これ以上は何も聞かねえよ。アンタが自分自身の力で乗り越えなくちゃならないことだからな。」

「・・・はい。ありがとうございます。」

ガロードと刹那からの声援にフェネクスは感謝の言葉を送る。

「あ、そうだ。これから食堂に行かねえか? ヒイロが手伝っているらしいぜ?」

「え? ヒイロさんがですか? できたんですね・・・。」

「ああ、そのようだ。どうする? そろそろ昼過ぎになるが・・・。」

「それじゃあ、ご一緒させてもらいますね。」

フェネクスの顔には笑顔が浮かんでいた。
アムロはその様子を見ると、

(この調子だと、それほど遠くない未来かもしれないな。あとはきっかけ、か。)

そして、3日後、ついに出撃の時がやってくる。トラック泊地への侵攻ルートが確立され、横須賀鎮守府に出撃命令が下った。

ハッチから第1、第2艦隊が出撃し、伊勢が威勢のいい声をあげる。

「第1、第2艦隊、出撃します!!みんな、行くよ!!」

その様子を埠頭から見ていたヒイロたち、

「みなさん、準備はいいですか?」

ヒイロがそう聞くと、ほかの5人はいつでもいける、と答える。

「ではこちらも出撃します!!伊勢さん、MS隊、これよりそちらに合流します!!」

『はいはい。よろしく頼むわね。』

ブースターを蒸し、伊勢たちと合流する。

「うっわ、本当に早いわね・・・。」

「これでも遅い方ですよ?」

「え、それ、ホント?」

伊勢から大分驚かれたが、問題なく艦隊に合流したヒイロ達はトラック泊地へと進路をとる。

余談だが、フェネクスは今回の出撃は見送った。理由として、NTDに向き合うことは決めたが、まだそれをする決心はつかないとのこと。

「それじゃあ、まずはトラック泊地の近海まで行こうか。」

『了解!!』

ヒイロ達含めた17人の声がかたまする。

(・・・誰かしらまだ生きているといいのですが・・・)

第14話

強襲!!トラック泊地攻略作戦

II

作戦が始まるまでの三日間、ヒイロは無碍にしていたわけではない。(他の5人もそうだが)

提督に許可を取って、天龍達が入院している病院に来ていた。

「怪我は大丈夫ですか？」

「ん。まあ、な。龍田や他の奴らも快方に向かっている。」

「そうですか。あ、これ、お見舞いです。みなさんで食べてください。」

ヒイロは素晴らしい、途中買ってきたお見舞いの品を天龍に渡す。

「お、サンキューな。暁達も喜ぶだろうよ。」

素晴らしい、天龍は心地よい寝息を立てている暁達を見る。

「よく寝ていますね。」

「ここのところずっとだ。あのままあそこに居続けたら見られない顔だったかもな。本当にありがたいとな。」

「あれは、本当に偶然にも等しいことでした。何かが少しでもズレていたら見つけることが出来ませんでした。」

「……そういえば、トラック泊地への攻撃作戦が発令されただつてな。横須賀の提督が言つてたぜ。謝罪の言葉と一緒に。」

天龍の言葉にヒイロは、

（あの人、ガロードの言葉を間に受けて……。というか無関係？な人に作戦のこと言つていいんでしょうか？）

と、心の中で頭を抱えた。気持ちを切り替えて、天龍に向き直す。

「聞いてたんですね。大本営はどうしてトラック泊地の攻略へのりだしたのでしょうか……？」

「……んー、そういえば、泊地の提督、妙に資材を集めていた気がするな。俺らの遠征もその一環だったし。」

戦艦や空母の奴らも滅多にしか出撃させてもらえなかつたな。ときおり、もつと多く持つてこれないのか、つて理不尽に殴られたりもしてたけどな。」

天龍の言葉にヒイロは悲しい表情をする。

「やはり、その痣は、泊地の提督につくられたものですか。」

「あー……。やつぱりわかつてたか。悪いな、氣い使わせてさ。」

「いえいえ、こういうのは貴方達自身の口から聞けるようにするのが一番かと思ひまして。」

一度会話を切ると天龍は病室の窓から海を見る。いや、海というよりもつとその先、水平線の向こうを、

「なあ、ヒイロ。一つ、頼みたいことがあるんだけどさ。もしさ、トラック泊地の連中がさ、捕虜でもなんでもいいから生きていたら助けてやってくんねえか？」

天龍の頼みにヒイロは厳しい顔をする。

「それは・・難しいことです。というよりわからないが正しいでしょう。既に占領されてから一週間が経過しています。場合によってはもう・・・」

殺されている。そういうにかけてヒイロは言葉を詰まらせた。

「・・・しかし、できる限りのことはやってみます。」

「ああ、よろしくな。」

途中、休憩をとりながらヒイロ達、連合艦隊はついにトラック泊地周辺海域に足を踏み入れる。その空はどんよりとした雲に覆われていた。

「つても天気悪いなあー。よく降らねえな。」

「だいたい深海棲艦の泊地に攻撃を仕掛ける時はだいたいこんな感じよ。」

まあ、確かによく降らないとは思ってたけどね。」

「と、いうことは近いんでしょうか?」

「そうだな。その証拠に水平線の向こうからの気配が凄まじい程伝わってくる。かなり数かもしれないぞ。」

アムロの言葉に伊勢のそばを航行していた重巡洋艦、摩耶が声をあげる。

「へえー、すげえな。まだ電探の有効範囲には入っていないのによくわかるな。」

「そういう訳ではない。あくまで気配を感じる程度でそれ以上のことはできないさ。摩耶。」

「それでも十分すげえよ。なんつうんだっけ? エレ・エネ・?」

「エスパー、ですよ。摩耶。」

「そう、それだよ!! エスパーだよ!! サンキュー、鳥海。」

「エスパーか。まあ、あながち間違いではないかもしれないな。」

「瑞鶴、偵察機の状況は?」

日向が確認を取ると、瑞鶴は困った顔をする。

「芳しくないわね……。トラック泊地の周辺が霧で覆われて向こうのようすが全然わからない。まあ、それは敵艦隊も同じなんだけどね。翔鶴姉もそんな感じ?」

「うん……。一応霧の外周を少し回らせては見たけど、やっぱり見えませんでした。」

「そうか・・・。」

「ねえ、どうしようかな、日向。霧に対応した電探、持ってきた・・・?」

伊勢の問いに日向は静かに首を振る。第2艦隊の皆も同じように首を振る。

「あ、でしたら私達が変わりに偵察をやりませうよ。」

「ええっ!?!いいの!?!」

「はい、ただし、報告した後も私達は霧の中にいますので、準備が出来次第、攻撃指示をお願いします。」

「わかったわ。お願いね。」

ヒイロはそういうと、すぐさまブースターを蒸し飛んでいった。アムロ達も続いていた。

その様子を見ていた伊勢は再度驚く。

「ほ、本当に速い・・・。」

「あつという間に見えなくなつたな。」

数十秒しないうちに見えてきた霧に突入するヒイロ達、霧が晴れるか晴れないかの境界に達したところで停止し、敵の状況を確認する。

「うわ・・・なんだよ。この数。」

ハイネがそう口漏らすのも無理はない。

目をよく凝らしてみるとかなりの数の深海棲艦が群れを成していた。

その数ざっと100はくだらない。

一応他の鎮守府の部隊が引きつけて数を減らしている筈だと提督の通信から聞いていたがそれでも多い。

「とりあえず、伊勢さんに報告を。」

報告を受けた伊勢はヒイロに待機命令を命じる。仕掛けてもいいけどこっちが有効射程圏内に入るまでまだ時間がかかるとのことだ。

しかし、敵はそうやすやすと事を進ませてはくれなかった。

「敵意!?来るぞ!!気をつけろ!!」

アムロが突然檄を飛ばす。それとほぼ同時に敵艦の動向を確認していたガロードも叫ぶ。

「嘘だろ!?敵艦撃つてきやがった!?避けろ!!」

咄嗟に散らばると今までヒイロ達がいた場所とその周辺は水柱に覆われた。

「バレていたのか・・!?」

「いや、バレていたにしては行動が遅い。それに狙いもバラバラだった。一応、向こうも気づいてはいなかったはずだ。」

「ならどうしてこっちに攻撃を仕掛けて来たんだよ？」

ハインがそう聞くと同時に伊勢から通信が入る。

『ごめん!! そっち、大丈夫!?!』

「ええ、砲撃はされましたが、無傷です。」

『よ、よかったあ・・・。』

「ところでそちらで何かありましたか?」

伊勢にそう聞くと再び謝りながら答えた。

『潜水艦がいたんだ。運悪く見つかったみたいでさ。多分君たちが偵察に向かったところも見られていたかも。』

伊勢の通信にヒイロ達は笑みを浮かべる。

「なら、霧に入ったところは見られてないですね?」

『え? あ、うん。多分、だけど。』

予想外の反応に伊勢はしどろもどろになる。が、ヒイロ達にはそれで十分だった。

「うん、それなら本来の予定を早めるだけです。今の砲撃は当てずっぽう。敵はまだこちらを正確に捕らえられてはいません。」

ヒイロはアムロ達に指示を飛ばす。アムロ達は頷くとすぐに散開した。

「伊勢さん、私達はこのまま敵軍に奇襲を行います。勝手な行動して申し訳ないですが、

ここにただ立っている訳にはいきませんので。」

『え、ちよ、ちよつとー』

止めようとした伊勢を無視して、ヒイロは通信をきった。

「き、切られちゃった・・・。」

伊勢は顔を真っ青にしながら日向に視線を向ける。日向は伊勢をジト目で見つめる。そして、ため息を吐く。

「古鷹、潜水艦は？」

日向がそう聞いたと同時に爆発の音とともに、水柱があがる。それを見届けた古鷹は「たつた今、撃破しました!!」

「本当!?なら全速前進!!あの霧に突っ込むよ!!ヒイロ達が砲撃を受けたみたい!!」

艦娘達の顔が険しくなる。心配するのも無理もない。三日間だけだったとはいえ寝食を共にすれば情が湧く。

「第四警戒航行序列を組んで!!突入するよ!!」

「了解!!」

伊勢達も霧の内部への侵入へと舵をきった。

「各機、準備はいいですか？」

ヒイロが最終確認の為アムロに聞く。すると、全員から問題ないの返答が返ってくる。

「・・・では、各機は指示通りに行動を。行きます!!」

ヒイロが霧から飛び出した。その姿は悠然としており、余裕すらも感じさせる。

深海棲艦は見たこともない艦娘?に驚いた様子を見せたが、すぐさま攻撃を開始する。

「撃ってきた・・・でも遅い!!」

ヒイロはそれを歯牙にもかけず飛んできた砲弾を回避する。

そのまま、敵艦隊に突っ込みながらバスターライフルを構える。

「効果最大確認・・・攻撃開始・・・!!」

放たれた閃光は戦艦、空母関係なく飲み込み、敵艦隊に一筋の道を作った。

そのあとすぐさまバード形態に変形し、移動する。

「刹那!!突入してください!!」

『了解!!ダブルオーライザー、目標へ飛翔する!!』

続いてヒイロが出てきた方向とは別から出てきたのは刹那だ。

緑色の粒子、『GN粒子』を出しながら目的の対象へと接近する。

途中駆逐艦や軽巡から対空砲火が飛ぶが、刹那は蛇行を繰り返しながら接近する。そ

して、目標である、軽空母又級が間合いに入った。

「ここは・・・私の距離だ!!」

腕に装着されてある大型実体剣『GNソードⅢ』の刃を出すと、又級に斬りかかる。

又級は何もすることが出来ずに真つ二つに斬り捨てられる。

「次のターゲットに移行する。」

次のターゲットを探索する刹那、だが、刹那の視界の端にはすでに発艦してしまつた敵艦載機群が映つていた。

しかし、それは緑色のビームに撃ち落とされる。

「こちら、キラ・ヤマト。これより戦闘空域に入ります。」

上空に広がっていた薄暗い雲から出てきたキラは『ルプスビームライフル』で敵艦載機にビームの嵐を浴びせる。嵐、といつても狙いは正確で一発も外すことはない。そのままキラは敵艦載機と同じ高度に付けると、

「これで・・・!!」

背部ウイングユニットに装備されてある『バラエーナプラスマ収束砲』を放つ。

二本の赤白い閃光は敵艦載機を一網打尽にする。

海面に降り立ったキラは伊勢達が戦闘エリアに入ってきたのを確認する。

キラに気づいた伊勢はすぐさま通信をよこしてきた。

『キラ、大丈夫!? 状況は!』

「空母を優先的に狙ってはいますが、すでに発艦された艦載機も多いです。

すぐに発艦準備を。」

キラから状況の確認を終えた伊勢は指示を飛ばす。

「翔鶴、瑞鶴はすぐに発艦準備を始めて!!」

「もうやつてますよつと!!」

同時に翔鶴、瑞鶴共に弓を放つ。

放たれた矢は艦上戦闘機『烈風』へと姿を変え、敵艦載機とのドックファイトを開始する。

『こちら、ヒイロ・ユイ。これより制空権確保の援護を行います。』

「え、ヒイロ?」

突然のヒイロからの通信に疑問符をあげる伊勢。

だが、直後の爆音と閃光に一瞬目が潰される。

先ほどまでバード形態に変形していたヒイロがバスターライフルを放ったのだ。

艦載機は激減し、続いて烈風も次々と敵艦載機を撃墜してゆく。

「ひとまず、制空権は取れた!! 翔鶴姉!!」

「ええ、いくわよ瑞鶴。」

「第一次攻撃隊、発艦!!」

放たれた矢は二本ずつ、それぞれ艦上爆撃機『彗星一二型甲』と艦上攻撃機『流星』へと変化する。

それぞれ、魚雷や爆弾などで駆逐艦や軽巡を沈めるが戦艦などの装甲が硬いものは残ってしまった。

「くっ．．．やつぱり戦艦を沈めるのは難しいわね．．．」

瑞鶴が悔しげに顔を歪める。しかし、突如、残った戦艦ル級が串刺しにされ、爆発する。

「え、だ、弾薬庫にでも誘爆したのかな．．．でも．．．」

爆煙から出てきたのはハイネだ。服や髪が濡れているあたり潜水していたのだろう。

『撃ち漏らしはこっちに任せろ!!どんどん撃ってけ!!』

そういい、ハイネは背部ユニット、『ヴォアチュール・リミュール』を展開し、対艦刀『アロンダイト』を構え、突撃する。

ヴォアチュール・リミュールから発せられる光の翼は残像を生み出し、深海棲艦を惑わせ、一瞬の隙を作る。そして、その一瞬で十分だ。

「叩き斬ってやるぜ!!」

高速機動で翻弄しながら次々と深海棲艦を倒していく。

その上空でアムロが飛行していた。

(敵艦載機にときおり、妙な艦載機が混ざっている時がある。その空母を叩けば幾らか戦局は好転するかもしれない。)

アムロは艦載機の中にツノが生えている丸い艦載機があることに違和感を覚えていた。ツノを見て、某赤い彗星が頭をよぎったがその艦載機は赤くもないし、ツノは二本だった。

「あれか．．？」

アムロがそれらしき空母を見つける。その風貌は白い髪をサイドテールにしている深海棲艦、というより人にほど近かった。

装備もほかの深海棲艦とは全く違う。特別製だろうか？

「迂闊に仕掛ける訳にはいかないが、仕方あるまい!!」

アムロはビームライフルを深海棲艦『空母棲鬼』に向けて放つ。

直撃はしたが大した損傷は与えられなかったようだ。

「装甲も特別製か．．これは一筋縄ではいかないようだ。」

アムロの接近に気づいた空母棲鬼は対空砲火を開始する。弾幕の濃さもほかの深海棲艦とは段違いだ。並の一般機では即座に蜂の巣であろう。

そして、自分の身を固めるつもりなのか艦載機を出して、一部をアムロに仕向けてき

た。

アムロはそれにバルカンで対応する。

艦載機は穴だらけとなり、爆発する。

「手数を増やす!!行け、フィン・ファンネル!!」

アムロの背部にあるラックから6つあるうちの二つのユニットが外される。

それはさながらアムロの艦載機かのように飛び回り、敵艦載機を撃ち落としてゆく。

艦載機をある程度落としたアムロはビームサーベルを取り出し、空母棲鬼に肉薄する。

接近しながらもフィン・ファンネルによる攻撃で空母棲鬼の武装を破壊していく。

「チィ……!!猪口オナ……!!」

(喋れたのか……!?)

アムロは深海棲艦が喋れた事実には驚愕をしながらもどんどん距離を詰める。

「たあっ!!」

青色の刃が空母棲鬼の装甲に深い傷を残す。体験したことのない痛み思わず顔を歪めた空母棲鬼は反撃しようとしてゼロ距離で砲撃しようとする。

しかし、アムロの方が一手速かった。すぐさまブースターを蒸し、空母棲鬼の脇腹あたりを斬り抜けた。

だが、大ダメージを与えたものの致命傷にはならなかったようだ。

「勝ツタト・・思ツテイルノカ・・？カワイイナア・・。」

狙いをすぐさまアムロの背中に向ける。空母棲鬼が勝つたと確信した時、

ドカアン!!

突如として襲つた爆発に体制を崩す。すぐに体制を立て直し、アムロを探す。

しかし、姿は見えない。

「無論、勝つたとは思っていないなかつたさ。だが、お前はここで終わりだ。」

聞こえてきた場所は自分の真下。少し視線を下げればすぐに見つけられた。

だが、体は動かない。よく見てみると、先ほど自分の装甲をえぐつたビームサーベルが腹に刺さっていた。しかもそれは空母棲鬼の体を貫いていた。

アムロは後ろを向いたまま、空母棲鬼に突進し、ビームサーベルを逆の方向から出し、そのまま突き刺したのだ。

ビームサーベルを抜き取り、離脱すると空母棲鬼は凄まじい爆発音を立てて、水底に沈んでいった。

「ふう・・なんとかなつたか。援護、感謝するぞ。伊勢。」

アムロが視線を向けた先には伊勢がいた。しかし、その様子はかなりご立腹のようだ。

「貴方ねえ・!!今のどう見たって鬼級でしょ!!それに一人で挑むって、どういう神経してるのよ!!?」

いきなり怒られたためアムロは驚いた。

「たまたま、私が気づいたからいいけど、あのままだとどうなっていたかわかんなかったんだからね!!」

こういうタイプは変に反論するより素直に謝った方がいい、そう何故か頭の中で理解していたアムロはとりあえず謝った。

「す、すまない。」

「もう、本当に焦ったんだからね。」

ここである程度落ち着いたことでアムロはあることに気づく。

「そういうえば、伊勢。お前、艦隊はどうした?」

そう言われると伊勢はビクツツと体を震わせてタラタラ汗を流し始めた。

「私のことより自分のことを心配したらどうだ?」

「やっぱあーい!!また日向に怒られるう!!」

慌てる伊勢を尻目にアムロは笑みを浮かべる。たがそれもすぐ厳しい顔に変わる。

(強敵は倒せたようだが、まだ奥にいるようだな・。しかし、深海棲艦が喋れたとはな・。)

ちなみに、この後伊勢は日向にヘッドロックを決められながら、頭をグリグリされた。所変わって、こちらはトラック泊地の埠頭。その淵に水面から伸びてきた手がついた。

ザバア、と水面から出てきたのはガロードだ。

「あー、やつと着いた．．。」

ガロードは前もってヒイロからトラック泊地への侵入を頼まれていた。

霧の中で砲撃された後、ずっと水中を進み、たどり着いた。

服を軽く絞った後、泊地内の建物を見渡す。

一言で言えばボロボロだ。窓は割れ、壁の一部は焼け焦げている。

特にひどいのは司令室と思われる部分だ。

「こっから生存者を探すのか．．。」

絶望的な状況に弱音を吐くガロードだが、すぐさま顔を両手で叩き、気合いを入れ込む。

「何弱気になってんだよ．．。まだ諦めるには早過ぎるだろうが．．。」

ガロードは周りを確認し、深海棲息艦がないことを確認すると、泊地内部に侵入した。

第15話 強襲!!トラック泊地攻略作戦 III

ギギギイ

戦闘の余波でもはや役目を果たせなくなった扉を開けるとそんな音が響いた。

ガロードはさながら廃墟にやってきている気分になった。

(さてと、探しに行きますか。)

ガロードがここに潜入したきっかけはヒイロのとある予想からであった。

ヒイロが間宮の手伝いをしていたのはちょうど彼女が昼飯の準備をしている所にしたときなぜか自分ではできると思ったからだ。

いざやってみればすっかりできたからその理由を探していたところとある予想にたどり着く。

もしかしたら、自分達にはパイロットができていたことはある程度できるのではないのか？

事実、パイロットのヒイロ・ユイは料理、洗濯などの家事も普通にできた。

ここで話をガロードに戻す。

パイロットとしてのガロード・ランはMSから部品をくすねたり、ピッキングなどを

やっていた。つまるところ、盗つ人業で生活費を稼いでいた。

環境が環境だったから仕方ないというのもあるが。

そういうわけで、こういう潜入もある程度はできると踏んだガロードは生存者搜索のためにトラック泊地の内部に来た。

しかし、事前情報もなく、横須賀鎮守府程ではないが、広い施設から何人いるかわからない生存者を探すのは無理があった。

しらみつぶしに回るしかないか。ガロードがそう思い、足を踏み出したその時。

ガロードの第6感とも呼べるものが何かを感じ取った。

まるでこつちへ行けと言わんばかりの感覚だった。その方角はガロードが探そうと
していたのと全くの逆だった。

(・・・いつてみるか。)

たどり着いたのはとある一室、案の定、鍵がかかっている。

ガロードは服のポケットから一本の針金を取り出す。

(・・・頼む。力を貸してくれ・・・)

針金を鍵穴に挿しこみ、ピッキングを開始する。感覚的にこうすればいけるとは分かっているが、やはり初めてだからか、予想以上に手間取る。

心の中で焦りながらもできる限り落ち着こうとするが、ガロードは余計に焦り始め

る。

だれかの足音が聞こえた。普通だったら焦る理由もないが、ガロードが今いる場所は敵の真つ只中、ましてや本陣にも等しい場所である。

となると、近づいて来ているのは、十中八九、深海棲艦であろう。

(う、嘘だろ!?こんなタイミングでかよ・・!!)

隠れようにももはや目の前の部の部屋にしか逃げ込むしかないガロード。心の中で悪態をつきながら、一か八か作業スピードを上げる。

カチンツ

鍵の開いた音が聞こえた。慌ててドアを開けて、飛び込もうとしたが、深海棲艦はすぐその角から姿が見えかけていた。

間に合わない、そう思ったその時、

「鍵の解錠、ありがとうございます。リフレクターインコム、射出します。」

部屋の方からどこか機械的な印象を受ける声が響いた。

ガロードが咄嗟に部屋の中を見た途端、オレンジ色の物体が飛び出し、続いて水色のビームが飛んでくる。

放たれたビームはオレンジ色の物体に当たった瞬間、突如角度を変え、部屋からは死角になっていたはずの深海棲艦を撃ち抜いた。

「ビ、ビームが曲がった．．？」

ガロードが呆気に取られていると、ビームを放ったと思われる張本人が手をさしのばす。

「大丈夫ですか？すみません、急に撃たれたりすれば驚きますよね。」

その人物はなんか色々大きくかつた。

身長は170を超えており、髪は碧色で腰近くまで伸ばしていた。

目の色はオッドアイで片方は髪と同じ碧色でもう片方は真つ赤な赤だった。

そして、なにより目が引くのはその体型であり、簡単に言うくと、ボン、キュツ、ボンであつた。

「お、おう。サンキューな．．。」

しどろもどろになりながら、ガロードはその人物の手を取つた。

すると、部屋の奥に艦娘達がいるのが目に入る。人数は6人。

彼女らは鎮守府にもいたから名前は覚えていた。

「えつと、奥に居るのは、比叡、古鷹、神通、由良、島風、深雪か？」

「はい、よくわかりましたね。もしかして、ほかの鎮守府の方？」

「ああ、そうだ。これはあつちに言つた方がいいか。」

ガロードは座り込む艦娘達に笑顔でこう告げる。

「あんた達を助けに来た。天龍の頼みでな。」

「て、天龍さんが!?!、生きてたんですか!?!」

比叡が驚きの表情をあげる。ほかの艦娘達も比叡ほどではないが驚きの表情をしていた。

「ああ、龍田と第六駆逐隊の奴らも一緒だ。」

「よ、よかつたあ・・・。」

安堵からか、ほっとした表情を見せる比叡。だが、服の下に見えてしまった痣でガロードは反面、顔を曇らせた。

（おそらく、他の奴らも・・・。）

「あの、外の状況はどうなんですか？未だ砲撃音がなりやまないのですが・・・。」

「ああ、外では私たちの仲間が戦っている。私は先に潜入して、司令官と生存者の捜索に来ただけだよ。結論から聞くけど、ここの提督は死んじまったか?」

「提督は・・・交戦中、司令室に敵の砲弾が着弾し、戦死しました・・・。」

比叡の報告にガロードは舌打ちをする。

「くそつ、やるだけやって、謝りもなしに死んだのかよ・・・!!」

怒りに顔を歪め、手を握りしめるガロード。

（いや、今はコイツらの安全が一番だ。）

気持ち切り替え、ここから出る方法を考える。

「なあ、比叡。艦装は大丈夫か？準備が必要なら時間を取るけどよ．．．」

「艦装は．．．すみません。投降した時に全て．．．」

「そっか．．．。ならここに残っているのが一番安全か．．．？」

艦装がなければ艦娘は海に出ることはできない。いくら艦娘といえども陸に上がってしまえば、ただの少女となんら遜色はない。いくら艦娘といえども陸に上が

(しっかし、投降か．．．ん?)

ガロードは引っかけかりを覚え、その原因である人物に聞く。

「あれ?そもそも、アンタなんでここにいるんだ?前々からいたにしても、アンタには暴行された感じがしないし．．．」

「私はたまたま迷い込んでしまったんです。その時、ちょうど彼女たちが投降している時でした。」

彼女曰く、ほつつき歩いていたところ、比叡たちが目に入り、援護に向かったそうだった。50を倒したところで比叡たちが人質に取られ、敢え無く投降したらしい。ついでに彼女の武装については嘘をついてその場を切り抜けたとのこと。

その言葉が、

「私の武装を破壊すれば、核爆発が起きますよ?別に構いませんが、その際には半径2

キロほどは消し炭になることを覚悟してください。」

この言葉に深海棲艦は破壊しようにも手が出せず、そのまま拘束されて、部屋に押し込まれたらしい。

「つまり、あなたは深海棲艦をびびらせて、ここにいるっていうことだな?」

「正確に言うと、シユレディンガーの法則を使いました。まあ、ビビらせたという表現でも間違つてはいませんが。」

「あ、それともう一つ聞いてもいいか?」

ガロードがそう聞くと、その人物は、はい。構いません。と快諾した。

「アンタ、ガンダムって知ってるよな?」

そう聞くと今までポーカーフェイスだった彼女の顔に初めて驚きの表情が浮かんだ。

「そ、それを聞くということは・・あなたは宇宙世紀出身ですか?」

宇宙世紀、ということとはアムロと同郷か。ガロードはそうに理解するし、質問に答える。

「いや、私は宇宙世紀出身じゃない。ガロード・ラン。それが今の私の名前だ。

MSとしての名前はガンダムDX。」

「聞いたこともない名前です・・。それに宇宙世紀出身ではないとはどういうことですか?」

「それは話すと長くなるからこつから脱出してから話す。それでアンタの名前は？」

「私は、アリス。アリス・スペリオールです。そして、MSとしての名前は、EX—Sガンダムです。」

「なら、アリス。ちよつと来てくれるか？」

「・・・わかりました。」

「そういい、ガロードはアリスを部屋の外へ連れ出す。」

「何をするんですか？」

「敵の旗艦を後ろから攻撃する。やれる時にやつとかないとあいつらがいつ比叡たちを人質にするかわからないからな。」

「・・・なるほど。たしかに、部屋で待っているよりは良さそうです。」

「ガロードは部屋の中にいる比叡に呼びかける。」

「私たちはこれから外へ行ってくる。鍵はかけるが心配しないでくれ。」

「ガロードにそう言われると比叡は渋々といった声色で答える。」

「・・・わ、わかりました。でも、絶対に戻ってきてくださいいね。」

「ええ。約束します。」

「ガロードとアリスは敵旗艦を背後から強襲するために外へ飛び出る。」

「そこでガロードはアリスにこんなことを聞いた。」

「なあ、アリス。あいつらのほかに生存者はいたか？」

「・・・私がきたころには、彼女らしか確認できませんでした。」

アリスからそういわれ、ガロードは悲しい表情をする。

「そっか・・・。サンキューな。」

「それよりも、敵旗艦はかなり硬い装甲を持っています。生半可な攻撃では弾かれるのが精々です。それに主砲にも気をつけてください。」

「へへっ、装甲だったら私だって負けちゃあいないぜ!!」

ガロードはアリスを引き連れて仲間達が戦う戦場へと向かう。

第16話

強襲!!トラック泊地攻略作戦!!

IV

「はあっ!!」

アムロはビームサーベルで目の前の敵を斬る。だが、想像していたほどのダメージを与えられない。敵はお返しだと言わんばかりに砲撃を行う。

咄嗟に後退しながら、アムロは悪態をつく。

「クツ・!!装甲が硬すぎる・!!先ほどの鬼級とは段違いだ・!!」

アムロ達が相手をしているのは深海棲艦の中で鬼級と呼ばれる部類に入る敵だ。

しかし、先ほどの空母棲鬼とは全く違う戦闘スタイルだ。

言うなればそれは『戦艦』。

圧倒的な火力と硬さで敵を倒すタイプだ。

伊勢達、艦娘も必死に攻撃を仕掛けるがその硬い装甲に弾かれて、有効弾は一向に生まれない。

それどころかこちらが攻撃をくらい、中破、大破にされ、ジリ貧になる一方だ。

「どうします!?このままじゃ・!!」

敵の随伴艦を仕留めたキラは焦りの表情を浮かべる。そばにいるハイネも似た表情

だ。

そこに同じく随伴艦を倒していたヒイロと刹那が合流する。

「ヒイロ、バスターライフルでどうにかならないか?」

「そうしたいのもやまやまなんですが・・・」

ヒイロは視線を敵の親玉である『戦艦水鬼』に移す。

戦艦棲鬼の目はじつとヒイロに向けられていた。さながらヒイロの動きを絶対に見逃さないと言わんばかりだ。

「どうやら私はマークされてしまったようです。バスターライフルを撃つにも少しばかりのタイムラグが生じてしまいますので、その瞬間を狙っているのでしょうか。」

ヒイロにそう言われ、アムロは苦しい表情をする。

「ですが、手がないわけではありません。」

ヒイロはそういい、アムロ達にある策を伝える。

「なるほど、それで行ってみよう。」

「そう言ってくれば幸いです。伊勢さんそういうことです。お願いできますか?」

『うん、わかったわ。日向もそれでいい?』

『ああ、悪くない。任せてくれ。』

伊勢と日向から通信越しに承諾の声が上がる。

「それなら、皆さん、作戦通りによろしく願います。」

最初に仕掛けたのは刹那だ。GNソードⅢをソードモードにして斬りかかる。

「でえやあああ!!」

大型実体剣を持つているにもかかわらず、素早い動きをする刹那に戦艦水鬼は対応に苦しむが、持ち前の硬さを使い、無理やり背後にある艤装の腕で殴りにかかる。当たってしまえば大ダメージは免れない。だが、それは当たってしまえばのである。

刹那は振り下ろされた人の体ほどの大きさの腕を蹴り、瞬時に離脱、直後に『GNマイクロミサイル』を浴びせる。が、やはり大した損害は見られなかった。

だが、爆風で視界は塞げた。なら、後は十分。

「ターゲット、ロックオン。目標、敵特殊深海棲艦……!!」

山吹色の閃光が戦艦水鬼を包むが、撃破には未だ至っていない。根本的にバスターライフルの出力を抑えているのもあるが、精々、表面の装甲を溶かす程度だった。しかし、してやられた戦艦水鬼はヒイロに怒りの視線を向ける。すっかりマークしていたにもかかわらずやすやすと撃たれたのだから。せめて随伴艦がいればまだどうにかなったかもしれないがすでにヒイロ達、MS隊によって全滅させられている。

「役ニ立タナイガラクタドモメ!!」

はたまた溢れ出たのは随伴艦に対する罵倒。近づけまいとしてヒイロ達に対して弾幕を張るが、その濃度はそれほど濃くない。その程度のものに当たるとアムロ達ではない。しかし、アムロ達はそれほど接近せず、あくまで戦艦水鬼の動きを止めることに専念していた。戦艦棲鬼が怪訝に思ったその時、自身の足元に衝撃が走った。すぐさま艦娘達が魚雷だと察し、自分が誘導されていたことに気づく。

「直撃を確認した!!ハイネ、キラ、やるぞ!!」

「了解!!」

その爆発を合図にしたようにアムロ達3人が接近を開始する。艦底部がやられ、推進力がなくなり、固定砲台と化した戦艦棲鬼はアムロ達に対し、対空砲火を密にする。

「刹那、援護!!手伝って!!」

「了解!!目標を狙い撃つ!!」

ヒイロのバスターライフル、刹那のGNソードⅢのライフルモード、そして伊勢達の艦砲射撃で主砲を破壊する。

ヒイロ達の後押しを受けたアムロ達は戦艦水鬼にビームの嵐を浴びせさせる。

だが、それはただ闇雲に撃っているわけではない。

ハイネは対空砲台を狙い、アムロとキラは闇雲に撃っているビームに混ぜて、一箇所をビームを当てていた。

寸分狂わない射撃のおかげで戦艦棲鬼が気づかないうちに艀装の装甲を融解して行く。そして、赤熱し、柔らかくなつたと確認すると、

「今だ!!伊勢!!撃つんだ!!」

『やるよ!!日向!!主砲、一斉射!!てええええー!!』

伊勢と日向が全砲門で発射し、放たれた砲弾が吸い込まれるように融解しかけた部分に飛んで行く。

取つた、そう思いかけたその時、

突如、戦艦棲鬼の艀装が勝手に動き出し、伊勢達の放つた砲弾をその巨大な手で防いでしまった。

「う、嘘だろ!?!あれ、勝手に動くのかよ!?!」

「どうしよう・・・!!もう伊勢さん達は疲労困憊なのに・・・!!」

「ちい・・・!!千載一遇のチャンスを逃したか・・・!!」

アムロが苦戦を覚悟したその時、突如として水色のビームが飛んできた。

それは融解していた装甲を貫いた。直後戦艦棲鬼は大爆発を起こして、沈んでいった。

「い、今のは・・・!?!」

「トラック泊地の方からだ。だが、今のはガロードではない。」

「ああ、そのようだが・・・。」

「ふう・・・当たった・・・?」

手に持っていた『ビームスマートガン』を置いて、地面にうつ伏せに、いわゆる狙撃態勢を取っていたアリスは大きくため息を吐く。

その目は両方とも真っ赤に染まっており、オッドアイではなくなっていた。しかし、それもすぐに元の碧色の目に戻った。

「ナイススナイプだぜ! あんた、すげえな!!」

「それほどでもないですよ。」

少々顔を赤らめながら、軽く微笑むアリス。

(そもそも、ALICE任せでしたしね。)

アリス、もといEX-Sガンダムに搭載されているシステム『ALICE』は発動させると本来はパイロットの思考から学習し、人格を形成する、いわばAIである。

しかし、先ほど使ってみたところほとんど補助ユニットとしての機能しか出せなかった。

(あの時、周辺機器ごとあの人達を逃したからかな・・・)

アリスのいうあの時、というのは大気圏に入ってしまった時、パイロットであるリョ

ウ・ルーツらを助けるためにコックピット部分をパージした。その時に周辺機器も一緒に飛ばしてしまったため、もはやALICEは補助ユニットとしての機能に落ち着いてしまった。アリスはそれでも一級品だと思ったが。

『こちら、アムロだ。ガロード、そこにいるか？確認してほしいことがあるんだが…。』
「おう。ビームのことだろ？今、その張本人と一緒にいる。」

『一緒にいるのか!?!』

アムロが驚愕の声を上げる。すると、アリスが気になったのか聞いてくる。

「仲間の人ですか？」

「ああ、そうだけ。あ、アムロ、こっちの調査もだいたい終わったから伝えるぜ。」

アムロから構わないと伝えられ、ガロードは結果を伝える。

「結果は艦娘が6人、見つかった。だけど、トラック泊地の提督は死んじまったし、その6人以外の艦娘は見つけられなかった。」

『……そうか。ありがとう。』

ガロードの心中を察してか、慰めるような雰囲気ですら礼を言うアムロ。

「あ、そうだ。ボートでもなんでもいいからよ。なんか乗り物用意してくんねえか？」

その6人の艦娘達のことなんだけどよ、艦装が完全に破壊されて、海に出られねえん

だだよ。」

『艤装がか・・・!?しかし、ボートを用意すると言っても、私達が抱えれば済む話ではないのか?』

「・・・その方が速いな。うん。」

それじゃあ頼む、と伝え、ガロードは通信を切った。

「話は着きました?」

「ああ、アイツらは私達で運ぶことになった。」

「二人だけ・・・ではないですよね?」

「んなわけないだろ。お、ちようどきたな。おーい、こつちだこつち!!」

ガロードが手を振り、居場所を知らせるとヒイロ達が降りてきた。

「あなたですわね? 援護して頂いたのは。ありがとうございます。」

「いいえ、ほとんど成り行きです。気にしないでください。」

アリスはそう答えると、何か自身を見つめる視線があることに気づく。

「あの、なんででしょうか?」

「ああ、すまない。君の着ている服に見覚えのある部分があつてな。気分を害したなら

謝るが・・・。」

「あ、そういえば。この人、宇宙世紀出身つて言つてたぜ。アムロと同郷だよな?」

「宇宙世紀出身なのか!？」

「え、ええ、はい。ですが、アムロ・?アムロ・レイですか?あの一年戦争の・・・」

アリスの言ったことに妙な引っかけかりを覚えたアムロはすぐさま聞くことにした。

「まあ、あくまで名乗っているだけなんだが・・・君はいつ造られたんだ?」

「U・C0088です。」

「・・・グリプス戦役の終盤か?しかし・・・あまりデータでも見たことないが・・・」

「ペズンの反乱ってご存知ですか?」

「ああ、知っているが・・・もしかして、ニューデイスイズに対抗するために組まれたα任務部隊か?」

「E-X-Sガンダムと言います。一応、この身ではアリス・スペリオルと名乗っています。」

「・・・そうか、アリスか・・・改めて言うが援護、感謝する。」

「ですから、成り行きですって。それよりも彼女たちをお願いします。」

「わかりました。ガロード、艦娘たちのところまで案内してくれる?」

「おう、任せな!!」

こうして艦娘達を救助し、ヒイロ達の初の大規模作戦は限りなく成功に近い形で幕を下ろした。

第17話 祝勝会

『カンパ〜イ!! イエーイ!!』

飲み物が入ったグラスを乾杯の音頭と同時に鳴らし合う。トラック泊地の攻略作戦から帰路に着いて3日、横須賀鎮守府に帰ってきたヒイロ達はパーティーの会場である講堂に引つ張り出されていた。

正直言つて、慣れない長時間移動からの戦闘に休みたいのが本音であったが、駆逐艦達の『来ないの?』という上目遣いに折れて、足を運んだ。その時、ヒイロ達はそろつて子供には弱いなどそれぞれ自覚したのは内緒である。

「よくあそこまで騒げますね……。特に出撃した人達は。疲労とかないんですか……?」
ヒイロは乾いた笑いをしながら出されたジュースに飲む。

「あの、私がこの場にいてもいいんですか?」

ヒイロにそう聞いたのはアリスだ。いきなりやつてきてパーティーに駆り出されれば戸惑いの色を隠せないのは無理もない。

「別に構わないと思うぞ。これは君の着任記念も兼ねていると思う。」

「そうですか。なら別に構わないんですが。」

アムロの言葉に安心し、出されている食事に手をつける。美味しい、とアリスは感想を述べる。その様子は幸せそうだ。ただし、それは全てアリスの全く働かない表情筋のせいで台無しである。ほぼほぼ無表情でやっているそのギャップにハイネが吹き出す。

「ブツハツ!!お前表情筋ついてんのかよ!!いくらなんでも無表情すぎだろ!!」

「ヤバイ・・腹が痛い・・wwww」

ツボに入ってしまったのか、ハイネと同じように吹き出した後、腹を抱えて震えているガロード。

「わ、笑わないでくださいよ!!まだ慣れていないだけです!!」

「よっしゃ、ならいま慣れさせてやるぜ!!」

素晴らしいアリスの頬を掴み、横に伸ばす。思ったより柔らかかったのかだいぶ広り、かなりの変顔になる。その様子を見たガロードの笑いが悪化し、机をバンバン叩き始める。

「やめてください!!ちよ、ほんほにいひやいれすから・!!」

そう言われるとハイネはアリスの頬を話し、やりきった顔をする。

若干赤くなった頬をさすりながらアリスはハイネを睨む。

ちなみにガロードはついに声も出せなくなり、プルプル震えるだけになった。

「いきなり何するんですか!?!私、何かしました!?!」

「ん〜。ま、固かったからだな。」

「か、固かったつて・・・表情筋のことですか？」

「まあ、それもそうだけだよ。俺もこういうところは初めてだからな。いつもの調子を取り戻すためにやった。後悔してないし、反省もしてない。」

「ええ〜・・・」

悪気もなく言い切ったハイネにキラが若干引き気味の視線を向ける。

気にも留めないハイネは調子が戻ったのか、いつも見たいに朗らかな笑みを浮かべる。

「ま、ようするに、お前さんだけが固くなっているわけじゃないってことさ。」

と、出されている料理に手をつけようとしたら、

「あれ、ヒイ口達じゃん。みんなから離れてどうしたの？」

伊勢が声を掛けてきた。しかし、何かを食べていたり、飲んでいたと言う感じはしなかった。

「ああ、伊勢さん。あまり、こういったのはまだ慣れなくて・・・。」

「あく、ま、あの有様じゃあねえ・・・。」

引きつった笑みをあげる伊勢の視線の向こうには酒を飲んで出来上がっている商船改造空母の二番艦などを筆頭にどんちゃん騒ぎになっていた。ちなみにその中に提督

が巻き込まれてたりする。

「そういえば、伊勢さんは今来たばかりで？」

「そうね。戦果報告書とか書いていたわ。」

「でしたら、一緒に飲みませんか？正直にいうとちよつと、状況がカオスすぎてついていけないです……。」

ヒイロが目を向けると、出された料理を瞬く間に消して行く某一航戦がいたり、いつのまにか服を脱ぎ始めている妙高型と軽空母がいたり、かなり参っていた。

「いいよ。私も巻き込まれてお説教は勘弁だからね。あ、日向とか連れてこようか？」

「ええ、できるだけだけ見知った仲だと有難いです。」

「それじゃ呼んでくるね。」

伊勢は席を外し、日向達を探しに行った。

「それにしても、かなり酒臭いな……。駆逐艦とかは大丈夫なのか？」

今まで黙々と料理を食べていた刹那が口を開く。刹那の言う通り、講堂には酒の匂いが充満しており、匂いを嗅ぐだけで酔いそうだ。

「大丈夫……みたいです。平然としています。」

「なんで耐えられるんだ……？」

アムロもだいぶ参って来ているようだ。そこに連合艦隊だったメンバーを引き連れ

て伊勢が戻ってくる。

「連れて来たよー、って、大丈夫？」

「すまない。酒の匂いに少々当てられたようだ。」

「酒は苦手か？」

「慣れないと言ったところか。すまないな、こんな状態で。」

「ふむ、まあ最初はそんなものだ。気にすることはない。」

「君にも、慣れない時期はあったのか？」

「いや、なかったが？」

日向が酒に口をつけながら、言われた言葉にアムロが呆れ顔になる。

「説得力がなくなったな。なあ、扶桑。艦娘の皆は最初からこんな感じに酒が飲めるのか？」

アムロは日向から視線を移して、黒髪ストレートで幸薄な雰囲気醸し出している扶桑に声をかける。

「個人差はあると思うけど……。やっぱり艦としての記憶が一番大きく作用しているのかもしれないわね。」

「艦の記憶……？つまるところ、前世と言ったところか？」

「ええ。乗員には基本的に飲める人が大半だったから、飲めるのだと思うけど、私はそん

なに飲めませんね……。」

「なるほど、前世か……。」

「そういえばあなたはどのようなのよ？一応、私たちとおなじ部類には入るんでしょう？」

扶桑の姉妹艦であり、隣にいた山城がアムロにそう聞くと、

「私か？私は、ダメだな。多分飲めない、というより飲まないが正しいな。そうだな、君たちでいう艦載機だつて酒に酔つて、平衡感覚を失つて、墮ちたり墮とされたりしたら笑話にもならんだろう？それと同じだ。」

「ふーん、まあ、わからない話してもないわね。」

「多分、ほかの皆も同じだと思ふぞ。聞いてみるか？」

アムロがヒイロ達に酒を飲まない理由を聞くと、アムロとほぼ同じ理由を言うものが全員だった。

「ところでさ。アムロ、あんた一人で空母棲鬼を倒したんだつたな。伊勢から聞いたぜ？」

「空母棲鬼……？ああ、あの変わった艦載機を出していた奴か。そういう名前なのか？」
対空砲火が売りの重巡洋艦、摩耶から質問にアムロは質問で返しながら答える。

「あ、そつか。アムロ達は知らないもんな。悪いな。」

「アムロが一人で倒しちゃった空母棲鬼はね、鬼級って呼ばれていて、深海棲艦の中でもトップクラスにヤバイ部類に入る敵なんだよ。似ているのに姫級っているけど基本的に統括とかしていて、こつちでいう提督みたいなものね。」

摩耶の謝罪から間髪入れずに入った伊勢の説明にアムロは納得をする。

「そういうえば、私たちが最後に戦ったあの深海棲艦も鬼級、姫級のどちらかなんですか？」

そう質問したのはヒイロだ。それに対し、伊勢は頷き、

「うん。そいつは戦艦棲鬼っていつてね。硬くてバカにならない攻撃力が売りなんだけど、つくづく、よく倒せたね。」

伊勢がうんうんとうなづく。ほかの艦娘も同様だ。

「確かにあの戦艦棲鬼の硬さには驚きましたね。フェイズシフト装甲が使われているかと思いましたがよ。」

「あの・・フェイズシフトってなんですか？」

摩耶の妹である鳥海がキラに聞く。キラは詳しく説明してしまうと鳥海の頭の上にクエスチョンマークが浮かぶことは目に見えていたためかいつまんで説明した。

「えっと、簡単に言うると物理的なダメージを激減させる装甲だよ。僕と、多分ハイネにも使われていると思うよ。」

「物理的なダメージを．．!?ちなみにどこらへんまで耐えられるんですか？」

「うーん．．。戦艦の主砲、副砲は難しいと思うけど、対空砲火とか、駆逐艦の主砲くらいだったら無効化できるんじゃないかな。とは言うものの衝撃はそのまま受けるけどね。」

キラの言葉に鳥海の目は丸くなった。

「それでも破格な性能ですよ．．。」

鳥海がキラを羨ましげな視線で見る。気づいたキラは困った顔をする。

「付けようとしても無理だと思うよ？根本的なところから艦装をいじらないといけないし。」

フェイズシフト装甲は装甲に電流を流し続ける必要がある。つまりそれを行うための発電装備やコンデンサが必要である。仮にできたとしても電力がなくなった状態、『フェイズシフトダウン』になってしまえば普通の艦娘が扱っている装甲より脆弱になってしまっただろう。

「それに、僕には僕の、君には君のできることがある。お互いのできることを完遂できたらそれでいいと思うよ?。」

キラがそう言い聞かすと鳥海は小さく、はいと頷いた。

「そういえば、ヒイロさん達が救助したトラック泊地の艦娘のみんなはどうしたんです

か？」

「それなら問題ない。すでに提督が天龍達の入院している病院に移送済みだ。同じような痣が確認されたからな。」

第二艦隊の旗艦を務めていた古鷹から質問に刹那が答えた。

それに古鷹は安堵の表情を浮かべた。

「向こうの古鷹さんのこと、気になっていたんですか？」

「そう・ですね。やっぱり所属は違えど、同じ古鷹ですから、自分のことのように思えてしまつて……。」

アリスがそう聞くと、古鷹はかなしげな表情をしながら答えた。

「なにかがズレていれば私が向こうの立場になつていたかもしれないと思つてしまつて……。」

伊勢達の顔に影が入る。ブラック鎮守府のことは噂でしか聞いてなかったし、無いものだと思つていた。

だが、実際に現実にあるとわかつてしまつた時、その残酷さに開いた口が塞がらない程だった。

「もしや、不安なのか？ 提督がああトラック泊地の提督と同じことをするかもしれないと。」

「う・・・それは・・・!？」

アムロがそう問い詰めると古鷹はびっくりした顔する。即座に笑顔に戻すが、手遅れである。

考え込んでいるとそこにちょうどフェネクスがやってきた。

「あ、アムロさん、どうも。」

「フェネクスか。どうしてここに？」

「いや、明石さんと夕張さんの3人で飲んでいたんですけど、明石さんが酔いつぶれて夕張さんがその介抱に行つてしまつて暇だったんです。」

フェネクスがあははは・・・と軽く笑う。余談だが、握られているグラスを見るとアップルジュースが注がれていた。フェネクスも飲めないようだ。

「・・・どうかしましたか？顔色が優れないようですけど？」

フェネクスが顔色が若干青い古鷹達を見て心配そうな声をかける。そこにアムロが話の成り行きを話す。

「・・・そうですか。トラック泊地が・・・。」

フェネクスはそれ以上のことは言わなかった。

「うん。古鷹ちゃんの不安も分からないものじゃないけど、大丈夫だと思えます。比較的新参者な私が言えるセリフじゃありませんけど、あの人そんな人じゃないと思えます

「よ？」

フェネクスは続けざまに言う。

「あの人は正義感のとても強い人です。悪いことは悪いと思える人です。だからでしょうけど……。」

そこでフェネクスは一度言葉を切った。

「……ともかく一度聞いてみたらどうでしょうか？今ならお酒のせい、ということでも聞き出せるかもしれませんよ？」

「……ふふ、たしかにそうして見るのもいいかもしれませんがね。」

フェネクスの提案で古鷹の顔に笑顔が戻った。

宴会もお開きになり、みんなが各々の部屋に戻り始めたころ、

「やれやれ、艦娘には酒癖が悪いのがあるようだ。」

「まあ、隼鷹さんとかその最たる例ですね……。あの人、素面でも酔ってるような喋り方なんですよね……。」

アム口とフェネクスは静寂な廊下を歩いていた。アム口達が歩く音だけが響く。

「そういえばさつきなにを言いかけたんだ？」

アム口が突然そんなことを聞くとフェネクスはバツの悪い顔をする。

「う……やっぱりバレてました？」

「あからさまだったな。もう少しいい隠し方はなかったのか？」
「はうっ」

アムロの言葉にフェネクスは胸を抑える。

「それで、なにを言いかけたんだ？」

「・・・私はニュータイプじゃないのでそれほどはつきりとはいえませんが、

あの人が、危ない気がするんです。」

「・・・私も同じだ。私を感じたのは深海棲艦に対する、憎しみ。さながら親の仇でもみているようだった。」

「やっぱり、そうですか・・・。」

（・・・本当にニュータイプじゃないのか・・・？）

アムロはフェネクスのニュータイプとそんなよくない感覚の鋭さにそう思わざるを得なかった。

第18話 陰謀

「これは、本当なのかね？元木くん。」

トラツク泊地攻略作戦から数日後、横須賀鎮守府の提督——元木は大本營に出向していた。

「はい。全て事実です。彼女たちの戦果は眼を見張るものでした。正しく、別次元と言っても過言ではありません。」

元木の言葉に他鎮守府の面々は怪訝な表情を浮かべる。

「しかし・艦娘たちでも手を焼く鬼級、および姫級がたった5人に、ましてや二隻も撃沈したとは・・・。」

「これは私の推測ですが、彼女らは未だ本気を出していないと思います。」

元木の言葉に提督たちのあいだにざわめきが起る。

「ば、馬鹿な!?これほどの戦果をあげていながら未だ本気を出していないだど!?馬鹿馬鹿しいにも、ほどがある!!」

いきりたちながら、元木に対して怒声を浴びせる一人の提督だが、それは用意された椅子の中心に座っている男のひと睨みで止められ、すごすごと元の席に座る。その男は

日本帝国のトップ、元帥である。

顎に生えた白い髭をさすりながら元帥は元木に聞く。

「元木くん、その、確かモビルスーツと言ったかな？その者達は今、どうしている？」

「……今のところは横須賀鎮守府に所属しています。しかしそれは普通の艦娘であればの話です。彼女らにとっては客将程度の感覚でいるでしょう。」

「……つまり、こちらが気に入らなければ、裏切ると？」

「……おそらくはその可能性が高いと。彼女らは普通の艦娘とは違い、自我が強い。私
が彼女らに出撃を命じた時、すぐには承諾しなかったのが、その印でしょう。」

その言葉に会議が再び紛糾する。

「そんな危険分子、即刻切り捨てるべきだ!! 廃棄しろ!!」

「だが、廃棄しようにも途中で勘付かれたら我々にはどうしようもないぞ!!」

報告書にはたった一発で敵艦載機を100近く撃ち落としたともあるのだぞ!!」

「静かにせんかつ!!」

「っ!?!」

そこらでヒイロ達に対する処遇を言い争っているところに元帥が関の声をあげ、会議
の場が静まり返る。ごほん、と咳払いを一つすると、

「元木くん、君はどうする？一応は君の所属になっているのだろうか？」

「私は……」

元木が自分の考えを打ち明けると、元帥を除いた提督は驚きの声を上げる。

「なるほど、そこで、彼女らを利用するのか？」

「はい、彼女らには楔になってもらいましょう。」

「うむ。では彼女らの処遇はこれで進めるとしよう。君たちも異論はないな？」

元帥の鋭い視線に他の提督たちもうなづくしかなかった。

「では、次の議論に移るとしよう。とはいえ、ほぼ最終確認のようなのだがな。」

提督たちは手元に配布されていたプリントを見る。そこにはとある作戦についてだった。

その名も、『AL／MI作戦』

ところ変わって、ヒイロ達は大本営の付近にある天龍達の入院している病院に来ていた。

「あ、ヒイロさん！おはようございますのです！」

病室に入って最初に出迎えたのは電だ。体についていた痛々しい痣はほぼ消えかけており、元気そうだ。

「おはよう。怪我は快方に向かっているようですね。よかったです。」

「他のみんなもほとんど良くなっているのです。特に暁ちゃんの骨折も三角巾がとれて、あと数週間すればギプスも取れるそうなのです！」

そういうと、電はさながら自分のことのように笑顔を浮かべた。

「そりやあ良かった。これも大人しくしていたおかげかね？」

「ふ、ふん。これぐらいどうってことないし。私はレディーなんだからね！」

「あ、僕たち、果物買ってきたんだけど、食べる？」

「食べる!!・・・あ。」

ハインネの言葉に大人ぶった態度をとった暁だが、キラの一言で化けの皮は剥がされ、顔を真っ赤にする。

その様子を見て、微笑んでいたアムロはズボンを引っ張られる感覚を受ける。

下を見るとアムロのズボンを引っ張っているのは響だった。

「アムロ、僕にもくれるかい？」

「ああ、勿論だ。ヒイロ、まだか？」

「はいはい。少し待っててください。」

ヒイロは持っていたりんごを手早く切り分け、わざと残していた皮を少しりんごの身から離し、ウサギの形にする。

「はい、出来ましたよ。」

「うわ〜可愛い〜!!」

雷がいの一番にりんごを手にとり、口に入れる。りんごの瑞々しさが口中に広がり、ほっぺたが落ちそうだ。暁たちも同様の反応を見せている。

「ん〜♥?美味しい♥?」

「ハラシヨ〜。こいつは力を感じる。」

「すごく美味しいのです!!」

「ほら、暁、口開けろ。」

「こ、このくらいできるし!!子供じゃないから!!」

と、言いながらも素直に口を開ける。

「ふふ、すっかり懐かれたわね〜。」

ハイネに食べさせられる暁の様子をみた龍田がヒイロ達に微笑む。

「別にこちらは懐かれるようなことはしてないんですけどね。あ、龍田さんどうぞ。」

「あら〜、ありがと。・・・うん、美味しいわ〜♥」

差し出されたりんごを食べ、暁達と似たような反応を見せる。

それを尻目に天龍がヒイロ達に話かける。

「そういえば、トラツク泊地から比叡達を救出してくれたんだってな。アンタらにはつくづく、世話かけてばっかだな。」

「気にしないで下さい。私たちはあなたの独り言を聞いて、勝手に実行しただけですから。」

「へへっ、言ってくれるじゃねえか。アンタら。そういうえば、ガロードと刹那が見当たんねえが？」

「あいつらなら比叡達のところにいるぜ。」

「どうも。見舞いに来ました。」

「あ、アリスさんに、あの時の・・・ええっと、お名前、聞いてませんでしたよね？」

出迎えてくれた比叡に名乗ってなかったことを思い出し、軽く自己紹介を済ませるガロードと刹那。

「ガロードさんと刹那さん、ですか。改めて金剛型二番艦の比叡です。この度は助けていただきありがとうございます。何もお礼を返せないのは申し訳ないんですけど・・・。」

「気にすんなよ。こつちが好きでやったことだ。」

ベットに座ったまま、お礼を述べる比叡に気を使わせないようにするガロード。

「体調はどうだ？入院してまだ日も浅いからそれほど治っていないのだろうか。」

「はい、そうですね。臙装と違ってすぐ効果が出てくるわけではないですからね。」

比叡は素晴らしい自分に付けられた痣を見せる。刹那の言う通りまだ傷はそれほど癒えてはいない。

「無理に見せる必要はなかったんだがな……。果物を買って来たんだが、食うか？」

「え!? 頂いていいんですか!？」

刹那はああ、と軽く返事をして、取り出したりんごを刃渡りの小さい包丁で切り始める。

「包丁、上手なんですな。」

「ナイフと然程扱いは変わらないからな。」

うまく六等分にし、比叡たちに配る。

「ほらよ。食えよ、島風。」

「ん……。」

ガロードから手渡されたりんごを齧る島風、しかし、その顔に笑顔が浮かぶことはなかった。

「どうした? どつか調子悪いのか?」

気になったガロードが聞くと、島風がうん、と首を振る。

「私たち、これからどうすればいいのかな、って思ってた……。連装砲ちゃんもいなくなっちゃったし……。」

その言葉に比叡たちの顔が暗くなる。艤装がない以上、艦娘としては生きてはいけな
い。かといつて、現代社会に突然放り込まれたって生きていけるわけがない。

「だよなあ……。どうしたらいいんだよ……。もう死んだようなもんだぜ……。」

島風の向かい側で寝ていた深雪がボソツと呟く。

病室にどんよりとした空気が立ち込め始めた時、刹那が口を開く。

「なら今から探せばいい。まだ、お前たちは終わったわけではない。」

比叡たちがキョトンした顔をする。

「確かに艦娘としては死んだかもしれない。だが、人間としてのお前たちは現にここで
生きている。艦娘としてではなく、一人の人間として生きていくのを考えたらどうだ
？」

「一人の人間として……。？」

「生きていく……。？」

神通と古鷹が刹那の言葉を反芻するように言う。刹那は続けて言った。

「現状に嘆くより、新たな視線を持つて生きていくんだ。チャンスは少ないかもしれない
い。だから、チャンスを無下にするような表情だけはやめておいた方がいい。」

「でもよお……。」

深雪が戸惑いの視線を刹那に向ける。

「無論、すぐできるとは言ってはいない。何事も変わるには時間がかかる。だが、お前が変わろうとすれば必ず機会はやってくる。」

刹那は深雪に近づき、語りかける。

「これはアムロの受け売りだが、人には無限の可能性を秘めている。それは艦娘だって例外ではないはずだ。」

「無限の可能性……。私にもあるのかよ。」

「ある。後はお前自身がどう向き合うかだ。」

「へへっ、なんか、そう言われつと照れるな……。」

軽く顔を赤くする深雪。どうやら少し笑顔が戻ったようだ。

（人の可能性、か……）

アリスも刹那の言葉に思うところがあつたようだ。

（私もやってみようかな……。表情筋の練習。）

若干ズレてる気がするのはいけない。（戒め）

病院からの帰り道、ヒロイたちは談笑しながら帰っていた。

「比叡さん達の様子はどうでしたか？」

「身体的には時間が過ぎればなくなると思うが、精神的にはかなり厳しかったようだ。」

「儀装を破壊されて、艦娘としての存在意義っていうか、なんていうか。とりあえず精神的に参ってたようだ。まあ、そこは刹那が演説かましてなんとかなったけどな。」

「演説をしたつもりはなかったのだが……。」

刹那は恥ずかしそうに顔を晒す。その様子を見たヒイロ達は軽く笑いながら鎮守府へと戻っていった。

第19話 発令、AL／MI作戦

天龍達の見舞いから帰ってきたヒイロ達。

談笑しながら帰り道を歩いているが、ヒイロは黙っている。

「う〜ん……。」

「……何を唸っているんだ？」

「……比叡さん達のことについて、です。彼女たちは仮に傷が完治しても艤装が既に壊されていて、艦娘として戻ってくる可能性は限りなく低いです。」

気になった刹那が聞くとヒイロは比叡たちについて語る。それを聞いたガロードはやるせない顔をする。

「つても、私たちがどうこうできることじゃないぜ。……情け無えけどな。」

「彼女たち、本当にどうなっちゃうんでしょう……？」

「……ヒイロ、ゼロではないんだな？彼女たちが艦娘として帰ってくる確率は。」

キラが不安気な顔をするが、アムロの言葉で驚いた顔に変わる。

「えっ!? 本当なの、それ!？」

キラから嬉々とした表情に圧されながらもヒイロは首を振った。

「確かにあるにはあります。でも・・あまりにも都合が良すぎる考えです。叶うことは、おそらく、ありません。」

「でも、聞くだけならダメ?」

キラの眼差しにたじろいだヒイロは自分で浅はかだと思つてゐる考えを口にする。

「それは、他の鎮守府に余つてゐる艦装を譲り受けることです。」

それを聞いたアムロたちは揃つて、難しい顔をする。

「確かに、それは難しいな・・。」

「ふう・・どうしたらいいんでしょう・・。」

若干気を落としながら鎮守府の門を潜ると、元木提督と鉢合わせる。その様子はどこか忙しい。

「ん? ああ、帰つてきたのか。もう良かったのか?」

「ええ、彼女たちも大分快方に向かつてゐるようです。であれば長居は無用です。」

「そういえば、どこか忙しい様子のようなだが、何かあったのか?」

アムロにそう問われると、元木はちよつどいいと言いながら、

「講堂に集まつてくれないか? 少し、艦娘の皆に伝えなければならぬことがある。」

「・・・わかりました。」

それだけ伝えると、元木はいそいそと鎮守府の建物に入っていた。

「・・・なんでしようね?」

「分からない。だが、あまりいい知らせではないようだ。」

「同感だ。・・・また作戦なのか? まだ一週間程しか経っていないというのに。全く・・・」
アムロはため息をつく。様々な予想が頭の中をいくつもよぎるがやはり一番可能性が高いのは新たな作戦だろう。

「ま、百聞は一見にしかずって言うしな。行ってみようぜ。」

ハイネの言葉を皮切りにヒイロ達は講堂へ向かう。

講堂では既に艦娘分の椅子が用意されていた。

適当な椅子に腰掛けると、全艦娘への招集がかかる。聞き流しながら待っているとぞろぞろと入ってくる中にフェネクスを見つける。向こうもヒイロ達に気付くと、駆け寄り、同じように腰掛ける。

「皆さん、早いですね。」

「たまたま提督に直接声をかけられたからな。ところでフェネクス、この招集について何か知らないか?」

アムロがそう聞くと、フェネクスは少し考え込んだあと、

「えっと、おそらく作戦の指令が来たんだと思います。」

「また作戦かよ!?この前やったばかりじゃねえか!」

「この前のは緊急指令です。おそらく、今回のは元々この時期にやるつもりだった作戦でしょう。」

「元々やるつもりだった作戦?なんなんだ?それは。」

「私も出張さん達の噂でしか聞いていませんが、その作戦とは、AL/MI作戦。」

ヒイロ達の頭の中で疑問符が上がる。そこでフェネクスが簡単な解説をつける。

「私も資料を少しかじった程度しか知りませんが、メインの作戦海域はミッドウエーだそうです。」

「ミッドウエー・・・?どこだ?それ。」

「北太平洋ハワイ諸島北西部にある無人島、というより環礁ですね。」

ヒイロの手早い解説にガロードは舌を巻く。

「よく分かるな・・・。」

「地球の大体の地図は頭の中に入ってますしね。」

そこまで言ったところで提督が講堂に入ってくる。やはり先頭にいる長門の号令で一斉に立ち上がる。ヒイロ達もまちまちの速度でつられて立ち上がる。

「全員、敬礼ッ!!」

提督が机について艦娘達の方角を見たと同時に長門の号令で敬礼をする。

敬礼についてはよくわからないので適当にした。

アムロとアリスはみように様になっていたが。

「今回、集まってもらったのはかねてより調整されて来た作戦がついに発令されたからだ。その作戦は、AL/MI作戦だ。」

その言葉に艦娘達はトラック泊地が占領された時とは打って変わって険しい顔をすする。特に一航戦の赤城と加賀はその最たる例だ。

「この作戦に思い入れのある艦娘は多いと思う。特に赤城、加賀達、南雲機動部隊の面々は人一倍、その思いが強いだろう。」

提督は力強い口調で言葉を続ける。

「昔、まだ君たちが物言わぬ艦艇だったころ、この戦いで多くの船が沈んでしまった。そして、戦争に負けてしまった。」

「だが、今、君たちにはこの過去を乗り越えられるチャンスがある。俺はこの君たちは乗り越えることができる、いや、絶対に乗り越えられる。そう信じている。」

提督の言葉に艦娘達の目に熱意が宿る。それを確認した提督は最後に声を張り上げる。

「この運命、絶対に乗り越えるぞ!!」

『はいっ!!』

「よし、では編成を伝える。当然選ばれない者もいる。しかし、他のものも選ばれなかったと言つて、自分にできることを最大限尽くしてほしい。」

提督は編成の書かれた紙を読み上げる。

編成は連合艦隊を組むとして第1艦隊は旗艦を赤城として、加賀、飛龍、蒼龍、榛名、霧島、利根、筑摩、舞風、巻雲、秋雲、そして吹雪。

第2艦隊は旗艦を金剛として、榛名、北上、大井、最上、三隈、夕張、五月雨、春雨、村雨、夕立。

計24名がミッドウエーに向かうこととなった。

そして、その艦隊にヒイロ達も編入されることが伝えられた。とは言うもののフェネクスは編入されていないが。

「まだ、決心が付かないか・・・。」

アムロからの確認にフェネクスが顔をうつむかせながらすみません、と小さく答える。

「前も行ったが、人は変わるには時間がかかる。お前に合つたスピードでいいんだ。」

「うう・・・。申し訳ないです・・・。」

「そういえば、フェネクスさんも戦えるんですか?」

「え、ええ。そういえばおはなししてませんでしたね。」

ヒイロから問われたフェネクスは自分のことを話した。皆から驚かれたが一番驚いたのはアリスだ。

「わ、私やアムロさんと同郷だったんですか!? それにU・C0096ってアムロさんより後の時代ですか・・!?!」

「ええ、まあそうですね。」

「そういえば、吹雪ちゃん、呼ばれてましたね。」

「ああ、これは彼女の努力が実った結果だろう。」

ヒイロとアムロは微笑みながら吹雪の頑張りを讃える。

「では、最後に作戦決行の日だがについてだが、6月5日に決まった。」

(・・・なんか具体的ですね・・。)

ヒイロは元木の言葉に何か引っかけかかりを覚えた。

「では、決行日まで出撃する艦娘は準備しておくように。解散!!」

「さて、どうしましょうか?」

会議から解放され、どうするか考えていたところ、

「ヒイロさん!!」

ヒイロ達が振り向くと吹雪が駆け寄ってきた。それについて赤い目に犬のような癖っ毛のついた艦娘と茶髪をショートカットにした艦娘もついてきた

「私、やりました!!」

「おめでとう、吹雪さん。貴方の頑張りが評価された証です。」

「で、あれ? お前さん服変わってねえか?」

ガロードの指摘の通り、吹雪の服は最初に会った時とは変わっていた。セーラー服なのは変わりはないが色が青から黒に一新されている。

「あ、これは改造して改二になったからです。性能も前よりぐんつと上がってますよ!!」
「・・・貝に?」

「キラ、貝ではないぞ。改造を二回したという意味で改二だ。」

「で、お前は時雨の妹か?」

「そうだよ。白露型四番艦、夕立よ。よろしくね。」

ハイネがそう聞くと夕立は無邪気な笑顔を浮かべながら自己紹介をした。天真爛漫、そんな言葉が彼女には似合うだろう。

「それで、貴方達も一緒に出撃するっぽい?」

「まあ、今のところ、ですな。」

「今のところってことは変わったりするんですか?」

「君は・・・如月の姉妹か?」

服からそう判断したアムロからそう聞かれると茶髪の艦娘、睦月は慌てて自己紹介を

する。

「む、睦月型一番艦の睦月です!!よ、よろしくおねご (ガチツふぎやあ!)」

「おい、落ち着け。そんなに固くならなくてもいいんだぞ?」

ガツチガチの挨拶をして舌を噛んだ睦月を見かねてリラックスさせるアムロ、睦月は一度深呼吸し、気持ちを落ち着かせる。

「落ち着いたか?」

「は、はい。」

「大丈夫? 思いつきり舌噛んだみたいだけど・・・。」

「はうう・・・面目無いですう・・・。」

「あらあら、睦月ちゃんったら、せつかちなんだがら。フェネクスさん、ごめんなさいね。」

如月がどうも、とアムロ達に軽く会釈しながら、睦月に近寄る。

「いいえ、大丈夫ですよ。」

フェネクスは如月に微笑みかけた。

講堂を出ると、ヒイロはアムロ達と別れて資料を漁っていた。

内容はミッドウエー海戦について。

(ミッドウエー海戦、ミッドウエー諸島沖で勃発した日本軍とアメリカ軍の戦い。日本はこの戦いで赤城、加賀等の南雲機動部隊が全滅。要因は多説あるけど、一番有力なのは日本軍の航空機の装備換装中にアメリカ軍の航空機に襲撃され、誘爆。当時の軍の幹部は後、五分あれば間に合ったとされ、この五分間のことを『魔の五分間』と呼ばれている。)

資料を頭の中で整理しながら視線を落として行くと、資料のある部分で目が止まった。それは海戦日時。

「日時を指定したのはこの日に合わせるため・・・？」

その日は6月5日。作戦開始の日と被る。だが、理由は分かっていたが、未だにヒイロの中ではもやがかかったかのように晴れることはなかった。

頭を抱えているとたまたま引つ張り出した深海棲艦の資料が目にとまる。

(・・・確か深海棲艦は戦争で亡くなった人達の怨念で形成されている。)

戦争というのは、かなり広範囲に当てはまるだろう。第一次世界大戦、そして第二次世界大戦も。

そこまで思考が届いた時、ヒイロはある可能性にたどり着く。

(これは、不味いかもしれません・・・!!このままじゃあ・・・。)

ヒイロは頭の中で最悪の事態を想定してしまった。

(このままじゃ、この鎮守府がやられてしまう・・・!!)
ヒイロは部屋から飛び出し、元木提督のところへ駆け出した。

第20話 残留

「君たちの部隊を出撃する組と鎮守府に残る組に分けて欲しい？」

提督は困惑したような声でヒイロに聞いた。

「はい。難しいのを承知ですがお願いできませんでしょうか？」

「理由を聞かせてもらえないか？君たちには世話になつてはいるがさすがにこれはおいそれと変えることはできない。」

ヒイロはですよね、と言葉を置いてから話し始めた。

そのことは提督を驚いた表情をするには十分であつた。

「馬鹿な・・!?!そんなことが・・!?!」

「前提条件に深海棲艦に第二次世界対戦の兵士の怨念、もとい記憶が入り込んでいるというのがありますが、もし、当たつてしまえばこちらの首を確実に取られてしまうことになります。」

開いた口が塞がらないといった様子の提督にヒイロが追撃をかける。

「というより、深海棲艦は全世界に広がつてはいるんですよね？つまりそれができるだけの戦力を既に持つている。たかが基地を一つや二つを捨てて、戦争に勝てればおつりは

帰ってくるでしょう。」

提督はうくむ、と長い唸り声をあげながら結論を出す。

「わかった。君の提案を受け入れよう。確かに予防線を出来るだけ張っておいても損はあるまい。ただし、このことを話すのは君たちMS隊と赤城、加賀の間でのみにしてほしい。無用な不安は煽りたくない。」

「了解しました。」

ヒイロが執務室から出て行くと提督は大きく一つ、ため息をついた。

「よもや日付を言ったただけであそこまでたどり着くとは……。確かに言われてみれば可能性はゼロではないが、彼女の発想力には脱帽だな……。」

「なるほど……。分かった。私やガロード、キラとハイネはこちらに残ればいいんだな？」

「はい。私と刹那とアリスはこれまで通りミッドウエー攻撃部隊についていきます。」

「しかしよお……。本当にヒイロの言った通りになんのか？」

「ならなければそれで構いませんし、なによりさせないための予防線です。」

「……。分かったよ。でも無茶はすんなよ。」

ガロードの疑いにヒイロは説明を行う。ヒイロの説明にガロードはとりあえず納得したようだ

「それでは、このことは基本的に他言無用でお願いします。」

「それと、赤城さん、もしくは加賀さんのどちらかに会ったらでいいので伝えてくれませんか？」

ヒイロの言葉にアムロ達はうなづき、解散した。

アムロはそこら辺を歩いているとタワーン、と何かを射抜くような音が聞こえてきた。

(そういうえば、ここは空母の練習場だったか?)

ちようどいい、と思いながら扉を開けると赤城と加賀が弓を引いていた。

その姿は凛々しく、見惚れてしまいそうだ。

赤城、加賀両名が弓を放つと吸い込まれるように的へ飛んで行き、見事、真ん中の黒い丸を撃ち抜いた。アムロがおお、と感嘆の声を上げていると、

「訓練中には邪魔になってしまうので入ってくるのを禁じているはずですが。」

赤城がアムロの方を見ずに警告してきた。

「ああ、そうだったのか。すまない。気がきかなかったようだ。」

「あら？アムロさんでしたか。でしたらしょうがないですね。初めてですよね？ここにくるのは。」

アムロだと気づいた瞬間、申し訳ない表情をする。反面加賀はムスツとした表情をし

ている。

「しかし、規則は規則です。守って頂かなねば全体の規律にも乱れが出てしまいます。気をつけてください。」

「ああ、分かっている。さつきも言ったがすまなかった。」

「いえいえ、それで何か御用ですか？まだ夕飯には早かったような・・・。」

「おい、確かに早いがまだ3時だぞ。・・・作戦についてなんだが・・・。」

そういうと赤城の目つきが変わった。アムロはすごい変わりようだな、それだけ気合が入っているのだな、と思いながら説明を行った。

「・・・分かりました。確かに言われてみればその可能性もゼロではありませんしね。」

「備えておいて、損はありません。私も異論はありません。戦力が下がってしまうのは目をつぶるしかありませんが。」

「そこは割り切ってくれ。君らも試合には勝って、戦いには負けるなんて思いはしたくないだろう。」

「ええ、そうね。それで、出撃するのは誰？」

「ヒイロ、刹那、アリスの3人だ。」

「となるとあなたは鎮守府にのこるのね。」

そういうと加賀は少し、ほんの少しだけ残念そうな顔をした。本来なら赤城にしか分

からなかったが、相手が悪かった。

「・・・なぜ、少しだけ残念そうな顔をするんだ？」

アムロからの指摘に顔を真っ赤にした加賀。その様子を見た赤城が笑いながら説明する。

「ふふつ、加賀ったら、瑞鶴さんからアムロさんの報告を受けた時からアムロさんのことばかり考えていたのよね。」

「赤城さん!?ど、どうしてそれを!？」

「だって顔に出ていたもの。表情には出なくとも、ね。」

姉妹艦でもないのに仲睦まじく会話をする赤城達を見てアムロは珍しいと思っていた。

(姉妹艦でもないのに仲が良い艦娘のいるのだな。)

そう思っていると加賀がアムロに声をかける。というより、咄嗟に赤城の追及から逃れるために声をかけたと言っている。

「う、えつと、空母棲鬼を単独で撃破したというのは本当なの!？」

「ああ、そうだが？」

「どうやって倒したの?以前、私たちが空母棲鬼と対峙した時は全員で夜戦まで持ち込んでやっとだったのに。」

「……そもそも、私たちと貴方達とは戦い方が全く違う。私たちの戦い方を知るのは構わないが、参考にはしない方がいい。」

「そう……。今回、貴方の戦い方が観れると思ったのだけど。」

「それは今度にしてほしい。だが、ほかのみんなもかなりのエースだぞ。」

刹那は近接戦闘力が高い。右に出る者はいないだろう。ヒイロも火力と状況判断能力がずば抜けている。今回の件もヒイロが発端だ。アリスも、私も見たことないがロード曰く、特殊な兵装もあるようだ。」

最後にこの情報が赤城と加賀だけには話さないことを伝え、アムロはその場を立ち去った。

「すごい方ですね。空母棲鬼という大きな敵を倒しておきながら、周りの方がすごいと言いつ切るなんて。」

「……そうですね。普通なら、誇ってもいいはずですよ。どうしたらあそこまで謙虚になれるのでしょうか。」

赤城と加賀は訓練場から出て行くアムロの背中を追うだけだった。

皆が寝静まった夜、夢を見ている者がいた。

真っ白な空間にぽつんと一人で立っていた。

辺りを見回していると、突然前に一組の男女が立っていた。

驚いて警戒していると、その男女はお互いに微笑みながら夢を見ている者を指で指す。

「貴方に力を。」「過ちは繰り返すな。」

夢はそこで覚め、夢を見ていた人物、ガロードは飛び起きた。

「．．．なんだったんだ．．．。今のは．．．。」

AL／MI作戦まであと1日。

第21話 陽光、TRANS—AM

「それでは行つてきますね。アムロ、留守を頼みます。」

「ああ、任せてくれ。アリスは初めての長距離移動で慣れないと思うが気をつけてくれ。」

「はい。気遣い、ありがとうございます。」

「ヒイロ、そろそろ時間だそうだ。赤城達が呼んでいる。」

「刹那も気をつけろよ。提督曰く、かなりの激戦区になるらしいからよ。」

「問題ない。どちらかと言えば、ガロード達の方が危険だろう。そちらこそ、気をつけてくれ。」

「・・・ああ、わかつてる。」

ガロードの反応に刹那は違和感を覚えたが、時間が押していたので特に言及はしないことにした。

「それじゃあ、3人とも気をつけてね。」

「こっちは任せてくれ。その代わり絶対生きて帰つてこいよ。」

キラの笑顔とハイネの親指を上立てたハンドサインを見届け、ヒイロ達は赤城達の

艦隊に合流した。その時、編成変更を聞かされていない赤城と加賀以外の艦娘から質問責めにあったが、赤城がうまくさばいてくれたため、事なきを得た。

ミッドウエーへの航海はまさしく順風満帆であった。特に深海棲艦と鉢合わせることもなくミッドウエー海域へと近づくことができた。途中、トラック泊地からの救援物資というわけでタンカーを引き連れた艦隊にヒイロ達は納得しながらだったが。

誰もがこのまま順調に行けばいいと思ったが、やはり、そう簡単にはいかなかった。状況はおおよそ、深海棲艦の泊地に近づいた時の天候である曇天。

「アリスさん!!5時の方角、上空400m!!撃つて!!」

「確認しました。撃墜します。」

空を飛んで辺りを警戒していたヒイロがアリスに指示を飛ばす。

直ちにアリスのビームスマートガンから放たれたビームは一つの花火を作った。

「くっ!!警戒網を潜り抜けられていたの!?!」

「ヒイロさん、どうかしましたか!?!」

「敵の偵察機を確認しました!!すぐさま撃ち落としましたが、おそらく手遅れです!!すぐさま艦載機を・・・来た!!」

ヒイロの声が途中で途切れたため、前を見据えた赤城。そこには空に群れを成す敵艦載機の姿だった。すぐさま艦載機を出撃させようとするが、ヒイロに待ったの聲がかかる。

「この状況で艦載機を出しても無駄に数を減らすだけです。ここは私に任せてください。」

ヒイロはそういい、バスターライフルを構える。標準はなるべく爆弾を積んでいる艦載機だ。

「ターゲット・ロックオン。まずは敵の出鼻を挫きます!!」

放たれた爆光は多くの敵艦載機を消しとばした。だが、敵艦載機の進軍は止まらずどんどん有効射程距離に近づく。

「金剛さん、榛名さん。三式弾、撃って!!」

「YES!!ワタシ達の実力、見せてあげるネ!!」

「勝手は、榛名が、許しません!!」

赤城が比叡の姉妹である金剛と榛名に指示を出す。すぐさま主砲が火を噴く。

放たれた先端が丸く、オレンジ色をしている砲弾、『三式弾』は敵艦載機群の中で爆発し、火花のように火花が広がる。それに触れた敵艦載機は主翼が溶断されたりするなどで墜落して行く。だが、それでも進軍してくる。中にはすでに雷撃態勢や爆撃態勢に

入っている。そこまで入られたら敵の攻撃は避けることしか方法がなくなる。しかし、それは艦娘には、の話である。

「刹那が雷撃機を、アリスは爆撃機を!!私はこのまま艦戦の殲滅に入ります!!」

アリスはすぐさま射撃態勢に入り、急降下してくる爆撃機にスコープを合わせる。

「一発で仕留めます!!ファイア!!」

トリガーを引き、ビームスマートガンからビームが放たれる。

ビームは何機もの艦載機を巻き込んだ。だが、いくつか生き残った艦載機もいるが、その艦載機も突然反射してきたビームに消滅した。

アリスは先に膝のニーバツクルからリフレクターインコムを射出しており、反射角度などを計算していたのだ。

「爆撃機の殲滅、完了。」

アリスが目を向けると、艦娘達に一直線に海中を進む魚雷が見えた。

が、アリスが手を下すことはなかった。

「目標を駆逐する!!」

GNソードIIIで魚雷を真つ二つに斬る。その勢いは全ての魚雷を叩き斬る程だったが、あくまで刹那が斬っているのは艦娘への直撃コースに入っている魚雷のみだ。

魚雷が全て外されたことに驚いたのか慌てたように逃げようとするが、刹那のスピードが圧倒的に早いいため、瞬時に追いつく。

そのまま刹那の肩部に付けられてある『GNビームマシンガン』で撃ち落とす。

「す、すごい……。あれ程の数の艦載機をほとんど3人だけで……。」

「赤城さん!! すぐさま艦載機の発艦を!! 第二陣、第三陣がいつくるかわかりません!!」

ヒイロの言葉に直ぐに弓を引く赤城。ほかの加賀、蒼龍、飛龍も同じように弓を引く。

「第一次攻撃隊、発艦!!」

放たれた矢は『烈風』、『流星』などに姿を変え、ヒイロ達が切り開いた空を進んで行く。

「制空権、確保しました!!」

榛名が叫んだと同時に、流星が魚雷を、爆戦バージョンの零式艦爆52型が爆弾を投下し、たくさん水柱が上がる。

それでも、まだ深海棲艦の数は多い。だが――

(妙ですね……。確かに数は多いけど、想定内で収まっている――)

(このまま行けば、多分、勝てる。損害は出るだろうけど、誰も沈みはしないはず……)

ヒイロは敵の数を見て、そう感じた。頭の中で嫌な予感が巡り始めたが、アムロ達を信じて、思考を目の前の敵に集中させる。

敵の司令官は情報によれば飛行場姫、この前アムロが単独で倒した空母棲鬼の飛行場バージョンのようだ。飛行場ということは搭載している艦載機の数は空母棲鬼より多いだろう。おそらく、まだ出していない艦載機もあるだろう。

しかし、ここで問題点が生じる。今までヒイロ達が戦った鬼級は戦艦棲鬼と空母棲鬼の二人。これらは海に浮いていたが、今回の飛行場姫は陸上にいる。

つまり、北上や大井の十八番の魚雷攻撃が届かない。

赤城が考えに耽っているとヒイロから声がかかる。

「赤城さん、AL方面の艦隊から連絡は？」

「まだ、ですね。そろそろ連絡が来てもおかしくはないんですが……。」

「そうですか……。ひとまず、私達は前に出ます。何か、指示はありますか？」

赤城は少しの間、考えるとヒイロに空母を狙って欲しいと伝えた。

「了解です。刹那、アリス、空母を狙ってください!!」

「了解した!!」「了解です！」

ヒイロ達は艦隊から離脱し、空母を叩きに向かった。

当然空母を守ろうと駆逐艦や軽巡による対空砲火が飛ぶが、糸を縫うように切り抜ける。

「刹那!!」

「了解！援護する！」

刹那がGNマイクロミサイルで目くらましを行う。爆発による煙で視界を塞がれ、咄嗟に煙から離れようとする空母ヲ級。

しかし、すでに時遅し、最期に見たのは緑色と水色の光の剣が振り下ろされる瞬間であつた。

ヲ級を沈んだことを確認した刹那はGNソードIIIから出した身の丈ほどのビームサーベルでそばにいた駆逐艦と軽巡を一閃した。

「次の目標は?!」

「2時の方角、空母1、軽空母2です!!」

すぐさま向かつたが、随伴艦にいた戦艦ル級の主砲に刹那が吹っ飛ばされた。

「刹那?!」「刹那さん?!」

が、刹那が飛ばされたのは2時の方角、つまりー空母のいる方角。

刹那は回転しながら腰に下げられてあつた『GNソードIII』を空母ヲ級に投合する。ヲ級は反応出来ず、頭に突き刺さる。

そのまま吹き飛ばされた勢いを利用し、GNソードIIIでヲ級に意識を取られたル級を縦に真つ二つにした。

続けざまにヲ級に突き刺さつたGNソードIIIを左手で引き抜き、軽空母ヲ級を同時

に斬り裂いた。

「怪我はないんですか!？」

「問題ない。爆風を利用しただけだ。」

ヒイロが赤城達の様子を見ると、飛行場姫に攻撃を仕掛けていた。

雨霰のごとく降りかかる爆弾や砲弾に飛行場姫の機装はボロボロになっていく。

どうやら微妙に再生しているようだが、このまま行けば飛行場姫を倒せるだろう。

爆煙に包まれ、姿が見えなくなった飛行場姫、一応警戒のために上空に艦戦を旋回さ

せているが、刹那が叫んだ。

「まだだ!!まだ奴は生きている!!」

驚いたヒイロ達が赤城達を見たのと、爆煙の中から爆弾を積んだ艦載機を出たのは同時だった。

(不味い……この距離じゃ・間に合わない……!!)

ヒイロは悟ってしまった。赤城達が思った以上に飛行場姫に近づいていて、かつ自分たちが赤城達から離れすぎてしまった。その赤城も突然のことに呆然としている。

完全に自分のミスだ。心の中で悪態をついていると、

「トランザムシステム、発動!!」

その声が聞こえた瞬間、刹那から緑色の粒子が溢れ出した。

一瞬、視界が潰されたが、目を開けると――
「トランザムライザー、目標へ飛翔するッ!!」

刹那の躰が紅く輝き、その様子はさながら陽の光のようだった。

第22話 絶望、襲来

「トランザムライザー、目標へ飛翔する!!」

一瞬、刹那のGNドライブから二つの円が出たかと思うと、ものすごいスピードで赤城達のほうへ向かった。

その速さは刹那の姿がブレて見えてしまう程だった。数秒かからずに赤城達への前に躍り出る。そして爆発。

ヒイロとアリス含め、全員が息を飲んだ。爆煙が晴れると、緑色のバリアのようなフィールドに包まれた無傷の刹那と赤城の姿があった。

その様子を見てとりあえず安堵した。が、再び爆弾を積んだ艦載機が刹那と赤城に迫り来る。刹那はGNソードIIをソードモードにすると、目にも止まらぬ速さで艦載機を斬り裂く。

刹那が爆炎に包まれている飛行場姫の方を見据えると、爆炎から傷が元に元に戻った飛行場姫、否、『中間棲姫』が爆炎の中から出てきた。

「傷が再生した・・!?それに形も変わって・・!?」

「多少、姿が変わっても私たちがやることに変わりはない。」

赤城は姿の変わった中間棲姫に驚くが、刹那は動じないが手間がかかるのは事実だ。刹那は赤城に目を向ける。目を向けられた赤城は刹那の目が金色に輝いていたように見えたが、今は気にかけないことにした。

「私はこれより突入する。援護を頼めるか？」

「・・・了解です。貴方に頼んだ方がいと思いますので。ですが、ごめんなさい。貴方のその状態はいわば、切り札ですよ？」

「・・・そうだな。その認識で間違いはない。だが、お前が気にすることはない。使うべき時にこそ使うのが切り札じゃないのか？」

刹那は軽く援護を頼む、と言うと中間棲姫に突撃する。途中、中間棲姫の艦載機や戦艦、重巡に砲撃に遭うが、ヒイロやアリス、赤城や加賀達の艦載機が刹那の突撃を援護する。

残像を出しながら中間棲姫にたどり着いた刹那は中間棲姫の殻のような外装に斬りかかる。

刹那の爆発的な加速力とGNソードIIIの鋭い切れ味が相まって、紙のように外装が断ち切られる。

中間棲姫は反撃で近接攻撃を仕掛けるが、刹那が素早く反応し、後退する。

その後も刹那にヒットアンドアウェイを繰り返され、中間棲姫は表情を歪める。

「すごい……。あんな速さでの戦闘、見たことない……。」

蒼龍がそう呟いた。飛龍も同じように刹那の戦闘を見守っていた。

刹那のヒットアンドアウェイが5回ほど繰り返されたのち、ついに刹那が決めにかかった。

腰部についてある『GNビームサーベル』を左手で掴むと、ナイフ投げの容量で中間棲姫に投擲する。正確に投げられたサーベルに中間棲姫は反応することが出来ずに肩部に突き刺さる。肉が焼き切られるような感覚に中間棲姫の表情が再び歪む。

続けて刹那はGNソードIIを一振り取り出して、GNソードIIIとの二刀流で斬りかかる。さながら剣舞のような機動で中間棲姫の軀に傷をつけてゆき、最後に剣をクロスさせて斬り抜けた。

少し、傷に悶える様子を見せた中間棲姫は再び、爆炎の中に消えた。

それを見届けた刹那は膝をついた。

「刹那!?大丈夫!?!」

「……問題ない、と言いたいが……。」

ヒイロが心配しながら駆け寄ると刹那は気恥ずかしそうな表情を見せる。

不思議に思った瞬間、ヒイロの耳にかすかに音が響いた。

それは、腹が減った時に鳴る空腹の音。

「何か、食べるものはないか？それと、体への負担が想像以上に厳しい。」
「でしたら、肩貸しましょうか？」

そう声をかけたアリスの好意に素直に答え、肩を借りる刹那。

「まあ、帰ったらいつぱい食べましょう。一週間ほど近くかかりますが。」

ヒロ口の言葉を聞くと、刹那はわずかにしよんぼりした顔をする。

と、同時に艦娘達が駆け寄ってきた。主に駆逐艦に囲まれ、ヒロ口達は困った顔をする。

その様子を赤城は微笑ましい表情で見ている。しかし――

「赤城さん。アリュージュシャン列島方面の艦隊から連絡です。」

「っ!?内容は!？」

気がかりになっていたアリュージュシャン列島方面からの連絡に赤城は急かすような声で加賀に聞く。

「向こうも無事任務を完遂したそうよ。だけど……」

「だけど……?どうしたの?」

加賀の不安感溢れる表情に赤城の頭の中で悪い予感が流れ出す。

「敵の部隊は想像より遥かに少なかったみたいです。さながら、基地を放棄したようだったと。」

「つ・・・!? ヒイロさん!!」

報告に顔を顰めた赤城はヒイロを呼んだ。びっくりした駆逐艦達を押しつけてヒイロは赤城の元に駆け寄る。

「どうしましたか!?!」

「アリュューシャン列島方面から連絡が入りました。向こうも敵の数が少なかった、だそうです。」

ヒイロは報告を聞き、すぐさま思考の海に入った。

(敵の数はこちらにも、アリュューシャン列島の方も想定より少なかった・・・)

でも中間棲姫の強さは別格、なら、この指揮官は中間棲姫で間違いはない。

だったらー

「ね、ねえ、赤城さん、どういうこと!?!」

「あれで終わりじゃなかったの!?!」

事情を知らない二航戦の二人が困惑した表情で詰め寄る。

「ヒイロさん、これは・・・やはり・・・。」

「ええ、おそらく、というかやはり我々の作戦は敵に筒抜けだったようです。いえ、もつと正確に言うなら、本能的に避けた、と言った具合でしょう。」

ヒイロの言葉に艦隊の皆に驚愕の表情が走る。

「ホ、ホワツツ!?!いい、一体どういうことデスカ!?!」

「つ、筒抜けつて、どうしてですか!?!」

金剛、榛名を筆頭に再び詰め寄られる。が、先ほどとは真逆の表情を挙げられている。

「まず、これを説明するには深海棲艦の本質について知っていなければなりません。」

「本質……? 怨念つてこと……ですよね?」

メガネをかけた金剛型の霧島がそう答えると、ヒイロは頷き、話を進める。

「怨念……というのは言い換えれば、記憶。恨み、妬みの記憶です。我々は今回、1924年6月5日、つまり、赤城さん達がまだ艦艇だったころのミッドウエー海戦をそのまま繰り返しを行ったのです。姿形、状況は違えど、やっていることは一緒。これにもし、当時の兵士の記憶が、深海棲艦にあつたとしたら、どうするでしょうか?」

そとまで言ったところで艦隊のみんなハツとした。

「絶対に、避けようとしません……!!」

吹雪が皆の声を代弁するように言った。その事実息を飲んだ。

「じゃ、じゃあ、今、私たちが倒した敵艦隊は……?」

「……これ以上は仮説の域を出ませんが……。おそらく、アリューシャン列島にいた艦隊かと。私たちは出し抜くつもりが逆に出し抜かれた訳です。」

比叡が絞り出した質問にヒイロは事実を突きつけた。

「な、なら、ミッドウエーにいた敵艦隊はどこに!? も、もしかして私たちを取り囲むつもりじゃ・・!!」

「いえ、その可能性は低いかと。」

慌てふためいた様子の蒼龍をヒイロは鋭い声で否定する。

「彼女らは我々の首を取りに行つたのでしよう。」

首、という表現に艦娘達は疑問の念が生じた。

ヒイロは正直、自分で言っておきながら、深海棲艦の戦力を過小評価してしまった。

情けない、と心の中で悪態を吐くが、もう遅い。あとは鎮守府に残したアムロ達に任せる他はない。

「敵は横須賀鎮守府、および大本営に対し、奇襲を仕掛けるつもりです。」

(できることはしたつもりです・・・。あとは頼みます・・!!)

ヒイロはもう、そう願うしかなかった。

同時刻、横須賀鎮守府では警報が発令されていた。

鎮守府近海を警戒していた艦隊が深海棲艦の大部隊を確認したとの通達が入った。

あらかじめヒイロから聞いていた提督は慌てふためく様子も見せず大淀に警報を

発令。全艦娘に出撃命令を出した。

作業は迅速に進み、あと少しで準備が整うところで敵の艦載機が見えてしまった。

その艦載機群を確認したアムロ達はすぐさま鎮守府から飛び立った。

「くそ、やはりヒイロの予想は当たったか!!提督、あとどれほどで出撃準備を整えられる!!」

『どう頑張っても5分はかかる!!すまないが持ちこたえてくれ!!』

「あの量を四人で、しかも五分も・・!!」

キラは鎮守府の正面海域に広がる深海棲艦を見て絶句する。

その量はさながら黒い霧、そう言っても過言ではないほどの深海棲艦の艦艇と艦載機がいた。

「やるしかないんだろ!!やっつてやるさ!!」

「こつちだつて、むざむざやれるつもりはねえ!!それにこの先にはアイツらが、天龍達がいるんだ!!」

ハイネとガロードは気合十分といった具合だ。

アムロは一度息を整え、声を張り上げる。

「各機、無茶はするな。私たちがやるのは時間稼ぎだ。艦載機を優先的に狙え。

行くぞ!!」

『了解!!』

アムロ達はブースターを蒸し、絶望へと立ち向かう。

第23話 魔の5分間

鎮守府に迫り来る敵艦載機の数はおよそ300。

単純計算で一人あたり75機を担当しなければならない。それに時間が経つにつれ、敵艦隊からの砲撃も加わる。戦力は絶望的だ。

だが、それで止まるアムロ達ではない。

そろそろ有効射程内に入るところでハイネがやってみたいことがあるといって、先行する。

ハイネは背部バックパックから折りたたまれていた長距離ビーム砲を構え、狙いを済ます。

(単発モードから照射モードへ切り替えて・!!)

放たれたビームは艦載機を消し飛ばす。しかし、ビームは砲口から依然出されたままだ。艦載機がビームから逃げようと回避運動を取ろうとした。

「逃すかよ!!これであええー!!」

ハイネがビーム砲を横に向けるとそれにつられてビームも艦載機を薙ぎ払うように動く。たくさんの艦載機を落としたが、横に広がっていた艦載機群はさらに迫り来る。

「ターゲット、マルチロック・!!ハイネ、撃ち漏らしはこっちに任せて!!」

キラがバラエーナ・プラズマビーム砲やクスファイアスレール砲、ルプスビームライフルの計五つの砲門が撃ち漏らした多数の艦載機を撃墜する。

アムロとガロードも続いてビームライフルとDX専用バスターライフルを連射する。

「ガロード、一機ずつではなくある程度まとめて撃つてくれ!!」

「わかってるっ!!」

一発につき数機を巻き込みながら次々と撃ち落として行く。

このままのペースでいけば持ちこたえられかもしれない。そう思い始めた瞬間。遠くから何かが光った。次に聞こえたのは主砲など放つ時に生じる爆音。

「っ?!もう射程圏内に入ったのか!」

降り注ぐ砲弾を避けながらも艦載機を撃ち落とすアムロ達、しかし、そのペースは格段に落ちてしまった。明らかに鎮守府に届いていない様子を見て、キラが気づく。

「こ、これ、もしかして、僕たちの邪魔をするため・!?!」

「くっそーっ!!やらせてたまるかぁー!!」

ハイネは声を荒げながら背部のヴォアチュール・リミュエールを展開しながら最大稼働で敵艦載機を叩き落とす。そのスピードは残像が見えて来るほど。しかし、

「ハイネ、迂闊に離れるな!!フォローができなくなる!!」

「絶対に・・!!通してたまるかああ!!!!」

アムロの声に聴く耳を持たずハイネはペースを落とすことなく長距離ビーム砲やビームライフルで撃墜して行く。ハイネはアロنداイトを取り出し艦載機を斬り裂いたり、肩部からフラッシュエッジ2を手に取り、投げた。投げられたフラッシュエッジ2はブーメランのように回転し、複数の艦載機を真つ二つにする。

アムロ達はハイネのカバーに入ろうとするが主砲や敵の艦戦で身動きが思うように取れない。

「くっ!!行け、フィン・ファンネル!!」

アムロが背部ウイングから六つ全てのファンネルを射出する。

「落とすんだ!!」

アムロの呼びかけに答えるようにファンネルが縦横無尽に動き回り、ビームを放つ。放たれたビームは次々と艦載機を撃墜して行く。

アムロ自身もフィン・ファンネルを動かしながら艦載機をビームライフルで撃ち落とししていく。

「おい、あとどれくらいだ!?!」

「あと1分です!!提督、そちらの準備は!?!」

『みんな全力で取り掛かっている!!あともう少しだ!!耐えてくれ!!』

ガロードの確認にキラと提督が答える。やはり戦力は足りても物量が圧倒的に足りないためじわじわと防衛線を下げざるをえないのが現実であった。

だが、提督が指定した五分まで残り30秒。艦娘達が出撃するためのハッチが開かれる。

「アムロ!!ハッチが開いた!!」

「いけるかつ!?よし、みんなもう一息だ!!持ちこたえるんだ!!」

アムロ達は最後の踏ん張りだと言わんばかりに艦載機を怒涛の勢いで落としていく。しかし、ここでアクシデントが発生する。最初に気づいたのはキラだ。

「っ!?ハイネ!!」

キラがハイネに向けて叫んだ。ハイネに敵艦載機が爆弾を引っさげて迫っていた。普通であれば特に気にする必要がないためハイネは疑問の表情をあげていたが、アムロとガロードはハイネの変わりように驚いた。

「か、髪が灰色に・・・!?」

「ど、どうしちまつたんだ!?!」

ハイネの髪が灰色に変色していたのだ。アムロとガロードは突然のことに反応出来ずにいたが、キラは違った。なぜなら、知っていたのだ。その現象を。

(あれはおそらく、フェイズシフトダウン・・・!!エネルギーの使いすぎで装甲にエネルギー

ギーが回らなくなったんだ!!)

フェイズシフトは実弾にとても強い耐性を持つがそれはちゃんと機能が働いていれ
ばの話だ。機能が動いていなければフェイズシフトはほとんど普通の装甲と大差ない。
つまりー

(今のハイネに、爆弾とか当たったら・・・!!)

思えば、ハイネは最大稼働の状態で出力の大きい長距離ビーム砲を乱射にも等しい頻
度で使用していた。自分がある程度注意しておけば・・・そんな後悔がキラの胸の内に
出るが、もうどうしようもできない。自分の今の状態に気づいたのかはわからないがハ
イネは回避運動をしようとしていた。

しかし、エネルギーが残りわずかなのか思うように動かない体に苦悶の表情をあげ
た。

「ハイネエー……!!」

爆弾が落とされ、ハイネの周囲で爆発が起こった。

アム口とガロードが心配した面持ちで見守る。

爆煙が晴れてくると、キラがハイネの前で盾を構えていた。間に合った証拠にハイネ
が無傷でキラの後ろにいた。

だが、ほっとするのもつかの間、アム口があることに気づいてしまった。

「キラ!!後ろだ!!一機、突破した!!」

アム口の言葉に後ろを振り向いたキラは魚雷を落とすコースに入っている艦載機を見つける。

「ク・・ツ!!間に合ええー!!」

ビームライフルを放ち、艦載機を撃ち落とす。しかし、キラの叫びは虚しく、魚雷が落とされ、開かれたハッチに向かう。続けてビームを放つが水中ではビームが減衰してしまい、魚雷を破壊することができない。

魚雷はそのままハッチに吸い込まれ、大爆発を起こしてしまった。

その爆発をアム口達はただ見つめるしかなかった。

時間は少し巻き戻り、横須賀鎮守府内のハッチ。

そこでは、艦娘達が今まきに出撃しようとしていた。その中には如月や睦月もいた。

「うう・・まさか深海棲艦がここまで入ってくるなんて・・・。アム口さん達が踏ん張っているらしいけど・・早く援護に向かわなきゃ・・。」

「ダメよ、睦月ちゃん。確かに早く援護に行きたいけどここで私達二人が出てもアム口さん達の邪魔になるだけだわ。それに見えるでしょ? 外の様子。」

睦月が開かれたハッチを見ると、アム口達が必死に艦載機を落としている様子が見え

た。敵艦の砲撃による水柱も見えた。しかし、逆を言えば、吹雪に聞いただけでしかないが、とても強いアムロ達でもかなり押されている、ということでもある。

「にやしい……。如月ちゃんの言う通りだね……。みんなはまだなのかにや?」

「やっぱり、準備には何事も時間がかかるものよ。でも、そろそろだと思っただけで、既に準備を終えていた睦月と如月、その他数名が今か今かと待ちわびている時、

誰かが叫んだ。

「つ?!魚雷だよ!!みんな離れて!!」

叫んだのは白露型一番艦の白露だった。しかし、突然のことにハッチに近かった者たちは動くことができなかった。如月が思わず目を瞑り、大爆発が起こった。

「う……。うう……。?あれ、生きてる?。って、如月ちゃん!?どこに行つたの!?!」

爆風で吹き飛ばされた睦月がぶつけた頭をさすり、如月を探すと、呆然と立っている如月が目に入った。思わず駆け寄り無事かどうかを確認する。

結論からすれば彼女はしっかりと生きていた。しかし、なぜか嬉しそうに爆風を見つめていた。

気になった睦月が爆風を見つめると、爆風の中に人影があるのに気づいた。

「また、あなたに助けられてしまいましたね。」

第24話 絶望、再来

「また、あなたに助けられてしまいましたね……。フェネクスさん。」

爆煙が晴れるとそこには如月をウェーク島周辺海域で艦載機から守ったようにアームドアーマーXCを前面に構えたフェネクスがいた。

「……。私、本当は分かっていたんです。自分がニュータイプだつてことは。」

「フェネクスさん……。？」

独白のような口ぶりのフェネクスに如月は疑問の表情を浮かべる。

「だから、いつNT-Dが発動するか分からなくて、逃げていたんです。また私のせいで……あの時の、『バンシイ』と闘った時のパイロットのように誰かが死ぬのを見るのは、嫌だつたから。でも!!」

一瞬、悲しい表情をするが、それはすぐさま決意を固めた目に変わる。

「それでも!!仲間が傷ついていく様子を見るのは、もつと嫌だツ!!」

「人は変わる……。!!変わることができる……。!!だから……。!!」

刹那に言われた言葉を口で繰り返しながら、フェネクスはついに変革の道を歩む。

「私に力を貸して!!お願い!!」

直後、フェネクスの装甲が展開し、蒼く輝くサイコ・フレームが現れる。

「こ、これ、あの時の・・・!? フェネクスさん!!」

「え、え、な、なにあれ!？」

状況についていけない睦月を置いて如月はフェネクスに心配するような声をあげる。またあの時のように獣のような戦いぶりをされたらひとたまりもない。

祈るような視線でデストロイモードとなったフェネクスを見つめる。

「フェネクス・ベルナル・・・!! ユニコーンガンダム3号機、行きます!!」

目から光は相変わらず見えませんがそれでも感じる熱意を纏い、フェネクスはハッチから出撃していった。

「フェネクスさん・・・!!」

「如月!! 無事か!？」

嬉しそうな視線でフェネクスを見つめていた如月に爆発音が聞こえたのか長門が駆け寄ってくる。

「ええ、何とか大丈夫です。魚雷もフェネクスさんが落としてくれましたから。」

「フェネクスが・・・? まあ、いい。ハッチは無事なようだな。ほかの面々もか?」

長門が辺りを見回し、負傷者がいないことを確認するとほっとした表情浮かべる。

「よし。なら出撃だ!! アムロ達が稼いだ時間、無駄にするな!! 全艦娘、出撃!!」

『了解!!』

長門が声を張り上げると、鎮守府に残っていた艦娘達が気合の入った声をあげる。反撃の狼煙が今上がった。

「ハッチはどうなったんだ．．!?」

一方、アムロ達は外でハッチの様子をうかがっていた。爆炎がハッチから上がり、悔しさをにじませるアムロだったが、

「．．．?この感覚．．まさか!？」

アムロが何かを感じ取った瞬間、爆炎を切り開いてフェネクスが出てきた。

「フェネクスか!?その姿は一体．．!?」

「話は後です!私も戦います!!」

「それはいいけど、ハッチは!？」

『こちら長門だ。ハッチは幾分かの損傷は受けたが出撃にはさしたる影響はない。艦載機はこちらに任せて、アムロ達は敵艦隊の中樞を叩いてくれ。』

キラがハッチを気にする発言の直後長門からの無事を伝える通信にアムロ達は安堵の表情を浮かべる。

「任せていいんだな?長門。」

『ふっ、愚問だな。ビックセブンの力、侮るなよ。』

長門達、鎮守府に残っていた艦娘の出撃を確認すると、キラを肩に担いでいたハイネに声をかける。ハイネの様子は息が絶え絶えで疲労からか目にも覇気が感じられなくなっていた。

「ハイネ、君は一度下がった方がいいよ。」

「なあ・・・これ、どうなってんだ・・・？」

「それは、根本的にエネルギー不足だよ。しばらく休めば戻ると思うけど、無理は禁物。これからはもう少しエネルギーに気を使ってね。」

「・・・悪い・・・こんな肝心な時に・・・。」

「大丈夫です。先も言いましたけど、私も戦います。任せてください。」

「へへっ、言うようになったじゃねえか・・・。じゃ、頼むわ・・・。」

フェネクスにそう言うとハイネはキラから離れて、一人で鎮守府へ戻っていった。

「よし、仕掛けるぞ!!反撃開始だ!!」

アムロが先頭に立ち、砲撃や艦載機が入り乱れる戦場へと進む。守る目標を艦娘達に任せたアムロ達に艦載機の攻撃は当たることはない。互いに互いを援護しながらただ一直線に敵の中核へと突入する。

「そこっ!!外さない!!」

フェネクスがビーム・マグナムを放つ。紫電を纏ったビームは戦艦ル級をまとめて三

隻ほど貫いた。そのほか、近くにいた複数隻にも大ダメージを与える。

「フィン・ファンネル!!」

エネルギーがチャージされたのを確認して再びフィン・ファンネルを6機すべて展開するアムロ。だが敵には向かわせず、代わりにビームライフルの銃口のまわりに円を描くように滞空させた。

「今思いついたことだが、この威力なら・・・!!」

ビームライフルのトリガーを引くと同時にファンネルのビームも発射する。

七本のビームは一本にまとまり、敵艦隊に風穴を開ける。

「二隻・・・!?!でも、やるしかない!!」

キラは二隻並んで砲撃を行なっているル級に目をつける。キラに気づいたル級は対空砲火を行うがキラは上半身を晒して避け、一気に懐に入り込み、ビームサーベルでル級を斬りつける。その後、瞬時にル級の体を蹴りつけ、その反動で離脱する。

「そっこだあああ!!」

蹴られたル級は態勢を崩し、隣にいたル級にぶつかる。その隙に背後に回ったガロードがハイパービームソードで一気に串刺しにする。キラはガロードに礼を言おうとしたが、ガロードが何やら思考に耽っている表情を見せた。

「ガロード?大丈夫?」

「えっ、あ、悪い。次行こうぜ。」

ガロードは我に返ったような反応を見ると、逃げるようにその場を後にした。

「どうしたんだろう……。って、そんなこと考えてると場合じゃない……!!」

気にはなったキラだったが、戦場の中で突っ立てるわけには行かないため、ガロードの後を追うようにブースターを蒸した。

(……大丈夫……。だよな……?)

ガロードは感じたことのない不安を感じていた。その理由は戦う直前に見えたビジョンとも取れる映像。最初はわずかに感じる程度だったが、今になってはかなり鮮明になって来ている。その内容は、燃えている鎮守府で呆然としている自分、その場にはアムロ達の姿すらない。文字通りの全滅。

(なんなんだよ……。このビジョン……)

不安に苛まれながらもビームソードで深海棲艦を斬り裂いていく。

「ううっ……。さすがにこの数は……!!」

フェネクスはビーム・トンファーで深海棲艦を倒していたが物量に押されて始めていた。
た。

「向こうに攻撃が向かないだけマシだが、完全にこちらを落とすしに来てるな……。」

深海棲艦の攻撃を避けながら、カウンターで倒していくアムロだが、顔には疲れの表

情を浮かべ始めていた。そろそろ限界か……？そう考え始めたその時。

深海棲艦が突如爆発を起こし、海の底へと沈んでいった。

何事かと思うと、アム口の後ろから声が響く。

「各艦、敵の艦隊に攻撃を集中させろ!!」

そこには長門含めて横須賀鎮守府の艦娘達がいた。砲門の口から煙が上がっているという事は、今の砲撃は彼女たちから発射されたものだろう。

続けて、上空を飛んでいた飛行隊が長門たちの砲撃による傷ついた深海棲艦に魚雷や爆弾を仕掛ける。深海棲艦は満足な回避行動も取れずに魚雷や爆弾が命中し、海に沈んでいった。

「あれは……瑞鶴や翔鶴の航空隊か……？なら……。」

アム口は周りを見渡すと今まで周囲を飛んでいた敵の艦載機群がほとんどいなくなっているのが確認できた。

「制空権なら、取ったわよ。といつてもアム口達が頑張つてなきや難しかったと思うけどね。」

「制空権は確保できたか……。ならば後は敵艦隊を撃破するだけか。」

アム口に近づいてきた瑞鶴の言葉でアム口はとりあえず笑みを浮かべる。

少しずつであるが状況が好転してきたからだ。

「ええ。でも、さすがにあの数はみんなでかかっても骨が折れるわ。．．改めて思ったけど、よく持ちこたえたわね。」

「．．．文字通り、かなり骨が折れた。少しでも鎮守府に砲火が向いたら終わりだったからな。」

「それにまだ100はいるわよ。まだまだ、骨が折れるわね。でも、アンタ達と一緒にならどうにかなる。そんな気がする。」

「．．．冗談はよしてくれ。私にあの勢力差を覆す力はない。買いかぶりすぎだ。」

「でも、覆す努力はしてくれるでしょ？アンタ達なら。」

瑞鶴にそう言われ、アムロはため息を一つついた。

「そうだな。私一人ではどうにもならないが。みんなでやればどうにかなるかも．．いや、してみせるさ。」

アムロは再びブースターを蒸し、深海棲艦にビームライフルを撃つ。ビームライフルに当たった深海棲艦は当たった箇所には大きな穴を開けられ、爆発する。

「HIIーッガンダムは、伊達ではないッ!!」

次々と深海棲艦を倒していく姿を見ている瑞鶴は気合の入った表情を浮かべる。

「いくらアムロ達が強くたって、私だって負けてられない!!航空隊、発艦して!!」

瑞鶴は航空隊を発艦させ、艦隊と合流する。その時、若干、長門に咎められたが状況

が状況なので特にお咎めはなかった。

艦娘達の合流で再び勢いを取り戻したアムロ達は艦娘達と協力して深海棲艦達を打ち倒していく。深海棲艦が確実に数を減らしていき、皆に希望が見え始めた時、怪訝な表情を挙げている者がいた。

「・・・なんか妙じゃないか？」

鎮守府に戻っていたハイネだった。エネルギーが戻ってきたのかその髪色は元のオレンジ色に戻りかけていた。

「妙・・・とは、どういうことだ？」

「えっと、提督はヒイロから深海棲艦がカウンターを仕掛けてくるってのは聞いてるだろう？」

隣に立っていた提督がそう呟いたハイネに問うと、そう言われ、提督は頷く。

「ああ、事実、その可能性を考慮した結果こうして彼女たちは戦っている。ヒイロには礼を尽くしても尽くしきれないよ。もし彼女からの進言がなかったら今頃、ここは火の海だっただろう。」

「それに關してなんだが、指揮できる奴って、基本的に本隊に組み込むよな。」

「ああ、やられては部隊が混乱してしまうからな。」

「・・・それと深海棲艦で指揮できる奴って姫級、鬼級なんだろう？基本的に。」

「……ああ。そうだ。」

提督がそういうとハイネは青い顔して戦闘を見つめる。気になった提督がハイネの様子を見て、少し焦りを含んだ質問をする。

「お、おい、何か不味いものを見つけたのか!？」

「見つけたんじゃないくて、見つからねえんだよ……。」

ハイネは戦慄した表情で提督に語りかける。

「指揮ができそうな、姫級や鬼級が見つからねえんだよ……!!」

ハイネの言葉に提督が目を見開いた瞬間、鎮守府の敷地内で爆発が起こった。

「な、なんだ!?何が起こった!？」

「そんな……クソ!!深海棲艦の戦力って、どんだけあるんだよ!!」

ハイネが見つめる先はアム口達が戦っている海域とはまた別の方向、そこに再び現れる黒い霧とも表現できるほどの艦載機群。

「アイツら……もう一隊、用意してやがった!!しかも最初の部隊の頭数はそんなに変わんねえと来たぞ!!」

「ば、馬鹿な!!まだ潜んでいたのか!？」

提督はありえないといった表情をする。しかし現実には現実、深海棲艦は事実としてそこにいる。もはやどうしようもできない。艦娘やアム口達も疲労困憊である。迫り来

る絶望に誰もが諦めかけたその時、

「へへっ、なんだよ。こんなあからさまな選択肢、決まってるじゃんー。」
「みんなで生き残った方が、断然いいに決まってるー!!!」

第25話 月はいつもそこにある

「そ、そんな、もう一部隊がいたなんて・・・!!」

キラは鎮守府に砲撃を行った深海棲艦の部隊を見て愕然とする。

ほかの面々も似たような表情を挙げている。

「ちいつ!!」ここで私たちを完全に仕留めるつもりか!!」

数が減ってきた砲撃が再び苛烈な状態に戻る。アムロ達は巧みに避けるが艦娘達はそうはいかない。次々と中大破していく。

「これ以上、やらせるわけには・・・!!」行け、フィン・ファンネル!!」

アムロはフィン・ファンネルを展開すると飛んでくる砲弾を見据える。

「落とすんだ!!」

フィン・ファンネルからビームを放つと高速で飛んでいる砲弾に見事直撃し大爆発を起す。

「アムロさん、さすがです!!」

「いや、だめだ!!」これでは焼け石に水だ!あの部隊を倒さねば、どうしようもないぞ!!」

感嘆の声をあげるフェネクスに対し、アムロが苦しい表情をして言ったとおり、敵部

隊を倒さなければ鎮守府がやられるのも時間の問題だ。だが、艦娘達は先ほどの砲撃で手酷く損傷を受け、これ以上の戦闘は危険で置いていくのが最善。しかし、まだどこかに部隊が潜んでいる可能性があるため誰かがこの場に残らなければならぬ。

(これは・・・どうすることもできない・・・!!情けない・・・やられていくのを見ているだけとは・・・!!)

キラやフェネクスもアムロに続いて迫り来る砲弾を撃ち落としたり斬り落としたりする。しかし、それが手一杯で迎撃に向かうことができない。

(・・・キラとフェネクス・・・?ガロードは何をしているんだ?)

ふと気になったアムロが辺りを見渡すと空中で佇んでいるガロードを見つける。

「ガロード!!何をしているんだ!?撃ち落とされるぞ!!」

アムロの言葉にも意を貸さず空中で眠っているように佇むガロード。

(このビジョン・・・こうなることを予見してたのかよ・・・!?)

ガロードは戦闘の途中で見たビジョンを見ていた。しかし、その内容は変わらず、火の海だ。

(どうすることもできねえってのかよ・・・!!せめて、せめてアレが使えたら・・・!!)だが、ガロードの言う『アレ』とは前提条件として月にとある施設がなければ使うことは叶わない。使えないと思つて、思考を打ち切ろうとした時、

(・・・あれ・・・、なんか一瞬、ビジョンが切り替わったような・・・?)

違和感を感じた。ガロードが使いたいと思っているモノを考えた時にそれは起きた。そう気づき、ガロードは再び、使いたいと思念を込める。そして、その違和感の正体がわかる。

(こ、これって・・・!!)

ビジョンが切り替わった。先ほどの火の海とは打って変わって、ボロボロながらも、皆がそこで笑っている。たしかに鎮守府で笑っている。ガロードもそれにつられて笑みを浮かべる。

「へへっ、なんだよ。こんなあからさまな選択肢、決まってるんじゃない」

「みんなで生き残った方が、断然いいに決まってるー!!!」

ガロードは空を見上げる。目に移るはまだ日は煌々と輝いてるが、白く淡い光を放っている月。

(使えるかどうかはわからなえ。だけど、やらないでやられるよりマシだ!!)

「頼むー。私に仲間を助けさせてくれー!!」

願いは月には届かなかった。月からは青白い光が降りてくることはなくただガロードを見下ろすのみ。わかつてはいた。だけどそれにすぎるしか方法はない。

だが、それはあくまで月にはの話。願いは確かに届いた。いや、既に届けられていた。

(撃つんだな・・・? 君は、サテライトキャノンを一撃。)

頭の中に響いてきたのはM I作戦が始まる直前に見た夢の二人とはまた違う明らかに大人の声。だが、ガロードには、ガンダムDX¹⁵年目の亡霊^{亡霊}には確かに聞き覚えはあった。

(アンタ・・・ジャミルか!? ジャミル・ニートか!?)

(私のことは覚えているのか・・・。今は気にすることでもないか。もう一度確認するが、撃つんだな? サテライトキャノンを。)

(ああ、私は仲間をみんなを守りたいんだ!!)

ガロードはジャミルに対しに自分の気持ちを伝えると軽く笑みを浮かべる。

(ふっ・・・。そこはガロードとあまり変わらないか。しかし、ティファのニュータイプ能力もあるとすれば、さながら彼らの子供のようだな。)

(なあ、やつぱりマイクロウェーブ送信施設はないんだよな?)

(・・・ああ、確かに施設はない。世界が違うからな。)

ジャミルにそう言われ、ガロードは悔しい表情を浮かべる。それを見たジャミルはだが一と付け加える。

(代替えはいくらでもある。月はいつもそこにある。)

(それは・・・どう言うことなんだ!?)

ジャミルの言葉の意味が理解出来ず、ガロードは叫ぶ様に聞いた。

(それはお前自身が気づかなくてはならない。私に言えるのは、ここまでだ。)

声がもう聞こえることはなかった。ガロードはジャミルが言っていた意味を考える。(月はいつもそこにある……?つまりそれって、撃てるのか?サテライトキャノン……?)

その結論に至ったガロードは意を決したように目を見開く。

「信じるぜ……!!ジャミル!!」

ガロードの背部ウイングが展開し、金色に輝く6枚羽と膝付近にも同じような金色に輝く羽のようなパネルが展開される。そして何より目がつくのはガロードの身の丈ほどありそうな大きな二つのキャノン砲。

「なんだ……?あれは……?」

ガロードの様子を見ていたアムロはそう呟く。ガロードの背部にキャノン砲があるのはなんとなくわかっていたが、あの金色に輝く羽は初めて見る。

そして、アムロはさらに驚いた。ガロードの金色の羽がさらに輝き始め、ガロードの周囲に何やら蜃気楼のようなものが出始めた

「あれは……熱か!?!目に見えるほどの熱量……何をするつもりなんだ……!?!」

「アムロ!!みんなをちよつと下げてくれ!!巻き込まれると困るからな!!」

「ガロード、何をするつもりなんだ!!」

「何って、決まってる!!みんなを守るんだ!!」

ガロードの周囲が排出される熱量のせいで蜃気楼が発生する。

これはガロードに任せるしかないと判断したアムロは急いで長門に部隊を下げるように伝える。

ガロードはエネルギーがサテライトキャノンにつたっていくのを感じる。どう言うわけかは分からなかったがその理由はすぐわかった。

(これ・リフレクターが太陽光発電してんのか!?どういうことなんだよ……。こんなの：私知らねえんだけど!?)

いつのまにか知らない装備が搭載されていたことに困惑するが、状況はかなり切迫していたため思考を打ち切る。

「とりあえず撃てるんなら構うもんか!!」

狙うは敵艦隊の中核。これ以上仲間を傷つけさせるわけにはいかないと意気込む。そして、ついに砲門が開かれる。

「ツインサテライトキャノン!!発射あ!!」

放たれた光はヒイロのバスターライフルの数倍は大きい。それなりの距離を取っていたアムロでもあまりの光の強さに目がくらむ。

一直線に敵艦隊に向かっていく光は爆発と共に着弾地点にドーム状に広がる。

光が弱くなりくらんだ視界が元に戻ってくると、皆揃えて目を疑った。

今まで雨あられのような砲撃をしていた深海棲艦の艦隊が装甲の一欠片も残さず消滅していた。

「な、なんだったのだ？今のの……？」

「……分からないわ。何か青白い光が敵艦隊に向かって……。」

突然のことに艦娘達はどよめきの声をあげる。それを尻目にアムロはガロードに近づく。

「ガロード、なんだったんだ？今のビームは？」

「今のは……サテライトキャノンってやつで、世界を一度、破滅に持った、日く付きの兵器だ。」

「世界を……破滅にだと……?!」

「あ、いや、正確に言うところ自身でやったわけじゃないんだけどよ……。直接的な原因になったのは確かだ。」

ガロードが敵艦隊を消滅させたのは鎮守府でもはつきりとわかっていた。

「すげえ……今のガロードがやったんだな!!」

興奮しているハイネに対照的に提督は顔を青ざめていた。

（なんなんだ……?!彼女たちは……ただでさえ強いと言うのに……!なんだあの兵器は……

!?!敵艦隊が消滅だ?!?)

アムロ達の超常的な力に提督は愕然とするだけだった。

(彼女たちは・・・我々が扱える力ではない・・・!!)

第26話 信頼

鎮守府に襲撃してきた深海棲艦群を撃滅していつしゅうかん、ヒイロ達がミッドウエーから帰ってきた。

帰還してきた赤城達の姿を見て歓喜に沸く横須賀鎮守府の艦娘達、提督もひとまず、ほっとした表情をしている。

「よっ、おつかれさん。っと、刹那、大丈夫か？」

「少し肉体的疲労があるだけだ。問題は無い。」

ハイネがヒイロ達に出迎えの挨拶をあげるとアリスの肩に担がれている刹那が目に入る。心配するが、刹那から大丈夫と言われ、それ以上は言わなかった。

ヒイロは辺りを見渡すと、(ちょうど妖精さんが修理をしていたが)鎮守府に砲撃を受けた痕を見つける。

「あの、やっぱり来たんですか？」

「ああ、ヒイロの言った通りだった。深海棲艦は反攻部隊を横須賀鎮守府に送り込んでいた。」

「しかも二つの部隊をこちらに送り込んできたよ。そっちはどうだったの？」

キラとアムロの言葉にヒイロは少し考える素振りを見せる。

「・・・ミッドウエー方面でも敵部隊を確認し、これを撃破しました。しかし、数は、体感的にとしか言えませんが少ないように感じました。つまりは困ったのでしよう。」

「困か・・・。なるほどな。道理でこちらは数が多いと感じたわけだ。」

「やはりそうでしたか・・・。となると、私達がミッドウエーで戦っていたのはアリユースヤン列島の部隊でしたか。」

「どういふことなんだ？」

アムロからの質問にヒイロは説明を始める。ヒイロ達が戦ったのは元々アリユースヤン列島の部隊を半分ほどに分けたうちの片方。つまり、片方はそのままアリユースヤン列島に残して、もう一つはミッドウエーに向かわせていた。

そして、鎮守府に侵攻してきた部隊のうちの一つが本来ミッドウエーにいた艦隊だろうと、推測の上でだがそう説明を行った。

「そうか・・・。本当に深海棲艦の軍事力は想像以上だ。あれほどの物量を持つてくるとは・・・。」

「アムロさん達も、よく二つの部隊を押しとどめましたね。」

ヒイロがそういうと、アムロ達はうーん・・・。と唸るような声をあげる。その中でガロードは申し訳ないといった表情をしている。

「……どうかしたのか?」

疑問に思った刹那が聞くと、アムロは少しガロードの顔を見て、話し始めた。

「……なるほど、もう一つの敵艦隊はガロードの持つツインサテライトキャノンという武器で一網打尽にしたと……。」

「今まで使えないって思ってたからな……。使えると分かって大分驚いてる。」

「使えない……?どうしてですか?」

「専用の施設がないと撃つためのエネルギーが確保できないんだよ。しかも、それは月にある。それに、威力もハイロのバスターライフルよりかなり強い。」

「ハイロのバスターライフル以上……!?!」

「……エネルギーの供給方法は今回は置いて、そのサテライトキャノンがどうかしたんですか?」

驚いているアリスを尻目にして質問をハイロが行うと、ガロードは再度申し訳なさそうな顔をする。

「いや、なんとも、思わないのかなって。使えないと思って、隠していたのは事実だし……。」

ハイロ達3人は顔を見合わせる。その様子は拍子抜けといった感じだ。

「どうって、言われても。まあ、驚きはしますけど、そこまでですね。見たことがないっていうのもありますが。」

「私もヒイロと同じですね。確かにそのサテライトキャノンの威力は話を聞いた限りだと目を見張るものがあります。でもー」

アリスはそこで言葉を打ち切り、笑みを浮かべながら刹那の方を見る。

「私が言うのか?・・・ガロードはそれをみんなを守るために使ったのだろう。なら、私達にはそれだけで十分だ。」

「ほら見ろ!!ヒイロ達もそう言ってるから気にすんなって!!」

背中をハイネに思いっきり叩かれ、前に躍り出るガロード。

「君は少し考えすぎな節がある。それに、私達は短いが寝食を共にしてきた。多少の隠し事であれこれは言わないさ。」

「隠し事なら私にだってあるさ。私にはトランザムシステムがある。」

「・・・あの赤く光った状態のことですか?あれ、なんだったんですか?」

「あー、アリスさんはGN粒子について知らなかったですね。と、いってもあの状態は私も存じ上げてないですけど。」

刹那がアリスを含め全員にトランザムについての説明をした。反応は様々で純粹に驚

いたり、納得するような声をあげたりした。

「つまり高濃度のGN粒子を解放することによる時限的な性能の格上げ……。そんな認識でいいんだな？」

「その認識で構わない。」

「つくづく、GN粒子はよくわからない物質ですね……。重力を緩和したり、ステルス機能もついてて……。挙句の果てにフィールドも形成できるんですよね？」

「……。ああ、そうだな。たまたま実験の副産物で得られたものでその実態は私の記憶の限りでは分かっていない。」

刹那の話を聞いてガロードは呆気にとられていた。その様子を見て、キラは微笑みながら声をかける。

「ね？心配はいらなかったでしょ？」

「……。なあ、なんでみんなは私に対して恐怖感とか持たないんだ？」

ガロードの問いにキラはうーん……。と軽く考えながら答える。

「そうだね……。一番に来るのは君を信じてるから……。かな？」

「私を……？」

「うん。まあ、サテライトキャノンの威力は確かにすごかったよ。あれは下手な使い方をすれば、そこらへんの戦略兵器以上の効果を出してしまう。そんな気がする。」

キラからそう言われ、ガロードは顔を俯かせる。無理もない。事実、サテライトキャノンのせいで宇宙と地球の二つを巻き込んだ戦争に発展してしまい、結果として地球の人口が2割ほどにまで減少してしまう。

「でもね。僕はそうならないって思ってる。さつき言ったけど、ガロード、君を信じているから。」

俯かせていた顔を思わずあげる。その表情には驚きが入っている。

キラは再度微笑みながら、言葉が続ける。

「君なら、間違った使い方は絶対にしない。それは皆がそう思ってるはずだよ。」

「……なんかそこまで言われつと恥ずかしくなってくるな……。」

顔をそっぽに向け、赤くなった顔を見せないようにするガロード。自分を受け入れてくれた嬉しいがなんとなく気恥ずかしさを感じたようだ。キラはその様子を変わらぬ笑顔で見つめていた。

そこでふと思いついたキラは刹那にフェネクスが立ち直ってくれたことを告げた。

「何っ!?!それは本当なのか!?!そうか……よかった。」

「おまつ!?!私の方よりフェネクスの方に驚いてんじやねえかっ!?!」

明らかにガロードのことよりも喜びを露わにしている刹那に対し、なんとなく一発入れたくなったガロードであった。

ヒイロ達が帰ってきてから翌日、妖精さんの深夜に渡る突貫工事のおかげで元の風景を取り戻した横須賀鎮守府ではAL/MI作戦成功の宴会が行われていた。

しじつでは手酷くやられてしまったからかどうかはわからないが前の作戦成功を祝った宴よりかなりのドンチャン騒ぎであった。

提督自身もほかの艦娘曰く、あまり酒は手をつけないらしいがー酒に手をつけ艦娘達と同じように作戦成功を祝っていた。

その様子を安定の少し外れた位置から見守るヒイロ達。その様子は若干引き気味だ。
「んー．．．酒くさい．．．。」

「赤城達空母も凄まじい量を食べているな．．．。あんな量を食べ、太らないのか?」
「ウボア」

「ま、不味い!!キラがあまりの酒の匂いのキツさにグロッキーを通り越してやがるっ!」
「．．．皇帝か? 夢日記か?」

「お前はお前で何言ってやがる!?! 大丈夫か、刹那!?!」
まさしくカオスと言いがない空間にガロードとアリスは白い目をするしかな

かった。

「うわあ．．．。」

と、言いながらも真面目に吐きかけているキラにバケツを用意するのだった。

第27話 提督が鎮守府に着任します!?

さんさんと照らしつける太陽の下、ヒイロ達は船に揺られていた。船体に打ち付けられる波で起こる揺れは心地よさを感じさせる。

「なんか、新鮮だな。こういうの。」

「だな。大抵、宇宙船に乗ってたおかげでこういう、海を征く船つつうのは初めてだ。」
船で出されたジュースを口に含みながら甲板で外の風景を楽しむガロードとハイネ。
楽しみ方はそれぞれで、日光浴などであった。

「ごめんね。こんなこと頼んじゃって。」

フェネクスも船に同乗していた。転落防止用の柵から身を乗り出し、声をかけているのは護衛で来ているのだろう横須賀鎮守府の艦娘達であった。

フェネクスに声をかけられた艦娘、如月はフェネクスに顔を向け、首を振る。

「いいえ、フェネクスさん達が頑張ってくれたおかげで如月たちの今があるんです。これくらいはお礼としては安いくらいです。」

如月以外の護衛の艦娘達もフェネクスにお礼を言うように笑顔を向ける。

その様子を見てフェネクスも笑顔になる。

「はあ……まさか、こんなことになるとは……。」

「その……ホントすまないな。俺自身まさかヒイロが……。」

ヒイロがため息をすると、隣にいた天龍が申し訳なきように謝る。ちなみに同乗者には天龍、龍田や第六駆逐隊の面々の他に、比叡達トラック泊地組もいる。

実はもう一グループあるのだが、それはまた後で。

「いや、大体何かしらの形でツケは来るとは思ってたんですが……。まさかこんな形で払わされるなんて……。」

きっかけは宴の翌日、いつもどおりに起き、朝食をアム口達ととっている中、提督から声がかかった。

「ヒイロ君。唐突で申し訳ないのだが、今日君たちに大本営から出頭命令が下った。」

「はい?。」

唐突すぎて朝食を食べていた箸が止まる。それはアム口達も同様だ。

「……何かやらかしたつけ?。」

ガロードは顔に冷や汗を流していた。だがガロード自身理由はなんとなく察していた。あんまり認めたくない心情から来たのだろうか。

「ガロードの件も可能性はあるが、それだったらガロードだけ呼べば済む話だろう。」

アム口にそう言われ、とりあえずホツとするガロード。だが、そうするとヒイロ達全

員が呼ばれた理由がわからない。

時間も時間だったため朝食を取ったら程なくして大本營に向かった。その出頭命令にはフェネクスも入っており、彼女も同行していた。

横須賀から大本營自体がそれほど離れていないため小一時間ほどだった。

だが、さすがは鎮守府の総本山、大本營だからかかなり巨大な施設だった。深海棲艦との戦争中だからかそれほど煌びやかではなかったが。

「うわー．．．とても関わりたくないです．．．。」

「ぼくたち、どうしてこんなところに来てしまったんだろう．．．?」

「あれこれ言っても仕方ないだろう．．．。」

すでに軽く『燃え尽きたぜ．．．真っ白にな．．．』。見たいに白くなっているヒイロとキラにアムロは諦めの入った声をかける。

「中は思ったより綺麗だな。」

「．．．純粋に言ってるのはわかるが、何故か別な意味を感じるのだが．．．。」

「ヤバい．．．。真面目に嫌な予感が．．．。」

「ガロード、震えすぎて携帯のバイブレーションみたいになってますけど．．．?」

入った瞬間に戦々恐々な反応を見せるヒイロたちを温かい目で見ながら先導し、一つの部屋に入るように促す。

部屋に入るように促されたヒイロ達は部屋の雰囲気からなんとなく感じ取ってしまつた。

入つてきたヒイロ達を囲むように用意された机に厳かな雰囲気を醸し出してる白い軍服の人物達。おそらく、他方面の提督だろう。

「元帥殿、ヒイロ・ユイ以下9名、お連れしました。」

「うむ。ご苦労。君も席に着くといい。」

元帥と呼ばれた高齢の男性に敬礼をし、席に着く提督。だが、それにも目にせず、他の提督達はヒイロ達に視線を集中させている。

(・・・これって、軍法会議・・・ですかね?)

(本当に軍法会議だとすれば不味いぞ。私達はこちら軍のルールなど知らないから仮に有る事無い事言われれば、私達にはそれを覆す手段がないぞ・・・)

アムロは齒噛みをしながらかヒイロに小声で話す。すると、ちやうど提督が元帥と呼んだ高齢の男性からヒイロ達に声がかけられる。

「さて、立ち話にしては少々長くなるのでな。そのの椅子に座つてくれ。」

思つてたより柔らかい物腰だったためヒイロ達は若干拍子抜けしながら用意された椅子に腰掛ける。

「それで、今回私達を呼んだのは何用ですか？」

「ふむ……。君たちのことは元木君・横須賀鎮守府の提督から聞いている。確か、モビルスーツ、と言ったかな？ビーム兵器など、我々の技術体系とは大きく逸脱しているが、先の深海棲艦の大規模な攻撃を防いでくれて感謝している。特にヒイロ君・だったかな？君に至ってはある程度予想していたそうじゃないか。」

「……。あれはたまたま側に資料があつたからです。私の功績ではありません。」

ヒイロの謙虚な姿勢に元帥は微笑ましい顔をする。

「して、今の君たちの現状だが。一応、横須賀鎮守府に居候の形でこちらに手を貸してくれているのだろうか？」

「そうですね……。行くあてもなかつたですし。何より、彼女たちのこともありましたし。」

「トラック泊地の艦娘たちのことだな。トラック泊地の提督に関してはこちらの監督不行き届きだ。提督代表として、謝らせてほしい。」

もう少し細かい話をして行くと、トラック泊地の艦娘たちの治療費は大本営が負担してくれているそうだ。容体も段々安定していき、全員程なくして退院が予定されているそうだ。

しかし、退院したところで、彼女たちには行くあてがほとんどない。比叡達トラック泊地から直接救出した艦娘達に至っては艀装が完全に破壊されていて艦娘として復帰

するのはほとんど不可能だ。

「そして、彼女たちのこれからに関してだが……彼女たちは再び戦う道を選ぶそうだ。」
「そうですか……。」

ヒイロは軽い反応しかなかった。いくら心の中では戦って欲しくないと願っていても、それを彼女たち自身に押し付けることはしない。今回の決断は彼女たちが考えて決めたものだ。これ以上、とやかく言うようでは逆に天龍たちに失礼だ。

「艦装はどうするつもりなんだ？主に比叡達だが……。」

「それに関して問題はない。各地の鎮守府から余っている艦装を譲渡してもらおう。」

軽くしか反応を示さなかったヒイロの代わりにアムロが気になったことを聞くと、ヒイロが予想していた通りの対処だった。それしかないだろうな。と納得し、それ以上は聞かなかった。

「……それで、我々を直接呼んだ理由はなんだ？それだけならば、わざわざこちらに呼び寄せる必要はないはずだ。」

「そうですね。それだけであれば別に後で文面だけ送れば済むはずです。話してもらいまししょうか？」

刹那が鋭い視線を元帥に向ける。ヒイロも目を鋭くし、元帥を睨みつける。それに元帥は変わらぬ柔らかな物腰で答える。しかし声には若干の驚きが入っているようだ。

「さすがにわかってしまうか。しかし、どの道話すつもりだったから変わらんか。」

少し間を空けて元帥は神妙な面持ちで話し始めた。

「実は、彼女たちが闘う道を選んだにあたって、一つ、条件を突きつけてきたんだ。」

「条件……?それは一体……?」

ヒイロが怪訝な表情をしながら聞くと元帥は少し困った顔をして答えた。

「……自分たちの提督を指定してきたのだよ。」

言われた言葉にヒイロたちは疑問符をあげる。予想外だった上に理由がわからなかったからだ。

「その条件を聞いて我々は納得せざるを得なかった。何故なら彼女らは少々男性に抵抗を覚えるようになってしまったからな。」

ガロードやハインなど8人のうち半分はわからなかったが、ヒイロや刹那は勘付いたようだ。苦々しい表情をした。

「見ての通り、提督には男性がほとんどだ。士官学校にはボチボチ女性の志願者はいるが、未だ女性の提督はいない。そこでなんだが……。」

そこまで言われたところでガロード達も気づき、驚愕の表情をあげる。

「ヒイロ・ユイ。君に、鎮守府の提督をお願いしたい。彼女たちは、君をご所望のようだ。」

元帥の言葉にヒイロは唖るしかなかった。その時、アムロ達から選ばれなくて良かった……(汗) みたいな感覚がしたのは気のせいだろうか？

「……拒否権は？」

とりあえず開いたままの口をかるうじて動かしたが、元帥は残念そうな顔をする。

「そうか……。であればいつも通り男性の提督を送るしかあるまい。しかし、彼女達の気苦労もどれほどかは分からないがな……」

元帥の言葉に心に罪悪感が蔓延る。それと同時にヒイロは大本営が自分に天龍達を助けた責任を取らせようとしていることも勘付いた。ある程度の責任の追求はあると思っていたがまさか自分が提督にさせられるとは思ってもよらなかった。

だから、ここで拒否をしてしまえば、天龍達の身に何が起きるかわからない。元帥の言った通りであれば確かに彼女達の気苦労は計り知れない。

つまり、ヒイロの取る道は――

「……ああ、もう。そんなの、やるしかないじゃないですか……!!」

苦渋の決断だった。ヒイロにはそれしか道がなかった。だが、それを黙って見ているほど、薄情な者はいない。

「ヒイロが提督になるにあたってだが、こちらからも条件を提示させてもらう。唯々諾々とはい、そうですかと言うわけには行かないからな。」

アムロがヒイロに対し、援護射撃を行う。アムロが皮切りとなつてほかの面々からも声がかかる。

「と、言つても条件は一つです。ヒイロが着任する鎮守府には私達もご同行させてください。」

キラが条件を提示すると、元帥は少し、考え込むような仕草をする。

「ふむ・・・こちらとしては戦力をなるべく等分にするために別々にしたいのだが・・・」
「戦力の分散はよく愚策だと言われぬか？それにだ。」

「いつ俺たちがアンタらの戦力になるつて言つた？まだ俺たちはうんともすんとも言つてないぜ？」

「悪いけど、ハイネの言う通りだな。」

刹那とハイネとガロードがヒイロを守るように言葉を投げかける。

続けてフェネクスがヒイロの前に立ち、元帥達を見据える。

しかし、その表情には困つた感じが出ている。

「あまりこういつた手は最後にとつておくべきなんでしょうけど・・・」

フェネクスはビーム・マグナムを手に取り、元帥達に銃口を向ける。これには予想外だったようで、全員驚いた表情を前面に出す。

「あ、今は撃つ気はさらさらありませんので、安心してください。今は、ね。」

最後に含みを入れた口調で元帥に伝える。つまり、元帥達が取る行動によつては撃つ、それも捉えられる。

「でしたら、私も。ことさらに撃つ気はありませんので、ご安心を。」

アリスも無表情のまま、ビーム・スマートガンを構える。

「ヒ、ヒイロ君、さすがにやりすぎな気がするのだが・・!?」

「いや、私にアムロ達を止める権限はないですよ。」

堪らず元木提督はヒイロに止めるように伝えたが、調子を取り戻したのかこれをやりわりとスルーするヒイロ。提督達全員の顔に冷や汗が流れる。

「きよっ・・恐喝ではないか!!これでは!!」

「おや、私達はお願ひしているだけですよ? フェネクスもアリスも撃つ気はないそうですし。」

ニヤリと口角が上がる。この時ばかりはヒイロはものすごく悪い顔をしているという自覚があった。

紛糾しかけた状況下のなか、元帥は軽く、ため息をついた。しかし、その表情はどうか穏やかだ。

「ふ・・・本当に一筋縄では行かない者達だ。なあ、元木君。」

「も、申し訳ないです・・。」

元帥が元木提督と軽く会話をすると、ヒイ口達に向き直る。

「わかった。君たちはヒイ口君と共に行かせるとしよう。」

「・・・そう言ってもらえるとありがたい。」

元帥がそう言ったのを確認すると、フェネクスとアリスは銃口を下に降ろした。

張り詰めた空気がなくなり、緊張から開放されたからか椅子に座り込む提督もいた。

「そういえば私達はどこに配属されるんですか?」

「ああ、そういえばまだだったな。君たちが向かつてほしいのは、佐世保鎮守府だ。」

第28話 着任

大本營の元帥達をお願い（恐喝）で攻め落としした後、ヒイロは別室へと案内された。ヒイロをその部屋に案内した女性の秘書官らしき人物は初期艦と呼ばれる、いわゆるポ○モンの最初の三匹のような感じで、艦娘を一人、同伴させるシステムと説明した。

ヒイロがその部屋に入ると、中に四人の艦娘が待っていた。その中に吹雪がいたが、あくまで顔が似ているだけの別人とのことだったため、特にこれといった反応はしなかった。

四人の艦娘がヒイロを見るなり敬礼をしてきたが、まだ慣れていないのかヒイロはぎこちない敬礼で返すしかなかった。

「えっと、一応、名前を名乗ってくださいますか？」

ヒイロがそうたずねると、吹雪がいの一番に自己紹介を始める。それに続けて、ほかの3人が自己紹介をした。

それぞれ、

吹雪型五番艦 『叢雲』

白露型五番艦 『五月雨』

綾波型九番艦 『漣』

と名乗った。

「佐世保鎮守府の提督（を押し付けられた）、ヒイロ・ユイです。よろしく。」

ヒイロが自身の名前を名乗ったところである事に気付いた。彼女たちの目になんとなくであるが、不安気なものが入っていることだ。

「では、皆さんの特技を提督に説明してください。」

秘書官がそう言うのと吹雪たちは自分の得意範囲など説明し始めた。その姿はさながら面接を行なっているようだ。

その間にヒイロは彼女たちの声色に違和感を覚えた。何か、不安気なものが入っていると感じた。何か、早く自分を選んでほしい。そんな感じの雰囲気が出ていた。何故なのかと考えた時に、そもそも選ばれなかった艦娘はどうなる？

気になったヒイロは秘書官に聞いてみた。

「あの、彼女たちって、ここで選ばれなかった場合、どうなるんですか？」

「そうですね。基本的には次の提督が現れるまで待機ですね。」

秘書官の言葉には軽い反応を返しておいた。

「では、ヒイロさん、どちらの艦娘にいたしますか？」

秘書官にそう言われ、ヒイロは吹雪達を見る。答えは、もう決めていた。

「悪いけど、私に君たちを選ぶ資格はないよ。」

あつけらかんとした、それでいて予想外の答えに彼女達の間で沈黙が走る。誰も何も言葉が続かなかつた。

「そもそも、このシステム、色々履き違えてる気がします。」

今度は唐突なことを言い始めたため秘書官含め全員が目丸くする。

「艦娘って、深海棲艦と戦うんですよね？それで提督はその艦娘達を統率し、指揮を行う。平たく言えばそうですよね？」

「え、ええ、そうですよね・・・。」

ヒイロの言葉に気圧されているのか、驚きの表情が入ったままで答える秘書官を一瞥しつつ話を続ける。

「あくまで戦うのは艦娘の皆さんです。であれば、提督は艦娘からの信頼を得なければならぬのが必然です。」

「そして、艦娘は提督が信頼に足る人物がどうかを見定めなければならぬ。」

「で、でも、艦娘にそういうのはいるんでしょうか・・・？私達はどうしようもなく、兵器なんですよ？」

若干透明感のある水色の髪を長めに伸ばしている艦娘、五月雨がオドオドしながら言う。するとヒイロは五月雨に向けて歩き始め、彼女の目の前まで迫った。

少し身長差があったためヒイロが見下ろす形になる。そのため何となく威圧感を感じてしまい、五月雨は内心アワアワしていた。

しかし、ヒイロは五月雨と視線を合わせるために軽く身を屈めた。そして、五月雨の人としての心臓がある場所、つまるところ、胸に手を当てた。

『!?!』

突然のことに部屋の中にいた全員の表情が固まる。あまりに自然過ぎかつ下心が一切感じられなかったため、どうすればいいのかわからなかった。それは五月雨も例外ではなかったが、彼女はどちらかというときと羞恥心から来るパニックで動けなかった。顔は真っ赤になり、心臓はバクバクと警鐘を鳴らしていた。

「君にも分かっているとと思うけど、艦娘だつて生きています。だからあまり自分のことを兵器だとは思って欲しくない。とはいえ、これはただの自論だけだね。君がどう思うかは任せますよ。」

「ひゃ・ひゃい・ひゃい・ひゃい・ひゃい」

ヒイロが微笑みながらそう言うと、五月雨は口をパクパクさせながらそう答えた。

ヒイロのぶつ飛んだ行動に五月雨以外の面々は皆してこう思った。

『何なの……この人……!?!』

「だから、私は君たちに選んで欲しいんです。私が君たちの提督として信頼に足る人物

かどうかを。」

そうは言ったものの、先ほどの五月雨に対する対応で正直に言っただろうか悩んでた。しかし、背に腹は変えられないし、次の機会がいつ来るか本当にわからなかったため、とりあえず、連いていくことにした。その間も五月雨は顔が真っ赤にしていた。

その後、佐世保行きの船に乗った時、彼女たちを紹介し、事のあらすじを説明したら、冷えた目で見られたり、眉間に指を当てるなど、散々な反応を受けた。

理由を聞けば、

「それは、一般的に言えばセクハラじゃないのか?」

「セクハラ・・・? セクシャルハラスメントですか?」

アム口に言われ、意味を確認すると、一同にしてうなづれた。一気に血の気が引いたヒイ口は急いで五月雨に謝りにいった。ちなみにその時、吹雪達から

「無自覚つてのが、余計にタチ悪いわね。」

「い、いや、新しい提督さんは大胆だね・・・」

「ふ、吹雪、頑張りますっ!?!」

吹雪に至っては、何を頑張るのかわからなかったが、叢雲と漣の引いた視線で、身から出た錆とはいえ、大きく心を抉られたヒイ口はしばらくうなだれていたそう
な。

船に揺られることおよそ半日、船員さん曰くそろそろ佐世保に着くそうだ。

「へえ、あれが佐世保鎮守府か。」

ハイネがそう言ったため、皆をして甲板の端によると、そこには横須賀鎮守府程広さではないが、かなりの広さを有していた。

船は波止場に停泊し、乗客を陸地にあげるため橋がかけられる。

ヒイロ達はこれを渡り、佐世保鎮守府に降り立った。

「これで着いた訳だが、これからどうするんだ？」

「特に何かしろと言われた訳ではないので、ざっと施設内を見ておきましょうか。」

ヒイロの言葉に皆が賛同したため集団で鎮守府を見て回り、どこに何かがあるのか把握しておいた。

「それで、ここが司令室……ですか……。」

閉じられた扉に手をかけ、ガチャリと音を立てて開ける。そこには横須賀鎮守府にもいた軽巡洋艦『大淀』がフリッポボードに手をかけ、待っていた。

「あ、もしかして待っていました？」

「いえ、お気になさらず。大方、鎮守府の中を見て回っていたんですね？ 必要書類などがありますので、どうぞこちらへ。」

大淀に案内され、用意されていた椅子に腰掛ける。そして、目の前にある机に書類が

乗っかっていた。内容は同意書と大差はなかった。一通り呼んだ後、ヒイ口は大淀からペンを受け取るとスラスラと名前を書き始めた。ただし、英語で、それも筆記体。

「あ、これって、日本語じゃないと不味かったですよね・・・？」

「え、ええと・・・どうでしょうか・・・。私自身、まさか英語で書かれるとは思ってなかったですけど、大丈夫だと思いますよ？私が艦船時代の頃だったら不味いですけど。」

「だったら直さなくていいか、と訂正も特にせずに大淀に渡す。」

「英語をお書きになられるってことは提督は外国出身なのですか？」

「外国ってどうか・・・。そもそもが・・・。」

大淀からそう聞かれたヒイ口は回答に困った。宇宙で生まれたと言っても冗談で済まされるのがオチだからだ。

「ごめんね、ちよつと話せない。ああ、そうだ。私と話す時だけど、フランクに接してくれて構わないよ。堅苦しいのはあまり好きではないんだ。」

「そうですか・・・。分かりました。まあ、提督がどこ出身であろうと、さほど気にはしません。我々艦娘はそもそも、出生の部分すら分かりませんから。」

大淀が出生という言葉を出したところでヒイ口がふつと気になったためついでに聞くことにした。

「そういえば、艦娘はいつから発見されるように？」

「そうですね……。提督はイージス艦はご存知ですよね？」

「……実物は見たことはないですね。ですが、知識としては、それなりに。」

「深海棲艦の存在が世界中で公になり出した時、おおよそ、三年程前でしょうか。その時はイージス艦でまだ深海棲艦と戦うことはできていたらしいです。ですが、その半年後、その戦局は大きく崩れてしまっています。ここからの話は私も小耳に挟んだだけですけど……。」

「続けていいよ。どんなに確証がなくとも情報は情報だからね。聞いておきたいんです。」

ヒイロがそういうと大淀はでしたら……。と言い、話を続けた。

「突如として、霧が発生したんです。」

「霧?どこでなんです?」

「場所は……。よくわかりませんでした。が少なくとも太平洋かと……。」

予想に反した大淀の言葉に思わず質問をしたが満足な解答は得られなかった。

「それでその時に起こった戦闘でほとんどのイージス艦が沈没、かろうじて戻ってきたイージス艦ものに沈んだそうです。結果として人類は深海棲艦に対抗する手段を失い、各国とのシーレーンなど滅茶苦茶にされました。その時ですね。艦娘が確認されたのは。」

「それで、日本は艦娘に目をつけ、鎮守府などの艦娘専用の施設を作ったと、そういうわけですね？」

「そうですね。大雑把にいうとそのような感じですよ。」

大淀の説明にとりあえずお礼をいい、ほかにやることはないかと尋ねた。

「いえ、初日というのもあつてこれ以上は特にはないですね。」

「それじゃあ、私はもう少し鎮守府を見て回ってくるよ。あ、後一つ聞いていい？」

「はい。どうかしましたか？」

「あれ、絶対着ないと駄目？」

ヒイロが指をさした先にはほかの提督達が着ていた白い軍服。大淀はそれを見るとクスクスと軽く笑った。

「提督は珍しい方ですね。普通の提督は否応がなしに着るんですけど。」

「さつきも言ったけど、私は堅苦しいのは好きではないので。できれば艦娘のみんなとは提督としてではなく、仲間として接していきたいんだ。」

ヒイロがそういうと大淀は少し間を空けて答えた。

「一応、提督にとつての制服ですので、着るのが当たり前ですが、そう言われるのならせめて他の提督の訪問の時とかは着てください。」

「分かりました。それで手を打ちます。では、おつかれ様です。」

「そういい、ヒイロは部屋から出て言った。残された大淀はヒイロに対する感情を述べた。」

「不思議なカタですネ．．。提督は。」

第29話 始動、佐世保鎮守府

司令室を出たヒイロ。誰かいないかなくと、ほつつき歩いてみると、話し声が聞こえた。向かつてみると、アムロ達全員が揃って何かを話していた。

気づいたアムロがヒイロに声をかけた。

「ん？ヒイロか？もういいのか？」

「ええ。初日というのもあつて特にこれといったことは無いようです。」

「そうか、ヒイロは部屋はどうするんだ？ちようど皆でそれを話しているのだが・・・」

ヒイロが話の輪に加わるとまず目に入ったのはお手製の地図だ。描かれているのはざっと見たところ佐世保鎮守府の全体図のようだ。

「もうおおよその地図が出来たんですか？」

「ああ。記憶が新しい内に書いてしまおうと思つてな。それで部屋はどうするんだ？」

「んー、私は司令室の隣に専用の寝室があるみたいなんですけど・・・」

「マジか。まあ、元々提督つてのは男が大半だったらしいから当然ちやあ当然か。」

ヒイロが申し訳なさげに話すと、ハイネが残念そうにしながらも納得した反応をする。

「それじゃあ、ヒイロは仕方ないとして。だいたい決まったかな？」

「どうやらほとんど決まっていたようだ。」

キラの言葉に皆が揃って頷く。

「まあ、希望があればいつでも聞いてほしい。できるだけ要望には答えるつもりだ。」

「なんか、申し訳ないですね…。任せっきりで。」

「ヒイロにばかり任せる訳にはいかないからな。鎮守府内の雑事は私達でなんとかするさ。だが、他のことはよろしく頼むぞ？提督。」

「か、からかわないでくださいっ!!まあ、自分でやると言った以上、全力を尽くしますけど。」

ヒイロの言葉に皆に笑顔が宿る。

「あ、そういえば、間宮さんが着任祝いつてことで料理を振舞ってくれるらしいぜ。時間も時間だし、食べに行こうぜ。」

ガロードにそう言われた通り、気づけば時間はすでに6時を回っており日がオレンジ色に彩られていた。

「あ、でしたら大淀さん呼んできます。先に行つてくれませんか？」

「ああ、それなら明石も呼んだ方がいいな。私も少し遅れる。先に準備を頼めるか？」

「ああ、了解した。」

その後、明石と大淀を交えて、ヒイロの提督着任祝いで横須賀鎮守府の時の宴程の豪勢にはならなかったが、楽しく出された料理を食べた。

次の日、ヒイロは朝早くから併走していた。

目的は人探し。

「あ、いた!!アムロー!!」

「ん?ヒイロ?朝からどうしたのか?」

探していたのはアムロだ。まだ朝が上がり切ってもいない時間なのにどうしたのだろうか?と、内心、アムロは思っていた。

(ま、起きてる私も私だがな・・・)

若干、遠い目をしてしていると再びヒイロから声をかけられ、我に帰る。

「すまない。それで、どうかしたのか?」

「今日から私達佐世保鎮守府は本格稼働な訳なのですが・・・。どうやら艦娘には練度というものがあるようでして・・・。」

「練度って、いわゆる熟練度だな?それがどうかしたのか?」

「実は、比叡さんや天龍さん達と吹雪ちゃんたちの練度に差があるんです・・・。」

アムロはヒイロの言葉に納得をする。比叡や天龍達はトラック泊地、つまりほぼ最前線にいた艦娘だ。練度もそれなりあるだろう。それに対し、吹雪達はほぼ新兵の状態で

引き渡された艦娘だ。練度に差があるのは明白だろう。

「それで、お願いがあるんですが……。」

「私にか？」

思わず聞き返すアムロ、それに対し、ヒイロは笑顔で答え、説明をした。

「ふむ……。わかった。任せてくれ。」

「ありがとうございます。」

ヒイロがお礼を言うところで、アムロはふっと気になったことを尋ねてみた。

「そういえば、ヒイロはやらないのか？ 提督自身がやってくれるなら彼女達もやる気を出すんじゃないか？」

「それでもいいんですけど、ごあいにく、予定が入ってまして……。」

用事があるなら仕方ないと、アムロはそこで結論づけた。

「それじゃあ、あとは頼みますね。」

時刻はおおよそ9時を回った頃、吹雪、叢雲、五月雨、漣の四人は艤装を背負い、鎮守府湾内に来ていていた。

「提督に対空射撃演習を命令されて来たけど……。まだ鎮守府には空母はいなかったよね？」

「そうね。基本的に随伴に空母が必要なんだけど……。何を士官学校で教わったのかし

ら、あの提督。」

吹雪の問いにむすつとした表情で答える叢雲。そもそも、ヒイロは士官学校を出てない。それを知るのはこの演習が終わった後である。

「で、でも、やれつて言われた以上、やるしかー」

ない、と五月雨がいかけた瞬間、ちょうど彼女達の真上を何か高速で通り抜けた。

その風に煽られてスカートを抑えていると、上空から声がかげられる。

「よし、全員いるな？これから対空射撃演習を始めるぞ。」

ブースターを蒸して上空に浮かんでいるアムロだ。アムロの見慣れない姿にしばらく固まっている四人。

「お・・おお・・かつ、かつけえ・・!!」

硬直から最初に戻ったのは漣だ。感嘆の声を出しながらアムロを見つめる。

「あ、アムロさん？そ、その姿は一体・・?!」

「そうだな・・。詳しくは語ることはできないが、簡単に言えば私達も君たちと同じように戦える。」

「な、なんで平然と空に浮かんでいるのよ・・?!」

「元々、そう言う兵器なんだ。私達はな。」

兵器。そして、私達。その言葉に吹雪達の顔に驚愕の表情が映る。アムロは若干、

やってしまったという表情をあげるが、時すでに遅し。案の定、吹雪達から追及の質問が挙げられる。

「へ、兵器?!それに私達って．．?!」

「．．．私も含め、ヒイロやキラ、刹那もそうだ。私達8人はみんな君達、艦娘と同じ元々兵器だった者達だ。」

吹雪達の間に沈黙が走る。そこで吹雪が恐る恐る、アムロに質問をする。

「あの．．．アムロさん達はやっぱり、戦争を体験しているんですか?」

「兵器だったからな。それは戦ったさ。．．．これは君たちに失礼かもしれないが、二つの世界大戦より、自分の感覚だが倍以上に凄惨なものだった。犠牲も、規模もな．．．」

吹雪達は絶句するしかなかった。その様子をみたアムロは雰囲気を切り替えるように、さて、と前置きを置いて訓練の内容を話し始める。

「訓練の内容だが、ヒイロから聞かされた通り、対空射撃演習だが、知っての通りまだここには空母はいない。だから君たちの相手はこれだ。」

アムロはそう言い、ファンネルラックからフィン・ファンネルを6機全てを射出する。それはアムロの周囲に滞空すると吹雪達から珍しいものをみる目で見られる。

「そ、それは?」

「これはフィン・ファンネルと言うものだ。そうだな。君たちにわかりやすく言うと、自

分の思い通りに動く浮遊砲台だ。」

「そういい、アムロはフィン・ファンネルを吹雪達の周囲を包囲するように飛び回る。一機ずつ別々の動きをしていることに気づく。」

「これ、どうやって動かしているんですか?」

「悪いが、企業秘密にしておいてくれ。話しの続きだが、このフィン・ファンネルを使って艦載機の動きを真似る。具体的に言うと、艦爆と艦攻の動きだ。君たちにはこれを撃ち落としてもらう。」

アムロの言葉に吹雪は真剣な表情で聞き入る。

「とはいえ、所詮は真似事だ。実際のものとは程遠いと思うが、感覚だけでもつかんでくれたらこちらとしては万々歳だ。よろしく頼むよ。」

「そう言う」と吹雪達は威勢良く返事をしながら敬礼を返した。

「・・・別段、それほど畏まらなくてもいいのだが・・・。」

こうして、約2時間、艦娘達の訓練が始まった。アムロが動かす艦載機（フィン・ファンネル）に頑張つて演習用の弾を当てようとするが、中々当たらない。

そのせいで、雷撃コースに入られたり、急降下爆撃のコースに入られたりして、散々であった。

そして、2時間後、

「よし、大体時間か。訓練終了だ。」

アムロがそう言うと、吹雪達は汗をダラダラに書きながら水面に座り込んだ。

「つ、疲れた……。」

「ま・マジ卍ですわ……。アムロさん……。」

「きつつ……!!ホントにそれしか出てこないわ……。」

「め、目が回ってます〜」

「そろそろ昼だが、その前に風呂かシャワーでも浴びてきた方がいいな。」

『は〜い……』

精魂尽き果てた吹雪達は鎮守府で風呂を浴びるのであった。

「あ〜、疲れた〜。」

ここちらでも吹雪達と似たような表情をしているものがいた。

「はあ、権力って持つものじゃないな……。。」

ヒイロはある建物に来ていた。その建物とは――

「提督、市役所への挨拶、おつかれ様です。」

「ああ、大淀さん。迎えに来てくれたんですか。」

「はい。どうでしたか?」

大淀の問いに歩きながら愛想笑いを浮かべる。

「まあ、大丈夫だったかな……。色々聞かれたけど……」

市役所に行くついでに市長に会って来た。初老の男性であったが、幸い気前の良い人でヒイロもさほど気を張らずに対面することができた。さらに市長自身が淹れてくれたコーヒーも絶品であった。どうやらコーヒーが趣味のようだった。

しかし、やけにケバブについてうるさかったが。特にチリソースをかける派かヨーグルトソースをかける派かどうかと問われた時は目に涙みがあった。

「ただ、やはりというかなんというか、私の着任については大分急だったようで、大変だったと言われてしまいました……。あの人、笑い飛ばしてましたけど。」

「それは……。災難でしたね……。」

「……。市長さんの声、何故か聞き覚えがあるんですね……。」

鎮守府はあくまで土地を借りて建てられているため、必然的に市長と顔を合わす機会が多いだろう。これから会うたびに頭にモヤモヤがかかった状態になるのか……。そう思うとなんとなく気苦労が多くなりそうだと感じた。余談だが、のちにキラにも似たような症状が出ることになる。

第30話 暴走（笑）

市役所への挨拶から帰ってきたヒロと大淀。時間も時間だったため、そのまま食堂へ行って昼食をとることにした。

「間宮さん、定食、二つください。」

「あ、提督。お疲れ様です。定食二つですね？少々お待ちください。」

間宮はそういうと作り置きしておいた料理を手早く盛り付けた。

「ありがとう。はい、大淀さん。」

「あ、どうも。」

定食を手にとったヒロと大淀は席に着く。ただ、すぐに手をつけなかった。

視界にグロッキーな状態になりながら少しずつ食べている吹雪達四人と申し訳なげな表情をしているアムロが入ったからだ。

「えつと……。どうしたんですか？」

「いや。少し訓練の調節をしすぎたかもしれない。」

「そんなに本気でやったんですか？」

「いや、加減はしたのだが……。」

「提督、アムロさんには対空射撃演習を任せていましたが、内容とかはどうしていたんです？」

ヒイロとアムロの会話を聞いてた大淀から質問が入ると、ヒイロはあー、そうか。と納得した声を上げる。

「大淀さん、もしかして私達に関して何も聞かされてない？」

「そう、ですね。急だったというのもあったからかもしれませんが、特にこれと言ったことは……。何かあるんですか？」

大淀にそう聞かれていると、食べることに集中していたのか吹雪がヒイロに対し、驚きの声を上げる。

「え、ええっ!? て、提督!? す、すみません、見苦しいところを見せて!」

「ん? ああ、気にしないで自分のペースで食べていいよ。変にかきこんで、吐かれると後が大変だから。」

「は、はい……。だったらそうします……。あ、提督、一つ聞いてもいいですか？」

「はい。構いませんけど?」

ヒイロがそう答えると、吹雪含め、飯を食べていた3人が一度食べるのをやめ、ヒイロに向き直る。

「提督は……。もとい刹那さんやハイネさん達は私達と同じように元々兵器だったんです

「天龍さんは提督といつから知り合いに?」

吹雪がそう尋ねると、話の内容がわからなかった天龍はヒイロに『何やってるんだ?』みたいな視線を向ける。

ヒイロがその意図を察して説明をする。

天龍はヒイロから説明を受けると納得した表情をし、話し始めた。

「つまり、提督は一兵卒から提督に大抜擢を受け、佐世保に着任したというわけなんですか!？」

「抜擢というか、責任を取らされたというか……。まあ、うん。そうなるね。だから士官学校なんて出てませんよ。」

「そうだな。ヒイロが提督に抜擢された理由というか原因だが、AL/MI作戦は知っているか?この前発令されたものだが。」

「え、ええ。知っています。それで横須賀鎮守府に深海棲艦の大規模な反撃艦隊が襲来しましたが、それを予想していた者がいて、損害を抑えられたとーってまさかっ!？」

大淀が結論に至ったのか、ヒイロの顔を見つめる。

「提督……。あなたなんですか?予想していた者というのは。」

「まあ、そうですね。横須賀の提督の言葉に妙な引っかけを覚えて軽く調べ物をしただけです。しかし、敵の戦力を見間違えて、被害を被らせてしまいました。」

『ええー！ーっ!!?』

ヒイロの言葉に吹雪達も驚いた顔をする。どうやら吹雪達もAL/MI作戦のことは耳に入っていたようだ。

「ま、結論から言っちゃえば、提督達が戦えるってのは事実だ。それにかなり強いぜ？兵装的にも技術的にもな。」

「強いなんて・・・。そんなわけありませんよ。」

「おいおい、冗談はやめてくれよ、提督。あれほどんでもねえことやっておいて強くなえて言われたらこっちの立つ瀬がなくなるだろーが。」

「あれほどって・・・？何をしたんですか？」

「確か・・・、戦艦とかが混じってた三十隻ほどの艦隊を秒殺してたな。」

「そ、そんなすごい人が私達の提督なんですか・・・？じゃあ、提督達が出撃して貰えば、深海棲艦との闘いも早く終わるんじゃないか・・・？」

五月雨がヒイロとアムロに憧れの目を向ける。しかし、ヒイロと、アムロはこれに対し、申し訳なさげな表情をする。

「ごめんね。それは、できない。」

「ど、どうしてですか!?!」

五月雨がヒイロに詰め寄って、理由を聞く。ヒイロから飛び出た理由は至ってシンプル

ル。

「し、資材が吹っ飛ぶんですよね……。私達が出ると。」

ヒイロの言葉にその場の全員が『あー……。』という顔をする。

「た、確かにそれはどうしようもないですね……。」

「そんなの貯めればいいじゃない。」

叢雲がため息をつきながらいう。しかし、それでもヒイロとアムロは遠い目をする。

「私達、ブースターを蒸すのに推進剤を用いているんですが……。」

「……。どうやらそれがかなりの厄介者だな。燃料に換算すると使用量が数千はくだらないようだ。」

「え、それって一回の出撃で？」

漣の青い顔をしながらの質問に無言でうなづくアムロ。ちなみにソースは横須賀鎮

守府の提督である。

「マジパネエ……!!？」

「と、言うわけで私達、しばらく出撃は自粛です。それと、昼食、ちゃんと食べてね。冷めちゃうよ?。」

あ、と素っ頓狂な声が響いた後、吹雪達が冷めかけているご飯をかきこんでいると、食堂に誰かが駆け込んできた。

「お、ヒイロ!! やっぱ帰ってきてたかつ!! ラッキー!!」

「ハイネ? どうかしました?」

「いやよ。ガロードと一緒に工廠で開発してきたんだけどよ。」

「いや何勝手にしてるんですか。」

今度はなんだろうと思っていたら中々とんでもないことを言ったため思わずツッコミを入れる。

「まあまあ、話しは落ち着いて聞いてくれよ。」

ハイネにそう促され、はあ・・・とため息を吐くヒイロ。

「で、何やらかしたんですか?」

「やらかしてねえっの。適当に回したら、こんなんできた。」

そういい、ハイネが取り出したのは艦載機であった。しかし、横須賀鎮守府で赤城や加賀が使っていた艦載機とは大きく形状や兵装が異なっていた。

まずプロペラのように回転しそうな箇所が見当たらない。代わりに機体の胴体側面に合計四つほどエンジンノズルが確認できる。見たところ、そのエンジンノズルはある程度の角度調整ができそうだ。つまり真下に向けることも可能。

つまりこれはー

「これ、なんですか?」

吹雪が見たこともない代物に疑問の声しか上がらない。

「これ、VTOLじゃないですか。しかもこれ多分ですけど、『AV-8B、ハリアーII』だと思いますよ?」

「はあ!?!VTOLかよ!?!」

「VTOLか。使うにも普通の空母では運用は難しいぞ。」

アムロ達の会話に全くついていけない吹雪達、疑問符をあげたままヒイロに聞いた。

「あの、ぶいていーおーえる?ですか?それってなんなんですか?」

「えーっと、VTOLというのは垂直離発着機の略称で、簡単に言えば、滑走路がいらな
い艦載機です。」

「滑走路がいらないう艦載機ねえく……。いまいちパツとしねえな。」

「まあ……。そうですね。軽く詳しい説明をするとー」

ヒイロがVTOLについて軽い説明を行うと、あまりの高スペックさに大淀が進言
を行う。

「あの……。提督その、ハリアー……。でしたよね?多分ですが、その代物、本来、開発か
らは絶対でない兵装だと思うんですが……。」

その言葉にヒイロ達は顔を見合わせる。

「え、マジ?」

「はい……。工廠で行う開発は基本的には第二次世界大戦時のものしか出ないはずなんです。提督、その兵装がいつ公表されたか、知ってますか？」

「えっと、うろ覚えですが。1985年かと……。うわー……。」

ヒイロは引きつった笑みを浮かべるしかなかった。

「そういえば、ガロードは？工廠にいるのか？」

「ああ、工廠にいるぜ。実は向こうでも一悶着あつてよ。」

「今度は何作つたんですか……？」

呆れ顔をするヒイロを尻目に悪気が大して感じられないハイネはあつけらかなと答えた。

「ミサイル。確かありやあイージス艦に搭載されてるタイプだった。」

「うわあ……。ハーブーンですか？シースパローですか？それともトマホーク？」

「いい、イージス艦の兵装まで……!? 一体どういうことなんでしょうか……。?こんなこと、今まで一例もなかったのに……。」

「これはあくまで仮説なんですけど……。」

工廠へと向かう道で大淀が頭を抱えているとヒイロが困った顔をしながら今立てた仮説を述べる。

「多分、開発に携わった人の年代が原因だと思っんです。」

ヒイロの言葉に全員が疑問符をあげる。

「大淀さん、開発というのは第二次世界大戦時の代物しかでないですよね？」

「は、はい。確かその通りです。」

「その理由を私は艦娘の方にあると推測します。」

「艦娘の方にか？・・・成る程な。だから携わった人の年代か。」

アムロは合点があったような表情をするが、周りは変わらず疑問の表情をあげたままだ。

「艦娘はほとんどが第二次世界大戦時の艦艇だろう？必然的に、装備の技術もその当時の代物しか知らない、というわけだ。」

「あー、なんとなく話しの骨子が掴めてきた・・・。」

アムロの言葉にハイネも徐々に理解してきた。

「まあ、つまるところ。俺たちって、この世界の技術体系から大きく外れたんじゃない？それはヒイロから聞いてるだろ？」

「はい・・・。聞いています。凄い未来的な兵器なんだなって・・・。あっ!!」

どうやら吹雪が何かに勘付いたようだ。

「そっか!!提督やアムロさん達は技術体系が今の世の中より既におつきく上回っているからそのV.T.O.Lとかも過去のものなんですよね!!」

「まあ、言い方にちよつと語弊があるけど、とりあえず、それで通しておきましょう。つまりー」

ヒイロはハイネやガロードが本来作れないものを作れたのは、技術の発展を一本の線とした時、艦娘達は彼女たちが生きていた時代、つまり第二次世界大戦時の代物までしか開発できない。それに対して、ヒイロ達MSは少なくともイージス艦が活躍していた時代より後に開発されている。つまり、艦娘より開発できる兵装の範囲が広いのだ。

「はあ．．．ほんとにめちやくちやね。アンタら。」

「私に言わないでくださいーい．．．。」

叢雲にそう言われ、乾いた笑いしか出てこない。

「あれ、ちよつと待てよ．．．。開発でできるってんなら．．．。建造でもチャンスあるんじゃないか．．．？」

ハイネがそう呟いた瞬間、その場の空気が変わった。

「．．．やってみるか？」

アムロが軽く口角を上げながら言った。一番止めてくれそうな人物が一番に賛同の声を上げてしまったため、一同に驚愕の顔が走る。

「資材は各五万あります。大型建造を二回程度なら目を瞑りましょう。」

さらに本来は止めるべきであろう立場のヒイロからも賛同する声上がる。

「いやいや、無理っすよ。流石につ!？」

「やってみなければ分かん!!」

「ちよつとどうしたのよいきなり!？」

「・・・単純に好奇心・・・ですね。」

「好奇心で、んなことやるなよ・・・。」

天龍に呆れられながらもヒイロ達は工廠へと足を踏み入れた。

第31話 初めての建造、初めての外国

工場に入ると、ハイネの言った通り、ガロードと明石のそばにイージス艦に積み重ねられているタイプのミサイルが置いてあった。形は筒状のものが四つほど斜めに傾けられて台座に取り付けられている。

「この形状だと、ハーブーンですね。とは言うもの、CIC（戦闘指揮場）かイージス艦の艦娘が来てくれないと運用ができないので、宝の持ち腐れですね。」

「あー、やっぱそうなる?」

ガロードも薄々そう思っていたようだ。明石に倉庫に置いておくように頼んで、先ほどのヒイロの仮説をガロードに伝える。

「へー、成る程な。ま、たしかに少なくともイージス艦が使われていた時代よりは後に作られただろうし、あながち嘘でもなさそうだな。」

「はい、その仮説をもう少し、試してみることにして、大型建造を回します。」

「スツゲエ大きく出たな……。大丈夫だよな?」

「二回だけです。資材も支給してもらったものが五万ほどありますし。」

「あれ、最低値が1500だったぞ。少し見せてもらったけどよ。」

明石がハーブーンを倉庫に運びに行ってしまったため、代わりにガロードが建造用のコンソールを操作する。一度に建造できるのは二隻であるが、資材を使う量を示すメーターがガロードの説明とは違い、最低値がそれぞれ30だ。

「あれ、数値が小さいですね……。」

「それは普通の建造だからな。大型建造はこっち。」

ガロードがコンソールに表示されてあった『大型建造』のマークを押すと、メーターの表示が切り替わり、メーターがガロードの言う通り、1500を表示していた。

「なるほど……。これ、逆に最大値は幾つなんですか？」

「あー、そっちは見てない。メーターをあげてみたらどうだ？」

そう促され、適当にメーターをあげていくと、数字は6000で止まった。

「どうやら、それが最大値のようだな。」

「あ、これ結構細かい……。一桁まで入力できる。」

ヒイロが操作に慣れるために色々といじっているとハイネがふと疑問に思ったことを言う。

「なあ。これって建造される艦娘は完全にランダムなのか？」

そう聞かれたガロードはうーん、と首を傾げながらも答える。

「さあな。でもよ、ハイネの言った通りだと数値化する意味がねえから、ある程度は指定

できるんじゃないか？例えば資材を多く使えば、戦艦とか空母が出やすいとか。」

「確かに。言われてみればそうだな。どうするんだ？ヒイロに任せるが。」

「空母を狙っていきましようか。うちにはまだいけませんし。」

ヒイロ達が建造について話している時、後ろで見ていた吹雪達は暇を持て余していた。

「初めての建造が大型建造って……。驚きを通り越して呆れるわ。」

「あはは……。まあ、無駄遣いはしないんじゃないかな……。」

「ん、しかも話しを聞く限り、狙うのは空母みたいだね。」

「空母と聞いてすぐ思い浮かぶのは……、赤城さんか加賀さんの一航戦でしょうか？」

「飛龍さん蒼龍さんの二航戦かもしれないよ？」

「五航戦の二人もあるんわよ。まあ、誰が出てきても構わないけど。」

呆れた、と言っておきながら叢雲も誰が建造されるか気になるようだ。

「ふっふっふっ……。読みが甘いですな。」

「え、でも提督さんが空母狙うって言うてるし……。ねえ？」

吹雪がそう言うのと叢雲と五月雨もうなづく。その様子を見た漣はチツチツ、と指を振りながら答える。

「漣は戦艦が出てくると大穴で予想するよ。具体的に言うとな門さんあたり。」

「よし、じゃあ、これでやってみますか。」

「お、どうやらやるようだぜ。」

吹雪達の会話を眺めていた天龍が吹雪達に伝えるとヒロの方に向き直る。

「それじゃあ、建造開始つと。」

ヒロがコンソールに表示された『建造』の二文字を押すと妖精さんによつて建造が始められる。さらにコンソールに時間が表示される。どうやら建造完了までの時間を指しているようだ。一つは8時間強。もう一つは7時間クラスだ。

「これ、結果はどうなんだ？」

「分かんらん。いかんせん、基準を知らないからな。」

「後は時間が過ぎるのを待つだけつとところですか？」

ヒロがそう言うつとガロードは首を横に振つた。

「高速建造のバーナーを使えばすぐ完成するらしいぜ。」

「高速修復材のようなものか？」

「そんな感じがいいと思うぜ。」

「それじゃあ、お願いします。いくつ使うんですか？」

「妖精さん曰く10個。大型だから使う量が多いんだとよ。」

それをいわれ、ヒロの顔は少し難しい顔になる。

「なるほど・・・。利用は計画的に、と言うことですね。」

「ま、そういうことだ。で、どうすんだ？」

ガロードが尋ねると、ヒイロは少し考える仕草を見ると、近くにいた妖精さんにバーナーの使用をお願いした。頼まれた妖精さんはヒイロに敬礼をすると、どこから持ってきたかはわからないが妖精さんにサイズを合わせた火炎放射機のようなものを取り出し、文字通り焼き払った。

『!?!』

初めてみた光景に目を奪われていると、今まで8時間近くを指していた建造時間が両方とも0になっていることに気づいた。

そして、艦娘が出てくるスペースから二つの人影が映し出される。

緊張した面持ちで望み、二人の艦娘を覆っていたベールが剥がされる。

一人は煌びやかな金髪をロングにした艦娘だ。服装は全体的に解放的。というか寒くないんですか？と思わず聞きたくなるレベルである。よく見てみると目の中に星が見える。瞳孔どうなってるんですか？艦装は巨大の一言に尽きる。その巨大さに見合った砲門は彼女が戦艦であることを決定付けていた。

もう一人は先ほどの艦娘とは対照的にそれなりに服は着ている。亜麻色の髪を短くポニーテールにしており、濃紺の色のセーラー服のような服の上にグレーのワンピース

をベルトで止めている。さらに首には救命浮き輪のようなものがかけられている。そして何より目を惹くのは手に持っている銃の艷装。横須賀の赤城と加賀が弓を射ることで艦載機を射出していたことを鑑みると、おそらく待望の空母だろう。

ここだけ言えば、完全勝利以外の何物でもない。

「Hi!! I am the Iowa class battle ship,
Iowa!!」

You are the admiral of this fleet, are
not, you? So good!!

Nice to meet you!!」

「Hi!! Essex class Aircraft carrier
number five, Intrepid!!」

You are the admiral, are not you? That
's nice.

Well, let's go together!! Is it OK?」

彼女達が発音がバリバリネイティブ感が溢れ出る英語を話さなければ。

唐突だったためよく聞き取れなかったのもあって、吹雪達は揃って反応することができなかつた。ただ、英語ということだけは理解できた。しかし、情報量が少なすぎた

めどのみち何も反応を示すことができなかった。

何も反応が返ってこなかったことを疑問に思ったのか金髪の艦娘、アイオワが質問をする。

「HEY? What's happen?」

だが、英語である。吹雪達は敵国であったアメリカが話していた言語である英語を聞き取ることが出来ずにパニック状態に陥る。騒がなかったのは不幸中の幸いか。しかし、ヒイロ達は至って冷静だ。伊達に戦場を生き抜いてはいない。不測の事態にも迅速に対応する。

「誰か、英語はできるか?」

「無理。あの二人が言ってる言葉が英語だつてのは分かるけどそれまでだ。」

「ハイネと同じく。何言つてか全然わかんねー。」

ハイネ、ガロードはいの一番にお手上げ状態を示す。アム口も聞き取れはするが会話はできない。頼みの綱はヒイロだけが……。

*ここから先は『内は英語で話しています。by作者

『えーと、失礼。突然のことに反応に時間がかかってしまいました。』

どうやらヒイロは英語を話すことが出来るようだ。それを理解したアム口達はこの

場をヒイロに任せることにした。

『私がここ、佐世保鎮守府の提督、ヒイロ・ユイです。よろしく。』

ヒイロが握手を求めるとアイオワとイントレピッドは心地よく握手を返してくれた。

『よろしくね。でも・・・サセボつてどこ？米国にそんな地名はなかった気がするけど・・・』

アイオワが困惑顔でヒイロに尋ねるとヒイロも困った顔をしながら答えた。

『その・・・、大変言いにくいのですが、ここは日本です。アメリカではありません。』

ヒイロの言葉にアイオワとイントレピッドは驚愕顔をする。

『う、嘘!?そ、それじゃあ、その子達はジャパニーズ!?!』

『ええ、そうです。それに貴方達と同じ艦娘です。』

『Oh・・・my got・・・』

アイオワとイントレピッドは信じられないと言った表情をしている。それをみたヒイロはある提案をする。

『でしたら、少し外を回ってみますか？申し訳ないのですが、現状、貴方がたを納得させるにはこれしか方法が思いつかないんです・・・』

ヒイロの提案に少し思案に耽るアイオワとイントレピッド、アムロ達はその様子を見守っている。

『そうですね。よろしく頼むわ。』

『そう言ってくれてありがとうございます。』

ヒイロは素晴らしい、笑顔を浮かべる。会話が終わったと判断したのか、アムロが声をかける。

「どうだったんだ？」

「すみません。少し、鎮守府の外を回ってきます。彼女達、ここを日本だと思っていない
そうなので。」

「そ、それで、彼女達は・・・何者なんです？」

大淀が恐る恐る、尋ねる。それはその場に居合わせた吹雪達の総意でもあった。

「彼女らは・・・。ごめん、ちよつとまつて。」

ヒイロはアイオワに英語で吹雪達に紹介していかどうかを尋ねた。

答えは承諾。ヒイロは吹雪達にアイオワとイントレピッドの説明をした。

「アイオワさんとイントレピッドさん・・・ですか。英語を話しているっていうことはやっぱり・・・。」

「アメリカ艦ですね。それは間違えようのない事実です。」

それを聞いた吹雪達は難しい顔をする。無理もない。艦艇時代は敵同士だったのに、いきなり味方で仲良くしろと言われてもすぐにはできないのは分かりきっている。

「すみません。完全にこちらの不注意です。まさか、海外艦が出てくるとは・・・。」
「・・・それはこつちだつてお互い様よ。単なる好奇心でアンタの行為を見逃したんだから。」

「いや、司令官はホントにとんでもない方ですなあ。ま、誰が来ても驚きはしないつもりだつたんですけれどね。まさかアメリカの艦娘が来るとは・・・。」

漣は乾いた笑いをあげながらも、特に気にすら様子は見られない。叢雲は止めなかつた自分にも責任があると、お互い様ということにした。

「ま、まあ、それほど悪い方々という訳でもなさそうですし・・・。」

「提督はそれほど気にしなくても大丈夫です。」

「それよりもヒイロは彼女達を軽く案内してきたらどうだ？そちらの方が早急にしなればならないことだと思つぞ。」

「こつちはある程度任せておけよ。」

「ほら行つた行つた。」

アムロやハイネに促され、アイオワとイントレピッドを引き連れて、鎮守府の外に向かうヒイロ。

『ねえ、よかつたの？貴方、提督なんですよ？』

『大丈夫ですよ。あの人は色々こなせますからね。』

『信頼してるのね。』

「あれ？ヒイロ？見慣れない人がいるけど、彼女たちは・・・？」

途中、キラと出会うアイオワとイントレピッドについて説明をする。

「アメリカ艦なんだね。となると話すのも基本英語なのかな？」

「そうですね。何か自己紹介するんでしたら、通訳しますよ？」

ヒイロが通訳を申し出るとキラはなら・・・と前置きを置いて自己紹介をした。

『キラね。これからよろしくお願いね。アイオワよ。』

『イントレピッドよ。お世話になります。』

「えっと、ないすとうーみーとうー、でいいんだっけ？」

キラはただどしどしい英語を話しながらアイオワ達と握手をした。

「あ、ちようどいいですね。キラ、刹那やフェネクス達にアイオワさん達について軽くで

いいので説明を頼めますか？」

「分かったよ。面倒だもんね、いちいち説明するの。」

キラと別れた後、鎮守府を出たヒイロ達3人は商店街を巡り歩いていた。

アイオワとイントレピッドは辺りを見渡すが書かれているのは日本語ばかりで内容を

をほとんど理解することができない。

『・・・本当にニホンなのね。どこもかしこもジャパンの言葉で書かれているわ。』

『ホントね。聴こえてくるのもジャパンの言葉ばかりね』

「どうやらここが日本であることは理解してくれたようだ。ホツと息を吐きながら、どうするかと考えていると。」

「ん？ヒイロ君じゃないか。こんな所で美人の女性を引つ掛けて何してるんだ？」

話しかけてきたのは佐世保の市長であった。しかし、服装はこの前出会った時はスーツで決めていたというのに、今はアロハシャツを着たラフな格好にヨーグルトソースをたんまりとかけられたケバブ片手にコーヒーを嗜んでいた。

「あれ、市長さん？何してるんですか。こんな所で。」

「何って、見ればわかるだろう。休憩だよ。休憩。」

日時は仕事をしている労働者であれば、まだ仕事をしている時間である。それは市長も例外ではない。ということは一

「サボりですか？」

「美人二人を引き連れて歩いている君にはあまり言われたくないな……。」

「あいにく、これも立派な執務なので。」

そう言われると市長は話題をヒイロからアイオワ達に切り替えた。

「ところで、後ろの二人はアメリカの艦娘か？」

「……分かっちゃいますか？」

「そりゃあ英語を話しているのを見てしまえばな。それに彼女らは女性にしては身長が高い。外国人にはよくあることだ。そしてなによりー」

市長は口調に力が入った声で、それでいながら静かに呟いた。

「胸の発育がよすぎるじゃないかー」

「セクハラで訴えますよ?」

「辛辣だな・・・」

市長のすつごい失礼な発言をズバツと切り捨てるヒイロ。

市長は焦りもせずにコーヒーを啜る。

「まあ、色々と大変だろうよ。様子を少し見てたが、彼女らはあまり、というか全く日本語が話せないようだしな。」

「・・・まあ、そうですね。こちらに不測の事態が起きてしまったというか・・・」

「とりあえず、他人事のように聴こえてしまうかもしれないが、なんとかなるんじゃないか?」

「・・・年寄りの勤ですか?」

「そこは年の功と言ってもらいたいのだがな・・・」

市長はケバブを食べ終わると最後にヒイロに言葉を発する。

「彼女たちの好きなようにやらせたらどうだ?それを寛大な心で受け止めてやるのが、

提督、というか、上司の気構えってやつじゃないのか？」

市長は休憩は終わったのか、市役所へと戻っていった。

「好きなように、ですか……。」

ヒイロはアイオワ達に向き直る。ずっと待っていたのか若干不安気な顔をしていた。

『そうですね……。何か食べてみたいものとかありますか？』

唐突な言葉に思わずキョトンとする二人、少し間を空けて口を開いた。

『じゃあ……。スシ？だったかしら、あれが食べてみたいわ。』

イントレピッドがスシを食べたいというアイオワも賛同の声を上げる。

『いいわね!!スシ!!行きましょう!!』

(スシ……。スシ……。ああ、魚の切り身が米の上に乗っかっているものでしたね。)

ヒイロ自身、知識でしか知らない寿司。それらしき店を見つけると回っている店と回っていない店があつたが、掲げられている旗を見て、回っている方を選んだが、そこは戦艦と空母、かなりの量を食べられ、費用はかきみ、ヒイロの財布は薄くなった。

第32話 鎮守府での日常

アイオワとイントレピッドを建造してしまったヒイロ。これ以上何が起こるかわかったもんじやないので、明石から建造および装備開発に関わることを禁じられてしまった。それはアムロ達も例外ではなかった。率直に言うことやることがなくなってしまう。しかし、ヒイロの仕事は提督。やることはたくさんある。

遠征部隊の編成、開発及び建造の指示、演習内容の説明、そして、積み重なる書類と格闘・・etc

正直に言つて疲れるが、全ての書類がやらなければならないことなので甘んじて、ペンを走らせる。

途中、扉をノックする音が執務室に響く。

「どうです。」

ヒイロが許可を出すと、入ってきたのは今日の秘書艦である比叡だ。

「司令。艦娘の建造が終わりましたので、報告しにきました。」

「重巡、妙高型二番艦、那智だ。貴様が司令官だな？よろしく願います。」

黒髪のポニーテールを揺らしながらヒイロを一瞥した那智。

ヒイロは書類を書く手を一旦止め、立ち上がる。

「ヒイロ・ユイです。こちらこそ、よろしく願いますね。」

ヒイロが軽い感じで敬礼をすると、那智は逆にピシツとした敬礼で返してきた。

「貴方の部屋ですが、あいにくここにはまだ重巡が古鷹ちゃんしかいないため、彼女と同室になってしまいますが、構いませんか？」

「ああ、構わない。ふむ、どうやら随分と新米の提督のところに来てしまったようだな。」
 「申し訳ないです。あいにく、指揮に関しては、まだ着任して2日の新人なので、ご容赦をお願いしたいです。」

「いや、むしろ楽しみだ。どのような成長を遂げるのか……。」

那智が楽しみであることを伝えるように軽く表情を柔らかくした。

その瞬間、急にドアが勢いよく開いた。

「Hey!! admirer!!」

手を上げながらフランクな様子で執務室に入ってきたのはアイオワだった。突然のことに固まってしまったヒイロ達3人、アイオワは思わず疑問の表情をあげるが、自分のタイミングの悪さを察したのか、

「Oh……、sorry……。」

先ほどの勢いとは打って変わって静かに扉を閉めた。パタンつと扉が閉まった音が

執務室に響いた瞬間、我に帰る那智。

「だ、誰だ!? 今のは!? 明らかに米国の言葉を使ってなかったか!」

那智の指摘に思わず揃って苦笑いをするヒイロと比叡。まあ、いずれ教えなければならなかったため、遅かれ早かれ、というものか。

とりあえず、那智に対し、説明を行う。すると、那智はとても驚いた様子だった。

「なるほど、アメリカ艦なのか……。てつきり、そういう流行なのかとおもってしまってたぞ。」

その言葉にずっこけるような素振りを見せるヒイロと比叡、どうやらこの那智という艦娘はそれなりに天然のようだ。

「ま、まあ、変なवादかまりがないならいいんです……。」

「その・・・、アイオワとイントレピッドといったか? 彼女ら日本語は話せるのか?」

「まだですね。昨日来たばかりですし。」

「そうか……。」

那智は残念そうな顔をした。何か交流でも持ちたかったのだろうか?

その様子にヒイロが尋ねると

「どうかしたんですか?」

「いや、アメリカの酒はどういうのがあるのか知りたくてな。」

ヒイロはここで思い出した。そういえばこの艦娘、横須賀でもすぐく酒を飲んでいた気がする……と。

那智を下がらせた後、すれ違いでアイオワが執務室に入ってきた。

表情は何となく、ごめんねと言っているように感じる。

『どうかしましたか?』

ヒイロは流暢な英語でアイオワに話しかける。その様子に比叡は感嘆の声を上げていた。

『えっと、日本語を教えてもらおうとおもって来たんだけど……』

『日本語を……?』

『ええ、やっぱり、コミュニケーションって大事じゃない? 最低限でもいいから、ニホンの皆と話せるようになりたいなって、昨日、イントレピッドと話して決めたの。』

『……分かりました。でも、こちらにも色々用事やら何やらがありますので、どう抗いでも、できるのは夜になりますか……。』

アイオワのお願いにヒイロは快諾したが、問題点を指摘した。それを聞いてもアイオワは構わないと言った。

『では、基本的に夜は開けておきますね。来たい時にいつでも来てください。』

ヒイロの言葉にアイオワは感謝の声を上げながら飛びついた。ちなみであるがヒ

イロはアイオワより頭一つ分ほど身長差がある。つまるところ、アイオワの豊満としか言いようがない胸部装甲（意味深）に顔を埋めることになってしまった。

ヒイロは顔が胸に押し付けられてしまっているため声を出すことができない。

代わりにアイオワの腕を叩くが、嬉しさのあまりからか気づく様子が見られない。

比叡がアイオワに止めるように声をかけるが言葉がまだ通じていないため、意味を成さない。

「ひ、ヒエー!!し、司令が色々とアブナイ状況にー!!?」

比叡がオロオロとし始めたその時、若干落ち着いたのかアイオワがヒイロの苦しそうな声に気づく。そして、自分が今、何をしているのかを正確に把握すると、

「Oh!! sorry!!」

アイオワはヒイロを解放すると、英語で『それじゃあ、後でお願いね!!』と言い残し、執務室を出ていった。さながら嵐が過ぎ去ったような空気が執務室に蔓延する。その中でヒイロはー

「……書類、片付けますか。」

「あ、あんなことが起きても平然としてられる司令、メンタル強すぎです……」

「あまり、考えてないだけです。」

「……ちなみにアイオワさんに抱かれた時の感想は?」

「・・・言った方がいいんでしょうか？まあ、いいですけど。」

ヒイロは一息、間を持つと感想を述べた。

「ヤワラカカッタデス。ハイ。」

若干、達観したような目で言うのだった。

同時刻、鎮守府周辺の海域では、キラが島風や古鷹といったトラック泊地組と演習をしていた。

「うん、今回はこれくらいかな。お疲れさま。」

キラがそう言うと、疲れからか、座り込む深雪と島風、ほかの古鷹や神通、それに由良は立っているのがやつとだ。

「ま、マジで疲れた・・・。」

「キラさん、はっやーい・・・。」

「あはは、あれでもまだトップスピード出していないんだけど・・・。」

「はあ・・・はあ・・・。それでも速すぎます・・・。」

「目で追うのがやつとなんて・・・。」

古鷹と神通がキラを悔しそうに見つめる。

「みんなには申し訳ないけど、もうすこし我慢してね。多分、演習の僕達の速度に慣れたら普段の艦載機なんて目じゃないと思うから。」

「そういえば、キラさんとかは最高速はどれくらい出せるんですか?」

由良にそう言われるとキラはうん、と考え込む。しかし、答えが出てくることはなかった。

「そういえば、いくつ出せるんだろう・・・?出したことなかった・・・。やってみようかな・・・。」

そう言い、何を構えるポーズを取った瞬間、キラの姿がかき消えた。その直後、巻き起こる突風。風が止んだあと、皆揃って、どこだどこだと探している。

「うん、大体マツハ5〜6つてところかな。思ったより速かった・・・。」

キラがいつのまにか艦隊の背後にいたキラに揃って今度は驚きの表情をあげる島風達。

「でもあんまり最高速は出せないかな。空気抵抗が強くて体への負担が大きみたい。」

キラは淡々と自己分析を行うと島風達を連れて鎮守府へ戻っていった。鎮守府への道すがら、由良と古鷹は軽く、感想を述べていた。

「凄かったね・・・。キラさんのスピード。」

「うん。早すぎて、目で追えませんでした。」

一応、ヒイロの口からはモビルスーツのことやそれぞれの戦争のことは聞いていた。それでも、あのキラのスピードは驚きを隠すことはできなかった。

「あの人は・・ううん、提督達は私達よりひどい戦争を経験しているのかな・・。」
古鷹と由良のキラを見つめる目に悲しみが入る。話では聞いていてもやはり実際に
見てしまうのでは訳が違う。ヒイロ達の話も軽く聞いただけで、詳しいことは何一つ聞
いていない。

「ねえ、キラさん!!今度かけっこしようよ!!」

「え、え?かけっこ?」

島風がキラに指をさしながらかけっここの約束の取り付けをする。

約束を請われたキラは困惑の表情をあげる。

「え、ええと、いいよ。僕なんかでいいなら。」

唐突な要求に難しい表情になりながらも承諾をした。

島風はそれを聞いて嬉しいそうだ。

「絶対だよ!!足の速さなら負けないから!!」

どうやら、島風は単純に速さで負けているのが悔しいようだ。

「キラさんって、案外子供に弱いんでしょうか?」

神通はキラの島風に対する反応を見て、そう思ったが、キラは否定の意を込めて首を
横に振った。

「い、いや、その・・。単純に島風ちゃん、露出度高すぎて直視が・・。」

ちなみに島風の普段の格好を初めて見たとき、ヒイロ達モバイルスーツ組は揃ってしかめっ面であった。

第33話 カムラン半島にて

ヒイロ達が佐世保鎮守府に着任してから、早数週間、開発や建造を繰り返しているうちに部隊が大部帯となっていた。主に、駆逐艦や軽巡洋艦が大半であり、次点で重巡であり、戦艦、空母は少しづつ人数を増やしていった。

中には艦装だけが出てくるパターンもあり、驚いたが、これは既に同じ艦娘が着任しているからとのことだった。

そして、今日の建造で、新しい艦娘が着任した。灰色がかった黒髪を腰まで伸ばし、比叡と同じような服装をしており、おしとやかな雰囲気が出ている。

その艦娘は敬礼をしながら自己紹介を始める。

「金剛型三番艦、榛名、着任しました。よろしくお願いしますね。」

「よろしく。ここの提督のヒイロ・ユイです。」

服装の感じから、榛名が金剛型であることは察しがついていた。ここまで提督業を続けてきてなんとなく姉妹艦は同じ服を着ていることが多い、ということがわかってきた。

そして、先ほどからドアの前で感じる気配。この主がタイミングを見計らったかのよ

うにドアを思い切り開く。

「Hey!! テートクウ!! ついにワタシ達金剛型が揃ったんデスね!!」

「す、すみません、提督……。一応、止めたんですけど……。」

「ううん、気にしてないよ。わかりやすい気配がドアから出てたから。いることはわかってたよ。」

比叡が申し訳ない様子でヒイロに謝るが、ヒイロ自身は気にしてなかった。それに――

「知り合いがきて、嬉しくない人はいません。それが姉妹であれば尚更です。」

「金剛お姉様!! もういらしてたんですわね!!」

榛名が金剛を視界に入れると表情に笑みを浮かばせ、嬉しそうに駆け寄る。それは金剛も榛名と同じように朗らかな表情をしていた。

「金剛お姉様、榛名との再会を嬉しがるのはいいですけど、本来、提督の元に来た理由を忘れないでくださいわね。」

「OK. No problemネ!! テートク、榛名の案内はワタシ達に任せるネ!!」

同じく金剛型の四番艦である霧島から促され、提督に榛名の案内役を名乗り出る金剛。

たしかに、金剛の言う通り、姉妹艦で案内させた方が、榛名も変に気を張らずに済む

だろう。そう判断したヒイロは榛名の鎮守府内の案内を金剛に任せることにした。「うん。じゃあ、お願いします。」

ヒイロに任せられた金剛は表情を嬉々としながら榛名の手を引っ張り、比叡と霧島も金剛に着いていき、執務室から出ていった。

「比叡さん、表情、嬉しそうでしたね。」

本日の秘書艦であった神通がそう言うヒイロは表情を若干柔らかい表情をしながらか答えた。

「これで、少しは比叡さんの気が晴れるといいんですが。」

比叡は元々、トラック泊地の艦娘である。比叡自身から気を使って聞いてはいないが、おそらくトラック泊地にも金剛達がいたはずであろう。

「とはいえ、姿は似ていても、決して同一人物というわけではない……。中々、酷なことをしてしまつたかもしれません。」

「……それは、比叡さん自身の問題です。提督が考えることではない、とは言いませんけど、あまり考えすぎるのも、よろしくないとおもいます。」

「……それもそうだね。ふう……。人付き合ひというのも、難しいです……。髪をわしゃわしゃと触りながら、ヒイロは難しい顔をするのだった。

「あ、そういえば、出撃している艦隊から何か連絡はありますか？大淀さん。」

「今しがた、カムラン半島に到着したそうです。第一艦隊、戦闘海域に突入します。」

ヒイロが通信機片手に機械とにらめっこしている大淀に尋ねると簡単で、かつ分かりやすい報告をした。

「ありがとう、とは言っても、それほど心配事はないと思うけど。」

今回の出撃でカムラン半島へ向かったのはアイオワ、イントレピッド、吹雪、叢雲、漣、五月雨に随伴にアリスを加えた7人だ。しかし、アリスは基本的には戦闘には参加せず危なくなったら援護する程度に抑えさせている。

確かに、ヒイロ達が戦闘を行えば、大半の深海棲艦はすぐさま沈められるだろう。

(でも、それだと彼女達艦娘のためにならない……。)

ヒイロ達も戦闘に出る以上、いくら撃墜される可能性が低くてもゼロではない。万が一、ヒイロ達がいなくなった場合、戦力的にヒイロ達に依存した状態だと、確実にパニックになるだろう。そうなっては困るため、この方針をとっている。

(さて、書類、片付けましょうか……)

ヒイロは再び、書類に向き直り、ペンを進める。

「それでは、私は上空を巡回していますが、基本的には見ているだけなので、戦闘は貴方がたで切り抜けてください。」

こちらはカムラン半島、燃料を節約するためにアイオワの艦装に乗っかっていたアリ

スがブースターを蒸し、上昇しながらアイオワ達に告げる。

「No problemネ!! Meのpower、見せてあげる!!」

「航空戦は任せて。ふふっ、腕がなるわね。じゃ、行きましよう!!」

ヒイロのおかげで日本語をマスターとは行かずとも日常会話程度なら問題なくなったアイオワとイントレピッドのアメリカ組は気合十分といった感じだが、反面、吹雪達是不安気な表情をしている。初めての实战だから、無理もないが――

「吹雪ちゃん達はやっぱり、不安?」

アリスに突然聞かれたため、顔を驚きの表情にしながら、答える。

「…正直に言うのと、そうですね。やっぱり、演習と実戦とでは訳が違いますもんね。」
「むしろ、それでいいと思います。初めての实战で感じるのは、アイオワさん達のように気合が十分な場合と、君たちのように、不安な気持ちになるのがほとんどです。というか、それ以外だとこちらが逆に不安になります。」

「じゃあ、アリスさんもそういう時が、あったんですか?」

五月雨からそう問われるとアリスは少し難しい顔をした。

「私自身はあまり参考になりませんので、私のパイロットの話でいいですか?」

「パイロットって、アンタが兵器だったころの?」

「はい、私のパイロット、名前は伏せさせてもらいますが、結構自信過剰な方だったん

ですよね。自尊心も高く、よく上官に歯向かったりしてました。」

「うわ、メンドくさそ。」

漣の辛辣な評価に笑いながらもアリスは話を続ける。

「で、そんな人が初めての实战で私に乗ったんですが、その人、コックピットの中で失禁してしまいました。」

「失禁って・・・つまり・・・。」

「お漏らしです。全く、あんなにあつた自信はどこに行つたのやら・・・。」

アリスが呆れたようにため息をつく、周囲で笑いが起きる。吹雪達が笑つたのだ。

「と、とんでもない人に乗られたわね。アンタwwwww」

叢雲が腹を抱えながら大笑いしている。どうやらかなりのツボにはまったようだ。ほかの艦娘達も同じような反応を見せている。

その様子を見て、アリスは微笑みながら話しかける。

「どうやら、いつときの気休めにはなつたようですね。それでは武運を祈ります。頑張ってください。」

アリスは軽く敬礼をすると、上空へと飛んで行つた。

「それじゃあ、Are you OK? let's go!! Follow me!!」

旗艦であるアイオワが号令をかけ、戦闘海域に突入する。吹雪達もアイオワについていく形で突入する。

「イントレピッド、spy plane、出せる?」

「OKよ。任せて。」

イントレピッドがボルトアクシヨンの銃を上空へ構えて、発砲。

軽快な音が響いて、放たれた弾丸が偵察機『彩雲』へと姿を変える。

「周りに敵艦隊がないか探して。」

イントレピッドがそう伝えると彩雲はエンジン音を立てながら素早い速度で偵察へと向かった。

「いい機体。さすがはメイドインジャパンね。」

程なくして、彩雲が敵艦隊を発見したとの通信を寄越してきた。編成は重巡り級が二隻、駆逐口級が三隻という五隻編成。

「それじゃあ、battle start ね!! Open fire!! イントレピッド、お願いネ!!」

「Sure!! Bomber、Torpedo Bomber、発艦始め!!」

アイオワの指示でイントレピッドは発艦用の銃を構える。

相手に空母がないなら艦戦を出す必要はない。そう考えて、イントレピッドは

艦上爆撃機『彗星』と艦上攻撃機『天山』を発艦させる。

射程内にまで距離を詰めた彗星と天山は対空砲火を潜り抜けながら攻撃を仕掛ける。

「M a s t e r y o f t h e a i r 確保！それと、駆逐艦二隻、デストロイしたわ！！」

イントレピッドの報告にアイオワは満足気にうなづく。

「OK!!それじゃあ陣形を・・・、U h h・・・、す、ストレートにして!!」

何が悩まし気な表情で指示をするアイオワ、陣形をストレートにしてと言われて、若干、疑問符があがったが、

「ストレート・・・。真つ直ぐ・・・なら、単縦陣ですか？」

「That, s r i g h t!!そう、それよ!!」

「アイオワ・・・。日本語でなんていうか忘れてたのね・・・。」

吹雪の指摘に目を輝かせるアイオワ、どうやら、まだ勉強が必要のようだ。

イントレピッドのため息混じりの言葉には舌を軽く出して片目をウインクすること、ごめんねアピールをする。

「それじゃあ、敵艦隊に向かってL e t, s g o!!」

改めて、指示を飛ばすアイオワ、艦隊は単縦陣をとり、敵艦隊へと向かっていく。

「インレンジに入った!!さあ、私の火力、見せてあげる!!F i r e!!」

アイオワの艤装の『16inch三連装砲MK.7』が火を噴いた。

放たれた砲弾はリ級へ飛んでいく。しかし、直撃することはなくかすめる形でリ級の前後に水柱をあげる。

「straddle^夾ね^又。次はHitさせるわ。」

アイオワが次の砲撃の準備をしていると、今度は自身の周囲で水柱が上がる。向こうのり級が撃ってきたのだ。

「ダメージは!？」

咄嗟に艦隊の被害を確認する。幸運なことに誰にもダメージはなかった。

「弾幕、張ります!!」

吹雪を筆頭に駆逐艦の四人が主砲で弾幕を張る。

り級は軽い損傷を受け、艤装と思われる部分から黒煙をあげる。

続けて、艦載機の換装が済んだイントレピッドが再び、艦爆、艦攻を出撃させる。

狙いは損傷を受けた方のり級。落とされた爆弾と魚雷のダブルパンチでり級は大爆発を起こし、海底へと沈んだ。

「Yeah!!やったわ!!」

「まだenemyは残っているわ!!フブキ、魚雷、Fire!!」

「了解です!!魚雷、発射します!!」

吹雪達四人から放たれた魚雷はリ級とロ級、均等に敵艦隊へと向かっていく。

そして、爆発。駆逐艦は沈んだようだが、重巡は未だ健在。吹雪達に主砲を向けている。しかし――

「今度は外さないわ。Fire!!」

砲撃準備を完了させたアイオワの第2射が、今度は正確に重巡り級を撃ち抜く。

戦艦の火力をまともに受けたり級も同じように海底に沈んでいった。

「お、終わったー……」

漣が疲れたように言葉を吐く。それと同時にアリスから通信が入る。

『お疲れ様です。それでは針路を北にとつてください。前情報だとその先にカムラン半島にいる敵の主力がいるそうなので。』

「OKよ。北に進めばいいのね。」

アイオワの先導で針路を北にとる艦隊、暫く進むと電探に敵艦隊の反応が映し出され、イントレピッドが彩雲を射出する。

敵の編成は戦艦1空母2重巡1駆逐2の六隻編成。

「戦艦がいるんですね……」

「戦艦はMeに任せて。それよりもイントレピッド、空母二隻を相手に取れるの? セークウケン、だったっけ?」

アイオワが不安気にイントレピッドを見つめる。それにイントレピッドは笑顔で返した。

「やってみせるわ。だから、安心して行つて。」

この言葉に皆の決意が固まったようだ。表情には共通して意を決した雰囲気が出ている。

「ま、どのみち敵とは闘うんだし、そもそも逃げるつていう選択肢もないわね。」

「やりましょう!!」

叢雲が冷静な口調で言うが、槍を持つ手は心なしか力が入っているように見える。五月雨も気合十分といった感じだ。

「ま、これが終わったらご主人様にみんなの間宮券でもせびりに行きますか!」
漣がそう言うのと皆揃つていいね、と口々に言った。

「よし、それじゃあ陣形を整えて、Here we go!!」

アイオワ達は敵艦隊に向けて突入を始める。

会話の内容を通信機越しで聞いてたアリスは、

「ヒイロの財布・・・持つかな・・・。」

素晴らしいながら、艦隊をいつでも援護出来るような位置に移動するのだった。

第34話 カムラン半島にて II

「航空隊、Make a sailly!!」

イントレピッドが弾丸を発射する。彗星、天山にイントレピッドが元々持っていた唯一の米軍機、『F6F-3』を含めた航空隊へと弾丸が姿を変えて、敵艦隊へ接近する。しかし、当然、空母がいるのであれば敵艦隊も航空隊を出してくるだろう。数はおよそ、イントレピッドが出した航空隊の二倍。向こうには空母が二隻いるため数の劣勢はどうしようもない。だから――

「F6F-3!! 敵の艦爆、および艦攻を最優先に!! Fighterには構わないで!!」
イントレピッドが指示を飛ばす。F6F-3に搭乗している妖精さんはその通りに艦爆、艦攻を優先的に叩き、こちらへの被害をできる限り減らそうとする。しかし、敵の艦戦もむぎむぎと見逃すはずもなく、F6F-3の妨害に入る。

敵の艦戦がF6F-3に意識が向いた隙に彗星、天山共々、敵艦隊に攻撃を仕掛ける。攻撃の矛先は、駆逐艦二隻と、戦艦ル級。しかし、敵の対空砲火により変に攻撃がばらけてしまい、駆逐艦二隻は大破どまり、戦艦に至っては直撃はしたものの、大したダメージは見当たらなかった。

「Shit!!ごめんなさい、倒し損ねてしまったわ・・・」

「むしろよくやった方よ。Good job!!」

しよぼくれるイントレピッドにアイオワがサムズアップをする。それを尻目にイントレピッドの航空隊を振り切った敵の艦載機が迫ってくる。

「敵艦載機、来ます!!」

「対空砲火よ!!Fire、Fire!!」

五月雨の報告にアイオワはすぐさま表情を切り替え、指示を飛ばす。主砲や機銃を駆使して弾幕を張る。その中で違和感を覚える者がいた。

「あれ・・・?」

疑問の表情を上げながら、ポツリと口を漏らしたのは吹雪だ。叢雲、漣、五月雨も同じような顔をしている。お互い顔を見合わせ、気になったことを述べる。

「なんか、遅く感じない?艦載機の動き。」

「う、うん。心なしか、だけど。」

吹雪の言葉に五月雨が同調の意を示す。

「それっ!!」

続けて、叢雲が主砲を放つ。放たれた砲弾は見事、空を飛ぶ艦載機に命中した。

「やっぱり、よく当たるわね。慣れて来たってことかしら?」

「慣れって、もしかや、アムロさんのフィン・ファンネル?」

漣がそう言うのと叢雲は頷いた。

「アムロは演習のとき、艦載機と同じ速さで動かしているように見せて、実は艦載機より速い速度でやってたのよ。」

「マジで?・・・いや、まあ、それもそつか・・・。それ以外理由が見つからなえ・・・。アムロさん、マジパネエ。」

漣がアムロに対し、畏敬の念を挙げていると叢雲が悔しそうな表情を挙げていることに気づく。

「ただー」

「ただ、ってどしたー? 叢雲さん。」

「アムロのフィン・ファンネルに一発も当てられてないっていうのがもどかしい・・・!!」

叢雲はイライラを艦載機にぶつけるように主砲を放った。

吹雪達は叢雲の様子に乾いた笑いをしながら艦載機を撃ち落とす。

「アムロさん、割とスパルタなんだよね。」

艦載機を次々と撃ち落としていく吹雪達、その命中率はおよそ5割、しかし、これはあくまで個人のを集計したものである。実際はお互いに援護をすることでおおよそ全体で7割を保っている。

「・・・凌ぎきりました!!」

押し寄せる艦載機による攻撃をなんとか凌ぎ切った吹雪達。

すぐさまアイオワが砲撃、敵の空母を仕留めにかかる。

砲弾は見事命中したが、撃沈には至っていない。

「U n n . . . 中破にできただけでもよしと考えるべきね。」

「っ!?!敵艦発砲!!」

五月雨の言葉に表情を硬ばらせるアイオワ。その直後、砲弾が着弾、あたりが水しぶきに包まれる。

「ウツ・・・スタートから至近弾って、中々ストロングな艦隊ね・・・!!みんな、大丈夫!?!」

水しぶきが収まった後、艦隊の無事を確認するアイオワ。どうやら全員、ダメージはなかったようだ。とりあえず、一安心する。

「OK。駆逐の皆は主砲、撃って!!」

「主砲、撃ちます!!当たって!!」

アイオワの指示で主砲を撃つ吹雪達。狙いは敵の駆逐艦。今度はしっかりと直撃したのか、直撃した駆逐艦は沈んでいった。

「駆逐艦二隻、撃沈確認しました!!」

「Niceよ!!イントレピッド、艦載機出せる?」

「換装は済んでるけど、いくらか落とされてるからピンポイントでやるけどいい？」

「OKよ。むしろそれをお願い！」

すぐさま艦載機を出撃させるイントレピッド、発艦した彗星と天山は一直線に敵艦隊へと飛び立つ。

目標は未だ無傷のもう片方の空母ヲ級。

彗星と天山は対空砲火を掻い潜り、爆弾と魚雷を落とす。

攻撃の結果は――

「天山から 通信 signal!! 敵空母を大破させたわ!!」

「Excellent!! サイツコーよ!! イントレピッド!!」

「これで、実質残り三隻ですね。」

「But、油断はダメよ。向こうにはまだ無傷の Battle ship があるんだから。」

「はい、分かっています。」

警戒するように注意深く敵のル級を見つめる五月雨。すると、敵の陣形が変わっているのに気づいた。

手負いの空母ヲ級二隻がル級の前に立っている、さながら壁のようである。だが、それと同時に――

「囿ね。どうみたって。胸くそ悪いけどかなり合理的ね。」

叢雲が敵の陣形を見つめて悪態をつく。その目はかなり冷ややかになっている。

「それじゃあ、こうしましょ。まあ、ベリーシンプルだけど、ね。」

「主砲、撃つわ!! Fireer!!」

アイオワが主砲を一斉に発射する。狙いは取り巻きの空母ヲ級二隻、砲弾は両方とも直撃、大爆発を起こして沈んでいった。

しかし、爆炎の中から覗いているのは、戦艦ル級の主砲である。狙いはアイオワ自身だろう。しかし、狙われているアイオワは至って冷静の様子だ、

「Hun、まあ、そうくるわよね。でもー」

アイオワは軽く口角を上げる。それはさながらル級を鼻で笑っているかのようだった。

「遅かったわね。ザンネン♪」

同時にル級の足元でアイオワの主砲が着弾した時以上の爆発が起こる。

「魚雷、着弾しました!!」

吹雪がル級がどうなったか確認しようとするが、爆煙に包まれて、どうなったか判別することができない。

「んー、あれくらい爆発だったら、さすがに沈んだんじゃない？」

漣が疲れた様子で爆煙を見つめる。

「ま、普通ならね。戦艦でもあの駆逐艦四隻分の魚雷を叩き込まれたら流石に沈むでしよ。」

叢雲も同調気味にいう。それにアイオワはー

「U n n . . . どう思う？」

イントレピッドに尋ねることにした。尋ねられたイントレピッドは困惑顔をする。

「わ、私に聞くの？て、言われても．．．ねえ．．．!？」

何気なく見た爆煙の中に、気づいてしまった。わずかながらであるがル級の姿が爆煙の中から覗いていた。狙いはおそらく、駆逐艦の誰か。そう直感したイントレピッドは思わず吹雪達の前に躍り出た。

イントレピッドの突然の行動に驚いた表情を上げるアイオワ達。

飛んでくるであろう砲弾に思わず目を閉じた。

そして、聞こえてくるル級の主砲の爆音、ここでアイオワ達が気づいたが、もう遅い。

放たれた砲弾はイントレピッドに着弾ー

いつまで経っても来ない衝撃に恐る恐る目を開く。

爆煙の中にわずかに見えていたル級は見えなくなっていた。

「W・・What's・・?何があったの・・?」

何があったのかわからないため困惑の表情をあげると空から見守っていたアリスが駆け下りてきた。

「危なかったです。数秒、発見が遅れていたら間に合いませんでした。」

「アリス・・?Youがやったの?」

「ええ、爆発の所為で視界が埋まってしまい移動していたところ、ちょうど爆煙の中から撃とうとしている敵戦艦を見つけました。すぐに撃破に向かいました。」

アリスはイントレピッドからアイオワ達に目を向けると彼女らの申し訳なき気な表情が目に入る。

「・・・今回は反省ですね。爆煙に包まれていたとはいえ、撃破したと高を括っていたのはいただけません。」

「う・・・反省します・・・。」

漣は顔をうつむかせた。最初に警戒を怠ったのは自分のため、責任を感じているのだろう。その様子にいたたまれない気持ちになったアリスは軽く漣の頭に手を乗せた。突然の状況にあまりついていけない漣。

「・・・ですが、今回はよしとしましょう。即座に対応できなかった私にも責任はありません。」

アリスは表情を和らげ、アイオワ達の艦隊は鎮守府への帰路に着くのだった。

第35話 進撃、アイアンボトム・サウンド!!

「第1艦隊、帰還しました。」

司令室に戦果の報告をしにアリスがアイオワ達を伴って入室する。

「お疲れ様。どうでしたか？アリスの目から見て、彼女たちは？」

「そうですね。立ち回りや敵の艦載機に対する対処は演習の成果が出ていました。しかし、少々詰めが甘かったりする点もありましたね。」

ふむふむ、と頷く素ぶりをヒイロが見せる。その間、アイオワ達は不安気な顔をしていた。

「ありがとう。お疲れ様。初めての实战で疲れただろうから、間宮さんのところに行つて何か食べてくるといいよ。」

アイオワ達に向き直り、笑顔で伝えた言葉に驚きの表情をあげる吹雪達、

「な・・・何もありませんか!？」

「え、はい。そうですけど？」

吹雪から詰め寄られたのが予想外だったのか戸惑いの表情をあげるヒイロ、

「・・・もしかして、お、怒られたいんですか？皆さん、まさかのマゾヒスト・・・？」

困り顔のヒイロの勘違いに揃って顔を赤くする吹雪達、四人にさらに詰め寄られてヒイロは椅子の背もたれにもたれかかる

「そ、そうじゃないわよ!!ただ、私たちの失態について何か言うことはないのか、つてことなの!!」

叢雲にそこまで言われてヒイロは納得した顔をする。

「ああ、なるほど。それについては何もいません。貴方がたはちゃんと生きて帰って来てくれました。それだけで私にとっては十分です。」

ヒイロが笑顔で言った言葉に吹雪達は言葉を失う。反面、アリスは少し反省したような表情を見せる。

「確かに・・・せっかく生き延びたのにその場で説教のまがいのことは無粋でしたね。漣ちゃん、申し訳ないです。」

「え!?あ、いや、漣がミスをやらかしたのは事実だし・・・!!」

漣がおどおどしながら、謝っているアリスに気にしていないという身振り手振りで伝える。

「あの、提督は怒つたりしないんですか?」

五月雨の確認するような質問にヒイロは笑いながら答えた。

「怒つたりしませんよ。ミスは誰にでも、どんな時にでも、どのような場所でも起こすも

のでしよう。それは戦場でも、過言ではないです。だから、皆さんにはその場をどう切り抜けるかを最優先にしてほしいんです。反省はその状況を切り抜けてからでも構いませんし、任務に至っては二の次で構いません。ダメだと判断したらすぐさま退却しても私は気には留めませんよ。」

ヒイロがさも当たり前のように言った言葉に吹雪達だけでなく、アイオワとイントレピッドも驚愕の表情をあげた。

「貴方がたには自分の感情に従って欲しいんです。貴方がたは『艦娘』という生まれた瞬間から戦う運命を課せられた存在ではあるかもしれませんが、それでも、君たちにはそれ以外は意志や感情を持った『人間』と変わりはありません。だから、もう一度言いますが、自分の感情のままに戦ってください。君たちにはその権利があるはずですよ。」

執務室に沈黙が走る。ヒイロは喋りすぎたかな・・・と、気恥ずかしい思いをしながら、視線を書類に逃げるように移す。

「・・・アンタも一応、出撃したりするんだよね?」

「え、ええ、頻度はそう高くないとは思いますが。」

叢雲にそう尋ねられ、とりあえず答えたヒイロ、

「なら、アンタもしつかり自分の感情に従いなさいよ。アンタは私達の提督であると同時に、一人の『人間』なんだからね。」

叢雲にそう言われると、ヒイロは軽く表情を緩めた。

「そう、ですね。その忠告、しっかりと覚えておきます。」

その言葉を聞き届けた吹雪達は表情を朗らかにした。

「それじゃあ、私達は間宮さんのところに行つてくるわ。あ、アイオワさん、あとで反省会みたいなの、やらない?」

「Sure!!いつでもOKよ。」

叢雲を先頭にアイオワ達は執務室から出て行つた。

部屋に残されたのはヒイロとアリスと秘書艦である神通だけであつた。

「やれやれ、一本取られてしまいました。」

「ブーメランを突きつけられてしまいましたね。」

表情を柔らかくしながら談笑するアリスとヒイロ。その様子を神通は静かに見つめていた。

（提督は、何より私達、艦娘の命を大事にしてくれている。吹雪さんに少し聞いた話だと、最初の秘書艦を選ぶ時、兵器だと言つた五月雨さんを軽く諫めたそうだけど・・・）

「あの、提督。少し聞いてもいいですか?」

「ん?どうかしましたか?神通さん。」

「提督やアリスさんはこの戦争について、どう思ってますか?」

「・・・中々、唐突に言いますね。」

「ごめんなさい。提督のその命に関する持論を聞いて、少し気になってしまいました。」
神通がヒイロ達がMSだったころの戦争の話を聞いたとき、正直に言つて驚きを隠せなかった。

なぜなら、同じ人間なのに、宇宙に住んでいるか、地球に住んでいるかの些細な違いで戦争を起こしていたからだ。

「んー、正直に言つて、まだわからないというのが正直な感想です。」
「と、言いますと?」

「深海棲艦はそもそも目的がわからない。何を持って人類に仇を成そうとするのか。かといつて日本は現状、深海棲艦を押しとどめるのに精一杯でそれ以外に何もすることができない。」

「私も同意見です。現状はこの戦争がどう傾くのか、分かりません。」

「そう、ですか。」

「質問に答えられなくてごめんね。」

「いえ、いいんです。」

「それじゃあ、私もこれで。執務も程々にしてくださいよ。ヒイロ。」

アリスが執務室を出て行き、執務室にはペンを走らせる音しか聞こえなくなった。

「さて、私達も執務を手早く終わらせて、間宮さんの料理を頂くとしませうか。」
「はい。提督。」

ヒイロと神通は宣言通りに執務を手早く済まし、間宮さんのところへ向かった。

翌日、ヒイロが起床し、執務室に立ちいると、大淀が執務室の中にちょうど入ってきているのが目に入った。

「あ、提督。大本営より、命令が下りました。」

「・・・内容は？」

ヒイロは気だるい顔をしながら執務室の席に着いた。内容は大方戦場に引つ張りだされるものだろうと予想がついていた。

「内容は、やはり提督達への作戦参加命令のようです。」

予想通りの命令にため息を吐くヒイロ、またか・・・と思いながらも大淀に続きを求めた。

「はい。・・・っ!?これは・・・。」

「ど、どうかしましたか？」

大淀が驚いた表情で固まっているのが気になり思わず声をかけるヒイロ。大淀は厳しい表情を浮かべ、電文の内容を伝える。

「あ、アイアンボトム・サウンドの攻略作戦への参加・・・です。」

「アイアンボトム・サウンド・・・？鉄底海峡という意味ですか？」

「ソロモン諸島のサボ島とガダルカナル島の間に存在する海峡のことです。あそこは一度は攻略が完了した海域なんですが・・・。」

大淀はそこまで言うところから先は恐ろしいと言った表情を上げながら続きを述べた。

「実はその後深海棲艦に占領されてしまい、大本営は再び攻略作戦を発令し、部隊を送りこみました。しかしー」

「しかし・・・？」

大淀は一度睡を飲み込むような音を喉から鳴らし、冷や汗を流しながら言った。

「部隊の大半が消息不明・・・。かろうじて生き残った艦娘も顔を恐怖に染めながら、こう言ったようです・・・。」

「化け物がいる。一瞬、視界が光に包まれたと思ったならみんななくなっていた、と。」

「化け物・・・ですか。」

「以降、大本営もしばらくはこの海域の攻略を渋っていました。ですが、こうして攻略作戦を発令したと言うことは、本腰を入れ始めたと言うことでしょう。」

「これは・・・また大変な戦いになりそうです。」

ヒイロが達観しながら外を眺めていると、大淀はまだ続きがあつたことに気づき、読

み上げる。

「それと、今回の作戦は横須賀鎮守府と呉鎮守府、そして、我々、佐世保鎮守府の合同艦隊で作戦を遂行するとも書いてあります。」

「横須賀鎮守府の部隊も・・・？それだと無碍にはできませんね・・・。しょうがない・・・。」
ヒイロはため息を吐きながら、大淀に全艦娘を講堂に集めてほしいと伝え、執務室を後にした。

鎮守府にかけられた放送により、鎮守府内の艦娘達は続々と講堂に集まっていた。その中にアムロ達も例外ではなかった。

「全員を集めさせたということは、大方、また大規模作戦の発令か。」

「ま、前よりはマシだろ。一ヶ月経ってるしな。」

「ハイネ達がいた横須賀鎮守府の話？聞かせてよ。」

ハイネの横にいた『瑞鶴』が興味津々な様子で聞くとハイネは人差し指一本立たせて、
て、

「大規模な作戦が終わった後の一週間後にまた大規模作戦。どう思う？」

「うわっ・・・キツ・・・。」

ハイネの言葉に瑞鶴は若干引き気味の表情をあげる。

「アムロさん達は両方の作戦に出られたんですか？」

「ああ、一つ目の作戦はまだどうにかなったが、二つ目の作戦はかなり危ない戦況だったな。」

今度はアムロの隣にいた『翔鶴』がアムロに尋ねるとアムロから返ってきた返答に心配そうな表情をした。

「だ、大丈夫だったんですか？」

「大丈夫ではなかったら、今この場に私の姿はないだろう。」

「つたく、まだ朝メシも食ってないつうのに。朝っぱらから、なんなんだよ。」

「それはガロードの自業自得ではないのか？それにこれで何度目だ。朝は早く起きて入ればやれることも多くなるはずだと何回か言った気がするのだが。」

朝食を取れなかったらしいガロードが不機嫌な様子のようにだ。一緒に講堂に入ってきた刹那がそれを諫めている。

「(っ)もつとも．．．だな．．．はあ．．．。」

刹那の言葉にぐうの音もでなくなるガロード、同時に腹の虫も鳴る。
見かねた刹那がとりあえず伝えた。

「まあ、この集会が終わった後でも遅くはないと思うが．．．間宮がまだ作っているだろう。」

「．．．ま、別に構わねえけどよ。」

そんな会話をしているガロードと刹那の会話に一人の人影が入り込んだ。セミシヨートの髪を団子状にし、そこからツインテールを下ろしている艦娘、『満潮』はガロードの前に立つと無言で何かを手渡してきた。

「ん？おおう？満潮、どうしたんだ？これ？」

ガロードの視界に映り込んで来たのは一つのパンだ。ガロードがこのパンの出所を聞くと、満潮はそっぽを向きながら、

「ふ、ふん。たまたま後で食べようと思っていただけ、いらなくなつたからあげるわ。」

「お、おう。サンキューな。」

有無を言わさないような雰囲気満潮にガロードが戸惑いながらパンを受け取ろうとした時、刹那が言い放つた。

「満潮、そういうえぼふと、思ったのだが。今日の朝食の時、余分にパンを受け取つてなかつたか？まさかとは思うが、ガロードに手渡す「そ、そんなわけないわよ!!この馬鹿!!」

刹那の言葉をさえぎり、顔を真っ赤にさせた満潮は照れ隠しだと言わんばかりのスピードでガロードの口にパンを突っ込んだ。そして、そのまま走り去ってしまった。

満潮が走り去った後、口の中でモゴモゴさせていたパンを飲み込んだガロードはただ一言、呟いた。

「……なんだったんだ？今の。」

「……わからない。」

刹那も困惑気味でガロードのつぶやきに答えた。

「ガロード、何かありました？満潮さん、顔を真っ赤にして走ってましたけど。」
一部始終を見ていたらしいフェネクスが尋ねたが変わらず、わからないの一点張りです。通すしかなかったガロードであった。

とりあえずガロードの解答を聞いたフェネクスは軽くあたりを見回すと床に突っ伏しているキラが目に入る。ちょうど空いている席も付近にあったため、近くによることにした。

「キラさん？何してるんですか？」

フェネクスがそう問いかけると、キラは疲れた表情でフェネクスを見あげた。

額には汗が流れていた。

「し、島風ちゃんとかけっこしてただけど……。じ、自分の体力の無さを思い知ったよ……。運動、定期的にしなくちゃ……。」

時節はおよそ七月の初旬。そろそろ本格的に夏が始まる季節である。どうやらキラにはこの快晴での運動は堪えられない。

フェネクスはとりあえずちょうど講堂に入ってきたアリスに声をかけ、肩を借りるこ

とでキラを席につかせた。

しばらくすると講堂のステージにヒイロが上がって来た。それと同時に自然と艦娘達の声が止んだ。ふと気になったハイネがアムロに質問をする。

「そういえばヒイロって提督用の服、着ねえんだな。あの白い軍服。一応あるんだろ？」
「大淀曰く、本人が着たがらないようだ。堅苦しいのは嫌いだと言っていたそうだ。」

艦娘達が立ち上がるると同時に敬礼をする。一応、アムロ達も同じように敬礼をした。キラは満身創痍といった感じだったため、アリスが立たせなかつた。

ヒイロは軽く敬礼を返すと艦娘達に座るように指示を促す。

「まずは朝早くから集まってもらつてごめんなさい。まだご飯とか食べていない人もいそうなので、手短に済ませますね。」

艦娘達が座つたことを見届けたヒイロはまず早朝からの集会について謝罪を行った。

「早速本題に入らせてもらいますと、ここの鎮守府にアイアンボトム・サウンドへの攻略作戦への参加の指令が下りました。」

艦娘達の間でどよめきが起こる。ヒイロはその付近の戦いについては調べていなかったが、艦娘達の反応から余程大変な海域であったことは察することができた。

「本作戦では、横須賀、呉、そして、ここ佐世保の3鎮守府の合同で攻略することとなっています。ほかの鎮守府の艦娘と協力して、作戦海域内の深海棲艦を撃退、および撃破

してください。」

「・・・3つの鎮守府合同の作戦、これはかなり激しい戦闘が予想できるな・・・。」

ヒイロの作戦の説明からアムロが作戦の激しさを予想した。

「それと、これは大淀さんから聞いた話ですが、この海域には『化け物』がいるとの噂話がありました。」

「化け物、か。いやに抽象的だ・・・。」

刹那は化け物という言葉に対し苦い顔をした。

「所詮噂話だと思っっている方も多いと思います。ですが、過去、この海域の攻略作戦を行った際、多数の艦娘が消息不明となっております。信憑性は高いと考えて間違いはないでしょう。各員はこのことを留意しつつ、本作戦に臨んでください。」

ヒイロの思ったとおり、噂話だと思っていたのが大半だったのか強張った表情に変わっていた。

「それでは、本作戦に出撃する艦娘を発表します。編成は連合艦隊で行くにあたって、艦は経験が豊富な長門さん、よろしくお願いします。」

「ああ、任された。その任務、必ず成功させるさ。」

長門の言葉にヒイロは領きながら編成の続きを述べた。

「続いて、アイオワさん、および比叡さん、金剛さん、よろしくお願いします。」

「Meの出番ね!!任せて!!」

「わ、私ですか・・・気合い!!入れて!!頑張ります!!」

「イエス!!ワタシの力、見せてあげるネー!!」

アイオワはサムズアップで答え、比叡は自分に発破をかけるように、金剛はヒイ口にアピールするように答えた。

「そして、赤城さん、イントレピッドさん。艦隊の航空支援をよろしくお願いします。」

「一航戦、赤城、承りました。」

「わかったわ。任せて!!」

赤城は敬礼をしながら、イントレピッドは頷きながら答えた。

「続いて、第二艦隊。旗艦は北上さん、次いで大井さん、よろしくお願いします。48門の魚雷、その真髓、相手に叩き込んじゃってください。」

「しようがないなー。頑張ろっか。大井っち。」

「はい!!北上さん!!頑張ります!!」

北上はあつけらかなとした態度で頷く。反面、大井は興奮気味、多分北上と一緒に出来ることが嬉しいのだろう。

「古鷹さん。よろしくお願いします。いつも言っている重巡の力、今こそ見せる時です。」

「み、みんなの前で言わないでくださいー!!」

「おおつ、シャッターチャンス!!」

「と、撮らないでよ青葉ー!!」

恥ずかしいがっている古鷹の顔を思わず手にもつていたカメラで激写する青葉。

その様子を微笑みながら見ているヒイロは編成の続きを述べる。

「最後に神通さんと島風ちゃん、それに深雪ちゃん。お願いします。」

「が、頑張ります。」

「はーい、頑張りまーす。」

「マジで!? やった!!」

緊張、平然、驚きといった三者三様の反応を見せる。ヒイロは深雪が確認するような視線を向けていたため、とりあえず、頷いておいた。

「それと、指令で私やアムロさん達も出撃することになっています。そのためしばらく鎮守府全体の指揮権を陸奥さん、貴方に一時的に譲渡します。」

「私? わかったわ。確認するけど、私だけなの?」

「いえ、補佐に加賀さんを回すつもりですが、よろしいですか?」

ヒイロが加賀に確認の視線を向ける。加賀は無表情で頷いた。

「分かりました。それで? どういったことをすればいいの?」

「内容としては、普段通りの遠征と警戒用の艦隊を定期的にだして頂ければ結構です。」

ヒイロの説明に陸奥と加賀は理解を示し、首を縦に振った。

それを見たヒイロは再び講堂全体に目を向ける。

「それじゃあ、連合艦隊の皆さんは2時間後まで出撃準備を整えて下さい。解散!!」

ヒイロが解散の声をあげると艦娘達は『了解!!』と敬礼をし、それぞれが為すべきことをしに講堂から出ていった。

ヒイロが壇上から降りるとアムロが待っていた。

「皆さん……。どうかしました?」

「いや、化け物という単語が気になったんだが、何かもつと情報はないのかと思ってな。」

「すみません。私もそれに関してはやさっぱりで……。大淀さんも詳しくは知らないと……。」

「そうか……。ならいいんだ。しかし、ほとんど情報のない状態で行動するのは危険だ。それは分かっているな?」

「ええ、分かっています。できれば私達の手に負える範囲で頼みたいですが……。」

「そればかりはどうしようもあるまい。」

そして、2時間後、ヒイロ達を伴った佐世保鎮守府の艦隊は横須賀、呉の艦隊とのラッパブーポイントへと向けて出発した。

「各員に通達します。」

ヒイロが突然、話し始めたことに驚き、艦隊の視線がヒイロに集中する。

「無理はしないように。生きることを最優先とし、皆で鎮守府に戻ってきましょう。」

その言葉に艦隊の皆が同調の意志を示す。その様子を感慨深い様子でヒイロは見た。

「頑張っても無理なものは無理ですしね。」

「おい!? それ最後に言うことかよ!?!」

ヒイロの最後に言った言葉にハイネがツツコミ、艦隊の間で笑いが起こった。

第36話 戦いを呼ぶ者

「イントレピッドさん、これを貴方に預けます。」

「What's!?! Admiral、これは……。」

「やはり、わかりますか。」

「え、ええ……。一応最近まで船としての原型はあったから、コレがなんなのかはわかるわ。」

「コレは私達にとつての決戦兵器リーサルウェポンです。もし、私達MS隊が動けないと判断した時、躊躇なく使ってください。」

「……Sure。わかったわ。任せて。」

横須賀、呉の艦隊とのランデブーポイントに差し掛かるところ、アムロがハイネに対し、気になっていたことを聞いた。

「ハイネ、そういえば君のその兵装を展開するたびに手に装着されるものはなんだ?」「ん? ああ、これ? ううん……俺にもよくわかってないんだ。」

ハイネは自身の手を包むようになっていいる兵装の手を開いたり閉じたりする。

手のひらには何か丸い窪みのようなのが見られる。

「まあ、仕方ねえさ。俺には自分がMSだったころの記憶がねえんだ。兵装に関する記憶がないのはむしろ当然だな。そこら辺は割り切ってやっていくしかねえよ。」

「そうか、いつか思い出せるといいな。」

「ああ、そうだな。」

本人がそう思うなら、これ以上あれこれ言うわけにはいかない。そう思い、アムロはハイネの兵装に関する思考を打ち切った。

「そろそろ、各鎮守府の艦隊のランデブーポイントです。見えてくると思いますが、どうですか?」

ヒイロが艀装に乗らせてもらっている長門に問うと、長門は少し、目を凝らした。

「ああ、確認した。人数を確認する限り、私達が最後のようだ。」

「見えてきたならそれで構いません。さて、おおよそ一ヶ月ぶりですけど、元気ですかね?」

「むしろ、元気でなければこれからが不安だ。」

久しぶりの再会に自然と表情が緩むヒイロ。そのつぶやきに答えた刹那も心なしか表情が穏やかだ。

「こちら、佐世保鎮守府所属艦隊。艦娘12名、MS隊8名、計20名。ただいま到着し

ました。」

ヒイロが敬礼をして挨拶をすると、それについて長門達、全員が敬礼をする。

艦隊の代表としてなのか、番傘をさしたポニーテールの女性が敬礼を返した。

「横須賀鎮守府所属、連合艦隊旗艦、大和型一番艦、『大和』です。今回の作戦、よろしくお願います。貴方がヒイロ・ユイ提督ですね。貴方がたの活躍ぶりは提督より兼ねて聞いています。」

「素晴らしい、大和は握手を求めてきた。それに対し、ヒイロは気恥ずかしいように頬をかいた。」

「やれやれ、参ってしまいます。座りながらで申し訳ないけど、それでよろしいなら。」
いえ、構いませんよ、と大らかな笑顔で答えた大和はヒイロの手をとり握手を交わした。大和と握手を交わしている中少し視線を横に向けると、呉鎮守府の艦娘達が観察するような目でヒイロ達を見ているのが確認できた。

「改めて、ヒイロ・ユイです。よろしく。」

「本当に提督自身が出てきていますね。．．。」

呉艦隊の旗艦、扶桑がヒイロを物珍しそうに見つめる。

「まあ、戦えるのならできる限り手は尽くすつもりです。」

一通り挨拶し終わった後、案の定というか、ヒイロ達もまあ、そうなるな、と予想し

ていたことが起こる。

「そういえば、後ろの金髪とちやばつのお二方はどなたですか？あまり見慣れないんですけど・・・。」

アイオワとイントレピッドのことである。彼女達自身も予想はしていたのか驚いた様子は見せずにしようがないといった表情を見せる。ヒイロは元々予想してたのもあったし、隠しても意味がないため普通に打ち明けることにした。

アイオワやイントレピッドといったアメリカ艦をヒイロが建造してしまったことは結論として、とても驚かれたが正直に話したためか、艦隊の理解を得ることができた。旗艦である大和は疲れた顔をしていたが、

「ほ、本当に規格外のことをするんですね・・・。あの人は・・・。」

「ま、まあ、それで私達も救われましたし・・・。」

服装が改二ーつまるところ、横須賀鎮守府の吹雪が大和に寄り添うように声をかける。

「吹雪ちゃん、お久しぶりです。」

「ヒイロさん!!はい!!お久しぶりです!!・・・えっと、アメリカ艦を建造したのは本当ですか?」

「なら聞いてみる？ アイオワさーん。」

ヒイロがアイオワを呼び出すと、キラとハイネを乗つけた状態で近づいてきた。

「Admiral? どうかしたの？」

「横須賀の吹雪ちゃんか君の英語を聴きたいって。」

「Oh, OKよ。Hello!! My name is Iowa. I, m a m e n
b e r o f S a s e b o g u a r d i a n o f f i c e !!」

アイオワが久しぶりのネイティブ感溢れる英語で吹雪に話しかけると、ちんぷんかんぷんな表情を見せる。

「え、ああ、その・・・。」

「ふふつ、そんなに慌てないで。Don't worry. 日本語もAdmiralに
教えてもらったからね。」

吹雪が対応に困っている様子を見て、アイオワは笑いながら日本語で話す。

ヒイロが教えたという事実で吹雪は驚いた表情を上げた。

「ええ!! ヒイロさん、英語を話せるんですか!？」

「はい、できますよ。」

「す、すごい・・・。」

「余談だけどよ。佐世保の艦娘らはそれなりには英語を話せるぞ。というか、ヒイロが

ほとんど教えた。」

「ぼくたちも例外なく教えられたね。」

キラとハイネの言葉に吹雪は再び驚いた表情にかえる。

「ということは、長門さんも・・・？」

吹雪に視線を向けられた長門は若干視線を逸らしながら答えた。

「わ、私は少し物覚えが悪いほうだな・・・。まだ簡単な会話しかできん・・・。陸奥のやつは既に日常会話までこなしているがな。」

「ナガトも別に遅いわけじゃないわ。時間が経てばできるはずよ。Admiralの教えもVery goodだしネ。」

アイオワの言葉に長門は照れ臭くなるのだった。

36人の艦娘とヒイロ達8名、総勢44人の大艦隊がアイアンボトム・サウンドへと針路をとる。

海域を進めば進むほど、海は黒く染まってゆき、空は厚い雲に覆われていく。

ヒイロ達も艀装に乗っかって海風を楽しむのもやめ、空を飛んで警戒態勢を取っていた。

その中でヒイロは考え事をしていた。

「やはり、気になるのは件の『化け物』か？」

アムロが声をかけるとヒイロは不安気に頷いた。

「ええ、戦場には不確定要素が付き物ですが、この『化け物』はいわばその塊です。」

「内容によつてはこちらが負ける可能性も孕んでいる、そういうことだな？」

刹那が確認の質問を取ると、ヒイロはこれにも頷いた。

すると、ヒイロ達、MSとしてのレーダーから警告が突如として、ヒイロ達の頭の中で鳴り響いた。

「ロックオン警報?! どういうことだ?!」

「分かりません!! ですが、これは……。つ!? 続けて、熱源反応を確認!! 熱源、来ます!!」
アムロが声を荒げ、ヒイロが状況を伝える。咄嗟にガロード達がバラけるように避けると四つの赤い光を白く包んだようなビームがその場を通り抜けた。

「これは、キラとハイネが扱っているビーム?!」

『だ、大丈夫ですか?! 今の光は一体……。!?』

「くっ?! いったい、どうして……。」

刹那が気づいたことを述べる。無事の確認をする大和の通信をしり目にしつつ、キラがビームの飛んで来た方向を見つめる。

『電探に反応あり!! っても、なんだよこのでかさ?! 航空機のでかさじゃねえぞ!!』

続いて、横須賀の摩耶が、この前見たときと服装が変わっているが改二になったのだ

ろうー、自身の電探に映った反応の大きさを見て驚きの声をあげる。

ヒロ達も目を凝らすようにビームが飛来してきた方角を見つめると、

「お、おい、ありやあ、MモビルアーマーAじゃねえか!?!」

「あの大きさや形状を見る限り、そのようだな!!キラ、あのMA、知っているか!?!」

ガロードの言葉に賛同しながらキラに質問をぶつける。キラは目を凝らしながら、ビームを放つて来たと思われるMAを見つめる。装甲は薄い緑色をしていて、形状はまるでカニのような形をしている。手と思われる四つのアームからはビームの発射口のようなものが見られる。しかし、そもそも、キラ自身の記憶にはあれほど巨大なMAは見たことがない。

「そんなこと言われても僕にはあんな巨大な兵器、見たことないよ!?!」

「先手を打ちます!!ターゲット、敵MA・!!」

キラの困惑の表情を見て、いち早く迎撃態勢を取ったヒロはバスターライフルを構え、標準を敵MAに合わせる。

「攻撃、開始!!」

バスターライフルから閃光がほとばしる。一直線に敵MAに向かっていき飲み込むかと思われたその時――

バタバタバチツ!!

機体を前につんのめる形にした敵MAは上部にシールドのようなものを展開するとヒイロが放ったバスターライフルを防ぎきってしまった。

「・・・防がれた？」

「ビーム・シールドまで持っているのか!？」

『どうかしましたか!?!』

ヒイロとアムロが敵の兵装に関して驚いている中

こちらの様子がおかしいことを察したのか、大和が通信をして来た。

「敵にこちらの兵装を防げるのがある!厄介だぞ、これは!!」

アムロが大和への状況説明をしているなか、摩耶が悲鳴のような声でヒイロ達に伝えた。

『おい、気いつける!!さっきのやつ程の質量はねえが、それでもデカイのがいくつか現れたぞ!!』

「数は!?!」

ヒイロが端的に聞くと摩耶から帰ってきたのは予想外のものであった。

『さっきのを除いて・・・5つだ!!』

その言葉を聞いて、思わず敵MAのほうを見つめるヒイロ達、摩耶の言う通り、先ほどヒイロのバスターライフルを防いだMAの周りに別のMAを確認できた。種類は二

つ、片方はMSの下半身を蜘蛛のようにしたローさながら神話に出てくるアラクネのような風貌をしたのが二機、そして、戦闘機をそのまま大型化させたような流線的な形をしたMAが三機、合計6機がヒイロ達の前に立ちはだかるように現れた。

「も、MAが、あんなに・・・!?!」

フェネクスが苦い顔をする。一機いるだけただでさえ厄介なMAが自分たちの目の前にはそれが6機いるのだ。

「でも、よく見ると向こうはいくらかダウンサイジングされているようです。」

アリスがビームスマートガンのスコープを覗きながらそう報告する。ヒイロ達がよく見てみると確かに3m程度に落ち着いている。しかし、それでも強力なのは違いない。

「こ、これって、アイツらが例の『化け物』ってやつか!?!」

「ああ、状況を鑑みるにその可能性が高い。だが、だからと言ってここで退くわけにはいかない。」

「ええ、寧ろ余計に帰れなくなりました。あんなの放っておけば、この先どうなってしまうか、わかったものではないです・・・!!」

刹那、ヒイロ、両名が厳しい表情をしながらGNソードⅢとビームサーベルを構える。それを見て、意を決するアムロ達。各々が武器を構える中、ヒイロ達は気になってな

かったが、今までだんまりだったハイネが口を開いた。

「あれは……、『ザムザザー』？それに『ゲルズゲー』と『ユークリッド』？」

「知っているのか、ハイネ!？」

「いや、なんか、頭ん中に浮かんできたっていうか。俺のじゃない誰かの記憶……みたいなの？」

「とりあえず、アイツらの名前はそれぞれ、ザムザザー、ゲルズゲー、ユークリッドでいいんだな？」

「ああ、それは確信を持って言える。」

ハイネがなんとも言えない表情をしていたが、少し問い詰めるとそれぞれのMAの特徴など、わずかながら詳細な情報を手に入れることができた。しかし、一番厄介なヒイロのバスターライフルを防いだバリアーについての情報がわからなかったのは痛かったが、無い袖は触れない以上どうしようもなかった。

「大和さん、私達MS隊は件の『化け物』、もといザムザザー、ゲルズゲー、ユークリッドの撃破に向かいます。そのため、その他の深海棲艦の掃討を頼みます。」

『あれらの正体がわかったんですか!?!』

「いえ、ハイネからかろうじて名前が聞けた程度で、対策は手探りで探していくしかないのが現状です。」

『……わかりました。あれらの撃破をお願いします。』

「……任務、了解です。」

大和との通信を切ったヒイロはザムザザー達と向き直る。

「MS隊は敵MAの撃破を最優先とします!!各機、十分に注意して戦闘を行って下さい!!」

『了解!!』

ヒイロ達はブースターを蒸し、ザムザザー達へ肉薄を開始する。

戦いの口火は切って落とされた。

第37話 怒れる瞳

ザムザザーといったMAへ肉薄するヒイロ達、飛来するビームを潜り行けながらビームライフルと言った射撃武器を放つが、ザムザザー達の展開するバリアーによってことごとくビームが弾かれてしまう。

「あのバリアーが厄介だな・・!!」

「何かないんでしょうか・・。」

刹那が歯がゆい表情をし、ヒイロがザムザザー達を見据えながら何か突破口がないか思案を張り巡らせる。途中、ハイネやキラが長距離ビーム砲やバラエーナ・プラズマビーム砲を放つたがそれも防ぎ切られてしまった。

「原理が同じかどうかはわからないが、私やアリスとフェネクスの宇宙世紀にもビームを弾く代物はあった。」

『I フィールド』ですか・・。」

フェネクスの言葉にアムロは無言でうなづき、話を進める。

「それは射撃武器は防げたが反面、実弾や爆煙、さらに接近されると効力をほとんど失っていた。奴らの張っているバリアーもその可能性はあるんじゃないか？」

「つまり相手の懐に飛び込んで、近接戦闘で倒す、ということですね。」
「ああ、そういうことだ。」

「わかりました。実弾兵装を持っているのは・・・キラと刹那ぐらいですか?」

実情、ヒイロ達が持っている実弾兵装はキラの『クスイファイアスレール砲』と呼ばれるレールガン、もしくは刹那の『GNマイクロミサイル』しかない。ということはほとんどは近接戦闘を仕掛けるしか対処がない。

「ではキラは中距離からの援護をお願いします。それ以外は近接戦闘を!!」

『了解!!』

散開し、それぞれザムザザー達へ再び接近を開始する。

「先に攻撃します!!後から追撃を!!」

キラが有効射程距離につき、牽制がわりにクスイファイアスレール砲をザムザザーに向けて発射する。

(これは少しは弾幕の濃度を押さえる・・・!!)

しかし、キラ自身避けさせるつもりで放ったがザムザザーは一向に避ける気配を見せない。

(避ける素ぶりを見せない・・・?まさか!?)

そう思ったのもつかの間、放たれたレール砲の弾はザムザザーに着弾し、爆発を起こ

した。しかし、爆煙が晴れるとザムザザーは再び、ビームを弾いたバリアーを展開して、無傷だった。

「くそっ!! 実弾も駄目なの!!」

悪態をつきながらキラは『ラケルタ・ビームサーベル』を抜き、ヒイロ達と同じようにザムザザーに対し、接近を始める。

ヒイロ達はゲルズゲーやユークリッドから放たれるビームを掻い潜り、後少しで届きそうになった時――

「みんな!! 下だ!!」

アムロが叫んだ。思わず下を見ると深海棲艦がヒイロ達に対し、砲撃を行っていた。

「……そう簡単にはやらせてくれませんか……!!」

フェネクスが苦しい顔をしながら深海棲艦からの砲撃を避け、一度ザムザザーから距離を取った。ヒイロ達も同様であった。

「厳しいな……。大和達の艦隊もまだここまで入り込めてない……。」

アムロは後ろを軽く見やると砲撃やプロペラ音といった戦闘の音は未だ後方にあることを悟る。

ヒイロは苦しい顔をしながらザムザザー達と深海棲艦を交互に見る。

(どうしよう……深海棲艦とMA群に対し人数を割く……? でもそれだと数の優勢は無く

してしまふ……。でもだからと言って下からの砲撃も見過ごせない……。どうすればー」
「ヒイロ」

「えー？は、はい？」

思案に没頭していたヒイロは突然声をかけられ、軽く驚いた表情あげる。

声をかけたのはアムロだ。

「ヒイロ、私を深海棲艦の方に向かわせてほしい。」

「え、まさか、お一人で!？」

「ああ、数の優位を失うわけにはいかないからな。」

「で、ですが、あの数を一人でこなすんですか!？」

「アムロさん!!さすがに無茶です!!」

ヒイロの声に反応したのかフェネクスも悲鳴のような声でアムロに迫る。

だがアムロは厳しい顔をしながらフェネクスに語りかける。

「だが、これ以上奴らに時間をかけるわけにはいかない。まだ作戦は始まったばかりなんだからな。」

その事実にはフェネクスは暗い顔をする。実のところ、ヒイロ達がいるのはまだアイアンボトム・サウンドの入り口付近である。

まだ敵の本陣にも届いていないのだ。

ヒイロは苦渋の決断とも取れる声でアムロに指示を飛ばす。

「つ……!!わかりました。アムロさん、頼みます!!ですがー」

ヒイロはアムロから視線を外すともう一人に目線を合わせる。

「ハイネ、貴方もお願いします。アムロさんと共に深海棲艦の迎撃を!!」

「……OKだ!!任せな!!」

「いいのか? ハイネまで向かわせるとー」

「そこからは言わなくても分かっている。それはヒイロもだろう。」

アムロの横から刹那が話しかけた。その表情はいくらか余裕があるように感じられた。

「MAとの戦いは慣れていない。問題ない、とは言いが、何とかする。」

アムロは刹那の視線を見て、信じていいと判断した。

「全く、援護をするつもりで言ったはずなのに、こちらが援護されている気分だ。信じる

ぞ!!ハイネ、行くぞ!!」

「ああ、やってやるさ!!」

そう意気込み、アムロとハイネは深海棲艦群に突入を始めた。

「大和!!聞こえるか!!」

『はい!!どうかしましたか!!』

大和との通信越しに砲弾が水上に着水した音が聞こえる、戦闘真つ只中のようだ。

「中から引つ掻き回す。その間に戦局をこちらに引き寄せろ。」

アムロは若干単的すぎたかと、思ったが、大和にはうまく伝わったようだ。

『挟み撃ちですね!!了解しました!!ですが、無茶だけはなさらずに!!』

「重々承知の上だ!!」

アムロは大和との通信を切るとハイネに顔を向ける。

「やるぞ、ハイネ。準備はいいな?」

「準備も何も、最初からできてるっての!!」

その言葉にアムロは表情を軽く緩めた。それ以上は何も言わなかった。

フィン・ファンネルを全機展開させると、ハイネと共に深海棲艦の集団へと突撃していった。

「さて、数的優位は失ってしまいましたが、やらなければならないことは、手早く済ませるとしましょう。」

「ヒイロ、ザムザザーは私に任せてほしい。MAの解体作業は経験がある。」

「わかりました。お願いします。各員は接近してMAを撃破してください。しかし、敵の戦力はまだ未知数です。気をつけて行動してください。」

刹那の提案を承諾しつつ指示を飛ばすと、刹那達は即座に散開し、MAの各個撃破に

向かう。

「んなろつ!!これでも喰らえ!!」

ガロードがゲルズゲーに対し、バスターライフルを放つ。ヒイロのバスターライフルとは明らかに出力は違うが、それでも高い方である。しかし、ゲルズゲーが展開したバリアーに阻まれてしまう。

「ちつ、やつぱ通らねえか……。厄介すぎんだろ、アレ。」

「これで!!落とす!!」

今度はフェネクスがユークリッドに対し、ビーム・マグナムを放つ。バリアーを展開したユークリッドはビーム・マグナムの出力に少し押されたがそれでもユークリッドの装甲に傷をつけることは叶わない。

「ビーム・マグナムでも……。高性能すぎませんか?」

「やはり、近接戦闘しかこちらに残されている手段はないようです。」

ガロードとフェネクスとヒイロは互いに背中合わせにゲルズゲーやユークリッドと相対する。

「なあ、それってふと思っただけだよ。根拠あるのか?」

「ありますよ。仮にガロード、貴方が艦隊とか編成する際、各艦娘の特徴は把握しておきますよね?」

「まあ、知つとかなきゃ難しいもんな。いぎつてときに。」

「知つておけばフォローとかしやすくなりますし……。」

「そう、それです。」

突然のヒイロの指摘に疑問符をあげるガロードとフェネクス。

状況が状況なので手早く説明を始めるヒイロ。

「仮にゲルズゲーといったあのMAが搭載しているバリアーが近接戦闘にも対応できるとしましょう。でしたら接近しているときに深海棲艦が援護する必要はあるでしょうか？私がMAと同じ立場だったら余計なお世話だと思えますけど。」

ヒイロの説明を聞いて合点がいった表情をするガロードとフェネクス。

「なるほどな。なら、幾分やりやすくなるってもんだぜ!!」

「確かに言われてみればそうですね。」

「それじゃあ、行きましょう!!弱点がわかってしまえばこちらのものです。」

同時にゲルズゲーとユークリッドからビームが放たれるがヒイロ達は散開すること
でこれを避ける。

「ヒイロ、ありがとな!!行くぞええええええ!!」

呐喊しながらゲルズゲーに肉薄するガロード、ゲルズゲーは近づけまいとして、手に
持つ二丁のビームライフルを乱射する。

「この程度っ!!」

ガロードはスピードを落とさずにAMBACを用いて器用に避ける。ガロードがある程度接してきたらゲルズゲーはビームライフルでの乱射を辞め、ガロードを下半身の蜘蛛のような部分で掴みかかってきた。迫り来るクローをガロードは避けようとせずに両手で二本、掴み取った。そして間髪入れずにそのクローをへし折った。

動揺しているような反応を見せたゲルズゲーの隙をつき、ガロードはゲルズゲーに組み付いた。

「この距離なら、バリアーは張れねえな!!」

ゲルズゲーが後退する前にハイパービームソードをゲルズゲーの胴体に突き刺す。

「てえりゃあっ!!」

そのままハイパービームソードに手をかけ、力を込めて、振り抜く。脇腹部分を切られたゲルズゲーはスパークを起こしながら爆発した。

「よっしや!!まず一機!!」

「ガロードさんがやりましたか・!!私も手早く片付けます!!」

腕部に装着されているビームサーベルを二振り両方だし、ユークリッドに突撃する。

(見たところ、あのバリアーは前面に展開されていることが多い・。なら!!)

ユークリッドから放たれるビームをバックパックに展開されているアームドアー

マーXCで受け止める。ビームの出力により、多少減速されてしまいがさほど変わらな
いスピードで受け止めたまま突撃するフェネクス。

続けてユークリッドから放たれる二発目も同じくアームドアーマーXCで受け止め
るフェネクス。だが、先ほどとは打って変わって、下に弾き出されてしまう。

しかし、これはフェネクスが狙って行ったことである。弾き出された反動をそのまま
利用しつつ、フェネクスはユークリッドの真下を取った。

「これで・・・!!」

二振りのビームサーベルをユークリッドの底部に突き刺すフェネクス、力を込めるよ
うに手を握るとビームサーベルの出力が上がった。その出力の大きさにビームサーベ
ルの色がピンクから白へと変わるほどだ。

「うおおおおオオオオ!!」

渾身の叫びと共にビームサーベルを縦に振り抜く、白く輝くビームサーベルはユーク
リッドの装甲を焼き切り、真つ二つにした。

「倒した・・・、のかな・・・?」

一方、ヒイロはバード形態に変形し、ユークリッドの周りを飛びまわり、攪乱してい
た。ヒイロのスピードについていけず、ビームを闇雲に発射するユークリッド。

「当てる気のない攻撃・・・なら!!」

ユークリッドの攻撃を見切ったヒイロは突如として方向変換を行い、真正面からユークリッドに突撃をする。途中、バスターライフルを放つが、それはバリアーに阻まれる。しかし、バスターライフルの光が収まると先ほど前目の前にあつたヒイロの姿は忽然と消えていた。咄嗟に辺りを見回すような素ぶりを見せるがヒイロの姿は見当たらない。

ユークリッドのレーダーに突如としてアラート音が鳴り響く。レーダーが指し示したのは――自身の真上、そう気づいたときには既にユークリッドの胴体は真つ二つに斬られ、爆散していた。

「・・・任務、完了。」

抜刀していたビームサーベルをシールドに戻すし、爆発して海へと落ちていくユークリッドを見て、呟いた。

「やっぱり、A Iかその類のものでしたか。通りで機械的な印象を覚えると思ったら・・・。」

ヒイロはユークリッドの対応からどこか機械的な印象を受けていた。相手が機械ならマニュアルにないようなことをしてしまえば、対応は遅れる。

そう思ったヒイロはバード形態時にバスターライフルを撃ち、目くらましをした後、ユークリッドの真上を取り変形を解除し、自由落下しながらビームサーベルで斬り裂い

たのだ。

ヒイロが目を向けるとアリスとキラ、ゲルズゲーとユークリッドが戦っているのが目に入った。

「っ!!!」

アリスが体を晒し、飛来するビームを紙一重で避ける。お返しにビームスマートガン
を放つがユークリッドの張るバリアーに阻まれる。

「……まあ、私は少々図体が大きいから、狙われるのはわかっていますけどね……」
「どうするの？ 遠距離から攻撃が効かない以上、接近戦しかないと思うけど……」

ゲルズゲーと対峙しているキラがちょうど背中合わせのような形で後ろにいるアリスに話しかける。

「敵は常時バリアーを展開している訳ではありません。だから、反応できない距離、もしくは場所までくればいいんです。」

そういう、アリスは軽くキラに耳打ちをする。それに対し、キラは頷いた。

キラはゲルズゲーに対し、クスイファイアスレール砲を放つ。ゲルズゲーは避ける素ぶりも見せず、バリアーで防いだ。砲弾はバリアーに当たり、ゲルズゲーを爆煙で包む。

そして、爆煙が晴れ、バリアーを一度閉じたゲルズゲーが見え始めた瞬間――

「アリス!!!」

「キラ!!」

お互い、名前を呼び合うとビームスマートガンとルプス・ビームライフルをゲルズゲーに向けて発射する。突然の出来事に反応ができないゲルズゲーは腕に持っている二丁のビームライフルを撃ち抜かれ、手で爆散する。

しかし、当然、ユークリッドが背中を向ける形となつたアリスに対し、確実に当てんとするため接近しながら、ビーム砲をここぞと言わんばかりに発射する。

「そう来るのは、分かってる!!」

後ろを向いていたアリスの前にビームを撃ち終わつたキラが踊り出て、腰部にあるラケルタ・ビームサーベルを空いている左手で抜刀、居合の容量で放たれたビームを斬る。

ユークリッドは接近するスピードを落とさずに再びビームを放とうとする。

あわよくば突撃して物理的な攻撃に出るつもりなのだろうか。

だか、ユークリッドがビームを放つより速く、下から胴体を水色のビームが貫いた。たちまち、ユークリッドは爆炎に包まれた。その様子をいつのまにか顔だけユークリッドに向けていたアリス。その手に持つビームスマートガンは下を向いていた。その背後にゲルズゲーが下半身部のクローでアリスを握り潰さんと目前まで迫って来ていた。

しかし、そのゲルズゲーも後方からというありえない方向から来た緑色のビームに

よって胴体を貫かれ、たちまち爆散した。ゲルズゲーが爆散したのを顔だけ向けて確認したキラはホツとした表情をすると、アリスと向き直る。その表情は若干疲れたような雰囲気滲み出ている。

「ふう、いきなりだったけど、何とかなった・・・。」

アリスはニーバツクルから射出していたリフレクターインコムを戻す。アリスもキラと同じように若干疲れた表情を滲み出していた。

「ええ、リフレクターインコムの同時使用かつ、別々の方向に動かすなんて、中々出来ませんよ・・・。」

「よくやろうと思ったね・・・。」

アリスはわざと隙を見せ、接近させることにより、相手の視界を狭め、先においておいたりフレクターインコムを使ってビームを直撃させるという、かなり無茶な荒技を取った。

「二歩間違えたら、本当に危なかったよ・・・。」

そうごねながらもアリスに対し、笑顔を向けるキラなのであった。

一方、ザムザザーと対峙した刹那、ビームを掻い潜り、ザムザザーに肉薄する。

ザムザザーはビーム砲を出していた腕部をクローへと切り替えた。

「近接攻撃も持っているのか・・・。アレに掴まってしまうえば、強烈なダメージは免れない

な・・・」

クローで刹那を捕らえんとするザムザザーに対し、刹那は下へ潜り込もうとするがザムザザーの各脚部に装備されているバルカン砲『イーゲルシユテルン』により形成される弾幕により阻まれてしまう。

「下に潜り込むのは厳しいか・・・。なら、強引に突破する!!」

刹那はGNフィールドを展開し、イーゲルシユテルンの弾幕を無理やり突破する。

真下に潜り込んだ刹那はGNソードⅢでザムザザーの底部を突き刺した。しかしサイズ差の前に思った以上のダメージを与えることは出来ず、ザムザザーのビーム砲の反撃に合う。

「くっ!? 浅かったか!!」

一度ザムザザーから距離をとった刹那、遠距離からのビーム、実弾が効かない以上、再度接近するしか手はない。

刹那はザムザザーに肉薄する。それに対し近づけまいとしてザムザザーは腕部のビーム砲に加え、イーゲルシユテルンと言った兵器を撃ちまくる。

「下手な戦艦より濃い弾幕・・・。だが、ここは私の距離だ!!」

迫り来るビームを上を飛び上がることで避け、そのまま上から叩き斬ろうとする刹那。ザムザザーは腕の一つをクローに切り替え、刹那に掴みかかる。

クローをよく見ると振動させることで掴む部分が熱を持ち、赤く赤熱していた。

余計に捕まるわけにはいかないと感じた刹那は空いている左手で、ギリギリクローに捕まらない位置、人間でいう手首の部分に手をかけ、逆立ちをする。そして、そのままGNソードⅢを振るい、ザムザザーのクロー部分を斬り落とす。

勢いそのまま前転宙返りをしながら、斬り落とされた腕の残った部分を足場にし、ザムザザーの胴体部分にGNソードⅢを突き刺す。コックピット部分を貫かれたザムザザーは動きを止め、爆散した。

「ファーストフェイズ、終了。ヒイ口達と合流する。」

「ヤバイ・・・囲まれた・・・。どうするよ？アム口。」

「ちつ、やはりフェネクスの言う通り、多勢に無勢だったか。だが、ハイネのおかげで思ったより長く時間稼ぎができた。ありがとう。」

四方八方を深海棲艦に囲まれながらも笑顔でハイネに礼を言うアム口。

「へっ、そいつはしつかりとここを切り抜けてから言つてほしいぜ。」

アム口とは顔を合わさず、アロンダイトを構えるハイネ、彼女らの周りには戦闘の激しさを物語るように斬られたり、蜂の巣にされたりした深海棲艦の残骸が多数浮いていた。それでもアム口達には大した損傷は見られない。

アムロとハイネ、深海棲艦がお互い睨み合うことで戦闘は膠着状態に陥る。

その沈黙を破ったのはアムロ達でも深海棲艦でもなかった。

聞こえてきたプロペラ音と凄まじい爆音、飛来した砲弾はアムロ達を囲んでいた深海棲艦の一隻を確実に仕留めた。

深海棲艦の一瞬の動揺に漬け込み、アムロとハイネは猛チャージを仕掛け、アロンダイトやビームサーベルを用いて、自身達を囲んでいた深海棲艦を海に沈めた。

「アムロさん、遅くなりました!!」

声の聞こえてきた方向を見ると大和率いる合同艦隊が見えてきていた。

「いや、むしろちようど良かった。感謝する。」

「そつちも無事のようにだな。良かった。」

「アムロ達が敵艦隊に突っ込んでから深海棲艦の動きが鈍ったからここまで来れたんだよ!!」

はしやぎながらアムロ達に近づいてくる島風達佐世保鎮守府の面々の元氣そうな顔を見て表情が自然と緩む。

しかし、その表情もすぐに厳しい顔に変わった。その表情には焦りも含まれていた。ハイネとアムロのレーダーに反応に動体反応。方角はちようどアムロ達の真下だ。

「みんな離れろ!!」

突然のアム口の檣にキョトンとした表情を見せる合同艦隊の面々、ハイネは一番近くにいた島風を咄嗟に突き飛ばす。その瞬間、アム口とハイネを突如上がった水柱に包まれる。

驚いて動けないでいると水柱からアム口が吹き飛ばされてきた。アム口が海上に叩きつけられる様子を見てみると同時に水柱から出てきたのはもう一機のザムザザー。クローに切り替えられている腕を見るとハイネが捕らえられていた。

「ハイネ!!」

島風が心配そうにハイネに叫ぶ。それに対しハイネは苦しげな顔をしながら笑顔で答える。

「しん、ばいすんな……。こんなすぐに、ぬけだしてー」

そこまで言いかけ、拘束を解こうとしたその時、ザムザザーがクローに力を込めた。

「ぐっ!? あ……。が……。!! はっ。!!!」

MSとは桁違いのパワーに思わず肺から息が吐き出される。ハイネ、もといデステイニーはヴァリアブルフェイスソフト装甲が使われている。物理的な攻撃には絶大な効果を発揮する。しかし、それはあくまで外側の話だ。内側にダメージが入る、衝撃や圧迫といった攻撃には滅法弱い。

(やっば……。!! 苦し……。!! 意識が……。!!)

その時、ザムザザーに砲弾が叩き込まれる。しかし、展開するバリアー、『陽電子リフレクター』の前に阻まれてしまう。

だが、そのおかげで若干力が緩んだのか意識を暗転させずに済んだハイネ。沈めかけていた意識を叩き起こし、砲撃の主を探す。撃つたのは島風のようなのだ。

「ハイネを離してよ!!」

ザムザザーに鋭い目を向けながら、島風は周りでびよこびよこ跳ねている連装砲ちやんに再度撃たせる。しかし、陽電子リフレクターの圧倒的な防御力の前には無力だ。

「島風、離れろ!!迂闊に刺激するな!!」

「えっ……?」

長門から呼びかけられ、島風が我に帰った時にはザムザザーはハイネを掴んでいる腕とは別の腕を島風に向けていた。その腕からビーム砲に島風は恐怖から動くことができない。

「あー、」

(やめろ……やめてくれ……)

ハイネは必死に拘束から逃れようとするが、パワーで負けてしまい、逃れることができない。

そして、無情にもビームは放たれ、島風の付近に着弾し、大爆発を起こした。

立ち上る爆炎にハイネは自身の無力感に苛まれる。そして、湧き上がるのは、怒りだ。自身の無力さと仲間を殺したザムザザーへの怒り、ハイネは悲しみにくれながら、ザムザザーに対し、怒りを爆発させる。

「許せねえ．．!!許してたまるかよ．．。まだ子供だったんだぞ．．!!それを．．お前は．．お前はああああ!!」

ハイネが慟哭する。まさにその瞬間、ハイネの中で『種』が割れた。

第38話 S. E. E. D / そのまなぎしの先には――

ハイネの中で『種』が割れたことで思考がクリアになる。目から光は失われたがその瞳の奥にある闘志はむしろ跳ね上がっていた。それと同時にハイネ自身の武装についての知識も頭の中に流れ込んでくる。

ハイネは自身の手をザムザザーのクローにあてると――

「吹っ飛ばええええー!!!」

一瞬、ハイネの手のひらが発光したかと思うとハイネを掴んでいたクローが爆発を起こし、解放される。ハイネは手に装着されていた武装、『パルマ・フィオキーナ』でザムザザーのクローを破壊したのだ。

「うおおおおおー!!!」

クローが壊されたのを驚いているような反応を見せるザムザザーを尻目にハイネは対艦刀、アロンダイトを引き抜き、ヴォアチュール・リミユールをフル稼働にして、ザムザザーに突撃を行う。

「こいつなら、どんなやつが相手だって!!」

ハイネの背中中のウイングから放出されるヴォアチュール・リミユールの光はハイネ

の動きに残像を生み出させ、ザムザザーが翻弄する。手当たり次第にビーム砲『ガムザートフ』を放つがそれらを全て見切り、ザムザザーに肉薄する。

その様子を見ていた長門たちはハイネの変わりように皆驚いたような表情をあげていた。

「な．．なんだ？ あれは、ハイネの動き、いつもとは全く異なる．．!？」

長門がハイネの動きを掴もうとするが、目がほとんど追いつかない。

ザムザザーがクローを振りかざすが既にハイネの姿はそこにはなく、次々とザムザザーの装甲を抉り取っていく。

そして、ついにザムザザーが損傷をあげた箇所からスパークをあげ、動きが固まった。ハイネはその瞬間を見逃さず、ザムザザーのコックピット部分をアロンダイトで突き刺す。すかさずアロンダイトを抜き取ると、アロンダイトにより穴が空いた部分をパルマ・フィオキーナで追撃。ハイネがザムザザーが離れると同時にザムザザーは爆散し、火の玉となった。

ハイネの戦いぶりに思わずハイネの顔を見てしまう艦娘達。そのハイネ自身は悲しげな表情をしていた。むしろ、今にも泣きそうだ。

「敵を倒したけど．．．島風が帰ってくるわけじゃない．．．。くそ．．．くそ．．．こんちくしょー「おい、勝手に殺すな!!」．．．え？」

ハイネが慟哭しかけたその瞬間、明らかに島風ではない声の持ち主がハイネに対し、怒声をあげる。

「あれ・・アムロさん・・? って、どうしたんですか!? その左腕!!」

声の主はアムロだった。いの一歩にアムロを見た横須賀の吹雪はアムロの左腕の見て驚愕の表情をあげる。アムロの制服が焼き切れ、その下にあった皮膚は大きく焼け焦げていた。

「ど、どうしたんだよ!? それ!! というか、勝手に殺すなって、どういうことだよ!!」

思わずハイネがアムロに駆け寄る。その瞳には光が戻ってきていた。

ハイネがアムロに今にも掴みかからんとしている様子を見て、軽いため息を吐くと――

「見ての通りだ。艦装に損傷を受けてしまったが、体自体に大きなダメージはない。」

アムロが軽く後ろを指差すとハイネの視界に艦装にダメージは受けているもの五体満足でいる島風の姿があった。

「島風!? ど・・どうして・・うつ!?」

ハイネが島風に駆けよろうとしたとき、胸を押さえて触り混んでしまうハイネ、心配した古鷹がハイネに寄り添う。

「は、ハイネさん!? 大丈夫ですか!？」

「おそらく、ザムザザーに捕まったとき、肋骨をやられたんだろう。だが、あそこまで動いていたということは、ヒビですんだのだろう。」

「な、なあ、アムロ……？どうして島風が生きてんだよ……？」

冷静に分析を行うアムロに対して、息も絶え絶えといった様子の子のハイネの質問にアムロは特に気にする様子もなく答えた。

「防いだからだ。コイツでな。」

そういい、自身のフィン・ファンネルを射出すると、アムロの周りに三つのフィン・ファンネルを基点にして、ピンク色のフィールドが形成される。

「な、なんだよ!? それ!? …… イツダア……!!」

思わず叫んでしまい、悶絶するハイネ。その様子を見ながらアムロは説明を始める。

「ヒイロ達と別れる前に宇宙世紀にはビームを弾く「フィールド」があると云っただろう? それがこれだ。」

「そ、それが…… フィールドだったのか……。でもそれだとその左腕は……？」

「……思っていた以上にザムザザーのビーム出力が高くてな。フィールドだけでは凌ぎきれなかったんだ。フィールドで凌ぎきれなかった分は咄嗟にシールドで防いだのだが、それでもギリギリがいいところだった。結果として防ぎきれたのだが、程なくシールドは爆発、そのままシールドの裏に仕込んであったミサイルやビーム砲が誘

爆。この火傷はその時のものだ。」

アムロは苦い顔をしながら火傷を負った自身の腕を見つめる。だが、傷とは別にアムロは別のことを考えていた。

（ハイネのあの爆発的な戦闘力の向上はなんだったんだ？ ガロード程ではないにしろ、人が変わったようなものだった。）

まあ、ガロードはそもそも人格自体がかわっていたのだが、そこまで考えたところで、自身の火傷を受けていない腕、つまるところ右腕をだれかが掴んでいるのに気づく。顔をあげると、なにやら鬼気迫っているような顔をしている赤城が目に入る。

「アムロさん、火傷をなめてはいけません。ウジでも湧いてしまったら、最悪、切り落とさなければならなくなります。さあ、早く!!」

「お、おい、待て!? 焼けたのはあくまで皮膚組織までだ!! 骨や筋肉には達してはいないぞ!?!」

思い切りアムロの右腕を引っ張る赤城、予想外の怪力に赤城の手を出して振り切るこ
とができない。そして、どこから取り出したのか救急箱のようなものを取り出してい
る。

「ちよつと待ってくれよ。その救急箱、どこから取り出した?」

思わずツツコミを入れてしまうハイネ、だが、のちに藪蛇を突いたことを悟る。

ほかの艦娘、主に佐世保の艦娘達が、ハイネに視線を集める。
(あ、やべ。)

そう思い、逃げようとしたハイネだが、そばにいた古鷹に取り押さえられる。

悲しいかな。艦船とMSでは元々のサイズに差がありすぎる。そのため力で押し負けてしまい、ハイネは動くことができない。

「お、おい、古鷹。ちょっと待て、は、話せばわかる。ほ、ほらアムロも言つてただろ？
ヒビで済んでるって……。だ、だからよ。」

古鷹は無言でハイネを取り押さえ続ける。顔は笑つてはいるが、その目はどこか笑つていなかった。

ハイネのそばに金剛たちが近づくと、手にはどこで手に入れたのか知らないが、チューブの容器に『カルシウム100%』とどでかく書かれたものが握られていた。

「お、おい。待て、待つてくれ。お、落ち着けよ。大体そんなので治るわけー」

そこまで言いかけたが金剛にチューブの中を突つ込まれ、ハイネの意識はそこで暗転する。

辺りにはハイネの絶叫が鳴り響いたそうなの。

「……何があつたんですか？」

ヒイロ達と合流してヒイロが開口一番に言ったのはアムロとハイネがやつれた表情

をしていることについてだ。

ヒイロに聞かれたハイネは死んだ魚のような表情でヒイロに告げた。

「……しばらく乳製品を喰いたくねえ……。具体的にいうとカルシウムが入ってるやつ……。」

状況がよく分からなかったため苦笑いしかできないヒイロはアムロに視線を向ける。目が合ったアムロはヒイロに疲れた表情でため息をつきながら答える。

「そのうちで構わないから、彼女たちに応急手当の手ほどきをしてくれないか？ 流石にこれは目に余る……。」

そういい、包帯でとりあえずグルグル巻きにされたような左腕を見せるとヒイロ達は共通して頭を抱えた。

「……分かりました。とりあえず、見せてくれませんか？」

ヒイロに促され、アムロは包帯と化した左腕を見せる。ヒイロが手早く包帯を取り外す。すると包帯に隠れていた火傷が露わになる。

「本当に何があったんですか？ 深海棲艦から誰かを庇いました？」

「半分当たりで半分外れ、といった具合だな。」

そういうとアムロはヒイロ達にザムザザーが一機潜んでいたことや火傷の経緯を伝える。

「……ザムザザーが、もう一機……。そうでしたか。島風ちゃんは特にこれといった不調はありませんか?」

「うん、連装砲ちやんが一つ爆発に巻き込まれちゃったけど、それ以外は大丈夫。」

島風はヒイロに問われると首を横に振り、問題ない、といったリアクションをする。

「……すまないな。もう少し早めに退避できればなんとかなったのだが。大事にしていたんじゃないのか? 連装砲ちやんのことを。」

「それは、そうだよ。でもアムロが守ってくれなかったら、連装砲ちやんどころの話じゃなかったから。」

「……そうか、君がそういうのであれば、それ以上は何も言わないこととしよう。」

島風にそう言われ、表情を緩めるアムロであった。ヒイロも手早く包帯を巻き直し、切り落とした包帯を片付けていた。

『……タイ……りタイ……』

そこに突如として頭の中で響くような声が聞こえた。思わず振り向くアムロ、しかし、そこにはだれもいなかった。ヒイロ達も同様に振り向くような素ぶりをしている。

「……聞こえたか?」

「はい、突然だったので、よく聞き取れませんでした。」

目線だけを合わせて確認を取るアムロとヒイロ。

「いまのは、テレパシーのようなものか？」

「かも、知らないね。他の人たちはどう？」

利那の質問に答えつつ、キラが艦娘達にも確認を取ると揃って聞こえた、との声が帰ってくる。

「子供、だったか？今の声。」

「そのようにも聞こえましたけど……。アリスさん、方角、分かりますか？」

ハイネの言葉に同調しながらフェネクスはアリスに尋ねる。しかし、アリスは難しい顔をした。

「……。解析不能、といった具合です。頭の中で直接言われたような感覚でしたので。」

「やっぱりですか……。」

フェネクスは肩を落とすように落胆の表情をあげる。フェネクスも頭の中で直接言われたような感覚だったのはわかっていた。フェネクスが顔をあげると、ふと、ガロードの顔が目に入る。何か、一点を見つめているような――

「ガロードさん？どうかしました？」

思わずフェネクスが尋ねるとガロードは無言で指をさした。指し示す先には何も見渡らない。

「あつち……。あの水平線の向こうになにかある……。」

ということはおそらく方角を指しているのだろう。そう考えに至ったヒイロは大和に方角を尋ねた。

「その方角は・・・、アイアンボトム・サウンドの奥地・・・つまり、我々の最終目的地です。」

「・・・そうですか、ちょうどいいのか、悪いのか・・・といった具合ですが・・・」
どのみち行くしかない。そう判断し、大和の指示でアイアンボトム・サウンドの奥地へと進路を取った。

奥に行けば行くほど空を厚く覆っていた雲は次第に灰色から赤へと色を変えていった。

「おいおい、これってかなりヤバくねえか？」

「雰囲気だけでわかる・・・。この先にいるのはかなり手強いぞ。」

アムロとガロードが赤く染まった雲を見て、敵の強大さを感じとる。

そして、水平線にとんでもないものがヒイロ達の目に入った。

「な、なんなんだよ!!アレは!!」

「光の、柱・・・?」

ハイネと刹那が目を見開きながら天空に突き刺さるようにそびえ立っている光の柱を見つめる。

「赤城さん、彩雲の発艦を!!」

ヒイロが早急に指示をどこ飛ばす。あれは本能的にとんでもないものだと思察したからだ。赤城はすぐさま彩雲を飛ばし、偵察へ向かわせる。

程なくして彩雲から報告が挙げられるが、内容は赤城の表情を歪ませるほどのものであった。

「つ……彩雲より報告!!あの光の柱の麓では半径30メートルクラスの穴が形成されている模様!!並びに敵の大艦隊を発見せり!!数は……戦艦棲鬼2空母棲鬼1を筆頭におよそ200!!」

「こ、これってかなりやばいって感じ?」

ガロードが額から汗を垂らしながらヒイロに尋ねた。ヒイロは苦虫を噛み潰したような表情をあげていた。

『カエリタイーカエリタイー』

奥地に進んだためか、頭の中に直接呼びかけてくるような声ははつきりと聞こえてきた。

「帰りたい……か。」

「……あまり、良い予感はありませんね。」

先ほどは遠かったため正確な場所は分からなかった。しかし、今度はアム口とフェネ

クスにもはつきりわかった。

「……あの中なのか？声の主は。」

刹那が光の柱を見据えた。こちらを見下ろすようにそびえ立つ巨大な柱は否応にもヒイ口達の気を引き締める。

「大和さん、戦闘海域には、あとどれほど？」

大和は電探担当の妖精さん呼び出すと妖精さんは大和に耳打ちをした。

「あと30秒ほどで戦闘海域に突入します!!各員は戦闘態勢を取ってください!!」

大和の指示とともに砲塔を構える合同艦隊、ヒイ口達も戦闘態勢を取った。

「アムロ、ハイネ!!怪我しているんですから、無理は禁物ですよ!!」

「この状況で言っていられるか!!」

「わかってるけど、そうも言ってもらえないぜ……。こいつは……」

「……ですよ。すみません、不粹でしたね。」

ヒイ口達は空へ飛び上がり海上から自分たちを見つめる戦艦棲鬼二隻と目を合わせた。

「全艦、攻撃を開始してください!!暁の水平線に勝利を!!」

『了解!!』

大和の号令とともに艦娘と深海棲艦の砲撃が火を噴いた。

第39話 戦火の先に

「全砲門、目標戦艦棲鬼!! 斉射、初め!!」

大和の主砲であり、代名詞でもある『46cm三連装砲』の砲門が切られ、砲弾が発射される。三基九門の砲塔から放たれた砲弾は敵艦隊の一番先頭にいた二隻の戦艦棲鬼のうち、片方に集中する。

軽いキノコ雲が上がる。大和の主砲はそれほどの威力なのだと、ヒイロ達は舌を巻いて見ていた。

「すっげえー……長門や金剛より主砲の威力が高えな……」

「初弾を命中させる技術にも脱帽ものだな。」

「だが、相手はあの戦艦棲鬼だ。そう簡単に行くとはー」

ガロード、刹那が大和に対し、感嘆の声を上げるが、アムロは反面、厳しい目で戦艦棲鬼を包んでいる爆煙を見つめていた。アムロの想像通り、爆煙から姿を見せたのはダメージは見受けられるものの、健在な戦艦棲鬼の姿であった。

「やはり、一筋縄ではいかないか。」

アムロは当然といった表情で見ているところに空母棲鬼が指示を下しているの

が目に入った。その指示が深海棲艦の艦隊に伝わり、敵の艦載機が発艦される。ヒイロ達の目にもその光景は写っていた。

「赤城さん達空母も艦載機が発艦を始めています。どうします?」

「もはや定型化してきていますが、発艦される艦載機の援護を。いくら激しい戦闘となってもまずは制空権の確保を優先してください。満足にアイオワさん達も撃てませんし。」

アリスがヒイロにそう尋ねると、ヒイロはそう指示を行った。

「敵の艦載機が発艦を確認!!数がヤバエぞこれ!!」

「空母の皆さんは艦載機が発艦を急いでください!!」

横須賀の摩耶が対空兵装を準備しながらごねる。大和はその報告に対し、艦載機が発艦を促した。そこに呉の扶桑から意見具申が入った。

「あの、ヒイロさん達に制空権確保の援護をもらうのは、どうでしょうか?」

「ヒイロさん達に、ですか……。そうですね。彼女らには申し訳ありませんが、そうしてもらいましょう。佐世保の皆さんは構いませんか?」

大和はアイオワ達にそう聞いた。なぜかという、ヒイロは他の艦娘達とは違い、提督の身でありながら戦場に出ている。提督が危険に陥るのはあまりアイオワ達が良い気はしないのではないか。そんな気がかりから大和は確認を取った。しかし、帰っ

てきたのは予想に反するものでー

「通信の必要はNo thingだと思おうわ。Admiral達もそれは分かっているはずよ。」

アイオワの言葉に佐世保の艦娘達は笑顔でうなづいた。それとほぼ同時に、ヒイロから通信が入る。

『こちら、ヒイロ・ユイ。これより制空権確保の援護を行います。そちらは艦載機の発艦を急いでください。』

「ほらね♪」

アイオワが大和に対し、ウインクをした。それを見た大和は顔を綻ばせながら、通信機を口に回す。

「お願います。ですが、数はかなり多いです。お気をつけて。」

大和が通信を終えると、戦艦棲鬼に目を向ける。本体と思われる人型の後ろに豪腕を持つ艀装が立っている。その姿は見たものに恐怖を感じさせる。

大和が主砲を放とうとした時、爆音と爆光が戦場に轟いた。山吹色の爆光は敵艦載機が墜ちたと思われる小さな爆発を起こしながら、一直線に進んで行った。

「な、なんですか!?!、今の光と音は!?!敵の新兵器か何かですか!?!」

大和が驚いた様子で空を見上げる。しかし、そこには先ほどの規模に見合うほどの大

きさを持つものは見えなかった。困惑の表情を挙げていると、再び、ヒイロから通信が入る。

『お気遣い感謝します。ですがこの通り、敵の艦載機はそれほど問題はありませぬので、ご心配はなさらず。むしろそちらが気をつけてください。』

ヒイロからの通信が終わると、大和は引きつ面で佐世保の艦娘達に尋ねた。

「えつと・・・今のは、ヒイロさんが？」

それに対し長門はその光景に驚きながら答えた。

「いや、我々もあの威力は初めてだが、あれは提督の仕業で間違いない。」

「Oh・・・やっぱりとんでもパワーデース・・・」

金剛が顔をひくつかせていると艦隊の周辺に水柱が上がった。戦艦棲鬼からの砲撃が飛んできたのだ。

「お姉様!!無事ですか!？」

「問題ナツシングね!!ワタシに構わないで比叡、ユーが決めるデース!」

「はい!!気合い、入れて、撃ちます!!」

金剛からの期待に応えるべく、比叡は損傷を受けている戦艦棲鬼に向け、砲撃を開始する。しかし、比叡の持つ『35.7cm連装砲』では戦艦棲鬼の硬い装甲を貫くことは出来なかった。

「ううっ……!!か、硬いつ!!こ、こんなのを、提督達は……!!」

『……ああいう強敵に関してはまだ闇雲に撃つても弾の無駄ですよ?』

「ひ、ひゃい!?て、提督……?か、艦載機と戦っているんじゃない!?」

突然のヒイロからの通信にびっくりした反応を見せる比叡。

『言いましたよね?特に問題はないと。艦載機は上を取ってしまえばこちらのものです。』

「ひえー……そうですかあ……。」

驚きを通り越して若干呆れ気味の比叡を尻目にヒイロは通信を続ける。

『戦艦棲鬼のように硬い装甲を持つ敵と戦う時、取るべき対策は主に二つです。一つは内側から攻撃する。しかし、これは巨大な敵……要塞とかと戦う時に取れる手法なので今回は置いておきます。』

「も、もう一つはなんですか?!もつたいぶらずに教えてください!!戦艦棲鬼の攻撃が激しいんですよ!?!こっちは!!」

戦艦棲鬼の砲撃を辛うじて避けながら戦う比叡。金剛も砲撃を行うが二人とも大和ほどの火力はないため決定的な一撃が入らない。わずかにアイオワと長門の砲撃がダメージになる程度だ。

『もう一つは一点を徹底的に攻め続けること。いくら硬いとはいえ、耐久力が無限にあるわけではありませんので。ついでですが、相手の弱点、ないしは損傷を受けた箇所ならなお良しです。』

損傷を受けた箇所、そう言われて比叡は戦艦棲鬼のある一点を見つめた。あるではないか、大和の砲撃により損傷を受け、煙を上げている部分が――

「わかりましたあ!!比叡、全力で、狙い撃ちます!!」

『各員にも通達をお願いします。こちらはこちらでやらなければならないことがあるので。』

ヒイロからの通信が切れると、比叡は長門に早速、ヒイロと話した内容を伝える。それを聞いた長門は、

「なるほど、一点集中か……。わかった。各艦に告ぐ!!大和の作った損傷箇所に徹底的に攻撃を続ける!!」

長門の号令のもと、佐世保の艦娘達は戦艦棲鬼の損傷箇所に向けて砲撃を行う。しかし、これ以上やらせないというように、戦艦棲鬼の艀装が豪腕な腕を用いて飛来する砲弾を振り払った。

「うっわー、なにあれ。あんなのってありなの?どうする?大井っち。」

北上が戦艦棲鬼に苦笑いを浮かべながら大井の方を見ると大井は何か怖い顔をしな

がらブツブツと言っていた。

「ちつ、魚雷が入らないじゃないの……。硬すぎんよ……。魚雷ぶち込んで中から爆破してやろうかしら……。」

「大井っちー?」

「はい♪北上さん♪どうかしましたかー(≡▽≡)」

北上に呼び掛けられたからか怖い顔から一転、満面の笑顔になる大井。

それに北上は特に気にしない様子で話しを続ける。

「んー、いや、どうする?あいつ、ホントに硬いんだけど規格外だよってーおおりよ?」
「どうかしましたか?北上さん……。って、なにあれ。」

北上の視線につられるように空を見るとオレンジと緑、二つの光が急激なスピードで戦艦棲鬼の後ろから突っ込んでくるのが見えた。

「刹那!!遅れんなよ!!」

「問題ない。このまま切り裂く!!」

ハイネと刹那だ。アロンダイト、GNソードⅢからそれぞれビーム刃を形成する。

気づいた戦艦棲鬼が迎撃を行おうとするが、時すでに遅し。

ハイネと刹那が一閃すると、戦艦棲鬼のあの砲弾を弾いた豪腕が両方とも斬り落とされる。

「今だ!!早く撃て!!」

ハイネからの急かすような声に長門達は言われるがままに一斉砲撃を行う。放たれた砲弾は防ぐものがなくなつた損傷箇所直撃。戦艦棲鬼は大爆発を起こして海に沈んでいった。

「や、やりましたあ!!」

比叡が喜びながらハイネ達に目を向けると、刹那が笑顔を、ハイネはサムズアップをしていた。しかし、ハイネが軽く胸を抑える素ぶりを見せると刹那が心配そうに近づく。ハイネは刹那に笑顔を向け、そのまま再び空へと戻っていく様子が見えた。

「提督が向かわせてくれたのかもな。全く、あれほどの敵艦載機を相手にしながらハイネと刹那を寄越せる余裕があるとは・・・」

不意に長門がいくつもの爆発が起こっている空を見つめていった。

赤城達空母の艦載機を加えた制空権の確保はヒイロ達の優勢で進んでいた。

「うわー、向こうの戦艦棲鬼よりもつとえげつないのがいたわー」

「本当にそうですよね〜・・・。アムロさんなんかときおり後ろを見ずに敵艦載機を落としている時もありますし。」

「あーわかるー。どうやったらあんな芸当ができるんだか・・・」

大井は北上とともに苦笑いをして空を見上げていた。

「あの、倒したのは構いませんけど・・・もう一隻の方は・・?」

「あ、そうだった。長門さん、もう一隻はどうなってるー?」

神通からの指摘で思いだした北上は長門に確認を行う。

「大和や扶桑といった横須賀と呉のチームが戦っているようだが・・。」

長門はもう一隻の戦艦棲鬼と戦っている横須賀と呉の艦隊を見据える。

そちらは大和を攻撃の基盤としてうまく連携を組んで戦艦棲鬼を圧していた。

「問題はないようだ。さすがは横須賀と呉の艦隊だ。我々とは練度がまるで違う。」

「まあこつちはまだできてばかりだしねー。提督達のついでで出されてもらってるっていうのが9割がただろうし。」

「それならme達はme達なりにできることをやりましょう。例えば、アイツを相手取るとか。」

長門と北上が話している中、アイオワが指を指す先には空母棲鬼がいた。艦載機の統括をしているのを倒せば、戦局は幾分かこちらに傾くであろう。

「ええ、そうですね。私達にできることを成しましょう。」

赤城が領きながら空母棲鬼を見据える。艦載機は発艦させてしまっているため、できることは少ない赤城だが、それでもなにもしないよりはマシだろうと考えた。

「よし。ならば、佐世保鎮守府の艦隊は空母棲鬼の討伐に移る。各員、やられるなよ。」

『了解!!』

「はあっ!!」

ヒイロは飛来する敵の猫型艦載機をビームサーベルで真つ二つにする。味方の艦載機の突入コースを確保しつつ、敵の艦載機を徐々に減らしていくが、いかんせん数が多い。

「ヒイロっ!!」

呼びかけに咄嗟に反応し、その場を離れると五つの光が敵の艦載機だけを狙い落とす。キラの『フルバーストモード』による超精密射撃だ。

落とした数は今のだけで40はくだらない。

「敵の艦載機だけを……。さすがです。」

「そんなことはないよ。もう一回撃つから合わせてくれる?」

「了解です。タイミングはそちらに任せます。」

「わかったよ。ターゲット、マルチロック……」

キラ、もといフリーダムガンダムに搭載されている『マルチロックオンシステム』により、一度に複数機をロックすることが可能だ。キラは目を閉じながらも意識を集中させる。

「今!!撃って!!」

「攻撃開始。」

キラのフルバーストによる砲撃は正確に敵艦載機を貫く。中には溢れものもあつたが、それはヒイロのバスターライフルにより消滅した。

(くっ……ツインサテライトキャノンが使えたら……。)

ガロードは空を覆い尽くす赤い雲を睨みながらごねる。

太陽光発電をすることで真昼間からツインサテライトキャノンが撃てるのはありがたいが反面、逆に夜や太陽が隠れてしまつている状況では使えなくなつてしまつた。

(いや……あれは、そう易々と使つていい代物じゃねえな……。そう考えると自分の武装の貧弱性がヤベエな……。)

ツインサテライトキャノンが使えない時にガロードが扱えるのは専用バスターライフルとハイパービームソードが二振りの合計三つしかない。バルカン等々は人の体を持つた際にオミットされてしまつている。

ガロードが敵艦載機の多さに手を焼いていると、下方からミサイルが飛来する。緑色の粒子を出しながらソレは敵艦載機に着弾し、複数巻き込みながら爆発する。

「GNマイクロミサイル……？刹那かつ!？」

「無事か？手を焼いているようだったから援護させてもらった。」

「長門達の方はどうなつた?？」

長門達の援護から戻ってきたハイネと刹那だ。戻ってきたということは長門達の方は問題なくなったのだろうが、確認のため一樣聞いておいた。

「アイツらもうまくやってる。心配はいらねえよ。」

ハイネが手短かに伝える。ガロードにはそれで十分であった。

「もう少し援護してくれねえか？ 武装の少なさもあつてちよつと手が回らなくなってきたからよ。」

「元よりそのつもりでこちらにきた。遠慮は必要ない。」

「そういうこつた。気にすんな。」

刹那が背中中のオーライザーから『GNビームバルカン』をばら撒き、敵艦載機を牽制する。

「こいつで・・・!!」

ハイネが艦載機が集まったところにちよう距離ビーム砲を叩き込み、一網打尽にする。

「ガロード、残ったやつを頼む!!」

「あいよ！任せなあ!!」

ガロードが撃ち漏らした敵艦載機を殴る蹴るといった近接格闘で粉碎していく。爆弾を抱えているものもあつたが、ガロードの強靱な装甲の前にこれといったダメージは

ガロードにはつかなかった。

「あれは・・・味方の艦載機？」

アリスがふと視線を向けると一機の味方艦載機が三機の艦載機に後ろをつけられて
いる様子が視界に入った。

「寄つてたかつて・・・見過ごせない。」

アリスはブースターを蒸し、ドッグファイトに乱入する。突然のアリスの介入に敵艦
載機は味方艦載機へのターゲットをやめざるを得なくなつた。

「行つて。ここは引き受けるから。」

味方艦載機の妖精さんはコックピットの中からアリスに対し敬礼をすると、空域を離
脱して行つた。

アリスはそれを見届けていると、敵艦載機が獲物を逃した腹いせと言わんばかりの軌
道でアリスに攻撃を仕掛ける。

「機銃程度なら避ける必要もないけど・・・。」

アリスは上昇することで、機銃を避け、敵艦載機の頭上を取つた。そしてそのままア
リスの巨大なバックパックに搭載されている『ビームカノン』で艦載機を撃ち落とす。
「勢いはこちらに分がある。でも、数の差は向こうのが圧倒的・・・。やっぱり空母を叩き
に向かつた方が能率がいいのかな・・・。」

空母を叩けば必然的に動ける艦載機も少なくなるはず。そう考えたアリスは高度を落とし、空母の撃破へと向かう。

そんな中、高度を下ろしている時、敵の編成について気になる点があった。

「上空から見て初めて気づいたけど……姫級、鬼級が見当たらない？ どういうこと？ 最初の3人で全員？」

編成を上空から見ていると奥に行けば行くほど……つまり光の柱に近づけば近づくほど戦力が脆弱になっていく。普通は主力というか、本隊長は後ろにいるものだ。つまりアリスは光の柱の中に本隊長がいると思っていた。

（でもこの陣形を見る限りそれはありえない。つまり、この部隊は私たちに向けるための戦力じゃない。むしろ……）

アリスは視線を未だに遠くにそびえる光の柱に目を向けた。

（あの光の柱に対して、戦力を向けているような……となるとあれは……敵、なんででしょうか？）

そこまで考えが至ると、アリスはヒイロに通信をかける。

『アリスさん？ どうかしめましたか？』

「敵の陣形についてなんですが、少し気になることがあってなんです。」

『敵の陣形……？ あまりよく確認してはいないので詳しくは言えないと思いますが……』

「いえ、別に構いません。ただ私が考えたことについてヒイロさんがどう思うかを知りたいので。」

アリスはそういい、ヒイロに自分が思ったことを話し始めた。

「ー以上です。どう思いますか？」

アリスがヒイロにそう確認を取ると、ヒイロは通信機の向こう側でうーん・・と唸っていた。そして少し時間が空いて返答が返ってくる。

『結論として現時点ではその判断のしようがありません。あの光の柱の現象は今回が初めてであり、危険度も未知数です。もしかしたらそういう陣形を元から取っているのかもしれないし、様々な憶測が飛んでしまいます。』

「そう、ですか。」

少し沈んだ声を出すアリスに対しヒイロは話しを続ける。

『でも様々な憶測の中には貴方の言う通り、敵ではないと言う可能性も含まれています。ですので、まずはこの状況を切り抜けてから考えましょう。私も一緒に考えますから。』

「．．．はい。ありがとう。ヒイロさん。」

『感謝するのはこちらですよ。アリスさんが気づかなければそのまま敵を撃破していたところでした。』

アリスとの通信を終えるとヒイロはキラと顔を見合わす。

「キラ、貴方はどう思います?」

「僕は・・・アリスの言う通りだといいなって思ってる。」

「やっぱりそうですよね・・・。私もそちらの可能性に賭けてはいます。でも、もし、私達に仇を成す存在であるならー」

「その時はその時だよ。だから、今はー。」

キラからそういわれヒイロは無言で頷いた。

第40話 First encounter

「主砲、斉射!!放て!!」

長門が『41cm連装砲』から砲弾を発射する。綺麗な孤を描きながら砲弾は空母棲鬼に着弾する。しかし、間髪入れずに空母棲鬼の艦載機から爆弾が投下される。砲撃直後だったのもあつて避けることができない長門はもろに食らつてしまい艀装が中破状態になる。

「くっ?!敵艦隊も、中々やる・・・っ!」

「長門さん!頭から血が・・・!!」

比叡が悲鳴混じりの声で言った通り、長門の頭から血が流れて顔半分を血で染めてしまつていた。

「なに、まだやれるさ・・・。主砲もまだ生きているからな。」

「で、でも、そんな状態じゃ、攻撃もままなりませんよ!」

「だが現状、中破や大破した者が多数いる。ここで私が退けば誰が彼女らを守る?」

「そ、それは・・・」

比叡は辺りを見回し、被害状況を確認する。深雪と島風は中破状態。赤城は駆逐艦の

二人を庇って、艀装が大破してしまった。

北上、大井は損傷は少ないものの、魚雷管がいくつか潰されており最大火力を出すことができない。つまり、硬い装甲と火力を持つ長門が退けばもしもがあつた時、対応ができないのだ。

「アイオワや金剛には空母棲鬼への攻撃に集中してほしい。私は負傷者の守りに回る。」

「・・・わかりました。ですが、決して無茶はしないでください。」

「無論、引き際はしつかり見るさ。勝手に沈むのは提督が許さないであろうからな。」

「・・・だいぶやられているわね・・・。」

イントレピッドは周囲を確認しながらそんな言葉を溢す。

空母棲鬼に損傷こそ与えてはいるものの、倒しても倒しても次々出てくる深海棲艦に手を焼き、じわじわとダメージを蓄積していく。

飛来する砲撃を避けながらもイントレピッドは手の中にある一発の弾丸を見つめる。イントレピッドはここでヒイロの言葉を思い出していた

『私たち、MS隊が動けないと判断したら使ってください。』

イントレピッドは空を見上げる。空ではヒイロ達が必死に艦載機を墜としつつづけている様子が目に入った。

「・・・使うしか・・・ないわね!!」

弾丸を握りしめ、意を決した表情で銃に弾丸を装填する。膝立ちで銃を握りしめ、標準を空母棲鬼に合わせる。

「・・・Fire!!」

トリガーを引き、弾丸を発射する。しかし、予想以上の反動に思わず仰け反るイントレピッド。

(お、重・・・!?)

さながら普通の銃でロケットランチャーを撃つたような衝撃にイントレピッドは肩を抑えた。

「やっぱり規格が合わないもので撃つものじゃないわね・・・。」

額に脂汗を流しながら放たれた弾丸を見据える。

弾丸は姿を変える。それはこれまでの艦載機のように横に大きく広がっている翼は持っていない。代わりに機体側部の四つのエンジンノズルから艦載機とは全く違う音を響かせ、空母棲鬼に接近する。空母棲鬼は当然のごとく対空砲火を行おうとするが、高度が低く上、艦載機とは類を見ない速さに対応することができない。

「ハリアー!! やりなさい!!」

イントレピッドの声に応えるように発艦した『AV-8B ハリアーII』は空母棲鬼の真横を一度通り抜けると旋回し、機首を再び空母棲鬼に向け、接近する。そして、主

翼にぶら下げてある空対艦ミサイル『AGM-84 ハープーン』を切り離す。切り離されたハープーンはエンジン部分が点火し、空母棲鬼に一直線に進んでいく。

対処のしようがない空母棲鬼は避けることが出来ず、ハープーンの直撃を受ける。ミサイル自身のスピードを加えた破壊力は空母棲鬼に無視できないダメージを与えた。しかし、与えただけであり撃沈には至っていない。

「イントレピッド!? What's that?」

アイオワが驚いた表情を上げながらイントレピッドに問いかける。

しかし、当のイントレピッドは空母棲鬼に指をさすジェスチャーをする。

「Exp lainは後!!今は向こうをお願い!!」

「・・・わかったわ。主砲、Fire!!」

イントレピッドに言われ、主砲を発射するアイオワ。ハリアアのハープーンの直撃により混乱状態になっている空母棲鬼はモロに砲撃を喰らう。それでも空母棲鬼は沈まず、むしろ状況がはつきりとわかったのか憤怒の表情でアイオワを睨みつけている。

「Oh・・・。ターゲットにされたわ・・・。」

厳しい顔で空母棲鬼と相対するアイオワ。空母棲鬼と一対一で戦うのは火力に自信のあるアイオワでも厳しいものがある。一人であら。

「Hey!!アイオワばかりに目を向けちゃ、NOなんだからネ!!」

「撃ちます!!当たって!!」

金剛と比叡が空母棲鬼の右側面に砲弾をお見舞いする。態勢を崩された空母棲鬼は苦々しい顔をしながら砲撃を行おうとする。

しかし、今度は反対の左側面から衝撃が走る。砲撃とはまた違う艦底部に来る衝撃の正体は――

「お、当たった当たった。いいねー、タイミングばっちりじゃん。」

「アイオワさん、さっさと決めてください!!」

魚雷だ。北上と大井は態勢を崩して注意が逸れた空母棲鬼に現状、撃てるだけの魚雷を空母棲鬼に叩き込んだのだ。

それほどの火力を叩き込んでも空母棲鬼は未だ健在であり、憎らしげな視線でアイオワ達を睨みつける。

「OK・!!撃って撃って撃ちまくるわ!!Fire、Fire!!」

次発装填を済ませたアイオワの主砲が再び火を噴いた。艦底部をやられたからか満足に動けない空母棲鬼は直撃を受けた。が、アイオワの視線は未だ空母棲鬼に向けられていた。

（いくつか避けられたわね……。となるとまだ仕留めきれしていない。けどー）

「Lastは譲るわ。But、きつちりfinishしなさいよね。」

空母棲鬼の視界を覆っていた爆煙が晴れると目の前に突きつけられているのは二人分の砲門。

「ゼロ距離射撃……これならいくら装甲が硬くてもっ!!」

「これで……終わりです。」

空母棲鬼の懐に入ったのは古鷹と神通だ。二人同時に主砲のトリガーを引き、空母棲鬼の頭を撃ち抜く。大きく仰け反りながら体を海上に叩きつけた空母棲鬼は動く気配を見せずにそのまま沈んでいった。

「た、倒した?」

「そうなつてくれていると、ありがとうございます……。」

お互い肩で息をしながら顔を見合わせる古鷹と神通。

「大丈夫デスか?」

「はい、これといった損傷は……。」

「二人ともないですね。」

心配する金剛の言葉に古鷹と神通は笑顔で返した。

そこにアイオワ達も集まり、お互いに喜びを分かち合っていると、

「みんな無事か? 遠目から見ているがかなり無茶なことをしていた気がしたが……。」

まあ、怪我がないのならいいのだが……。」

島風や深雪ら負傷者を引き連れて長門も駆け寄って来る。

「神通さんと古鷹さん、最後までかかったな！あんな近距离まで近づくなてよ!!」

「そ、そうですか？遠距離からはあまり効果がなかったので近づいたんですが・・・」

深雪が興奮気味で神通と古鷹に話しかける。神通は若干恥ずかしげに頬を染めた。古鷹も似たような反応だ。

「・・・提督達は今どうしているのでしょうか？」

ボロボロになった衣服を押さええながら赤城が呟く。それを聞いた長門が辺りを見回すと戦火の中心は光の柱付近になっており、離れたところにいる

長門達の周辺には深海棲艦の姿はなくなっていた。

「あそこにいるのだろうか、これ以上、進んでも横須賀艦隊や呉艦隊の足枷になるだけだな。むしろ、空母棲鬼を倒せただけでも大金星だろう。」

「これが、今のMe達のlimitってわけね・・・」

「・・・ああ、今の・・・な。」

「いつか、立てるといいですね。提督・・・あの人達の側で。」

アイオワの言葉に長門含め、佐世保の艦娘全員が齒がゆい表情をする。本来は提督の立場であるヒイロは後方で艦隊指揮に集中しなければならぬ。しかし、現状はむしろ提督に守られているのではないか。

その事実が長門達に決意を抱かせる。

「帰ったら、訓練の密度を一度熟考しなければならぬな。」

「そうね。いつまでも Admiral に守られてばかりじゃいけないもの。」

「・・・ところでイントレピッド。あの艦載機は一体なんだ？見たことがない形をしているが・・・。」

「・・・えつとねー」

長門にハリアーのことを聞かれ、説明を始めるイントレピッド。ヒイロ達が開発で作ったという事実長門達は軽く頭を抱えるのであった。

「さてと、最深部まで来ましたが・・・。」

「どういう原理でこうなっているのか皆目見当がつかないな・・・。」

ヒイロ達MS隊は敵艦載機群と敵艦隊を突破し、光の柱の麓にたどり着いた。

いざ臨んでみるとあまりの光景に言葉を失っていた。

本当に海に半径30M以上の穴が開いていたのだ。これでは艦娘達にはどうしようもない。

「これって、私達しか行けないパターンか？」

「つてもこの現象を起こしている元凶っぽいのが見当たらねえしなあ・・・。」

「そうなるよ、この中にいるのが必然だろう。」

ガロードとハイネが苦々しい表情を見せる。反面刹那はスパツと言いつつた。その言葉にガロードとハイネは揃って嫌な顔をした。

ヒイロがどうしようかと対策案を考えているとー

『アナタハ・・・ドウシテタタカウノ?』

頭の中に直接響いてくるような声が再度聞こえ、ヒイロ達は表情を引き締める。

「・・・この声はやつぱりあの光の柱からなのかな・・・。」

「一応、意志というか・・・。そこにナニがある、ということだけしかわかりませんね・・・。」

「・・・この声、どこかで聞いたことがあるような気がしますが・・・。」

キラ、フェネクス、アリスがそれぞれ別々の反応を示す。

「どこかで聞いたことがある、ですか・・・。たしかに遠くで聞いた時はそうは感じませんでした。今こうしてちゃんと聞いてみるとそのような感じが・・・。」

アリスの言葉にヒイロが顎に手を乗せ、考える仕草をする。

「やつぱりそう聞こえるか?なんか聞いたことのある声なんだよな。」

ガロードも薄々感じていたようにヒイロの言葉に賛同した。

「だが、どのみちこの光の柱に突入するしかないな。艦娘の皆には行くことはできても戻ることとは不可能だぞ。これでは。」

「元凶を倒したら海がすぐ戻っていきませんかね?」

「そう都合よくは行くまい。仮になったとしてもまず消えるのは光の柱だろう。最悪、そのまま海底に叩きつけられるぞ。」

アムロがフェネクスに対し、穴の奥底に見える海底を観ながらそう指摘する。

『コッチニキテ・・・』

再度頭の中に響いて来た声にハイネは困った顔をしながら光の柱を見据えた。

「やっぱり行くしかなえつう訳だな？」

「・・・そうするしかないですね。」

意を決したヒイロ達は光の柱に突入を始める。

「こ、これは!？」

「外見から見た大きさとこの空間の広さが違いすぎるっ!？」

ヒイロ達が飛び込んだ光の柱の中には真つ黒な空間が広がっていた。さながらどん

どん浅瀬から深海へと潜り込んで行く感覚を受ける。

「なんつうーか。入口みたいだな。さっきの光の柱。」

「入口か・・・。言い得て妙かもしれないな。その言い方は。」

ヒイロ達はどんどん下降していく感覚を受ける。しかし、変わらず真つ黒な空間が続いていくかとおもったがー

突然地面に皆揃って叩きつけられた。

「いったあー!!?」

突然の痛みに思わず頭を押さえながら悶えるハイネ。そのほかもぶつけた箇所をさすりながら立ち上がる。

「っ……。まさか突然地面に叩きつけられるとはな……。」

「だが、それは目的地に着いたということではないか?」

予想外の痛みを抱えながら辺りを見渡すと、刹那の言う通り、暗闇の空間にぽつんと光が差し込んでいる場所があった。

「まずさ。ここ、どこなんだよ。」

「下降していた距離から換算すると、ここに地面があるのは不自然です。」

辺りを見回しているガロードにアリスは自身の気づいたことを伝える。

「……。私達、どこに連れてこられたんでしようか?」

「分からないけど、少なくともここはアイアンボトム・サウンドじゃなさそうだね。」

フェネクスの不安な口調で話した言葉にキラがぶつけた額をさすりながら答える。

「さながら、異空間といったところでしようか?」

「……。異空間ねえ……。深海棲艦ってそんなことまで出来るのか?」

ハイロの結論のような言葉に先ほどまで地面をゴロゴロ転がっていたハイネが寝ながら疑問をぶつける。

「……とりあえずあの光のところに向かいましょうか。だれか、いるようですよ。ヒイロ達は光の差し込む場所に歩を進める。」

その場所には少女がヒイロ達に背を向けて一人ぽつんと立っていた。

その後ろ姿に何故かヒイロ達は既視感を抱いたが、とりあえず会話ができる距離まで近づき、声をかけた。

「確認します。アナタが私達を呼んだんですね?」

目の前の少女は頷く代わりにヒイロ達に顔を向けた。

だが、その顔はヒイロ達に取って驚愕するに等しいものであったからだ。

その少女は頭に深海棲艦が持っているツノが生えていることと左腕が肥大化していることを除いて姿形が――

「なっ!?!ふ、吹雪……ちゃん!?!」

駆逐艦吹雪と瓜二つだったのだから。

第41話 真実。それは時に鋭い刃に――

「ふ、吹雪……なのかつ!?」

ハイネが驚愕の表情を上げながら目の前の少女に聞いた。

目の前の少女は真紅に染まった視線をヒイ口達に向けながら確認するような口調で言った。

「ソウネ……。貴方タチカラ言エバ、私ノ存在ハ吹雪デ間違イナイ。」

「……どういうことだ? 君のようなタイプには初めて会う。」

吹雪によく似た少女の言葉にアム口は疑問符をあげた。

今まで深海棲艦と戦ってきたが艦娘とよく似た姿形を持つタイプは初めてだ。さらに言うと、この吹雪に似た深海棲艦から敵意を感じないことを刹那とアム口、そして、フェネクスが感じ取っていた。そのことがアム口達の困惑度に拍車をかけていた。

「少し確認だ。お前からは我々に対する敵意を感じなかった。お前は敵なのか?」

刹那の質問にヒイ口達は固唾を呑んで見つめた。吹雪に似た深海棲艦は一度目を閉じ、思案に入る。

そして、目が開かれると――

「広い範圍デ言ツテシマエバ、敵デ違イハナイ。ダガ、私ハ人類に対シ、憎シミヲ覺エテイル訳デハナイ。」

「つて、あれ？ 深海棲艦つてさ。恨みやらそう言つた黒い感情が具現化したものとか言われてなかつたか？」

吹雪に似た深海棲艦——もうこの際深海吹雪に呼び名統一するが、ハイネの言葉に領きを示した。

「ソノ認識デ間違イハナイ。ダケド、ドンナモノニモ、イレギュラーハ付キ物ダ。私ハソノカテゴリーニ入ッタノダロウ。」

「イレギュラー……か。まるで僕達見たいだね。」

キラがそのように感想を述べるとヒイロは深海吹雪に質問をぶつける。

「イレギュラー、ですか。つまり深海棲艦側にとつて貴方は異端分子だということですね？」

「ソウイウコトダ。外ノ陣形が私ヲ、トイウヨリ光ノ柱ヲ取り囲ムヨウニナツテイタノハソノ為ダ。」

ヒイロは質問を続ける。

「では君が生まれた経緯とかは分かりますか？」

深海吹雪はヒイロの質問に対し、首を振った。つまり知らないということだ。

「ダケド、ヒトツダケ感覺的二分カッテイルコトガアル。コレハ私ガコノ姿吹雪デイレレルコトニモ関係ガアル。」

深海吹雪はそこで一度言葉を切り、ヒイロ達を確認するように視線を動かすと言葉を続けた。

「艦娘ト深海棲艦ハ姿形ハ違エド、同ジ存在デアル可能性ガ高イ。」

「艦娘と深海棲艦が……」

「同じ存在……だどっ?!」

アムロと刹那が驚きの声をあげたがそれ以外の者は言葉を失った。

「貴方ガタハ、『ドロップ』トイウ単語を知ッテイルカ?」

「い……いえ、初耳です。」

ヒイロが首を振ると深海吹雪は「ソウカ……」というトドロップについての説明を始めた。

ドロップとは深海棲艦が倒された後、ごく稀にであるが深海棲艦が倒した地点から艦娘が生まれてくる現象だ、とのことだ。

「おいおい……冗談じゃねえぞ。どう考えたって、その現象はさっきの言葉の裏付けになんじゃねえか!!」

ガロードが声を、荒げながら言った。

「・・・待つてください。それは逆説的に言ってしまうえば、深海棲艦の元って・・・。」
フェネクスが血の気が引いた顔をしている中、深海吹雪は代弁するように言った。

「・・・恨ミ、妬ミノ感情ガ、深海棲艦を構成シテイルノハ事実。デモ、鬼級、姫級を構成するには材料はモウ一個イル。」

「嘘・・・。まさか、そんなことが・・・!?!」

アリスが目を見開いて驚愕の表情をあげる。

「轟沈シタ艦娘。ソレガ姫級、鬼級ノ重要ナファクターにナツテイル。事実トシテ、私ハ轟沈シタ艦娘トシテノ吹雪ガ使ワレテイル。」

「それじゃあ、この戦争を終わらせるには艦娘の轟沈をゼロにしつつ・・・。」

「・・・全ての戦いで、勝利を収めなければならぬ。そういうことですか?」

キラとヒイロがそういうと深海吹雪が口を開く前に――

「いや、その必要はないかもしれない。」

刹那が口を挟んだ。突然の否定の言葉にその場にいる全員の視線が向けられる。

「人類と、深海棲艦が相互理解、つまりわかり合うことができれば、これ以上、戦争を行う必要はなくなる。」

刹那のスケールの大きい言葉にヒイロ達は何も言うことができなかつたが、深海吹雪は首を横に振った。

「ソレハ難シイ。知ツテノ通り深海棲艦は恨ミ妬ミの凝リ固マツタ連中ガホトンドダ。」

「ほとんど、か。いるにはいるんだな？君のような存在が、君以外にも。」

アムロの指摘に深海吹雪はわずかにだが、首を縦に振った。

「深海棲艦も一枚岩ではなかったというわけですか。」

アリスが普段の無表情に戻りながら言っている中、ヒイロは刹那の顔を見つめながら言った。

「刹那。貴方の言っていることは茨の道。最悪、普通に深海棲艦と戦っていくことより難しいことかもしれません。」

「それでも、これ以上艦娘を轟沈の危険にさらすわけにはいかない。いくらその道が厳しくとも、これが最適解だと私は考える。」

刹那はヒイロの目線から逃げる事はなく、しっかりと見つめて言い切った。

その言葉を聞いたヒイロは表情を緩め、フツ、と軽く笑った。

「分かりました。まあ、どの道、刹那の言うことには賛成しましたが。私もこれ以上、戦いの歴史を繰り返させるわけにはいかないと思っていたので。」

ヒイロがそう言うのと深海吹雪は困惑するような口調で質問をぶつける。

「貴方ガタハ戦争ヲ止メタイノカ・・・？普通ニ我々ヲ倒シタ方ガ手早イト分カツテイテモカ？」

「確かによ、そっちの方が早いかもしれないし、簡単かもしれないねえ。でもそれだと私達がやってきた戦争と何も変わらんねえ。どっちがいなくなるまで戦うなんざより刹那の言う通りわかり合った方がいい。どんな時、時代であろうと『いい戦争』なんざありやしねえんだよ。」

「それに、深海棲艦にも君のように話の通じる者がいるのも分かった。であれば可能性はいくらでもある。」

ガロードとアムロの言葉に目を見開く深海吹雪。

その言葉を屈託のない目で言い切ったことに深海吹雪はガロードとアムロに畏敬の念を向ける。

「そういえば、貴方は私達にこう尋ねましたね。『どうして戦うのか』と。」

深海吹雪はその言葉に無言で頷いた。

「結論から言ってしまうえば、私達が望んでいるのは平和です。でもその平和はどちらかに与えるものではなく、どちらにも等しく与えられるものだと思います。」

「ま、その中には私達の世界のようになってほしくないっていうのが一番の根っこにあるだけだよ。」

ヒイロとガロードの言葉に深海吹雪は静かに下を向いた。

「ヤッパリ、貴方ガタハ強イ存在ダ……。ソノ力モ、心モ……。」

「そんなことはありませんよ。人類に強者などどこにもいません。むしろ人類全てが弱者なんです。それは私達だって例外ではないですし、君もそうですよ?」

ヒイロが俯く深海吹雪に近づき、頭を軽く撫でる仕草をした。

アムロ達の表情が柔らかいものに変わっている中、反面、何かを考えるような表情をしているハイネがいた。

「あのさ。すつごくいい雰囲気になってる中悪いんだけどよ。」

ハイネが手を上げながら発言を行う。怪訝な表情をしながらハイネに視線を向ける
と――

「ここからどう出るんだ? 出口らしいものが全く持つて見当たらないんだけどよ。」

爆弾を投下した。ヒイロ達は揃って口を開けたままになる。

「わ、忘れてた……。」

「……どう出る? 物理的な手段は無理だと感じるが……。」

内心、ものすごく焦っているアムロ達を見て、深海吹雪はクスツと微笑んだ。

「問題ハナイ。ココハ私ノ心情風景ノヨウナ物。私ガ念ジレバ、ココカラ出ラレル。」

「ま、マジで? お前、そんなことできんのかよ!」

深海吹雪が祈るように手を重ねるとヒイロ達の視界が白く染まっていく。

「あ、最後にもう一ついいでしょうか?」

「・・・ドウカシタカ？」

「ザムザザーやゲルズゲー、外にいたMAですが、貴方に見覚えは？」

ヒイロがそう聞くと深海吹雪は首を横に振った。

「イヤ、アンナ兵器は見タコトガナイ。ソモソモ、ザムザザーツテイウノカアノカニモドキハ。」

「そうですか・・・答えてくれてありがとうございます。」

「そういえば、お前はこれからどうすんだ？」

「私カ？私ハ、アマリ戦イニ関ワラズ生キテイクツモリ。」

ハイネからの質問に深海吹雪がそう言った瞬間、ヒイロ達の視界は真っ白に包まれた。

気づくと先ほどの黒い空間から脱出していて、海の上にいた。

向こうから、長門達が駆け寄ってくるのが見える。

「急に光の柱が消えたからどうなったのかと心配したぞ!」

心配そうに声をかけてくる長門を尻目にヒイロが辺りを見渡すと確かに光の柱は消え去り、空は紅い曇天から青く輝く晴天へと変わっていた。

「ヒイロさん、あの光の中には何があつたのですか？」

「まあ・・・、新たなタイプの鬼級の深海棲艦を確認しましたが・・・。」

大和が光の柱についての質問を聞かれ、ヒイロが素直に言うのかと刹那達が焦ったように霧囲気を出したが――

「なんとか制圧しました。あとはこの通りですね。」

ヒイロは嘘を言ったことに刹那達は安堵した。

（嘘は言つてないもんな。うん。）

（それに彼女の話したことはまだ大和達に伝えるのは早すぎる）

ハイネと刹那がひそひそ声で話す。

「そうですね……。わかりました。では、これで作戦は完遂、ですね。」

大和がそういうと艦娘達の間で歓喜の渦が巻き起こった。

その喜びを噛み締めながら大和達は帰路へとつく。

長門の艦装に乗せてもらったヒイロは深海吹雪と話したことを思い返していた。

（艦娘と深海棲艦が同じ存在……。さながら、表と裏のような存在ですね……。）

（こんなことが知れてしまえば、彼女らの戦意に関わるでしょう……。）

（私達は、人間と深海棲艦、両者の相互理解のために、どうすればいいんだろう……。？）

ヒイロが見上げた太陽はヒイロの疑問など知らないというように嫌というほどさん

さんと輝いていた。

第42話　これからへの選択

アイアンボトムサウンドでの戦闘を終え、大和達横須賀と呉の艦隊と別れたヒイロ達。

無事、何事もなく佐世保鎮守府に帰還することができた。

「あー、帰ってきたー!!」

「ハイネ、肋骨にヒビが入っているのだから、そういうことはやめておけ。」

ハイネが腕の上に伸ばしながら、凝り固まった体をほぐす。

アムロが忠告した直後、ヒビに当たったのか、苦笑いをしながら胸をハイネは胸を抑える。

「つてえー……。なあ、ヒイロ、どれくらいで治るか分かるか?」

「私は医者ではないんですけど……。肺とかに折れた骨が刺さっていないのでしたら、二週間くらいで治ると思いますよ。」

ため息を吐きながらも自分の見立てをハイネに話すヒイロ。それを聞いたハイネは嬉しそうに――

「そっか、ありがとよ。安静してればいいんだろ?」

「・・・以外です。ハイネなら大丈夫の一言で片付けて勝手ににはしゃぐものだ・・・」
「うおい、ヒイロは俺のことなんだと思ってるんだよ!? ガロードじゃあるまいし、休む時にはきっちり休むって。」

「私も休む時には休むって!! 勝手に飛び火させるなよ!」

艦隊の皆が笑いながら、鎮守府にたどり着くと、佐世保の艦娘達が総動員して埠頭で待っていた。艦娘達がポカーンとしているヒイロ達を見つけるやいなやヒイロ達に対し敬礼をする。

『お疲れ様です!! 提督!!』

埠頭に艦娘達のヒイロ達を労う声が響く。その様子はさながらー

(・・・ギャングのボス・・・ですか?)

そう思うヒイロであったが、当然そのようなものになったつもりは全く無い。

「あの・・・。この集まりは一体・・・?」

「提督の出迎えだけど? 本来、私達がやらなきゃいけないのに、提督達がやっているんだから、これくらいはいんじゃない?」

ただたどしく一番近くにいた陸奥に聞くとさも当然だと言わんばかりの口調で帰ってきた。ヒイロはそれを聞くと頭を抱えるような素ぶりをする。

「そこまでしなくてもいいんですけどね・・・。とりあえず、休ませてほしいです・・・。」

あ、入渠する人は損傷の大きい人から入ってね。」

『了解!!』

そういうと艦娘のみんなは散開し、またそれぞれの日常へと戻っていった。

「それじゃあ、お疲れ様でした。」

「ああ、おつかれ。すっかり休んでおいた方がいい。今回は色々あったからな。」

アムロの言葉に無言で頷き、ヒイロは陸奥と加賀を率いて執務室へと戻っていった。

「……あとは、何かしらの娯楽設備がほしいって声が多かったわね。ここも結構な

大所帯になってきているからね。どうしても暇を持て余す人も多いみたい。」

「分かりました。すんなりと出てくるのはテレビやゲーム機の類ですが、陸奥さんや加

賀さんは何か娯楽としておいてほしいものとかありますか?」

「私? そうねえ・スポーツ用具はどうかしら? ここ結構広いし、場所さえ用意できれば

できないことでもないと思うわ。」

「私はそういったものには疎いですが・外出許可証とかを発行するのはどうでしょうか

? 艦娘にも現代のものに興味を持つものを多いですから。」

ヒイロは執務室で陸奥と加賀から出撃していた間のことを聞いていた。

「陸奥さん、それに加賀さんも突然仕事を押し付けてしまつて申し訳ありません。」

「いいのよ。提督達が引つ張りだされるのも無理もないからね。」

「アムロさんやハイネさんが負傷するほどの戦闘だったのでしょうか。しかし、提督達に頼らざるを得ない状況にはいささか目を細めざるを得ないのも事実ですが。」

加賀の言葉を聞いたヒイロは気まずそうに目線を逸らした。

「提督? どうかしましたか?」

加賀に目ざとく指摘されたヒイロは特に取り繕うこともなく口を開いた。

「・・・申し訳ないですが、私達に頼らざるを得ない状況はしばらく続く可能性が高いです。」

「・・・何か訳ありみたいね。アイアンボトムサウンドで何があつたの?」

ヒイロは陸奥と加賀にザムザザーやゲルズゲーと言つたMAのことを話し始めた。

ヒイロ達MSより強大なMAの存在に陸奥と加賀は言葉を失う他なかった。

「提督達でも手を焼く相手、ね。アムロやハイネの傷もそいつに付けられたものなのね。」

「・・・モビルアーマー。提督達の時代にはそんなものまで戦場に蔓延つていたのね。」

「蔓延るほどの物量はないと思うんですけど・・・。それでも、そういつたこちら側の技術が向こうにもあるとなると、これからの戦場はかなり厳しいものになると思います。」

「そうね・・・。提督の言つたとおりのスペックだと、一度こつちが苦勞して取り返したところも、そのモビルアーマー一つで返されてしまうでしょうね。」

陸奥、加賀の両名もこれからの戦いについて、だいぶ悩ましの表情を浮かべる。

「おそらく、ですが、向こうにはどういった方法かはわかりませんが、私達の技術を確保できる手段がある、ということですよ。」

「・・・厳しくなっていくわね。」

「提督、少し意見具申をしてもいいかしら？」

陸奥が悩ましの表情を続ける中、加賀はヒイロに詰め寄って、意見を述べる。

「はい、何でしょう？」

「提督達が出撃している間、倉庫に見たこともない装備を見つけました。」

「倉庫?・・・あ、まさか。」

ヒイロはそれを聞いて冷や汗を流すが、加賀は気にすることもなく話しを続ける。

「四つの筒が土台に付けられたような装備。明石さんに聞けば、それは『トマホーク』と呼ばれる兵器でイージス艦に装備されていた兵装らしいです。」

「えっと、その・・・。」

加賀の詰問に言葉を返すことができないヒイロ。冷や汗をダラダラとかくしかかない。

「そして、それが提督達が開発したことも聞きました。」

正確に言えばガロードとハイネが勝手にやったことなのだが、それをいつても何かが変わると思わなかったため、何も言わなかった。

「提督、開発をお願いできないでしょうか？今度、モビルアーマーのような敵が出てきても貴方がただけに任せることが無いように。」

「でも、それだと……。」

「それは百も承知です。ですが、私達にとって、貴方はなくてはならない人なのです。」
加賀達にまで危険が及んでしまう、そこまでいったところで加賀自身もわかっていたのか、割り込まれ、言葉を塞がれる。

「提督、貴方がたは確かにとてつもなく強いです。しかし、戦争は一人や二人でどうにかなるほど甘くはありません。それは提督だってわかっているはずです。」

ヒイロは加賀の言葉から自身のMSだった頃を思い出していた。

『オペレーション・メテオ』のガンダム五機による地球圏への強襲作戦。最初こそはガンダムの圧倒的な火力でどうにかなっていたものの月日が経つうちに対策が次々と取られ、最終的に自身が守らねばならないコロニーを人質に捕らえられ、パイロットが自爆の選択を取らざるを得ない状況まで追い込まれた。これはヒイローウイングガンダムにとって苦々しい記憶になっている。

戦争は少数の力で終わらせることは不可能である。人々が手を取り合って、声を上げることで初めて戦争への終焉へと舵をとることができる。

（おそらく、この先、深海棲艦の戦力にMAが加わったことで戦いが激化していくでしょ

う……。加賀さんの言う通り、戦争はちよつとや少しの人数では終わらせることはできない。それは私自身よくわかつている……。」

ヒイロは目を閉じ、軽く息を吐くと、加賀と視線を合わせる。

（二度も過ちを繰り返すわけにはいきません……。ここを間違えれば、何より彼女達が危険にさらされる。）

「……。分かりました。私達も手を尽くしましょう。ですが、資材との要相談で構いませんか？ 私自身、どれほどの量を使ってしまいかわからないので。」

「ありがとうございます。……ですが、提督自身、アムロさん達が開発を禁止していたのも明石から存じています。その理由は、大本営に目をつけられるのを防ぐためですね？」

「ええ、そうですね。アイオワさんやイントレピッドさんは別として、イージス艦の装備はさすがに看過してはくれないでしょうからね。しかし、状況が状況です。そうはいってはいられなくなりました。」

「ねえ、加賀、見つけたら私に言ってくれたっていいのに……。」

「ごめんなさい。明石さんからあまり言いふらさないでほしいと言われたものですから……。」

「……まあ、仕方ないわね。それじゃあ提督、しつかり休んで頂戴ね。」

「提督、今回はお疲れ様でした。」

陸奥と加賀が執務室から出ようとした時――

「あ、すみません、少し一ついいですか？」

「あら、どうかしたの？」

「いえ、大したことではないのですが、おふたりは明日の夜は空いているでしょうか？」

「……はい。空いています。」

「ならよかった。明日3人で外食に行きませんか？私の奢りで。」

「あら、結構太っ腹なのね。提督。でも、どうして？」

「今回のお礼ですよ。これくらいはさせてください。」

「……ごめんなさい。気持ちは有難いのですが……。」

加賀はやんわりと断った。おそらく自身の食べる量が多いことを考慮してのことだろう。

「多少のおかわりでしたらどうってことはありませんよ。だから加賀さん、遠慮なくいらしてください。」

「……提督がそう言うのであれば……。」

加賀の承諾を受け取ったヒイロは笑顔を浮かべながら、陸奥と加賀に別れを告げる。

「さてと私はもう寝ますか。」

ヒイロはベッドに入ると程なくして深い眠りに入った。

次の日、ヒイロは鎮守府内の射撃訓練場に来ていた。この施設は艦娘達が装備の試し打ちや調整のために利用する所だ。

そこにはちやうどガロードとアムロがいた。アムロはバズーカを構えて海上に設置された的に狙いをつける。

トリガーを引くと爆発音とともに実弾が発射される。その実弾は艦娘達の放つ砲弾と違い、一直線に飛んでいくと、寸分狂うことなく的に着弾し

木っ端微塵に吹き飛ばした。

「アムロさん、どうですか？ 『ニューハイパーバズーカ』の具合は。」

「ああ、MSだったころの威力と変わりはない。すまないな、ヒイロ。ガロードのついでに開発を許可してくれて。おかげで戦術の幅が広がった。」

バズーカをバツクパツクに取り付けると感謝を述べるアムロ、一方のガロードは開発した武装に苦戦していた。

「くっそー…装備が増えたのはいいいけどよ、私これ大してつかってないんだよなあ…。ブースターの機能を使ったのがせいぜいだし…。」

ガロードはそういいながら身の丈ほどある盾のような兵装を前面に構える。すると盾の表面部分が観音開きになり、そこからビームが複数、発射される。いくつものビー

ムは的を破壊するどころか土台部分まで破壊してしまった。

「うおっ?! コイツ、こんなに威力あったのかよ?!」

「これ、連射も可能なんですよ? だとしたらかなり強力な武装ですね。この『デイバイダー』と呼ばれる武装は。」

「ああ、盾の機能を持ちながら、攻撃も可能、さらにはブースターの代わりにもなる。文字通りの万能兵器だな。」

ガロードの驚いている様子を尻目にデイバイダーについての感想を述べるヒイロとアムロ。そうしていると試し打ちはもういいのかガロードが戻ってきた。

「ヒイロ、あんがとな。コイツを作る機会くれてよ。：私自身、これほど威力があるやつとは思ってなかったけどよ・・・。」

「礼はいりませんよ。資材の使用量に目を瞑れば、私達の時代の装備が作れることを知れたのは大きいです。」

「確かにな。妖精さんにも非常に驚かれていたからな。」

デイバイダーやハイパーバズーカを作る際、一回の開発に使ったのは実に普通に艦娘の建造を行う時に使う資材の量と変わりがなかった。それに失敗する場合も多く、容易に開発をすることはできなくなった。

「そういや、ヒイロ、作ってる間に副産物とかあったけどよ。それって何があったんだ

？」

「えっと、明石さんがリストアップしてくれたのを見ると・・・」

今回の開発には副産物も多少なりともあった。ガロードにそれらについて聞かれ、明石が作ってくれたリストを見る。

「・・・まずは二式大艇ですね。明石さん曰く、正式名称は二式大型飛行艇でかなりの高性能機らしいです。かなりの巨体を誇るため、輸送作戦でも重宝されるそうです。ただー」

「・・・大方、その巨体のせいで空母には積めない、そんなところか？」

アムロにいわれると。ヒイロは無言で頷いた。

「二様、水上機とのことだったので、千歳さんや千代田さんにも頼んでみたんですが、やはりサイズが大きすぎるとのことです・・・」

「ただだけでかいんだよ、その二式大艇。っていうか、空母に乗つけらんねえって言うなら、誰に乗つけられんだよ？」

「公式にある文章によれば、『秋津洲』と呼ばれる水上機母艦が載せていたとしか・・・」

「・・・倉庫行きか。」

「・・・ですね。」

ない袖は振れない以上、二式大艇を運用することは不可能である。現実是非情である。

「あとは、試製景雲の艦偵型ですね。エンジンが普通の艦載機に使われているものとは違うため、偵察機としては彩雲より質がいいようです。ただー」

「おいおい、まさかこれも空母には載せられねえとか言うんじやねえよな？」

ガロードにそう言われるが、ヒイロは首を縦に振るしかなかった。

「・・・自分達が作っておいて言うのもおこがましいかもしれないが、何か使えるものはないのか？ 面白いえば、やけに大きい主砲ができた気がするのだが・・・」

「えっと、あ、ありました。『試製51cm連装砲』ですね。大和さんの主砲からさらにひとまわり大きいです。」

「大和の主砲はいくつか覚えてるのか？」

「46cmですね。」

「そこから考えるとかなり大きいな・・・。戦艦、にしか装備できねえだろうけど、それでも人を選びそうだな・・・。」

「ガロードの言う通り、サイズ合わせを行った結果、長門さんと陸奥さんでギリギリということがわかりました。ここにとっては事実上の長門さんと陸奥さんの専用装備でしょう。」

「アイオワでも無理だったのか．．．意外だな。」

アムロが意外そうな顔を上げる。その通りアイオワでも51cmの連装砲を扱うとは無理があつた。アイオワの主砲は16inch、おおよそ、41cmである。いきなり10cm近く大ききの違う砲を扱おうとしても無理がある。

「やれやれ、難儀なものだ。」

アムロが軽いため息を吐いた。困った顔をしながらそばに立てかけてあつた時計を見ると正午過ぎを指していた。

「ちようどいい時間か。昼食をとりに行くか。」

「そうですね。行きましょう。」

ヒイロとアムロとガロードはそういい、食堂へと向かつていった。

第43話 本当の強さとは――

アムロ、ガロードと一緒に昼食を済ませたヒイロは執務室に戻っていた。

「提督、大本営より手紙が届いています。」

大淀は素晴らしい座っているヒイロに三通の手紙を手渡す。

受け取ったヒイロは若干予想していたかのような表情をする。

「大方、モビルアーマーに対する説明でしょう……」

ため息をつきながら一通目を開ける。

内容は予想通り、先の作戦でのモビルアーマーに対する説明のため大本営に出頭せよ。とのことであった。まあ、日付は一週間後後のことだから今は置いておこう。

「となると、残りの二通は……?」

残っている二通のうち片方を開けた。ヒイロは手紙に書かれている文章を読み進めているうちに困った顔に表情を変える。

「大淀さん……。私って階級『中尉』だったんですね……」

ヒイロが大淀に手紙を見せると、

『ヒイロ・ユイ中尉。今回の作戦の戦果を称して貴官の階級を中尉から大尉へ昇進す

る。』

「えつと、本来であればおめでとうございませうと言ふべきところなんでしょうけど……。」
「いりませんよ……階級なんて……。所詮形なんてないものなんですから……。」
「素晴らしいながら机に項垂れるヒイロ。」

「クマー。もう一通はどうクマー?」

今日の秘書艦である球磨型一番艦『球磨』が急かすようにヒイロに近寄る。

うなだれた姿勢のまま手紙の封を解き、中に書かれてある文章を読み進める。

「あれ、内容がさっきの昇進のものと同じ……?」

「クマー?何かあったクマー?」

「内容が同じですか……?大本営もミスをするんですね。」

素晴らしいながら、大淀と球磨と一緒に手紙を見つめるヒイロ。

一見、ほとんど同じ内容に見える文章だが――

「あ。」

ヒイロが口を驚いた形にしたまま固まった。

大淀と球磨が怪訝な表情でヒイロを見つめていると、ヒイロは指を震わせながら二箇所、指し示した。

『えっ?!?』

思わずダミ声で驚く大淀と球磨。二人とも目を丸くしている

「こ、これは・・・なんとも縁起が良くないとかクマ・・・」

いつもは大らかな笑顔を浮かべている球磨でさえ、笑顔が引きつらくなる。

ヒイロの指差した箇所を見つめるとさっきの手紙では『中尉』と『大尉』と書かれていた箇所が、『大尉』と『少佐』に置き換わっていた。

つまり――

「私、二階級特進してるんですけど・・・？いや死んでいないから昇進、ですね。この場合・・・」

「えっと、その、お疲れさまです？」

「もう嫌だ・・・」

机に項垂れるどころか沈むヒイロであった。

晴れて(?)少佐になったヒイロだが、特に階級とか興味ないため淡々といつも通り執務をこなしていく。

「まあ、薄々鑑みてみればわたし達佐世保鎮守府は『一応』姫級三隻倒していてスコア的にはなんだかんだ言ってトップなんですよね・・・それでも2階級昇進はやりすぎ感が否めませんが・・・」

「でも提督達が頑張ったのは事実クマ。少しくらい自分を労ったらどうクマ？給料も上

がつてるはずだクマ。」

「自分を、ですかあ……。」

自分を労うと言ってもこれと言った趣味がないため正直に言ってお金をもらっても宝の持ち腐れ気味なヒイロ。

「うん。まあ、考えておきます。」

「……ホントクマか?」

「あ、あれっ!? どうして疑いの目で見るんですか!？」

所変わって、埠頭では古鷹が埠頭の淵から足をぶら下げないように座っていた。

(提督達……やっぱり強いなあ……。演習でもわたし達にちようによくするように調整してくれているし……。)

古鷹は演習を行う度にヒイロ達に対してわずかながらの無力感を感じていた。

この前のアイアンボトム・サウンドにおける戦いで自分たちは進撃をやめている中、ヒイロ達はまだ前に進めれたことは古鷹達出撃組には大なり小なり心の変化が起きた。

演習でもアリスや刹那が航空機代わりに対空演習を行うが、基本的には刹那達が艦娘に合わせて動いている。それが艦娘達の無力感を助長しているしまっている面もあった。余談だが、新しく来た艦娘の担当はいつもアムロである。アムロは若干スパルタな所があるため大抵の新任の艦娘は地獄を見る。さらに本人は艦娘達のことを考えて

やってくれているため、なおタチが悪い。

「古鷹ちゃん？どうしたの、大丈夫？」

「あ……、キラさん……。」

「たまたま通りすがったキラが古鷹に話しかける。

「……隣、いい？」

「えっ、あ、はい。どうぞ……？」

古鷹に許可を一応もらい、隣に腰を下ろした。

「それで、どうかしたの？何か思いつめているようだったから。」

「……。」

「気まずそうに視線を晒す古鷹。無力感を味わっている原因が側に来てしまったのだから無理もない。」

「……キラさんを含めて、提督達が来てから最近の戦いはとても楽になっています。」

「口を開く古鷹にキラは対称的に口を噤む。聞き手の姿勢を取らないといけないと感じたからだ。」

「でも、最近思うんです。提督達が戦っていくだけで、この戦争、終わっちゃうんじゃないかって。」

「その、別に戦争が続いて欲しいなんて微塵も思つてません。むしろ終わつて欲しいと思つてます。だけど、提督達が戦つて、何十隻もの深海棲艦を倒していく姿を見ると、自分が何のために生まれてきたのかわからなくなるんですよね……。」

古鷹の顔に影がかかる。その様子を見ながらもキラは未だ口を挟まない。

「艦娘は確かに、人間だと思えます。こういう感情もあるし、考えることもできる。でも、あくまで人の形を成しているだけで本質はやっぱり兵器なんですよね……。」

顔をさらに沈めて、表情を伺うことができなくなった古鷹に対し、ついにキラが口を開く。

「……大したことが言えるわけじゃないけど……。」

「古鷹ちゃんは、自分が弱いつて考えてる?」

「弱い……ですか。確かにキラさん達と比べたら技術的にも、経験でもやっぱり、劣つていって感じちゃいますね……。」

古鷹の答えにキラは特にこれといった反応を示さなかった。技術的、経験の差は明白であり、キラはフォローをしようと困った顔なりなんなりすると思つていた古鷹は少し意外な顔をする。

「質問を変えるよ。君は何のために戦っているの?」

「何のために、ですか?それは深海棲艦を倒して、平和を得るため……。」

「追加の質問。君は目の前には傷ついた深海棲艦の艦隊、追撃すれば確実に仕留められるダメージだ。これを倒せば作戦は成功し、君は名誉を得る。提督もそれを望んでいる。この際提督をトラック泊地の提督にしとくね。だが、君の足元には同じく甚大な被害を被っている加古ちゃん、青葉ちゃん、衣笠ちゃん達だ。今にも沈んでしまいそうで深海棲艦の追撃を行えば、沈没は避けられないだろう。君はこういう場面になつたとき、どうする？」

キラからの質問に古鷹は頭の中で鮮明に浮かびあげてしまった。
顔を青くしながら浮かびあげたイメージの中で自身の行動を考える。

トラック泊地の提督、自分たちに暴力を振るい、艦娘達を恐怖のどん底に突き落とす張本人。命令に逆らえば、もれなくこぶしが飛んでくるであろう。

仲間を取るか、名誉を取るか。

古鷹がとつた選択は――

「私は……加古達を優先します。やっぱり失うのは嫌だから……。」

古鷹の答えにキラの反応は――

「うん。それでいいと思うよ。君は弱くないし、むしろ強いよ。」

笑顔を浮かべ、古鷹は強いと言った。強い、という言葉に疑問符を付けられたが、

「あの、強いんですか？私。キラさん達のように戦場を駆け回れる実力はないのに・・・」
「強さっていうのはね。思いとか、そう言った気持ちの問題だと思うんだ。単純な力の強弱じゃなくてね。」

「思い・・・ですか。」

「うん。単純な力の強さも持たないといけないけど、それは行き過ぎるとただの暴力に成り果ててしまうんだ。」

「ただの暴力・・・。」

古鷹はそういいながら自分の拳を握ったり開いたりする。

キラは話を続ける。

「本当に強い人っていうのは、大切なものを守ろうとする人だと思うんだ。どんな劣悪な環境でも、誰かを守りたいっていう思いで人は強くなれる。だから、さっきの質問で君の大切な人を救うって決めた君は十分強いよ。」

キラは話は終わったと言わんばりに立ち上がりその場を後にしようとする。

「あ、あのっ!!」

「どうかしたの？」

立ち去ろうとするキラの背中を古鷹が引き止めた。なぜなら古鷹は気になったからだ。

「キラさんは……貴方が守りたいモノってなんですか?」

「僕の守りたいモノは、佐世保鎮守府のみんなだよ。」

古鷹はその回答を聞いて、心の中で何となく悔しいと感じている自分がいることを感じた。

それはさながら、ほかの誰かに自分の好きな人を盗られてしまったような――

(好きな人……?え、嘘……?!わ、私、まさか……)

自覚したと同時に心臓の鼓動が早くなつていくのを感じる。それはキラを見つめれば見つめるほど鼓動の間隔が短くなつていく。

「……大丈夫?何か顔が赤いけど……。熱でもあるのかな……?」

そういうしながら顔を近づけるキラに対し、古鷹は自身の心がこれ以上もたないと感じ、

「だ、大丈夫ですからあ!!」

一目散に退散してしまつた。キラが静止の声を上げるが古鷹は聞き入れる様子もな
くいなくなつてしまつた。

「……僕、何かしたかな……?」

自身の行動を省みるがとくに何かした記憶はない。まあ、大丈夫だろうと結論づけ、
その場を離れようとする――

「ここにいたか、キラ。」

「あれ？アムロさん？どうかしたんですか？」

キラの後ろにアムロが立っていた。

「少し、相談事があつてな、同郷の君なら何か知っているんじゃないかと思つてな。」
アムロの言葉にキラは疑問符をあげるだけであつた。

第44話 考察、それに伴う不安

古鷹が走り去ってしまったのち、キラはアム口と話しをしていた。

内容はハイネの突然の戦闘力の向上についてだ。

「それで、ハイネの動きが爆発的に変わったってこと？」

「ああ、島風がやられたと思ったハイネは突然、人が変わったかのようにザムザザーを翻弄し、撃墜していた。」

「それだけ聴くとただの感情が爆発しただけのように感じるけど……。他に何かないかな？」

キラにそう尋ねられ、手を顎に当てるアム口。少し間記憶を思い返していると二つの点に気がついた。

「そうだな……。私がハイネに対して、手袋のような兵装について聞いていたのを覚えていたか？」

「えつと……。はい。覚えてます。使い方がわからないから使用できないって言ってましたね。」

「ハイネがああの状態……。この際だから『覚醒』と言っておくか。覚醒したハイネはその

兵装を使っていた。」

「・・・その覚醒した時に使い方を思い出したのかな？」

「いや、その『思い出した』可能性は低いだろう。思い出したということは逆説的に少なからず記憶があったということになる。そうなるとハイネが元々パーパープランの機体だったという前提が崩れてしまうからな。」

「じゃあ、アムロはどう考えているの？」

アムロは難しい顔をしながら、キラの質問に答えた。

「・・・ハイネは戦ったことがないという割には動きは良いと感じたことはないか？」

「言われてみれば、そうだね。ちよつと血が上りやすいところはあるけど、動きが悪いって感じたことは・・・。」

「推測の域を出ないが、私はハイネ、もといデステイニーガンダムは少なくとも一機はハイネとは別にあつたと考えている。」

「デステイニーガンダムがもう一機？でもそれとハイネの動きに何の因果関係が・・・？」

「そのデステイニーガンダムが戦場に出撃して戦った記憶、ないし記録がハイネにインプットされていたとしたら、あの動きは納得が行くものだと感じないか？」

「なるほど・・・。稼働していたもう一機の記録がですか・・・。」

アムロの考えに納得しながらもキラはハイネの『覚醒』について一つの可能性を見出

していた。それを確かめるため、アムロに一つ、質問をする。

「アムロ。ハイネがその『覚醒』した状態になっていた時、目が変わりやなかった？ 具体的に言うと、瞳のハイライトが消えていたとか。」

「……まだ語っていないことを言うということは、知っているんだな？ ハイネのあの状態について。」

キラにそう尋ねられたアムロはやはりといった表情をする。キラはうなずきながら説明を行う。

「ハイネのあの状態は『SEED』を発現させたからだよ。」

『『SEED』……だと?』

アムロは聞きなれない単語に首をかしげる。

『Superior Evolutionary Element Destiny
d i f f a c t o r』。直訳すると 優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子。その頭文字をとって『SEED』だよ。」

「優れた種……か。宇宙世紀でいうニュータイプみたいなものか?」

「ううん。ニュータイプとは全然違うよ。確かに感覚とかは数段鋭くなるけど、他者との感覚を共有するとかそういうことはできない。完全に戦闘向きの代物だよ。」

「なるほど……。戦闘力の爆発的な向上はその『SEED』の発現が理由か。『SEE

D』の因子を持っているのはもう一機のデステイニーガンダムのパイロットが持っていたからか？」

「そう考えるのが妥当だと思うよ。」

「そういえば、『SEED』の発現に条件などは存在するのか？」

「確か・・・感情の爆発とか、かな。あとは危機的状況に陥るとか。」

キラの『SEED』に対する博識さにアムロは一つの可能性を思いつく。

「・・・私の思い違いなら聞き流してかまわないのだが。」

「・・・どうかした？」

「君のその『SEED』に対する博識さ。私が第二次アクシズ抗争の時の記憶しか持ち合わせていないことを鑑みてのことなんだが。君のパイロット、キラ・ヤマトも『SEED』因子を持つものだったんじゃないのか？」

アムロからの指摘にキラはうーん、と少し困惑した表情をする。

「もしかして、隠してらるって思ってた？べつにそんなつもりはないんだけど・・・。」

「・・・そうか。それは悪いことを聞いた。忘れてくれ。」

若干赤らめながら顔を下に向けるアムロ。その様子を軽く笑いながら言葉を続ける。

「アムロの言葉は事実だよ。僕のパイロット、キラ・ヤマトは確かに『SEED』の因子を持っていた。」

「なら、ハイネの例もある。君も持っているんじゃないのか？」

「・・・どうなんだろうね。それは僕も分からない。」

キラは首を振りながら表情を微笑みのものにする。

「ただ、持っているからって必ずしも守りたいものが守れるわけじゃない。必死に守りたいって思つて、手を伸ばしても届かないものが必ずある。」

その顔はどこか悲しげな表情をしていた。キラが見つめているのはどこか遠いところを見ている。その気がアムロには感じられた。

「さて、どうすつか。これ。」

ところ代わつてガロードは鎮守府内の廊下を歩いてた。手にはガロードが使用していたシールドである『デイフェンスプレート』があった。攻守の両立ができる上にブースターの補助にもなる『デイバイダー』を作ってしまったため、いらなくなつてしまったのだ。

「このまま捨てるつてのももったいねえし・・・。」

「あれ、ガロードさんじゃないですか。何してるんですか？」

あてもなく彷徨っているとガロードに声をかけられる。声のした方向に振り向くと金髪の髪をお団子の形にしつつ、ツインテールにし、なおかつ身に何となく似合わぬ子供臭い声の持ち主、長良型軽巡、阿武隈がいた。

「……なんか急にディスプレイされた気がしますう……。。」

「……いきなり頬を膨らませて何やってんだ？」

「私のことはいいんです。それより何やってるんですか？」

突然の阿武隈の奇行に首を傾げながらたずねるガロード。阿武隈は表情を戻すとガロードに再度何をやっているのかを尋ねた。

「……まあ、いつか。開発してもらったんだけどよ、いいのができたはいいんだけど、おかげでこいつがお役ご免になっちゃってますな。」

「えっと、盾ですよ、それ。ガロードさんが使ってたやつ。前から思ってたんですけど、小さすぎませんか？それ。」

阿武隈の指摘にガロード自身もそういつた意識があったのか頬をかきながら乾いた笑いをあげる。

「……まあ、ごもつともだわな。あ、そうだ。」

ガロードはなにか思いついたのかのような声をあげるとディフェンスプレートを阿武隈に差し出す。阿武隈は突然のことに顔をキョトンとする。

「え？どうしたんですか。いきなり。」

「やるよ、これ。捨てるには惜しい代物だしな。」

意味を察した阿武隈は遠慮がちな表情に変える。

「え、そんな、いいですよ。それはガロードさんの身を守るものですよ。あたしなんか貰っても・・・。」

「悪いが、私にはコイツができちまったんでな。」

ガロードは素晴らしい、デイバイダーを取り出す。身の丈ほどあるデイバイダーの大きさに阿武隈は呆気に取られる。

「お、おつきい・・・!?!」

「そういうことだ。コイツはお前が使ってくれ。硬さも私とおんなじ装甲使ってつかからお墨付きだぜ?」

「・・・あ、あの。どうしてあたしなんかに?」

阿武隈は気になったことをガロードに聞く。なにか大きな理由があるのだろう。阿武隈はそう思っていたがー

「たまたまお前が目に入ったから。」

「え」

「あとお前、結構ドジ踏むタイプだろ。そんだけ。」

「ひ、ひどいですつ!! あたしだって頑張ってるんですよ!!」

「ならその頑張りをソイツに付き合わせてやってくれ。」

ガロードは屈託のない笑顔を阿武隈に向けながら言った言葉に、阿武隈は言葉を詰ま

らせる。

「さつきも言ったが、ソイツの硬さは私のお墨付きだ。魚雷や砲撃なんかじゃビクとしねえと思うから存分に使つてやつてくれ。じゃあな。」

ガロードは手を振りながらその場をあとにした。阿武隈はガロードの背中を見つめながら言葉を零した。

「……も、貰っちゃつた……。本当に……。」

阿武隈はガロードにもらつたデیفエンスプレートをどうするか悩むのであつた。

その日の夜、ヒイロは約束通り、陸奥と加賀と共に外食に来ていた。

町の商店街にある洋食店、それほど人目につかない席で三人は外食を楽しんでいた。

注文して程なくして出された料理はヒイロは手慣れた手付きでナイフとフォークを使い、口に運ぶ。他愛もない話で盛り上がっている中、

「提督つて、もしかしてこういうテーブルマナーとか慣れてるの?」

ヒイロのナイフとフォークの扱いの上手さにふと陸奥に質問されたヒイロはうーん、とうなりながら答えた。

「なんというか……。わたしのパイロットはそういった機会も多かったので……。」

「それほどに戦果をよく挙げていたのですね。」

「戦果、ですか……。そういつた訳ではないんですよね。」

「というところ？」

ヒイロの言葉に疑問符をあげる陸奥。ヒイロはそのまま言葉を続ける。

「私のパイロットは潜入工作員、いわゆるスパイ活動をやっていたのでそういったパーティー会場でのマナーも施されていたんですね。それが私にもうつっていたというか……。そんな感じですよ。」

「なるほど、そういうことね。」

陸奥が納得した表情をしたのを確認すると、再び料理を口に運び、舌鼓を打つのだつた。

「提督、おかわりください。」

「……加賀さん、それは私じゃなくて店員さんに言つて……。」

既に5皿ほど積み重ねながらも未だおかわりを要求する加賀の姿を見ながら苦笑いをするヒイロなのであった。

「提督、今日はありがとうございました。」

ヒイロに対し、夕食のお礼を述べる加賀、その様子はどことなく申し訳なさがにじみ出ていた。おそらく、ヒイロの財布事情を察しているからだろう。

「いえいえ。お礼として誘っただけです。あと、そんなに申し訳なさがな雰囲気はよししてください。」

「ですがー」

「まあ、財布はこの通り。だいぶ薄くなってしまいました。それに見合うものもありませんでした。」

「・・・あつたんですか？本当に。」

ヒイロの言葉に加賀は訝しげな視線を送るが、それに気にすることもなくヒイロは言葉が続ける。

「ええ、本当ですよ。加賀さんの食べる姿とつてもいい笑顔でしたので。それを見てしまえば何か財布の事情を考えるのは憚られてしまいますね。」

「て、提督・・・そんなところまで見ないでください。」

口調は淡々としているが顔を少し赤らめながらヒイロを軽く睨む。

ヒイロは特に気にした様子もなかったが。

「あらあら、加賀がそんな顔をするなんて珍しいわね。」

「陸奥も茶化すのはやめてください・・・。」

陸奥に援護攻撃を食らった加賀はあえなく精神的に撃沈するのだった。

陸奥と加賀が仲睦まじく話している中、ヒイロは一人、心の中に不安を抱えていた。

（艦娘のみんなは、深海棲艦の真実を知った時、戦う意志を持ち続けていられるのですよ。うか・・・？）

第45話 救援要請

変化とは起こるべくして起こるものもあれば突然起こるものもある。

佐世保鎮守府ではヒイロ達、艦娘達共に束の間の平和を過ごしていた。

「あー、あつついわー。最近気候がおかしいんちゃうかー。」

暑さを少しでも和らげるため服でパタパタと仰ぎながら埠頭でごちているのは軽空母、龍驤だ。時節は夏本番と差し掛かり、同時に暑さも佳境を迎える。

「うーん、やつぱ釣れへんなあ。何かしら釣れると鳳翔はんのところで作ってもらえるんけどなあ。」

龍驤は現在釣りを行なっているが、海面へと吊るしている糸が微動だにしない様子を見て、フラストレーションが若干溜まっている。

「あー!!やつぱ釣れへんー!!日差しもきつついし止めややめー!!海風で涼しくなる思ってたけどさっぱりや!!」

気持ち爆発したのか釣りをやめ、用具を片付ける龍驤。片付けながらこんなことをこぼす。

「やっぱ涼しくなるんは怪談か何かやな。今夜祥鳳や瑞鳳あたりを誘って怪談話でもしようかなつと。けど千歳はダメやな。絶対酒飲んで途中でおうちぬわ。」

鳳翔さんに見つかった時には説教もんやしなあ、バレへんようにせなあかんわ。」

そんなことを考えながら屋内へ戻ろうとすると、背後から何か音がしたような気がした。龍驤が振り向くが映った視界には何も見えない。気のせいかと思つて再び歩を進めるが――

ヒタ・・・ヒタ・・・

と濡れた足で歩いた時に発するような音が龍驤の背後で鳴った。

思わず足を止める龍驤、しかし振り向くことはない。

(じよじよじよ、冗談やろ? まっさか後ろにいるなんて・・・ましてや今真昼間やで。)

あまり想像したくないことに顔が青くなり自然と足が震えてくる。しかし、若干の好奇心があるのも事実だ。振り向いてみようかなとも思つてる。

(待て待て待て、待つんや!! 好奇心猫をも殺すつちゆうことわざもある!! 今の自分はその猫や!! 下手に振り向いて死ぬのはまっぴらごめんや!!)

恐怖心からか汗を額から垂れてくる。そうこうしている間にも濡れた音は龍驤に近づいてくる。

(ど、どうする、どうするんや自分。そもそも考えると昼間からその類のものが出てく

るっちゅうのはおかしくないか?)

若干の冷静を取り戻したのか、常識的なことを考えられるようになった龍驤。しかし、それでも混濁した頭の中で彼女が出した結論は――

(ええい、ままよ!! 覚悟を決めるんや!!)

「何もんや!! 幽霊ならさっさと成仏しなはれや……!!?」

出した結論は振り向くことであつた。意を決した龍驤はそこにいたであろう幽霊に怒声をあげるつもりでいたが、その声色しだいには色を失い、言葉が続くことはなかつた。

なぜなら、そこにいたのは各所から血を流し、足取りは重く、今にも倒れそうな様子の深海棲艦、それも姫級か鬼級の人型だつたからだ。

「え、は? う、嘘やろ?」

言葉を失い、それしか声を出すことができない龍驤を尻目に、その深海棲艦は途切れ途切れの口調で言つた。

「才願イ……タス……ケテ……!!」

その言葉を最後に深海棲艦は倒れ伏してしまつた。

倒れてしまつた深海棲艦に対し、思わず側に駆け寄つてしまふ龍驤。

「ど、どないしよ思わず駆け寄つてしまつた……!! しゃあない、やつてしまつたことだし、

「ちよい大丈夫か!!」

自分の思わずとつてしまった行動に後悔しているが、やってしまったことはしょうがないと割り切り、深海棲艦に声をかける龍驤。

「こ、この出血、素人のウチから見ても大分やばいで・・・!!」

龍驤はだれかいけないかとあたりを見回そうとするが、果たしてほかの艦娘に見せても大丈夫だろうかという疑問が吹き出る。相手は本来敵であるはずの深海棲艦だ。

「どど、どないしよ・・・。ホンマに・・・!!」

「龍驤か?そんなところで何をしているんだ?」

「あ、アムロはんっ!!」

龍驤が困惑しているところにアムロが現れた。驚いた龍驤は思わず深海棲艦を隠すように反応する。が、アムロはあたりに立ち込める血の匂いを嗅ぎとり、龍驤の後ろに隠しきれないほどの血が広がっているのを見つける。

「龍驤、どいてくれ!!」

「あ、アムロはん!!待ってー」

龍驤の制止の声も届かず、アムロは龍驤をどかし、倒れ臥す深海棲艦を見つめる。その顔は厳しいものをしている。

「龍驤。」

「な、なんや。」

アム口からトーンの低い声で話しかけられて、萎縮した態度をとる龍驤。怒られるかなにかされると思っていたが――

「こういう時はすぐに人を呼べ。手遅れになる。」

アム口は厳しい表情を保ったままだったが、龍驤を怒ることはなく、一言嗜めると、迅速に深海棲艦の傷を見る。

(これは・・・砲撃によるやけどではないな・・・。火傷の範囲が狭すぎる。そもそも体を貫通するほどの砲撃、駆逐艦ならともかく、姫級か鬼級の装甲にできるのか?・・・ん?この腕は・・・?)

傷を診ている中ふと目に入ったのは深海棲艦特有の身体が肥大化している箇所であった。しかし、その箇所は左腕。アム口の頭に一抹の不安がよぎり、深海棲艦の顔を確認する。

「き、君は、あの時のかつ!?!」

そこにいたのは、アイアンボトム・サウンドで会った吹雪とよく似た深海棲艦の姫級であった。

「龍驤、ドックは空いてたかつ!?!」

「は、はあ!?!た、確か空いと思ったと思うけど、どうするんや?」

「無論、助けるに決まっている。それに君も助けたいと思っただからこの子の側に駆け寄ったんじゃないのか？」

「み、見とつたんか!?!人が悪いでアムロはん!!」

深海吹雪をお姫様抱っこで抱えると走り出すアムロ、龍驤もそれについていくが――「あ、アムロはん、速すぎや!!島風より速ないかつ!?!」

「悪いが一刻を争う!!質問には答えかねる!!龍驤、君はドックから高速修復材を持ってきてくれ!!」

アムロの走力についていくことが出来ずに徐々に距離が離れていく。アムロは走りながら龍驤に頼みごとをする。

「こ、高速修復材やとつ!?!効くんか深海棲艦に!!」

「やってみなければ分かん!!とりあえず早く持つてきてくれ!!」

「わ、分かったわ!!」

アムロの剣幕に押されて、承諾する龍驤。そのまま高速修復材が置いてある倉庫へと向かう。

アムロはドックへと向かうために全力で走る。途中何人かの艦娘とすれ違うが、構うものか。1分、1秒が惜しい。

程なくして着いたドックの扉を蹴破り、深海吹雪を入渠させる。溢れ出る血のせいで

入渠施設内の水が赤く染まってしまふ。

(くっ、かろうじて脈はあるが、このまま入渠させても失血死するのが先か・!!)

このまま見過ごすしかないのかと、アムロが思い始めた時、

「アムロ!!高速修復材だ!!」

刹那が高速修復材を手にとって入渠スペースに駆け込んできた。おそらく龍驤から事情を聞いて代わりに持ってきたのだろう。お礼も言う時間も惜しかったため刹那から受け取ると間髪入れずに深海吹雪に高速修復材を浴びせた。

「事情は龍驤から聞いた。だが、治るのか?」

「分からないが、可能性に賭けるしかあるまい。彼女が言ったことが真実であれば・:。」
アムロは願うような口調で深海吹雪を見つめる。深海吹雪は自分には艦娘が使われていると言っていた。それならば高速修復材が効く可能性もゼロではないはずだ。

すると――

「傷が、塞がっていく・:。」

刹那がポツリと零した通り、深海吹雪の傷が徐々に塞がっていき、最終的に傷跡は見えないほどにまでなった。しかし、深海吹雪は目を覚まさない。

「目を覚まさないが・:。」。大丈夫なのか?」

「おそらく、血を出しすぎたことによる貧血状態に陥っているからだろう。時間が経て

ば起きるはずだ。」

刹那が心配気な視線を送るが、アムロの言葉により、視線を元に戻す。

アムロは再度脈を確認し、しっかりと脈があることを認識する。

「彼女、なぜこの鎮守府に来たんだ？」

「分からない。だが、彼女に付けられていた傷は少なくとも砲撃のものではなかった。」

刹那の問いにアムロは首を振りながら答えたが、続けた言葉に刹那は疑問符を挙げた。

「砲撃ではない？なら一体、誰に付けられた傷なんだ？」

「……話は後にしよう。続きは彼女が快方に向かってからだ。」

「……分かった。」

深海吹雪を抱え、アムロと刹那は医務室へと向かった。

深海吹雪をベットに寝かせて、側で見守っていると、ヒイロを含んだMS勢が部屋に駆け込んできた。

「アムロさん!! 深海棲艦を救助したって、本当ですか!？」

「見ての通りだ。しかも、顔見知りと来た。」

「顔見知り……?」

「あっ!! コイツ、アイアンボトム・サウンドで会った吹雪似の深海棲艦じゃねえか!!」

ハイネの驚きの声に流されるように確認するヒイロ。ハイネの言うとおり、深海吹雪がそこにいたことにヒイロも驚いた表情をする。

「ど、どうして彼女がこんなところにつ!？」

「事情は彼女から聞いた方がいいだろう。起きるまでは私がそばにいる。」

「そう……ですか。」

「ああ、そうだ。第1発見者は龍驤だから、彼女にも話しを聞いておいてくれないか?」
「龍驤さんが?分かりました。」

医務室を出たヒイロ達は近くに龍驤の姿を見かける。おそらく深海吹雪が心配になつてみに来たのだろう。

「提督……その……あの深海棲艦、どうなつたん?」

「結論から言えば一命はとりとめたと言つた具合です。」

「よ、良かったあ……。流石に敵とはいえ目の前で死なれたら後味悪かつたからなあ……。」

「そういえば、君が第1発見者らしいけど、話しを聞かせてくれない?」

キラがそう尋ねると龍驤は乾いた笑いを出しながら気まずそうに視線を逸らした。

「い、いやあく。ウチもだいたい気が動転してたから、あんまり覚えてえへんのや。」

「何か少しでも覚えてないですか?」

ヒイロが続けて尋ねると龍驤はうくと唸り声をあげた。

「そもそも、何か情報になり得そうなことは何も喋ってなかったわ。精々助けてつて懇願されたぐらいやな。」

「・・・となると、あとは彼女の回復を待つしかありませんね・・・。」

「ごめんな。ウチがもうちよい落ち着いていられたらなんか掴めたかもしれないのに・・・。」

「貴方の責任ではありませんよ。気にしないでください。」

「・・・提督にそう言われつと、こっちも気が楽だわ。ありがとな。」

龍驤と話したのち、ヒイロ達は情報がなさすぎるためどうすることもできずに解散した。

深海吹雪が目覚めたのは丸一日経ったころであった。

「彼女が目を覚ましたって本当ですか!？」

執務室にヒイロの驚きの声が響いた。アムロが執務室に訪れ、深海吹雪が目覚めたことを報告しに来たのだ。

「ああ、とりあえずまだ医務室に居てもらっているが、会話も可能なほどに回復した。ただ、本人は何か焦っているような感覚があったがな。」

「焦っている、ですか？」

「ああ。それと出来ればあの光の柱に居合わせたメンツで来て欲しいとのことだ。」

「あの、提督？ 深海棲艦を拾ったと聞いてましたが、その深海棲艦と何か関係をお持ちで？」

会話についていけない大淀がヒイロに質問をする。しかし、ヒイロは難しい表情をする。

「……ごめんなさい。まずは彼女のところに向かわせてください。本当のことは必ず話しますので。」

ヒイロは大淀に頭を下げた。大淀は困惑顔でそれを見つめた。

「……分かりました。それほど込み入った事情がおりなんでしょう。」

「ありがとう。」

ただ一言だけお礼を言うとヒイロはアム口とともに執務室から出ていった。

「あの人は……本当に提督らしくありませんね……。」

大淀は笑みを浮かべながらそう言った。元々、特に止めるつもりなどなかったが、ヒイロに頭を下げるという予想外のことがあったため思わず狼狽えてしまったのだ。

ヒイロが医務室に着くとそこには既に刹那達MS組が揃っていた。

「お久しぶりです。といたいたいところですが、貴方はそうは言ってはられないらしいで

すね。」

「話シガ早クテ助カル。単刀直入ニ助ケテ貰イタイ者ガイルンダ。」

深海吹雪は光の柱の内部でヒイロ達と出会い、そして別れたあと世界を放浪していたとのことだ。

そこら辺をうろついていても深海棲艦だから見逃されるのが功を奏したらしい。

ヨーロッパなどを点々としていたらしいがやはりほとんどが好戦的な深海棲艦がほとんどだったらしく若干の諦めも入っていた。そんな中、ついに人間に対し、恨みを持ち合わせていない深海棲艦と出会えたとのことだ。その深海棲艦の名は、『港湾棲姫』と『北方棲姫』。北方の名前の通り、アリューシャン列島よりさらに北、ロシアやアラスカに近い海域で出会えた。ひっそりと日々を過ごしていた二人に対し、接触を行い交流を深めた。そんな中、ヒイロ達の存在を伝えたところ一度会ってみたいとのことだ。南下してきたとのことだ。

「わたし達に会いに、ですか？」

ヒイロがそう言うのと深海吹雪は頷くがその表情は暗かった。

「タダ、途中デ謎ノ人型飛行物体ノ襲撃ヲ受ケテ、私ダケ逃ガサレタツイウ訳ダ。」

「人型飛行物体・・・？待っててください、それってまさかー。」

「モビル、スーツか？」

ヒイロとアムロが顔を青くしながら聞くと、深海吹雪は頷いた。

「確力、二人の側二居タ用心棒ガ、ソウ言ツテイタ気ガスル……。」

モビルスーツ、この単語にヒイロ達の間で戦慄が走った。モビルアーマーだけでなく、モビルスーツまで深海棲艦に在るとは、あんまり考えたくないことだったからだ。

「待って、その用心棒ってモビルスーツを知っているんだよね？となるとー。」

キラの指摘に全員の間で一つの可能性が出てくる。期待を込めながら深海吹雪に尋ねるとー

「ソノ二人ハ貴方ガタト似タヨウナ兵装ヲ持ツテイタ。名前ハー。」

『『シーブック』ト、『スウエン』ダ。』

第46話 作戦は一刻も争う

アイツの語ったシーブツクとスウエン、二人の名前。

おそらくヒイロ達と同じMSが人間となった者なのだろうが、誰も聞いたことのない名前であった。

アイツがみんなを助けてほしいと言った。しかし、ヒイロ達には出ようにも出れない理由があった。

「・・・それは、難しいお願いです。君は既に丸一日寝ていました。今から救援に行つたとしても、既に移動しているか、もしくは・・・。」

ヒイロはそれ以上言葉を続かせなかった。しかし、アイツが捉えたヒイロの表情は悲しげに顔をうつむかせており、何より如実に語っていた。

「ソ、ソナナ・・・私ハ、丸一日モ、寝テイタノカ・・・!!?」

「ええ、アムロが傷だらけの貴方を見かけたのち、すぐさま高速修復材をかけて損傷は直しました。しかし、極度の貧血状態だったため君はつい先ほどまで起きる気配もありませんでした。」

そう言われたアイツは自身の不甲斐なさを呪っているのか、悔しい気な表情を挙げ

た。そのまま彼女は顔を両手で塞いで、俯いてしまった。

その様子にヒイロ達は悼まれない雰囲気になってしまった。

救援は絶望的、そう思われた時。

「提督!!遠征の帰還途中であった天龍さん達から緊急の通信です!!」

大淀が切羽詰まった形相で医務室に駆け込んできた。そのただならぬ雰囲気ヒイロ達も気持ち切り替える。

「内容は？」

「はいっ。鎮守府からおよそ40キロの地点にて、救難信号を確認!!提督に判断を委ねたいとのことですよ!!」

「救難信号?どうしてそんなー!?!」

大淀の話す内容にヒイロは一つの可能性を見出した。

ヒイロは深海吹雪に向き直ると、若干焦った口調で詰め寄った。

「ねえ!一緒にいた人たちと別れたのはどこっ!?!」

「お、おい、ヒイロ!?!どうした突然!!」

ハイネが困惑した表情の中行われたヒイロの突然の行動にアイツは状況を掴めていないのか、驚いた顔のまま固まっている。

「早く!!もしかしたら、生きているかもしれない!!」

生きている、アイツは最初こそ理解できなかったが、先ほどまでの会話の中でその言葉が示しているのがその者たちであることを理解した時、彼女の口は自然と開いた。

「確力、50キロダ……。コノ鎮守府カラ、50キロ……。!!」

それを聞き届けたヒイロはすぐさま大淀に向き直り、迅速に指示を飛ばす。

「大淀さん、天龍さん達にすぐさまその海域から離脱するように通信を!!あとのことは私達に任せて。」

「えっ?!提督が出撃するんですかっ?!」

「それほどの緊急事態です。それでいいですよねっ?!」

ヒイロがアム口達に振り向くとアム口達は待つていたと言わんばかりの顔であった。

「すぐ戻ります。少しの間、お願いします。」

ヒイロが医務室を飛び出すとアム口達もそれに続いた。

残された大淀とアイツは呆気にとられた表情を挙げていた。

「もう……。本当に提督らしくありませんね。あの人は。」

「提督、ダツタノカ?」

大淀がため息混じりに言った言葉にアイツは疑問符を上げながら聞いた。

「ええ、そうですよ。ヒイロ・ユイ。それがあの人の名前でここ、佐世保鎮守府の提督。」

それでー」

大淀が困った表情を一転、笑顔にすると、

「私達の尊敬する提督です。」

「敵はおそらくモビルスーツです。モビルスーツである以上、最悪、というよりほぼ確定で載せている戦艦の存在も予想されます。そのことを留意しつつ戦闘を行ってください。」

「戦艦か……。厄介だな。」

ヒイロが鎮守府内の廊下を駆け抜けながら注意点を述べていくと、アムロが難しい表情をあげる。

「となると人員を戦艦とモビルスーツ、半分に分けるか？」

「母艦を叩ければ確かにいいですが、そう簡単に行くとも思えません。現状は救助を最優先事項としてください。」

刹那の提案をヒイロは蹴った。最優先するのは救助部隊、その言葉に納得した刹那は特にそれ以上は何も言わなかった。

「それじゃあ、皆さん。行きますよ!!」

『了解!!』

鎮守府の施設を出たヒイロ達はすぐさま兵装を展開し、アイツの仲間達を助けるべく、救難信号の発信源へと飛翔した。

「さて、救難信号を出したはいいが、これが吉と出るか凶とでるか。」

「……可能性としては凶の確率が限りなく高い。あまり期待はしない。」

「素晴らしいながらもこれしか方法がないのが現状だ。お前だってそれはわかってるだらう?」

「……否定はしない。」

「私はここで見張っている。二人の様子を見てきて貰えないか?」

「……わかった。」

煌びやかに輝く金髪をポニーテールに纏めた女性が隣にいた自身の一回りほど身長の小さい相方に声をかけると対照的な銀色のツインテールを翻しながら、無人島にあったそこら辺の葉っぱと木材で組み立てたテントに顔を覗かせる。

「港湾棲姫。調子はどうだ?」

「私ハ、大丈夫。コノ子モコノ様子ダカラ。」

素晴らしいながら『港湾棲姫』は自身の太ももでスヤスヤ眠っている『北方棲姫』の頭を撫でた。その様子にテントをのぞいていた女性は微笑みながらも港湾棲姫に厳しい

目を向ける。

「無理はするな。応急処置は施したとはいえ、お前は腕を負傷しているからな。」

「エエ、心配シテクレテアリガトウネ。『スウエン』。」

「・・・それは私達の至らなさが引き起こしたことだ。気にかけるのは当然のことだ。」
若干気恥ずかしげな表情をしながら女性ー スウエン・カル・バヤンはテントを後にした。

「どうだった？ スウエン。」

再度見張りに戻つてくると金髪の髪の女性がスウエンに二人の様子をたずねてきた。

「問題ない。今のところは、な。」

「そうか・・・。深海吹雪アイツと別れてから丸一日経ってしまったが、音沙汰なしか・・・。」

「やむを得ない判断だったとはいえ、彼女には荷が重かったかもしれないな。」

スウエンにそういわれ、悲しげな表情を挙げていると、二人のリーダーに反応が現れる。

「・・・どうやら、凶だったようだな。『シーブック』。」

「流石に速いな・・・。まあ、元々、分の悪い駆け引きだったさ。あれこれ言うつもりはない。だから今はー」

「ああ。二人を守るぞ。」

シーブックとスウエン、二人の視線が見据える先にはモビルスーツが何かに乗って飛んでいた。

装甲が薄い緑色に水色のメインカメラを光らせている。シールドに十字の下に半円の弧が描かれているモビルスーツ、その名も『ジエガン』。その数はおよそ30だ。それらは揃ってフライトユニット『ドダイ』に跨って、シーブック達のいる無人島へ接近していた。

「彼女らの警護を最優先にして撃墜を怠ったのが今になって響くか……」
「しようがあるまい。とりあえず、迎撃するしかないな。」

そう言う二人は兵装を展開する。スウエンはハンドガンのサイズの二丁拳銃を手に、シーブックは体を包むようになっていたマントを翻しながらさながら海賊が持つようなカトラスのような刀身を持つビームサーベルを引き抜く。

「クロスボーンガンダムX1、シーブック・アノー、出るッ!!」
「ストライクノワール、スウエン・カル・バヤン。出撃する。」

シーブックは背中から見える特徴的なX字のブースター、スウエンはノワールストライカーのブースターを蒸し、ジエガン達の迎撃に向かう。

二人が迎撃に向かってきたのを確認するや否や、ジエガン隊はビームライフルを発射する。30機ものジエガンから放たれるビームは濃密な弾幕を形成するが、

二人は平然とした様子で切り抜ける。

「そこっ!!」

シーブックが手に持っていた『バスターガン』で正確にジェガン隊の内の一機を撃ち抜く。乗り手を失ったドダイはそのまま落ちていくがー

「利用できるものは最大限利用させてもらおうっ!!」

腰部から鎖の先端にクロウが付いた『シザーアンカー』を射出し、ドダイを掴む。シーブックはシザーアンカーの鎖を掴むとそのまま力いっぱい振り回して、別のジェガンにぶつけた。

「そこっだー!」

スウエンもジェガンに肉薄し、両手に持つ二振りの『フラガラツハ3ビームブレイド』で袈裟斬りをする。小ぶりながらも対艦刀でもあるビームブレイドはジェガンを胴体から斜めに切り落とした。

スウエンは切り落としたジェガンに見向きもせず次ターゲットに目をつける。

スウエンが二機のジェガンに接近すると、当然迎撃としてビームライフルを発射する。対してスウエンはビームを潜り抜けているなか、両の腕からワイヤーを発射しつつ、二機のジェガンの間を通り抜ける。ジェガンは振り向いて再度ビームライフルでスウエンを攻撃しようとするが、突如として両機ともバランスを崩し、互いにぶつかり

合って爆発した。

スウエンはワイヤーを二機のジエガンに突き刺し、通り抜けたあとにワイヤーを駆使して、ジエガンを引っ張ったのだ。

「ちっ、数が多すぎる。捌き切れないなこのままでは。」

「不味い……か。やはりそうなるか。」

スウエンが舌打ちしながら苦言をこぼす。シーブックも似たような表情を挙げたままだが、攻撃の手を緩めることはしない。

しかし――

「ツ!? 高エネルギー反応!?!」

シーブックとスウエンが二人揃って咄嗟にバレルロールを行うと今までいた場所を高出力のビームが駆け抜けた。スウエンはビームの飛んできた方角を見やると――

「このタイミングでの戦艦の介入……。奴らは我々にとどめを刺してきたか。」

そこには巨大な空を飛ぶ船がいた。黒い装甲に特徴的な飛び出た二つのモビルスーツ用のカタパルト。シーブックはかろうじてジエガンは知っていたが、その戦艦の周りには見たことがないモビルスーツがいた。カラーリングはベージュとオレンジのツートンカラー、黄色のセンサーカラーをシーブック達に向けている。可変機能を兼ね備えたZ系列機『リゼル』が4機とおよそ24機のジエガンをおともにドゴス・ギア級2番

艦、『ゼネラル・レビル』が悠々と飛んでいた。砲門は既にシーブック達二人に向けられていた。

「くっ……。これほどの戦力差とは……!!」

「このままでは……っ!!」

シーブックとスウェンの後ろには港湾棲姫と北方棲姫がいる無人島がある。

逃げるわけにはいかない。だが、目の前の戦力差は絶望的だ。

（くそっ……。何か手はないのか……!!）

そのシーブックの思いは無情にも目の前に広がる無数の光に閉ざされた。

第47話　ガンダム10機確認

ゼネラル・レビル、そしてリゼルを戦力に加えたジエガン隊はビームの矛先を全てシーブックとスウエンに向ける。放たれたビームが雲霞のごとく降り注がれる。

「くっ……!!さすがにこの数は……!!」

「戦力差は絶望的……。こちらがやられるのはやはり時間の問題か……!!」

シーブック、スウエン共々降り注ぐビームを避け、反撃しようとするが想像以上の弾幕の濃さに捌くのが精一杯になっている。

シーブック達がビームに手を焼いている間、ゼネラル・レビルからミサイルが発射される。

シーブックは自身らに飛来するものかと思つたが、ミサイルの軌道は明らかに二人を狙つたものではない。

では一体どこを狙つてー

「まさかっ!」

シーブックが振り向いた視線の先には無人島。つまりあのミサイルは港湾棲姫と北方棲姫を狙っているものかもしれない。

シーブックの予想通り、ゼネラル・レビルより発射されたミサイルはシーブック達の頭上を通り過ぎ、無人島へと接近する。

「やらせるものかっ!!彼女たちを!!」

シーブックは自身が羽織っているマントを脱ぎ捨てた。ヒラヒラと舞うマントはジェガンたちのビームに焼かれるかと思ったが、

『ABCマント』だ!!こいつで強行突破する!!」

ビームがマントに触れるとさながら弾くようにビームがそれていった。

シーブックに装着されてある『ABCマント』。ABCとは、アンチ・ビーム・シールドの略。つまりビームに対し、耐性を持つ性能が付与されたマントである。

しかし、耐性を持つとは言え、せいぜい五、六発を防ぐのがやっとのため、マントは一瞬のうちに焼き切れる。

「なんとおーー!!!!」

だが、その一瞬の隙をシーブックは見逃さなかった。ブースターを一気に蒸すことでビームの嵐から離脱する。

「スウエン!!保たせられるかっ!?!」

シーブックはミサイルを追跡しながらスウエンに問いかける。

対するスウエンはビームの嵐を潜り抜けながらため息を吐く。

ジエガン隊はリゼルを戦列に加えて、スウエンに対しさらにビームの弾幕を濃くする。

囲まれる形となつたスウエンにジエガン、リゼルのビームライフルが襲いがかかる。普通であれば絶望的だが――

「ふっ!!」

四方八方から飛来するビームをスウエンは回転しながら避けた。体を捻りながら行つた回転にビームは脇や股の下などスウエンの体ギリギリを通り過ぎる。

スウエンは回転している中、両手にビームライフルをハンドガンのサイズに収めた『ビームライフルショーテーター』をカウンターと言わんばかりに乱射する。

回転しているというのもあつて命中率はおぎなりだが、それでも5、6機に直撃し、爆発に包まれる。

「行け。彼女らを頼む。だが、長くは保たない。」

「・・・注文の多い奴だ。だが、ありがとう。」

軽く笑いながらお互いの相手を見据える。シーブックはミサイルへ、スウエンはモビルスーツ隊と。

「間に合うか・・・? いや、間に合わせる!!」

特徴的なX字のブースターを蒸しながら、ミサイル以上の機動力で接近すると、ビー

ムの刀身が斬馬刀のような形をしている『ビーム・ザンバー』でミサイルを斬りふせる。
「くそつ。飛んでいるのはいくつだ・・!?」

飛来していくミサイルの数は残り10。対して潜伏していた無人島までは残り数百メートルほど。

到底間に合うような距離と数ではない。だが、ここで諦める訳にはいかない。

シーブックはビームザンバーを振るい、ミサイルを斬り落とす。

しかし、圧倒的に時間が足りず、全機撃墜は絶望的、そう思われた時。

『その人!!どいてください!!』

シーブックに対する呼び掛けとレーダーに映った高出力反応に咄嗟にその場を離れた。直後、ミサイルを山吹色の閃光が駆け抜け、閃光が過ぎ去ったあとにはミサイルのかけらも残っていないかった。

「今のは一体・・・?」

シーブックが閃光が飛んで来た方角を見ると、八人の人影がシーブック達に向かって
いるのが見えた。

その中の一人と思われる者から通信が入られる。

『こちら、佐世保鎮守府提督、ヒイロ・ユイです。確認します。あなたがシーブックさん、
もしくはスウエンさんですね?』

シーブックとスウエンの名前を知っているのは港湾棲姫、北方棲姫、もしくは先に目的地であった佐世保鎮守府に向かった深海吹雪しかいない。そして、佐世保鎮守府がシーブックとスウエンの名前を言ったということは――

「そうか……。彼女は、無事に着いたんだな……」

深海吹雪が無事に生きていることの現れである。シーブックはそのことに安堵しながらヒイロの通信に答える。

「ああ、私が、シーブック・アノード。まさかとは思いますが救難信号を拾ってくれたのか?」
『たまたま、その海域付近を通っていた遠征艦隊が居ましてね。援護します。動けますか?』

「なるほどな。救援、感謝する。すまないが私とスウエンには手に余る数でな。」

シーブックとの通信を終えたヒイロは視線の先に展開しているモビルスーツ部隊に目を向ける。

「あのモビルスーツと戦艦、ゲルズゲーやザムザザーといったモビルアーマーと同じようにダウンサイジングされていますね。」

「あれは……ジェガンか。私の時代の頃のもののような……。だが、あのZ系列のような機体と奥の黒い戦艦はなんだ?」

ヒイロとアムロが敵MS部隊に対する見識を述べる。アムロはジェガンは知っては

いるがその他の機体、および戦艦は知らない。だがー

「あれは、Z系列の量産機、リゼルとドゴス・ギア級二番艦、ゼネラル・レビルです。」
「フェネクス？知っているの？」

フェネクスが戦艦とモビルスーツの名前を述べるとアリスが驚きの表情でたずねる。その問いに対して、フェネクスは無言でうなづく。

「あれは、私の時代。UC0096の時代の機体です。」

「となると、第二次アクシズ抗争の際のジエガンと思わない方がいい、ということか。」

「キラ、先行して吹っ飛ばしちゃってください。」

「分かったよ。」

ヒイロがキラに指示を飛ばす。キラが先行するとフルバーストモードに移行する。

「ターゲット、マルチロック・・・。」

キラがマルチロックオンシステムでジエガンとリゼルにターゲットを合わせる。

もちろん、戦っている最中のスウェンはちゃんとターゲットから外している。

「ああいう乱戦状態から撃ち抜くのは得意な・・・はずだよ!!」

キラの一斉掃射がスウェンの周りのジエガン隊を撃ち抜いた。

「今の攻撃方法・・・見覚えがあるな。」

突然の砲撃に驚いたスウェンだったが、自分に対する攻撃ではないことを察すると自

身に引つかかることがあつたのか、ポツリと言葉をこぼした。

「その君、大丈夫？」

スウエンのそばにキラが駆け寄つた。キラの後ろの青い翼を見てスウエンは合点の
いった表情をした。

「……その青い翼、お前はフリーダムガンダムか。」

「……君は、僕のことを知っているんだね。」

「お前の悪評は連合にも届いているからな。」

「え、僕、何かやらかしてたっけ？まあ、ザフトと連合を相手取って色々やってたから
なあ……。」

「ストライクノワール、スウエン・カル・バヤンだ。今はあの部隊を叩くぞ。」

コーディネイターとナチュラルに關係なくな。」

スウエンのその言葉を聞いて、キラは驚いた表情をしながらビームサーベルを構え
る。

「君、珍しいね。連合だからつきり目の敵にされるって思ってたけど……。」

「……コーディネイターにも様々な人間がいることを知っているからな。」

素晴らしいスウエンは自分の記憶の中にいた緑色の長髪のコディネイターの女性を
思い返した。その女性は自身のパイロットをナチュラルでなおかつ敵であるにもかか

わらず、助けてくれた。その出来事にはスウエン、ストライクノワールにも少なからずの影響を与えていた。

「僕のことにはキラって呼んでほしいな。キラ・ヤマト。」

「・・・了解した。」

スウエンとキラはブースターを蒸し、ジェガンをラケルタ・ビームサーベルもフラガラツハ3ビームブレイドで斬り裂く。かと思うと即座にルプス・ビームライフルとビームライフルショーテーターを構えて、互いに援護するようにジェガンを撃ち落とす。

「さすがだな。」

「そつちもね。」

シーブックも再びジェガン隊との戦いに戻る。バスターガンでリゼルに攻撃を仕掛ける。しかし、クロスボーンガンダムX1は接近戦向きの機体。射撃には若干の不得手があるのか、リゼルには避けられてしまう。リゼルはお返しと言わんばかりに変形機構を駆使してシーブックを翻弄する。

「くつ。精度が低いな・・・。」

「ディバイダー!!こいつでえ!!」

ガロードが苦戦しているシーブックにディバイダーで援護を行う。

無作為に拡散するディバイダーのビームはリゼルの逃げ道を狭めて行く。

リゼルはビームをやり過ぎそうとするがー

「逃すものかつ!!」

好機と見たシープックがビームザンバーを投擲する。デイバイダーのビームに気を取られていたリゼルは避けることが出来ずに胴体部分にビームザンバーが深々と突き刺さる。

さらにシザーアンカーでビームザンバーの持ち手を捉えようと、シザーアンカーの鎖を掴み、振り回す。鎖の動きと連動し、ビームザンバーがリゼルの装甲をえぐり取り、爆発四散する。

「すまない、助かった。．．．いい武器だな。それ。」

シープックはガロードのデイバイダーを見て、感想を述べた。

「おだててもなんもでねえからな? とりあえず今はあつちが優先だろ。」

それに対しガロードはゼネラル・レベルに目を向ける。ダウンサイジングされているとは言え、元々ドゴス・ギア級は600メートル以上のサイズを誇る宇宙世紀最大の戦艦である。モビルスーツの搭載量も火力面でも他の戦艦とは一線を成す。いわば、大和型の宇宙世紀バージョンといったところだろうか。

ガロードの言葉にシープックは納得の表情を挙げる。だが、ふと思いついたことをガロードに述べた。

「・・・そうだ。名前はなんて言うんだ？」

「私？ガロード、ガロード・ランド。」

「なら、ガロード、申し訳ないのだが、あのモビルスーツ隊のビームライフル、残しておいてはくれないか？」

「・・・別にいいけどさ。何に使うんだ？」

「少し、作ってみたいものがあったな。」

シーブツクの言葉にガロードは疑問の表情をあげるしかなかった。

第48話 新たなる目標

「でえああああっ!!」

刹那がGNソードⅢでジェガンを縦に真つ二つにする。その背後にリゼルがビームサーベルを振りかざしている。仇を討とうとするようにビームサーベルが刹那に振り下ろされるが――

ザンツ!!

突如として飛来したビームを纏ったブーメランがリゼルのビームサーベルを持つ手を切断する。

リゼルはブーメランが飛んできた方向を見ようとしますが、次の瞬間にはジェガンと同じようにせつなに斬り裂かれた。

「助かった。ありがとう。」

刹那の視線の先にはハイネがいた。ハイネは自分の手に戻ってきたブーメラン、フラッシュエッジ2を掴むと肩に戻しながら、オレンジ色の髪をわしゃわしゃとする。その表情はなんだか微妙な顔をしている。

「ま、お前には余計なお世話だったと思うけどな。」

「それでも援護してくれたことに変わりはない。」

「そうかい。刹那がそう言うんなら別にいいけどよ。」

二人は背中合わせでGNソードⅢとアロンダイトを構える。周りには未だ10機あまりのジェガンが二人を包囲していた。

「俺らの仕事はゼネラル・レビル付近の敵を引き剥がすことだけど、こなせてるのか？これ。」

「ブリッジさえ叩けば問題ないはずだ。それに、彼女らは、戦艦の対空砲火に当たる程度の力量ではない。」

刹那の言う通り、ゼネラル・レビルの周辺ではヒイロ達が飛び交っていた。

ヒイロ達が付近を旋回すると対空砲火が飛んでくるが、それに直撃するヒイロ達ではない。

空を縦横無尽に駆け抜けながら、一つ一つ砲台を潰して行く。

「フィン・ファンネル!!」

アムロのフィン・ファンネルがミサイル発射管を破壊し、

「目標、狙い撃ちます!!」

「ビーム・マグナムでっ!!」

アリスとビーム・スマートガンとフェネクスのビーム・マグナムが対空砲を装甲ごと

えぐり取る。

「艦底部に回り込みました!!これで!!」

バード形態でゼネラル・レビルの艦底部に回り込んだヒロがバスターライフルを構える。

「ターゲット、ロックオン・・・!!」

標準はゼネラル・レビルのエンジン部分。ターゲットをロックしたヒロはバスターライフルのトリガーを引く。

「攻撃開始。」

銃口から放たれた山吹色の閃光はゼネラル・レビルのエンジンを貫通し、そのままブリッジまで巻き込んだ。

ブリッジとエンジンが消し飛んだゼネラル・レビルは動きを止め、海面へとその巨体を叩きつけた。爆発の規模は衝撃波が目に見える程であった。

「こちら、ヒロ・ユイ。敵戦艦、撃破しました!!各員は残党勢力の掃討を!!」

「よっしゃあ!!やるぞ、シーブツク!!」

ガロードはガッツポーズをしながらシーブツクを見るが、当のシーブツクは驚愕といった表情をしていた。

「凄い技量や連携の持ち主だ・・・。君たちは。」

「そうか？これでも寄せ集めだけ？私達。ま、目指してるところはおんなじだけだな。」
ガロードは素晴らしいながら、残りのモビルスーツを蹴散らすべくディバイダーを構えながらブースターを蒸す。

「寄せ集め、か。」

シーブックは自分がかつていた集団、『クロスボーン・バンガード』を思い出した。『クロスボーン・バンガード』は宇宙海賊として活動していたため、寄せ集めという感じが否めなかったが、それでも皆同じ理由を持って戦っていた。

「悪くない部隊だな。ここは。」

シーブックもガロードに続き、ブースターを蒸した。

ゼネラル・レビルを喪ったジェガン隊は指揮系統がなくなつたためか混乱するような様子を見せていた。ヒイロ達はその間に潰け込み、次々と撃破していく。

程なくしてジェガン隊を全滅させたヒイロ達、シーブックとスウエンに案内されて、港湾棲姫と北方棲姫と対面する。

北方棲姫は見た目は子供と遜色はないが、真っ白な肌と真紅に染まつた目、それに頭部に生えた二つの小さなツノが彼女が深海棲艦であることをしっかりと表していた。そんな彼女を抱き抱えている港湾棲姫はお姉さん、あるいは母親のようにも見える身なりではあつたが、抱き抱えている手がかぎ爪のように異形化しており、禍々しさも若干

感じさせる。

「佐世保鎮守府提督のヒイロ・ユイです。あなたがたが……。」

「どうした、ヒイロ？ 思いつめた顔してよ。」

そんな二人にヒイロは声をかけようとしたが途中で言葉を詰まらしてしまう。

不思議に思ったガロードが問うとー

「そのですね。彼女……名前、なんていうでしたっけ？」

「……そういえば、聞いてなかったな。」

刹那がそういうとほかの面々もあー、そういえば、と言ったような顔する。

「どうしましょう?。」

「安直だが、深海吹雪で大丈夫じゃないか？ 彼女自身、吹雪と言う艦娘に似ている自覚はあるみたいだからな。二人もそれで分かるか？」

フェネクスが不安な視線を浮かべているとシーブックが提案をした。

深海吹雪。安直だが、そのぶんわかりやすい。シーブックに聞かれた港湾棲姫と北方棲姫は首を縦に振り、理解を示した。

「それじゃあ、改めて。あなた方が深海吹雪ちゃんが言っていたお二人でよろしいですね?。」

「港湾棲姫。深海棲艦ノ間デ私ノ様ナタイプハソウ呼バレテイル。コッチはホッポ。北

方棲姫だ。」

「ゼロオイテケ!!」

「ぜ、ゼロ置いてけ? 一体なんのことですか・・・?」

「すまない。こちらでも何を要求しているのか見当がっていない。」

挨拶がわりに言われた言葉にヒイロは困惑の表情をしながら北方棲姫と付き合いの長いはずのスウエンに視線を移したが、スウエンはお手上げ状態であると言われた。

「・・・えつと。とりあえず一度鎮守府で話を聞きますのでご同行願えますか?」

鎮守府に戻ってきたヒイロ達、彼女らがまず最初に行ったのは港湾棲姫、北方棲姫、そして深海吹雪の事情説明だ。

最初こそ警戒心を出していたが、スウエンとシーブックが筆頭となって説明を行った結果、なんとか艦娘達の了解を得ることができた。

「ふう、なんとかかひと段落つきましたね。」

「全くだ。もう少し考えて行動を起こすべきだったな。」

額に汗を浮かべながらヒイロとアムロが司令室の椅子に腰掛ける。

「ま、別にいいんじゃないの? こうして仲間も増えたわけだしさ。って、刹那どした? そんなに考え込んでよ。」

ガロードが笑みを浮かばせながらいると何やら思いつめた様子の刹那が目に入る。

「・・・なぜ、MSは港湾棲姫らを狙ったんだ？味方同士ではなかったのか？深海棲艦と私たちの世界の技術を横流ししているものは。」

「・・・その口ぶりだと、今回とはほかにMSが居たように聞こえるが？」

刹那の言葉にスウェンとは怪訝な表情を浮かべる。

刹那は無言で頷きながら話しをする。

「私たちが深海吹雪と初めてあつて戦場での話だが、複数のMAと接触した。

確か、名前はー」

「ザムザザー、ゲルズゲー、ユークリッドの3つだ。」

ハイネがMAの名前をあげるとスウェンが苦い顔をする。

「っ!?その3機は連合のMAだぞ・・・!?」

「知ってるのスウェン!？」

キラが驚いた表情のままスウェンを見つめる。

「私は連合のガンダムだからな。その3機の名前は知っている。スペックもある程度までは把握している。」

「その話し、あとで詳しく教えてもらってもいいですか？今は別の話しをしているので。」

「ああ、わかった。しかし、その3機が現れた戦場では深海棲艦と共にいたのか？」

ヒイロの言葉で話しを元に戻すスウェン。

ついでに質問した言葉はフェネクスが答えた。

「そう、ですね。その時は完全に私達を敵視していましたね。」

「そうすると今回のMSはこの前のMAの軍勢とは別なのでしょうか？」

「いや、その可能性は低いかもしれない。」

アリスの疑問をアムロが否定する。

「シーブック、彼女ら港湾棲姫達は私たち人類との戦争は望んでいないのだろうか？」

「その認識で構わない。彼女らは戦争にはだいたい否定的だったからな。」

シーブックの答えに頷く素ぶりを見せると厳しい顔をしながら話しを続ける。

「敵の目的が見えてきた。おそらく裏で糸を引いている奴の目的は戦争を続けさせることだ。」

「戦争を続けさせること、ですか？」

「ああ。港湾棲姫達が理性を持って人類と話し合うことで、少なくとも深海棲艦が一枚岩ではないことを海軍は分かってくれるはずだ。道のりは遠いかもしれないが、確実に平和への道は開かれる。」

「・・・ですが、もし深海棲艦側が、そういった者達を隠蔽し続ければ、海軍内では深海棲艦＝敵の図式が成り立ってしまい、両者の間での対話が不可能になる・・・。」

ヒイロの言葉にアムロは頷いた。刹那達も厳しい表情をしている。

「なるほど、港湾棲姫達を狙ったのは、そういう可能性の芽を摘むためか。」

「せつかく分かり合えそうな奴が出てきたんだ。そんな勝手な理由でアイツらを殺されたまるかよ。」

刹那が表情を厳しくし、ガロードが両手を握ることで気迫を露わにする。

「……ようやく、真に倒すべき敵が見えてきた、というところですかね。」

「まだ全貌は明らかになつたわけではないがな。だが、この先は文字通りの茨の道だ。何しろ、時間が経ち過ぎている。」

刹那の言葉にヒイロは頷く。人類と深海棲艦の戦いは既に三年近く続いている。

人類の間でも深海棲艦を恨んでいる者も少なくない。横須賀鎮守府の元木提督がその最たる例だ。

「でも、まだ可能性がゼロになっていく訳ではない。そうですね、ヒイロ。」

「はい。まだ終わってしまったわけではないですから。」

フェネクスの言葉にもヒイロは頷く。可能性がわずかにあるのであれば諦めることはしない。

「私たちの最終目標はこの戦いの裏を引いている者。ひどく大雑把ですけどね。」

第49話 スウエンとシーブツクのその日暮らし

「……」

ここは食堂。何人もの艦娘達が間宮が作る料理に舌鼓を打つ。

和気藹々とした雰囲気の中、無表情で黙々と食べ続ける者が一人。スウエンだ。

まだ佐世保鎮守府に来てから日の浅いスウエンは割と一人でいることが多かった。

「隣、いいかな?」

「ああ。構わない。」

そんなスウエンに声をかけるものがいた。同じコズミック・イラ出身のキラだ。

キラはスウエンの隣に座るとスウエンと同じように黙々と料理を食べ始めた。

しばらくの沈黙のあとキラが口を開く。

「ねえ、スウエンって僕よりあとに出来たMSなんだよね?」

「そうだな。だが、お前もその時はまだ動いていたはずだ。ときおり悪評は聞いていたからな。」

「その悪評ってどんなのがあったの?僕、なぜかヤキン・ドゥーエまでの記憶までしかないから、ちょっと気になって。」

「・・・聞くのか?」

スウエンが少し微妙な顔をする。キラはそれに気にしないと言った顔をする。

「別にそんなに遠慮しなくていいよ。僕は連合にもザフトにも敵対していた身だからね。」

「・・・わかった。これは私が噂で聞いた話しだ。間に受ける必要はないと先に言っておく。」

「う・・・うん。」

スウエンの念押しに軽く気圧されるがキラは意を決して頷く。

「まず、お前、もといフリーダムガンダムはアークエンジェルを伴っていくつもの戦闘に介入していた。」

「・・・やっぱり、ナチュラルとコーディネイターの?」

「ああ。ヤキンの戦いが終わった後もいくつもの戦闘行為が各地で起こっていた。」

キラはその言葉を聞いて悲しい顔をした。スウエンはその表情を見つめながらも話を続ける。

「なんとなくだが、戦闘を辞めさせたいというのは感じていた。だが、その行動によく意味がわからないことをすることもあつたが。」

「い、意味がわからないこと?」

「敵のMSの武装や部位だけを破壊してそのまま放置していた。そんなことをすれば他の敵のいい的になるだけなのだ。」

「元々不殺主義だったからね…。僕のパイロット。僕に乗って明確に殺したと言えるのは……。」

そういつたところでキラの脳裏に一機のMSが浮かんだ。憎悪の塊とも言えるあのMSは本当に強かった。

「……今は考えることじゃないね。他には何かあった?」

「そうだな……。これが一番よくわからなかったな。」

「という?」

「カガリ・ユラ・アスハを知っているか? オーブ首長国連邦のだ。ヤキンの戦いにも参戦していたらしいからお前ならわかると思うが。」

「ああ、うん。知ってる。金髪の男勝りな人だよな。」

「そいつの結婚式に乱入して花嫁であったカガリ・ユラ・アスハを拉致していた。」

「……え? 何それ。僕のパイロット、そんなことしてたの?」

「……こちらが聞きたいのだが。」

思わず表情を固めて、言葉を失ってしまうキラ。スウエンはその様子をみてため息をついた。

「なぜ奴が彼女を連れ去ったのは未だよくわかっていない。．．．どうした？」

スウエンがキラをちらりと見やるとキラの様子がおかしいことに気づく。

顔は下を向いて表情を伺えなかったが、手がプルプルしていたことに目が入る。

「．．．．．して。」

「．．．．．？」

「どうしてあの人は、そんなに人の許嫁が好きなんだアアア!!!」

キラと突然の絶叫が食堂に響き渡る。艦娘達が驚いた様子でキラに視線を集中させ、スウエンも目を見開いて驚きの様子を表していた。

「これで三度目だよ!! 1 回目には友達の許嫁、2 回目に至っては親友の許嫁、それにあのラクス・クラインだよ、その相手!! そしてさらに僕が見ていた限りかなりいい雰囲気になっていった!! もう親友のジャスティスのパイロットが可愛そうだよ!! にも関わらず、3 回目に至っては結婚式中の花嫁を拉致するって!! どこまでやらかすつもりなんだあの人はあ!!」

「ま、待て。とりあえず落ち着け。」

キラの突然の豹変にスウエンはどうすれば良いか分からなくなっていた。

止め方もわからないため、どうすることも過ぎず、キラの暴露はヒートアップしていく。

「それに僕が覚えている限りだと、カガリさんは僕のパイロットと血縁関係なんだよ!!
姉か妹かはわからないけど肉親を寝取るつもりなのかあ!!」

なかなかものすごい暴露を言い切ったところでキラの絶叫は一度なりを潜める。

収まったかとスウエンは思ったが――

「……一度あの人ぶっ飛ばしに行こうかな……」

潜めたところか悪化してた。キラの目からハイライトは消え失せ、虚ろな瞳がこの世界にはいないはずのフリーダムのパイロットを見つめる。

スウエンはよく理解できなかつたが、少なくともこのまま放置するのはまずいことだけは直感していた。

故に――

「悪く思うな。これはお前のためでもあるからな。」

キラの頭にスウエンは思い切りげんこつを叩き込む。ゴスツつと鈍い音が食堂に響いた後、キラは仰向けに倒れた。

「……。食べるか。」

(スウエンさん、強っ……。)

そのまま再度ご飯を頬張り始めたスウエンを見て、とりあえずホツとする艦娘達であつた。

「……何か、食堂のほうで一悶着あったような気がするんだが……?」

「気のせいじゃねえの?今はこっちに集中しようぜ。」

こちらは工廠。ここではシーブックとガロードが鋼材を用いて兵器を製作しようとしていた。

前回の戦闘で鹵獲したジェガンやリゼルのビームライフルを材料に設計図を書いて妖精さんに頼んでみるという寸法であった。

「とりあえず、こんなもんでどうよ?」

書き終えた設計図を手にとって確認するシーブック。

しかし、その表情は難しい顔に変わる。

「……む。全体的に線が不揃いだな……。これで出しても妖精さんとやらは正確には作ってくれないんじゃないか?」

「んー、やつぱそつか。いや、難しいな。こういうのは。」

「やはり、そういうことに精通している者が書いた方がいいんじゃないのか?」

「つつてもなあー。明石はちよいと深海吹雪達の艤装に掛り切りになってるしなあ……。」

ガロードが手を後頭部に回し、困った様子を表しているところ。

「あれ？ガロードさん？それにあなたは確か、シーブックさんでしたよね。」

工廠の中に入ってくる人物がいた。緑がかつた銀髪のパニーテールがトレードマーク、軽巡の中で比較的特異な部類に入る特殊兵装軽巡の夕張だ。

「お、夕張じゃん。……お前って設計図とか書けるか？」

「えっ？設計図ですか？んー。明石さんほどはうまくは書けませんけど、それでいいんです。」

「お、なら頼むわ。こういうったヤツなんだけどー」

ガロードの不完全な設計図とシーブックの説明と共に夕張は鉛筆を右手に定規を左手に持って設計図を書き上げていく。

そして数十分しないうちにー

「とりあえず、こんな感じですか？シーブックさん、確認してもらえますか？」

夕張が書き上げた設計図をシーブックが確認する。

「凄いな……。君は。私が想像した通りのものに仕上がってる。」

その設計図の出来にシーブックは声を唸らせる。そこにはシーブックの想像通りに特殊な形を兵装『ピーコック・スマツシャー』が描かれてあった。

「そうですか？ご期待に添えられたようで良かったです！」

夕張が嬉しそうな顔をする。シーブックも微笑みながら出来上がった設計図と材料

を妖精さんに手渡す。

「やれるか？」

シーブツクがそう尋ねると妖精さんはしばらく考えこむような仕草をすると、何か思いついたように工場の一角にパタパタと走り込んだ。

そこには別の妖精さんの集団がいたが、ほかの妖精さんとは一風変わった雰囲気をしている者が多かった。

パインサラダをモシヤモシヤと食べている妖精さん。

何やら怪しい雰囲気醸し出している5人ほどのおじいさんのような妖精さん。

メガネをかけ、嫁と思われる妖精さんいつも一緒にいる妖精さん。

帽子を被った子供のような妖精さん。この妖精さんに至ってはガロードにはなんとなく見覚えがあった。

設計図を持った妖精さんがその者たちに駆け寄るとすぐさま集まり会議のような話し合いを開始した。

「……なあ、あんな妖精さん、いたか？」

「いや……。私は見たことないですね。というか、あんなのがいたら絶対記憶に残って
ます。」

ガロードと夕張が怪訝な表情を浮かべながら妖精さんの話し合いを見つめる。

程なくして話し合いが終わったのかその集団は工廠の奥へと消えてった。

奥から何やら铸造したりする音が聞こえるため、なんとなく開発をしてくれていることは察せたが。

しばらくすると開発が終わったのか妖精さんが開発できたものを持ってきてくれた。クロスボウのような形をした兵装に複数のビーム発射器が付いたものだ。

シーブックが操作するとビーム発射器が付いている部分がクジャクのように広がった。

「妖精さんの技術力には脱帽だな。」

「それは同感だな。私もこれ作ってもらったからな。」

ピーコック・スマツシャアの出来に感嘆の声を挙げるシーブックにガロードが自身も作ってもらったデイバイダーを取り出しながら声をかける。

「そういえば、ガロードさんのデイバイダーとシーブックさんが作ってもらった物って結構使い方似てます?」

「そうだな。結構参考にした節はある。」

「というか、こっちのが取り回しはマシだな。私のは機能が多くてだいぶデケエからな。」

「ええー。結構好きですよ、ガロードさんのデイバイダー。機能が多いうてことはそれ

だけできることがあるってことじゃないですかー。」

「肝心の私がいこなせてなかったら意味ねーけどなー。」

お互いに笑い合っているとシーブツクが外を指差しながら話しかける。

「なあ、試し打ちできる場所はないのか？少し慣らしておきたいんだ。」

「おう。あるぞ。こつちだ。夕張も来るか？」

「えっ!?!いいんですか!?!」

「構わない。減るもんじゃないからな。」

ガロードに誘われ、シーブツクにも許諾を得た夕張は嬉々とした顔で着いていった。

第50話 胎動

射撃演習場にきたシーブック達3人は早速『ピーコック・スマツシャー』の試射を始める。

7、8のビーム発生機から放たれる閃光の束は孔雀の翼のように広がっていき、設置された的をことごとく撃ち抜いた。

「やっぱり、見ればみるほどに量産したデイバイダーって感じがしますね。」

夕張が感じた感想を述べる。それに対し、シーブックは苦笑いを浮かべる。

「そう言われるのもしょうがないな。機能を一部簡略化したところ以外はほとんどガロードのデイバイダーと遜色ないからな。」

「でもよ、そっちの方が取り回しが効くから面白い使い方ができそうだけどな。」

「面白い使い方・・・か。」

ガロードの言葉にシーブックが考えるような素ぶりを見せた。

少しすると、シーブックはブースターを蒸し、的に接近する。

「何をするんですか?」

「いや、ガロードの言う面白い使い方をしようと思っただけな。」

そう言うと、シーブックは空中で回転をしながらピーコック・スマツシャーを発射する。回転しながら撃っているため、指向性がなくなったビームの嵐が的に集中的に降り注ぐ。

「うわーっ!! あんな使い方があるんですね!!」

「名付けるなら『ランダム・シユート』だな。何のひねりもないが。」

降り立ちながら興奮気味の夕張を見るシーブック。

「私のデイベイダーでもできっかな・・・。」

「やるにしてもやっぱり取り回しが問題では? ガロードさんのは大きさが身の丈ほどまでありませし・・・。」

「だよなあ。そこら辺がキモだよな・・・。」

「それにビームの出力にも差がある。ガロードのでやろうとするとかなり負荷がかかると思うぞ。」

シーブックにそう言われると、やっぱ難しいかとガロードは自分の中で結論づけた。

「ま、そつか。シーブックはまだ試し打ちするか?」

「いいや、十分だ。すまないな、付き合ってもらって。」

「いいっていいって。気にすんなー。」

「はい!! 私もいい経験をさせてもらいましたし。」

シーブック達はその後にした。

「明石さーん？居ますかー？」

工廠の一角、妖精さんに作ってもらった特別スペースで明石は自身を呼ぶ声を聞いた。作業を切り上げてその声が出た場所に向かう。誰かは想像ついていたため、視界に入るとすぐにその名を呼ぶ。

「提督？どうかしましたか？」

「差し入れです。明石さん、没頭しすぎる癖があるそうなので。」

特別スペースに入ってきたのはヒイロだ。いつも変わらないジャケットにジーンズの服装で明石にサンドイッチの入った箱を手渡す。

貰いながらも時計を確認すると時刻は既に一時を回っていた。

明石は箱を手に取りながら、申し訳なきげに手で髪をわしゃわしゃとする。

「うわっ。本当だ……。ごめんなさい提督。手を煩わせてしまって……。」

「気にしないで結構ですよ。進捗はどうですか？」

「そうですね。ひとまず、なんとかなりそうです。妖精さんも手馴れてきた、と言えはいんでしょうか？あ、これ美味しい。」

ヒイロの作ったサンドイッチを頬張りながら、ファイルを取り出す明石。

その視線の先には淡く黒い光を反射しながら佇む、巨大な艦装と少々小ぶりの艦装があった。

それらは最近鎮守府にやってきた港湾棲姫と北方棲姫の艦装だ。

「しかし、やはりこうやって調べれば調べちゃう程、提督の理論が現実を帯びてきますね……。」

明石にそう言われ、ヒイロは顔に暗い影を落とす。深海棲艦は艦娘と同位体であるということ、アイアンボトムサウンドにて深海吹雪から語られた真実をヒイロは明石に話した。

「……やはり、驚きますか？」

「……まあ、最初は。ですが、こうして妖精さんでもある程度治せてしまう現状を見ても……、深海棲艦が私達、艦娘と同位体だと言うのも、納得がいくかもしれせん。でも……、そうなってしまうと、私達は一体、何のために戦っているんでしょう……。」

明石は素晴らしいながら表情を俯かせた。それに対し、ヒイロは少し沈黙を保っていた。

「……戦争を止めるためではないでしょうか？」

「戦争を止める、ため？」

明石がキョトンとした表情をする。ヒイロはそれに構うことなく話を続ける。

「正直言つて、今の世界は歴史を繰り返している感じがするんです。悲しく、そして惨めな戦争の歴史を。この前のAL／MI作戦だつて繰り返す戦争の歴史の一つです。昔と同じ作戦をやつて、勝つたり、負けたりして……。」

でも、それではまた私達や、君たちのような兵士が必要となつてきてしまう。いつまで経つても戦争は終わらないんです。さながら終わらない円舞のようなもの。」

「まあ、元々戦争を助長する兵器だつた私達が、今度は戦争を止めるために戦うつて、ちよつと皮肉かもしれないかもしれませんがね。」

乾いた笑いをあげながら頬を指で軽く搔くヒイロ。若干の恥ずかしさを表している。

「戦争を止めるため、ですか……。」

「うん。人間と深海棲艦も本当は分かり合えると思うんです。だつて、明石さんだつて、こうして深海棲艦の装備、整備してくれているでしょう?」

「それは、そうですね……。どちらかと言うと、提督、あなたの指示で……。」

「それでも嫌な顔をしないで整備してくれますよね?」

ヒイロに押し切られる形で黙りこくってしまう明石。

「遠い道かもしれない。厳しい道かもしれない。でも、それでも戦争なんかをずっと続けるよりはマシではありませんか?」

「……平和、ですかあ……。」

明石はどこか遠くを見つめるように呟く。

「まあ、戦争がずっと続くのはやっぱりごめんですね。戦争状態がデフォルトなんて、地獄以外の何物でもないですし。」

遠くを見つめているように上を向いていた明石が笑顔を浮かべながらヒイロに向き直る。

「それじゃあ、お願いしますね。体調にはお気をつけて。」

「承りましたよ、提督。」

ヒイロは笑顔を明石に向けながら工廠を後にする。

明石は先ほどの暗い表情は消え失せ、やる気に満ちた顔で作業に戻った。

「……ふむ、来たか。」

白い柵のようなものが張り巡らされた建物の中で、1人の女性がテーブルに座って紅茶を啜る。

その様子には上品さと女性の持つ妖艶さを感じられる。

建物といってもかなり解放的で、一見すると西洋風の庭で見られるものとてもよく似ている。しかし、その建物の外から見える風景は本来なら自然豊かな緑が見えるはず

なのだが、その建物より外は何もない、真つ白な空間であった。

「いきなり何の用なのよ。こっちはせっかくのシャワータイムだつていうのに。」

その建物の中に突如として現れた水色の髪の女性。何やら苛立っている様子だ。

さながら瞬間移動のような現れ方に普通の反応であれば驚くべきところだが、

座っている女性はさながらそれが当たり前かのように特にこれといった反応を見せなかつた。

先ほどの水色の女性の他に4〜5人ほどの女性もその空間に現れた。

「揃つたようだな。……『アドミラルティ・コード』より我々に指令が下つた。」

「おお!! やつとか!! それで内容はなんだ? どんな奴を叩き潰せばいいんだ!? あ、でもこの前見たいな奴らはごめんだけ。弱つちくて話しになんねえからな。」

テーブルに座る女性の言葉にタンクトップもどきのちぐはぐな格好をした女性が獐猛で好戦的な笑みを浮かべる。

「落ち着け。今回の指令は、日本の佐世保鎮守府の制圧だ。」

「佐世保……確か、艦娘化したガンダムがいるつていう噂の鎮守府。」

「そうだ。おそらく、『アドミラルティ・コード』は奴らの増長をこれ以上看過できないらしい。」

「ふん、元々そつちの不手際のくせに、私達に後始末を任せんのかよ。……なんだよ。」

大好きな『アドミラルティ・コード』を眨されて怒ってんのか？」

悪態を吐く先ほど好戦的な笑みを浮かべていた女性が側にいた赤いドレスにメガネを身につけた女性に睨みつけられていたことに気づき、喧嘩を吹っかけるような口調で話しかける。

「そこまでにしておけ、ちなみに今回の指令ではMSが一機、ついてくることになっていく。」

「一機だけ？ 戦力になるの、それ？」

「さあな。わたしにもよくわからん。」

作戦について、一通り話終わった後、女性の視界は先ほどの真っ白な空間からしつかりとした風景のある世界へと変わる。どうやら一種の精神世界だったようだ。

女性が身を翻すとそこには一機のMSがいた。左腕にはムチのような下げられており、一種の凶悪な感じさせる。右腕から伸びているコードの繋がっている先には剣が握られている。

そして、何より目を惹くのはワインレッドに輝く装甲。背中にわずかに見える翼はさながら悪魔のような風貌をしている。

そこにはかつて、アフターコロニーにてホワイトフアングの首長、ミリアルド・ピースクラフトが駆った『ガンダムエピオン』がそこにいた。

第51話 激突!!霧の艦隊!!

「提督、大本営より作戦要項が来ています。」

「・・・まだですか？」

最近作戦が続くなあと思いながらヒイロは大淀から作戦要項の入った封筒を受け取る。

封筒の封を切って中身を確認する。作戦要項の表紙には『霧の艦隊関係の報告書』と書かれてあった。

「霧の艦隊・・・?」

その言葉に妙な引つ掛かりを覚えるヒイロ。記憶を掘り起こしていくと――
『霧が出た、とー。』

「・・・大淀さん、件の霧の艦隊が本格的に活動を開始したようです。」

「霧とは、まさか？」

「はい。大淀さんが私が着任した時にお話ししてくれた、あの霧です。」

ヒイロが封筒から報告書と共に取り出したのは指令が書かれた一枚の書類。

そこには霧の艦隊を打ち果たせという旨の内容が記されていた。

「・・・・・・・・・・」

ヒイロは報告書を一枚一枚じっくりと見て霧の艦隊に対する考察を組み立てていく。(霧の艦隊は簡単に言ってしまうえば近未来的な改装を施した第二次世界大戦中の艦船、なんでしょね。主砲は基本的に実弾。それはいいですが、問題はミサイルを叩き込んだにも関わらず、無傷であったこと。)

大和クラスでもバイタルポットにトマホーク等のミサイルを叩き込まれればただでは済まない。だが、報告書ではシルエットだけみれば金剛型クラスとの記載がなされている。仮に敵が金剛型だと仮定すればミサイルを撃ち込まれたら少なくともノーダメージでは済まないはずだ。にも関わらず無傷ということは――
(何か、バリアのようなものを張っている?)

それにいくつか特殊な兵装も見られる。ミサイルの他に電撃を行う無人飛行ユニット。これは報告書に記されている分だけ、その他にも何か妙なものを積んでいると直感する。

「大淀さん、出撃メンバーを伝えます。講堂へ艦娘のみんなを集めてください。」
「了解です。」

講堂では毎度のごとく艦娘達が集められていた。流石に慣れてきたのか艦娘達の間でも作戦だろうという空気が流れている。

「ガロード、何が始まるんだ？」

「大方、上から作戦でも出されたんじゃないのか？」

「やはりか。艦娘達の間には張り詰めた空気が流れているのはそのためか。」

シーブツクの質問に答えたガロード。

スウエンはなんとなく想像がついていたのか合点のいった顔をする。

しばらくするとヒイロが現れ、今回の作戦の説明が始められる。

艦隊は第1艦隊と第2艦隊の連合艦隊で行動するとして、メンバーは第1艦隊の旗艦を金剛として、榛名、摩耶、鳥海、北上、大井。

第二艦隊は旗艦を比叟として、霧島、アイオワ、妙高、那智、高雄、愛宕となった。

そして、随伴としてヒイロと刹那、それにフェネクスを除いた七人が編成された。

ヒイロが編成の説明を終えたあたりで赤城から質問があがる。

「提督、今回は高速艦で統一されているようですが、空母が誰一人としていないのは……？」

「理由として、敵艦隊は電撃武装を所持しています。それは対空としても使える利便性

の高い代物で最悪、それに航空部隊が一網打尽にされる可能性があります。空母を編成しなかったのはそのためです。アムロ達にはとても負担を強いてしまうことになりませんが……。」

「気にすることはないさ。私達はやることをやるだけだ。」

「だが、私とフェネクスを抜いた理由はなんだ？」

アムロからの返答にありがたみを感じていると刹那からの質問があがる。

「これははつきり言えば予備戦力です。大本営が霧の『艦隊』というほどです。この間のミッドウエーの作戦の時のように敵がカウンターで別働隊をけしかけてこないとは限らないので。」

「了解した。」

「今作戦では敵の戦力は完全に未知数です。出撃する人は敵が完全に沈黙するまで警戒を怠らないように!!」

『了解!!』

講堂で作戦要項を伝え終えたヒイロはある人物に声をかけようと探していた。

「あ、ガロード。ちよつといいですか？」

「うん? ヒイロ? どうした?」

「今回の作戦、敵は特殊なバリアを所持しているようです。最終的な判断はガロードに任せますけど、ツインサテライトキャノンの使用を考えておいてください。」

「・・・わかった。考えておく。」

「ごめんなさい。あなたがそれをあまり使いたくないのはわかってはいるんですけど・・・。」

「いいよ。どんなものも使いようだ。適材適所つてやつか?」

「・・・あなたのその性格にはとても助けられますね。」

「それに使わなきゃいけないタイミングで使わなかった方がワタシは後々絶対後悔するからな。そんじゃあ留守を頼むぜ。」

「はい。任せてください。」

「しっかし、また面倒な敵と戦うことになったもんだ。」

「摩耶ったらもう・・・でも分からない訳ではないわね。」

摩耶が腕を頭で組んで面倒くさげに言う。鳥海はそれをため息をつきながら見るが中々面倒な敵とは感じているようだ。

「報告書にあったバリア・・・。一体どれほどの強度なのでしょう?」

「少なくともミサイルでは効果的なダメージは出なかったと提督が言っていましたか……。」

榛名と霧島が報告書にあつたバリアの考察を考えていると北上は大井の方を向きながら、言葉をこぼす。

「それって、魚雷でもダメなのかな？ どう思う？ 大井つち。」

「……やっぱり実際見てみないと分からない、というのが正直なところですね……。」
「珍しいこともあるんですね。いつもの大井さんだったら北上さんと一緒ならどんな敵でもやれますよ、的なことを言うと思っただけ……。」

「比叡さん、魚雷、叩き込まれましたか？」

「ひ、ひええ……。じよ、冗談ですからあ……!!」

比叡の冗談に大井が魚雷をちらつかせることで怒りを表す。

それにビビって涙目を見せる比叡の姿を見て艦隊の間で笑みがこぼれ、和やかなムードが漂う。

「私だつて北上さんと一緒ならどんな敵でもやれるって思っているわ。でもそれは相手が深海棲艦であればの話。それこそ、アムロさん達みたいなモビルスーツとかが現れたらどうしようもないのが正直なところね。」

「……一応、それを見越して訓練のプランをやつてはいるのだがな。」

大井の言葉にアムロは一応の対応はしているという旨を言うが大井の目は厳しいもののままであった。

「でも、兵装が貧弱だどう抗ってもジリ貧なのは否めない。アムロさんもそれは分かっているはずですよね。」

「・・・分かった。戻ったら艦娘がモビルスーツに対応できるように開発を色々試してみるようにヒイロに具申してみる。」

「うーん、やはりそうなりますか・・・。」

「霧島、こればかりはしようがないネ。提督達はそもそもがこの場にいるのがミラクルのようなものネ。いつもだと大抵、この前見せてもらったジエガンとかいうモビルスーツみたいな感じなんでシヨ?」

「そうですね。この間のジエガンのようなものです。その認識で間違いはないかと。」

霧島を宥めるため言った金剛の言葉にアリスが同調の意思を示す。

するとー

「っ!?何か来るぞ!!」

突然何かを直感で感じたシーブックが厳しい表情をしながら浮上する。

その瞬間ー

「で、電探に感あり!!で、ですが、この速さ・・・艦載機ではありません!!」

「ならミサイルかつ!?キラ、頼んだ!!」

「了解です!!」

鳥海の報告からアムロが指示を飛ばす。頼まれたキラがバラエーナ・プラズマ粒子砲を展開しながら、シーブックと同じように浮上する。

「手伝うか?」

「お願いします!!」

シーブックがピーコック・スマツシャヤを構えながら、キラの隣で浮遊する。

視界にミサイルが飛んでくる様子が映ると、それぞれトリガーを引き、ビームが発射される。

発射されたビームはミサイルを悉く撃ち抜き、空に花火を作り上げた。

「・・・どうやら、件の霧の艦隊のお出ましか。」

ハイネの言う通り、アムロ達の視線の先にはいつのまにか霧が立ち込めていた。

霧の中はよく見えないがなんとなく巨大なにかが発光しているのが見える。

「・・・各員、気を引き締めろ。この敵はいつもような深海棲艦とは違う・・・。」

「あ、あれは・・・っ!?!」

霧の中から出てきたのは『艦船』であった。艦娘とも深海棲艦とも違う、まさに船。第二次世界大戦中の艦船が今まさにそこにあった。その数、6隻。

「あ、あの形・・・長良型っ!？」

「な、なんだよ、アレ・・・!!」

「呆気にとられている暇はないぞ!!戦艦組は砲撃を開始しろ!!微調整はこちらから伝える!!」

アムロの声で我に帰った艦娘達は砲撃を開始する。放たれた砲弾はその巨体故に長良型のような艦船の直撃コースに入っていた。

砲弾は見事に直撃し、長良型と思われる艦船は爆煙に包まれた。

「直撃したっ!!」

霧島は手応えを感じたのか、手を握って感情を露わにする。

「霧島!!油断するな!!」

「えっ?」

アムロに声をかけられ、爆煙を見つめる霧島。そこには無傷の長良型が自分に砲塔を向けている様子が見えてしまった。

「しまっー」

そう思ったのもつかの間、砲撃が開始される。直撃する、そう直感した瞬間――

「やらせるものかっ!」

飛んできた砲弾が突然真っ二つに両断される。二つに分けられた砲弾は霧島の左右

でそれぞれ爆発を起こした。

霧島が爆風に煽られながらも前をみるとそこにはビーム・ザンバーを振り下ろしたシーブックがいた。

「大丈夫か？」

「……すみません、油断しました……。」

「気をつけた方がいい。相手は並みの戦力では返り討ちにされる。それほどの相手だからな。」

シーブックは霧島にそれだけ言うとは接近戦を仕掛けるために長良型に突撃する。

「接近戦なら……!!」

弾幕を軽々と掻い潜り、長良型の甲板に降り立ったシーブックはビーム・ザンバーを甲板に突き刺しながら走り始める。

その先には長良型の艦橋部分、つまるところブリッジがある。

「こいつで、どうだああああー!!!」

艦橋部分の麓にたどり着くとそのまま一気にブースターを蒸し、上空へ上昇する。

艦橋部分にダメージを負った長良型は爆発を起こす。しかしー

(くっ、浅かったか!!)

ビーム・ザンバーの刀身がそれほど大きくなかったためか長良型は未だその身を海上

へと浮かばせている。

その時、歯噛みするシーブックの側をオレンジ色の閃光が駆け抜けた。

「まだ行ける筈だ!!」

ハイネは対艦刀、アロンダイトを構えながら傷を負った長良型へと突撃する。

長良型は件のバリアで逃れようとするが――

「逃がすかあ!!」

ハイネがヴォアチュール・リミューエルでさらに加速し、ばら撒かれる弾幕を張り切ってそのままバリアの中へ突入する。

「この距離じゃバリアを張られねえみたいだな!!」

上段で構えたアロンダイトをブリッジに向けて袈裟斬りをする。

元々損傷を受けていたブリッジはハイネの一撃で斬り落とされる。

ブリッジが機能しなくなった長良型はそのまま爆発を起こし、その身を鉄屑へと姿を変えた。

「よしっ!!まず一隻だ!!」

「くっ……。このバリア、陽電子リフレクターと同じような性質を持っている……。!?」
キラは一隻の長良型を相手どっていた。ルプス・ビームライフルやクスイファイアス

レール砲を放つが敵のバリアに阻まれ、有効的なダメージは与えられない。

「でもあれ・・僕たちのどの技術体系にも該当しそうなものがないんだよね・・・。あんな六角形のブロックのようなものを構築して形成するバリアなんて知らないし・・・。」
敵の兵装について疑問に思っていると迎撃用のミサイルが飛んでくる。しかし、これに当たるキラではないため、引きつけて一気にバラエーナで掃討することで対処する。

「キラ、援護を頼めるか？」

ミサイルを迎撃しきつて、どう相手の防御を切り崩すかを考えているとスウエンから声をかけられる。

「スウエン? いいけど・・・どうするの?」

「バリアの一つのブロックに一点集中だ。全体ではともかく一箇所に集中的に攻撃を受ければ破れるかもしれない。モビルスーツの部位破壊をやっていたお前なら楽な仕事だろう。」

「・・・わかった!! 行って!!」

スウエンが駆け出すと同時にキラはバラエーナを長良級へ向ける。弾幕やミサイルは先行するスウエンに向けられている。

「これなら落ち着いて狙える・・・。スウエンの突入コースから計算して、一番楽なのは・・・。あそこかな。」

狙いをつけたキラはそこに向けてバラエーナを連続で発射する。

バラエーナは寸分の狂いなく連続でキラが狙いを箇所命中する。5、6発撃ち込むとー

「バリアの破損を確認!!スウエン、行って!!」

「……流石はスーパークーデイナーターが駆っていただけのことはある。」

スウエンはフツと笑みを浮かべるとキラがこじ開けたバリアの穴から長良型へと接近する。そのまま『グリフォンビームブレイド3』を二振り取り出すとー

「はあっ!!」

ブリッジ部分を覆っていた窓を突き破り、ブリッジ内部へ潜入する。

「ブリッジ内部は、さほどコズミック・イラの戦艦と変わらないか……?」

ブリッジ内部を一通り見て回ると今度はビームライフルシューティーを手にする。

「なんであれ、不穏分子は排除させてもらう。」

そのままビームライフルシューティーを乱射する。放たれたビームはブリッジの壁を穿ち、そこからスパークを生じさせる。

それを見たスウエンはすぐさまブリッジから離脱する。

「今だーバリアを無効化した!」

そう通信機に伝えると無力化した長良型に砲弾の嵐が降り注ぐ。

最初こそは原型を保っていたが、程なくすると爆散した。

「これで二隻目か……。倒せない訳ではないが、骨が折れる。」

スウエンの眼下にはまだ四隻もの長良型と思われる艦船がいた。

第52話 胎動するゼロ

「えーと、みんな何が好きでしたっけ……。」

ヒイロは提督としての業務を休んで間宮さんの代わりに厨房に立っていた。

理由としては作戦に出ている艦娘やアムロたちの労いのため、高級なものをふんだんに使った料理を作るためだ。

手間がかかるものがあるためゆっくりと作っていると、ふとあることに気づく。

「あれ……少し材料が足りない……?」

自身が考えているレシピと材料を頭の中で見比べるといくつか足りない材料があることに気づいた。

(……どうしよう。火元から離れるわけにはいかないですし……。)

どうしようかと悩んでいると、食堂にだれかが入ってくる音が聞こえた。

ヒイロが振り向くと、そこには刹那とフェネクスがいた。

「結構いい匂いがしますね。何を作っているんですか?」

「それは内緒です。ですが、ちようどいいところに来ましたね。」

「ちようどいい? 一体どうしたんだ?」

刹那に疑問げな顔を上げるとヒイロは近くに置いてあつた紙にサラサラつと文字を書いて刹那に手渡す。

刹那がその紙を見るとヒイロが足りないと感じていた材料が記されてあつた。

「これは……」

「少し材料が足りなくてですね。二人でお使いを頼んでもいいですか？」

「お使いですか……。わかりました。行つてきますね。」

少し考える素ぶりを見せたがフェネクスが承諾すると、刹那も続くように頷いた。

「それじゃあ、お願いしますね。」

ヒイロに頼まれた二人は材料調達のために鎮守府から市街へと向かった。

それを見送つたヒイロは厨房に戻るととりあえずできるものから手につけ始めた。

「フンフン♪」

鎮守府の波濤で鼻歌を歌いながら歩いているのは最近スウエンとシーブックと一緒にやってきた北方棲姫、愛称として『ホッポ』の名前が付けられている。

そして、それを微笑みながら見つめているのが同じく最近やってきた港湾棲姫。愛称は港湾の英訳である「ハーバー」だ。ちなみにアイオワ命名である。

余談だが、深海吹雪の愛称は『黒雪』だったりする。理由は吹雪が真っ黒になったよ

うだから『黒雪』。すごく安直なのは目を瞑ってほしい。

最初こそ彼女たちには少々恐怖のような視線を向けられていたが、最近は自分からそばに近寄ってくる艦娘も増えてきた。

「そんなに走ったら危ない……。」

波濤で走りながらはしゃいでいるホッポにハーバーは注意をするが、その表情には笑っていて彼女自身、止める気はないのだろう。

なぜなら今までこんな風に地上はを走り回るなどしたこともなかったからだ。

願わくばそれが続いてほしいと思っていたが、そう長くは続かなかった。

「っ!？」

突然ハーバーの目が鋭くなった。彼女は厳しい表情で空を見つめる。それと同時に聴こえてきたのは空を切るような機械的な音。おそらくブースター、それもモビルスーツのもの。

何か、空にワインレッドのようなものが見えた瞬間、彼女はホッポに向かって走り出した。

「ホッポ!!」

突然呼ばれたホッポはきよんとした表情を浮かべるが、彼女はそのままホッポを抱

きかかえながら地面を転がる。

その直後先ほどまでホップがいた場所に緑色の光が叩き込まれる。

地面は簡単にひび割れ、土煙をあげながら粉碎される。

そして、その土煙が晴れてくるとハーバーを睨みつけるように緑色のデュアルアイがのぞかせる。

「っ……!!ガンダム……!!」

ワインレッドの装甲に背部に蝙蝠のような機械的な羽を持ったそのモビルスーツの名は『ガンダムエピオン』。

エピオンは手に装着されてある『ビームソード』をハーバーに向けて構えるとブースターを蒸し、斬りかかる。

「っ!!」

ハーバーは咄嗟に避けようとするが、モビルスーツのスピードについていけないはずがなくホップを抱えていたその巨大な爪を根元から斬り落とされてしまう。

「ああっ!!」

手が斬り落とされた痛み思わず抱きかかえていたホップを落としてしまう。

乱雑に落とされたホップは地面に叩きつけられる。

軽いうめき声をあげながら、顔を上げると、エピオンがすでにホップにその剣の

切っ先を向けていた。

その恐怖にホツポは足がすくんで動けなくなってしまう。

「ホツポ．．．!!逃げて．．．!!」

ハーバーが痛みから息を切らしながらホツポに呼びかけるが表情が完全に恐怖に呑まれていて、その声も届かない。

エピオンがホツポに斬りかかろうとした時――

「はああああつ!!!」

意気軒昂な声が波濤に響く。エピオンはその場から離れると今度は鉄拳が地面を抉る。

煌びやかに輝く黒髪をたなびかせるのは長門型一番艦、『長門』だ。

「無事かつ!?!」

長門のその言葉にとりあえず頷くハーバー。それを見た長門は目の前のエピオンに視線を集中させる。

(つ．．．!!よもや件のモビルスーツが鎮守府に攻め込んでくるとはな．．．!!しかし、相手は単騎．．．。さらに見たところ、あの巨大な剣の他に鞭のようなものが見えるがそれ以外のものは見当たらないが．．．)。

おそらく狙いはホツポとハーバーたち深海棲艦だろう。

彼女たちはアムロたちの宇宙世紀にいたモビルスーツに襲われていた。追撃部隊が出てもおかしくはなかったが、よもや鎮守府にまで来るとは想定外だった。

長門はファイティングポーズをとりながら、エピオンを警戒する。

「ここから先は通さん!!ハーバー、ホッポを連れて逃げれるか?!!」

長門の言葉に頷くとハーバーは残ったもう片方の手でホッポを抱きかかえながらながらその場から離れようとする。

しかし、エピオンはそれを許すはずもなくブースターを蒸し、接近するが、その間に長門が立ちふさがる。

「先には行かせんと言ったはずだっ!!」

モビルスーツの加速に初見であれば面を食らっていたが、あいにくヒイロたちで見慣れていたため、反応はできる。拳を握りしめて、エピオンに殴りかかるが、複雑な機動を描いたエピオンはそれを難なく切り抜ける。

「くっ・・・!!早いっ!!」

易々と抜かせはしないと意気込み、エピオンに向かって手を伸ばすがそれも届かず、ホッポたちへの接近を許してしまう。

エピオンは左腕の『ヒートロッド』を赤熱させずに伸ばし、ハーバーの足を引っかけ

バランスを崩したハーバーは思わず斬り落とされた手を地面にぶつけてしまい、その場に悲痛な絶叫を響かせる。

長門が駆け寄ろうとするが、エピオンはすでに上段にビームソードを構え、二人に振り下ろす寸前だった。

そして、ビームソードが振り下ろされる。

ガアンツ!!

エピオンとハーバーたち二人の間に再び割り込んだ影があった。金髪の髪を二つ、輪っかを作るように形作っている特徴的な艦娘の名前は『阿武隈』。

彼女はエピオンのビームソードに何かを押し当てようにして、張り合っていた。

それは、ガロードの持っていたディフェンスプレートだった。

阿武隈の持つディフェンスプレートはビームソードとぶつかり合いあたりに紫電を撒き散らす。

「う……うう……っ!!コイツ……なんなのよ……!!」

しかし、阿武隈の力ではエピオンの出力に張り合うことが出来ずに徐々に力負けをして押し込まれていく。ディフェンスプレートもそれほど長くは持たないのか、ゆつくりとビームソードが食い込んでいく。

長門が援護に向かうがそれよりも早かったのが――

「それ以上は．．．!!やらせません!!」

武装を展開したヒイロだった。ヒイロはそのままエピオンに向かって突撃するとエピオンにショルダータックルを食らわし、そのまま波濤から沖合の空へと戦場を移した。

「つ．．．。まさかエピオンが来るとは．．．。」

スペック的にヒイロ、というよりウイングガンダムはエピオンより下だ。だが、それで止まる彼女ではない。

なぜなら彼女の後ろには守るべき仲間がいるから。

「彼女たちをこれ以上傷つけさせません!!」

ヒイロがブースターを蒸すと、エピオンも同じようにブースターを蒸す。

そして、お互いのビームサーベルとビームソードがぶつかりあい紫電を撒き散らす。

ヒイロは全力でビームサーベルに力を込めるが、エピオンはそれ以上の力でヒイロを押しとくる。

「つ?!?ビームの出力では向こうに分がありますね．．．!!」

エピオンは力任せにビームソードを振り払うがヒイロはその前にその場を離れ、間合いを取って、距離をとる。

(接近戦では向こうに軍配があがる．．．!!なら常套手段だけど．．．。)

ヒイロはバスターライフルを構え、出力を抑えて単発モードでエピオンに向けて発射する。

しかし、エピオンもブースターの出力を上げ、射線から逃れることで直撃を避ける。「くっ、標準が定まらない!!」

歯噛みするヒイロを尻目にエピオンは急接近をしてくる。

ヒイロも接近戦を避けるために後退するが、エピオンを振り切ることは叶わない。ある程度距離を詰められるとエピオンはヒートロッドを伸ばしてくる。

鞭のようになつて襲いかかるそれをバレルロールで避けるがそれを読んでいたのか、エピオンはヒイロの真上からビームソードを振り下ろす。

苦い顔をしながら咄嗟にビームサーベルを構えて防御するが、ヒイロは片腕というものもあり、完全に力負けをし、鎮守府の壁に打ち付けられてしまう。ヒイロとエピオンはそのまま鎮守府の中に転がり込む。

「う……!!ぐう……!!」

衝撃に耐えながらも目の前のビームソードを全力で抑えているが、エピオンにマウントポジションを取れてしまい、それが精一杯で反撃する余力もない。

少しだけ周囲に目を見やるが艦娘たちの姿は見えなかった。

そのことに安堵していたが、腹部に突然、何か硬いもので押しつぶされたような感覚

が走る。

「カハツ・・・!?」

衝撃で肺から空気が吐き出されるがビームサーベルを持つ手の力だけは緩めずに自分に何があつたのか確認すると、エピオンの左腕が自身の腹に叩き込まれていた。

（こっちは両腕でやってやっただというのに、向こうは片腕だけ・・・完全に力負けして・・・どうすれば・・・!!）

左腕がフリーになるほど力の差があることにきつい表情をしながら打開策を考える。バスターライフルは鎮守府に叩き込まれたときに落としてしまった。

「提督っ!!」

そこに舞い込んだ声に思わず思考を打ち切る。驚いた表情で声の聞こえてきた方角を見ると心配そうな目でこちらを見ている加賀の姿があつた。

「来ちゃ・・・ダメえ!!」

加賀に向けてそう叫びながら左腕のシールドでエピオンを殴る。

しかし、マウントポジションからは解放されたが、ビームソードを押し込まれ、僅かに胸部をかすめる。

切られた箇所から血が流れていた。

それは御構い無しと追撃としてブースターを蒸そうとしたが、なぜかブースターは作

動してくれなかった。

(推進システムに異常……?!鎮守府に激突した時にどこか壊れたの!?)

でも、よりによってこのタイミングで……!!)

ヒイロの目の前には既にヒートロッドが目の前に迫っていた。

もはやこれまでかと思ひ、目を瞑る。そして、あたりに響き渡る肉を焼き切るような音。

しかし、ヒイロの身にはいつまでもその音に似合うような痛みは来なかった。

不思議に思つて目を開くとそこには、自身の代わりにヒートロッドに貫かれた加賀の姿があった。

「か……が……さん?」

衝撃の出来事に加賀の名前を呼ぶこともすらままならなくなる。

エピオンはヒートロッドを引き抜くと、加賀の体は重力に惹かれるように崩れ落ち、あたりに血の海を形成する。

その様子にはヒイロは呆けた表情をするしかなかった。

「うそ……ですよね……。かがさん……。?しつかりしてください、ねえ……。」

自然と目から涙が零れ落ちる。それと同時に徐々に状況を理解していく、いや、してしまう。

たかうちから、ならせんぶこわさなきや、これいじょうふやさないためにだからたたかうものほてき。」

「戦うものすべてがわたしの敵であつ!!」

ヒイロはその濁りきつた目をエピオンに向けると壊れていたはずのブースターを無理やり蒸してエピオンに突撃する。なぜかそのスピードは先ほどの比でなくあつという間にエピオンを再び沖合の空へと連れて行つた。

「て、提督……。どうしちゃつたのよ……。」

冷や汗をかきながら伊勢がそう尋ねる。皆、口を閉口して、その問いにだれも答えようとしなない。

「今は、加賀の救助を最優先だ。」

「な、長門、本気なのっ!?! あんな様子の提督、放つておくつていうのっ!?!」

無情とも取れる長門の発言に陸奥が辛そうな表情を上げる。

「そんなことは分かつているっ!! だが、だが、あれは……我々では絶対に勝てない……っ!!」

長門は悔しさに表情を歪めながら、手を握りしめる。

その様子に陸奥たちは口を閉じてしまう。

「だから、今は……。加賀の治療を最優先だ……。!!」

第53話

霧の艦隊、その正体、未だ不明――

「……………なんだ？」

霧の艦隊との戦闘中でありながらもガロードは不意に視線を逸らした。その先は水平線の向こうにある自分たちの帰る場所である佐世保鎮守府であった。

ガロードはしばらく佐世保鎮守府に視線を注いでいたが、言いようのない焦燥感に駆られてしまう。

「なんなんだよ、この感覚……。アイツら、大丈夫だよな……。？うおっ!」

ガロードが咄嗟に身を翻して長良型のような艦船からのビームを避ける。

驚いた表情を浮かべながらも意識を目の前の敵に集中させる。

(……………ちゃんと集中しろ。!!今は、やるしかねえんだよな。!!)

頭を振り回し、思考に入り込んでくる不安を振り払うと白く雪のように煌めく髪をたなびかせながら長良型へとブースターを蒸し、接近を始める。

接近してくるガロードに長良型の艦船は対空の弾幕を形成するが、一隻の機銃の弾幕に当たるほどガロードはやわではない上、そもそもとして機銃程度ではガロードの堅牢な装甲を破ることはできない。

「デイバイダー、コイツでどうだあつ!!」

ある程度まで接近するとガロードは左腕に装着したデイバイダーを前面に構えて、観音開きをした部分からビームを発射する。

「一点集中で・・・!!」

ビームを拡散させずに滞留させながら放った攻撃は艦船の展開する防御フィールドに弾かれてしまう。

しかし、デイバイダーの威力は絶大で展開されたフィールドにヒビを入れさせるほどの威力はあった。

「金剛!!そつちから狙えるかっ!!」

『OKー!!こつちでもC確onf認irmati認onしたワ!!全砲門、fire!!』

艦隊の旗艦である金剛に通信を送るとそのような返答が返ってくる。ガロードはそれを聞き届けると右手に持っていたバスターライフルを腰に提げるとリアスカートからハイパービームソードを引き抜く。

程なくしないうちにガロードの視界に爆発と思えるオレンジ色の光が入り込んだ。おそらく金剛が発砲したのだろう。

ガロードは広角を吊り上げるとビームソードを大きく上段に構える。

ドガアアアアッッッ!!

霧の艦船と思われる船が展開しているフィールドに爆炎が生まれる。金剛が放った砲弾が着弾、爆発した。

その直後、ガラスの割れたような音を辺りに撒き散らしながらフィールドが破片となつて消えていくのをガロードはその目でたしかに確認した。

このまま艦橋めがけて構えたビームソードを振り下ろすことで破壊しても良かったが――

「こちらアリス。これより援護します。」

金剛が砲撃した場所とはまた違った方角から今度は青白く、極めて細いビームが飛んでくる。長良型の真正面に滞空しているアリスのビームスマートガンによる狙撃なのだろう。ビームというよりレーザーといったも差し支えないほどまで細く搾られたビームは金剛が破砕したバリアの隙間に寸分狂いなく入り込み、艦橋を撃ち貫く。普通であれば目標を貫いたビームは水平線の彼方へ消えていくが、アリスの放ったビームスマートガンは目標を貫いた後でも、未だその青白い光線を出し続けていた。

「このまま艦橋を溶断します。合わせてっ!!」

「おう!!任せなあっ!!」

アリスがビームスマートガンを横に動かすとビームもそれに続くように艦橋をレーザーカッターのように徐々に焼き切っていく。

ガロードはアリスが開けた穴から侵入すると、上段に構えたビームソードを縦に振り下ろす。

艦橋をエックス状に切り裂かれた長良型は航行不能となったのかその足自体は止めたが各武装はまだ生きているのか、その砲口から実弾やビームなどを撒き散らしていた。

「各艦、ストップした艦船の懐に潜り込むわよ!! Follow me!!」

金剛の指示で艦橋が破壊され、艦娘達が物言わぬ鉄となった長良型に密接する。

一応、盾として活用しようと考えた金剛であったが、直後に盾にしている長良型が爆発を起こした。

「ホワッツ!? 自爆でもしたの!?!」

「金剛!! そこにいるのならすぐに離れろ!! 考えは悪くないが、敵も容赦というのが一切ないらしい!!」

動揺の色を見せる金剛にアムロからの通信が入る。それは随伴艦である榛名達にも聞こえていたようでアムロの通信に耳を傾けていた。

「一体何が起こっているんだよ!!」

「航行不能に陥った艦船を別の二隻の艦船が砲撃を仕掛けている!! 君たちでいう雷撃処分のようなものを、奴らはしているんだ!!」

摩耶の声に返したアム口の言葉に金剛達は顔を顰めた。雷撃処分、世界大戦中、航行不能に陥った艦船を敵への技術漏洩を防ぐために行うものであるが、それは乗員を退避などさせた上で、処分していくものだ。しかし、今日の前にいる敵はそれを間髪なく行ってきた。

有無を言わさないようなその行いに全員が表情を歪めるのは仕方のないことであった。

「早く退避してくれ！そこにいると確実に巻き込まれるぞっ!!」

『……了解!!』

「……奴らがその判断を下すのが早いのもうなずけるな。」

アム口の指示に従い、盾にしていた長良型から離れている途中、通信機から別の人物の声が入ってくる。その声の主は最近鎮守府に入ってきたスウエンであった。

「スウエンさん……?それは一体どういうことですか?」

艶やかな黒髪を揺らしながら疑問気な表情を浮かべた高雄がスウエンに質問をした。その表情にはどこか不安気なものも含まれていた。

「……奴らに乗組員は一人も存在しない。先ほどブリッジの中を見たが、人影のようなものをかけらとして見かけることはなかった。おそらくこの間接敵したモビルスーツ群と同じ自律機能で動いている可能性が高い。」

「……要はプログラミングされている敵、ということかな？」

「推測の上での判断だ。あまり当てにはしないでくれ。」

スウエンとキラのやりとりが通信機の間で交わされる中、金剛達は残り二隻の長良型を見据える。

その残った二隻の長良型はアムロ達の攻撃を防御フィールドで防ぎながら機銃は砲塔から弾幕として実弾、ビーム問わず吐き出し続けていた。

「やはり、あの長良型のような敵の張るバリアはかなりの強度があるようですね……。アムロさん達もどうにか破壊できてはいますけど、そこまで漕ぎ着けるのが、中々……!!」

「……一応、ワタシ達の攻撃がパーフェクトにシャットアウトされるワケじゃないのがラツキーだけど……!!」

榛名が苦い表情を浮かべながら姉である金剛の顔を見ながら言葉を零す。

金剛も榛名と似たような顔をしながら長良型の姿を見つめる。

決して自分たちの攻撃が通用しない訳ではない。それは金剛を含めた全員は分かっていた。

だが、そこまでたどり着くのが果てしなく遠くまで続く道にどうしても思えてしまうのだ。

「やっぱり、このままじゃアタシ達、どーみたつて提督達のお荷物になっちゃうよねー。」
不意につぶやかれた北上の言葉に皆重苦しい表情をしてみよう。あつけらかんのよ
うに聞こえた北上の声だが、それは同時にみなの心中を的確に表しているのが分かつて
いたからだ。

「……もしかしたら私達は決断を迫られているのかもしれない。」

鳥海の遣る瀬無い表情を浮かべながらもその声にはある種の決意のようなものが混
じっていた。

「大井さんが、アムロさんにおっしゃっていたようにこれからは敵もアムロさん達と同じ
ようなモビルスーツを使ってこないとは限らない、いえ、もう敢えてこう言いましょ。
確実に使ってきます。その時に私達がモビルスーツの相手をできないようではずつと、
アムロさんや提督達に余計な手を煩わせてしまいます。」

「私達は、変わらなければならぬ。ただ艦娘としてではなく。軍人としてではなく。
人間として、無限に続く、明日という未来を、みんなが笑顔で暮らせる平和な明日を掴
み取るために。」

その決意が宿った目を見た艦娘達はみな揃って呆気にとられたような表情を浮かべ
る。

その視線に気づいたのか、鳥海はらしくないことをしたとでも言うように頬を真っ赤

に染めながら恥ずかしそうに俯いた。

「……そうね、それはチョーカイの言う通りね。」

「アイオワさん……?」

鳥海の言葉に同意の言葉を最初に挙げたのはアイオワであった。その表情はどこか朗らかなものになつており、その星のような瞳孔がある灰色の目は納得といった形をしていた。

「ミーの主砲、横須賀のヤマトにも負けないくらい**の**ストロングな代物よ。それこそ、戦後もそれなりに戦闘に駆り出された。」

自身の艦装である *16 inch* 三連装砲を優しげな手つきで触りながら表情を緩めるアイオワ。

しかし、その目はどこか悲しげなものになつていた。

「でも、時代の流れつていうのは *suggestible* なものよ。私の主砲の射程よりとつてもない距離から撃つて、ミーの頭上を何食わぬ顔で飛んでいくものを見るのは、今こうして艦娘の身となつてみれば、凄く *vain* なものよ。」

「いくら近代化してもらつたところで中身は所詮時代遅れの産物。出来ることは、極めて限られていた。」

アイオワの言葉に思うものがあるのか、揃つて表情を沈ませる一同。

「でも、それはあくまで艦船である話よ。今はこうして作られたとはいえ、人間としてしっかりとした命がある。生きているのなら、どんなことだってできるはずよ。日本だって、物力で圧倒的に差のあるアメリカに戦争仕掛けてきたし。」

「いや、いまの話とその話は違うような……。」

アイオワの言葉に霧島が苦い表情を浮かべながらメガネを軽くあげる仕草をする。

「……ですが、人間、何をするのかは確かに未知数です。一見無謀なことのようにも見えて、紆余曲折を経て結局は成し遂げてしまう可能性があるのも事実です。おそらく、私達、艦娘が変わることも不可能ではないでしょう。」

「私も実は前にいた鎮守府でアリスさん達に救出されてからも、助けられてばかりでした。いつまでも助けてばかりではいられません。」

霧島の言葉に比叡が意を決した表情で頷きながらサムズアップのポーズをとった。

金剛は旗艦として、艦隊全員の顔を見る。その視界に入った表情に微妙な顔を浮かべるものではなく、皆決意に満ち溢れていた。

金剛が頷きながら言葉を述べようとした瞬間、水平線の向こうから極太のビームが走った。そのビームは海上スレスレを駆け抜け、その斜線上にいた長良型二隻をフィールド毎その船体を呑み込んだ。

突然の状況に息を呑む金剛達。

もしかしたらアム口達が巻き込まれたかもしれない、そう思ってしまうほどもビームであつたが——

「金剛さん、あれ!!」

愛宕が指差す方向に視線を向けると五体満足で滞空しているアム口達の姿があつた。ひとまず無事だつたことに金剛達は胸を撫で下ろした。

「……まずは、この戦いを生き延びていかないとね。」

「ええ、そうね。さっきのビームを放つた敵をどうにかしないと。」

表情は僅かに笑顔だが、額から冷や汗を流す金剛にアイオワが声をかけながらもビームを放つた相手に警戒心を露わにする。

アム口達とはかく、金剛達にも分かつていた。先ほどのビームは純粹な敵意を持つた敵であると——

しばらく様子を伺うアム口達、なにせ残つた長良型と思しき艦艇に攻撃を仕掛けようとしたら、別方向からの大出力のビームが飛来、残つた二隻の艦艇をまるごと呑み込んだのだ。

「……援軍、なわけないよな。」

「そう願いたいものだが……な。」

ハイネが薄笑みを浮かべるも即座にアム口の微妙な言葉の前にうなだれる様子を露

わにする。

先ほどまで海域を覆っていたはずの濃い霧がなぜか晴れているのだ。そして晴れてくる海上に浮かび上がるのは怪しく輝く薄い紅。

さながら舞台が整えられているような様子に一同は警戒心を最大限にまで引き上げる。

『流石はガンダムの名前を冠するだけはあるじゃない。まああのくらいでへこたれているくらいだと倒し甲斐がないのだけだね。』

スピーカーに拡大されたような声がアムロ達はもちろんのこと、海上にいる金剛達の耳にも届く。

「ちっ……一体何者だ!!」

アムロが声を荒げながら徐々に接近してくる怪しい光に銃口を向ける。アムロはもちろんのこと、その場にいる全員がわかっていた。

先ほどの大出力ビームはコイツが放ったものだと――

『一体何者……ねえ……。答えはもう出ているようなものよ。貴方達の足元で蠢いている奴らに聞いてみたら?』

明らかにこちらを嘲るような言い方に思わず眉をひそめてしまう。

足元、というのはおそらく金剛達のことを指している。その彼女ら蠢いているなどと

いう、さながら虫でも見ているかのような言い草であった。

「……金剛、そつちに何か、本能的に察していそうな人はいませんか？」

「ほ、本能的に察していそうな人……？」

アムロからの通信に金剛は疑問気な様子を見ながら艦隊のみんなを見回す。その謎の人物の言葉に全員理解していないような顔をしていたが――

「……高雄？それに愛宕も？」

ふと視界に止まったのは、高雄と愛宕の二人だった。さながら先ほどの言葉に心当たりがあるような――

「もしかして……？」

「……私だって、頭の中では否定したいわ。だけど――」

「私の愛宕としての記憶が囁いている。あれは、重巡、高雄よ。」

高雄と愛宕の言葉に目を見開く金剛。とつさに通信機でアムロ達に伝える。

あれは高雄型だと――

「……君は、重巡高雄か？」

『ええ、そうよ。もつとも艦娘なんていう小さい枠組みになんて入らないけどね。』

「重巡つてことは、戦艦とか空母もいんのか？」

ハイネの言葉にキラ達を息を呑んだ。彼女が重巡を名乗るのであれば、空母や戦艦がいるのも道理なのは確かだ。

先ほどの長良型と思われる艦艇だけど、中々手がかかるといふのに、その上戦艦や空母と来れば、ジリ貧は必須だ。

『それはどうだか、真実は貴方達自身の目で見てみたらどうかしら？もつとも――』

『貴方達はここで死んでもらうけどね!!!』

直後、アムロ達にビームが飛来する。伊達に宇宙空間で高速機動をやっていないため、突然の攻撃にも瞬時に対応し、次の攻撃に備える。

「……どうする？あれはおそらく先ほどの長良型と一緒にしない方がいいのは目に見えている。」

「……その分、バリア強度も硬いと考えるべきか。厄介だ。」

アムロはたまたま近くにいたスウェンに目配せをしながらビームライフルを構える。

スウエンもショーティーを構えるが、とてもではないが効果があるとは思えなかった。

「さらに先ほどの大出力のビーム……。下手をすれば一撃でこちらに死人が出るぞ!!」
「だったら撃たせないって言うのが一番手っ取り早いんだけど……。」

「そう簡単には行かなえよなあ……。」

シープックの険しい表情と共にその大出力ビームに対して警戒を露わにする。

キラとハイネも対策を考えるも、そもそもとして霧の艦隊の内部構造がよくわからない以上、そのビームの出所も不明だ。

「……あれだけの大出力だ。多分、そんなに連射は効かないはずだと思う。」

「じゃあ、今のところは安全……?」

「んな、平和なこと言ってるかよ!!」どのみちあの高雄型をどうにかしないと、金剛達が危ねえ!!あれじゃあ避けられない!!」

「そうですね。少し、希望を持ちすぎました。ごめんなさい。」

ガロード自身、高出力のツインサテライトキャノンを有しているが故に出てくる言葉にアリスが期待のこもった視線を送る。

もつともハイネに即座に却下され、若干項垂れる様子を晒すことになったが。

「どのみちここで戦わなければ返って危険になるだけだ。各員、気を引き締めてくれ。」
アムロの締め言葉に全員が険しい表情で頷く。それをみたアムロは通信機で海上の金剛達に通信を送る。

「金剛、わかっているとは思いますが、この敵はかなり危険だ。私達でもどこまでカバーができるか想像がつかない。」

「……こつちはこつちでなんとかするワ。だから、アムロ達は前衛をお願い、サポートくらいはできると思うから。」

「……無理はするなよ。」

「それはワタシのセリフね。アムロ達こそ、無理はしないで。」

「重々心に留めておく。」

金剛との通信を切ったアムロは視線を重巡高雄に向ける。先ほどまで怪しい光に包まれて、全貌が明らかでなかったその姿が徐々に光のもとに晒される。

船体は先ほどの長良型とは違ってかわって重巡らしく巨体を誇っていた。

何より目を引くのは、船体を挟むように空中に浮いている巨大なユニットだ。

「……なんだよ、あれ。」

ハイネの質問はもつともだが、その質問に答えられる人物はいなかった。

謎の上に謎で覆われたような霧の艦隊との戦闘。

アムロ達はさらなる混沌の戦場へと足を踏み入れる。そのことを何となく察しているのか、全員の表情は険しいそのものであった。

「ちよ、ちよっと、提督どうしちゃったんですかっ!？」

ガロードからもらったデイフェンスプレートを抱きかかえている阿武隈が上空のヒイロとエピオンの戦闘ぶりを見て悲痛な声をあげる。

誰がどう見てもヒイロの様子がおかしいのは目に見えていた。

「わからない．．．!!加賀があの血にまみれたような装甲をもったガンダムに斬られてから、提督の様子が変貌したとしか．．．。」

「ど、どうするんですか!?!あのままじゃ提督、死んじやいますよっ!?!」

「駄目だ．．．!!あれほどの高速機動で動き回れば、私達にはどうしようもない．．．!!」

長門が齒噛みしながらの内容に阿武隈は再度悲痛な声をあげながらヒイロを見つめる。

ヒイロとエピオンの高速機動は目で追うには厳しいレベルまで上がっている。

そこに砲弾を撃ち込んでも、余裕で回避されるか、よくて砲弾が叩き落されるのが御の字だろう。

さらに最悪のパターンは現在海上で繰り広げられているヒイロとエピオンの戦闘が鎮守府の敷地内でやられてしまうことだ。

そうなつて仕舞えば、誰も戦闘をとめることはできやしない上に一般市民にもどれほどの被害が出るから未知数だ。

「大淀に頼んで市長に緊急避難の指示を出してもらおう。一番不味いのは、この戦闘を市街でやられることだ・・・!!阿武隈、大淀のところへ向かつてくれ!!」

「わ、分かりました!!」

阿武隈を大淀のところへ向かわせた長門の言葉に陸奥は重苦しい表情を浮かばせながらもそれが自分たちにはできることだと言いつたように頷いた。

「ねえ、私達にできることはほかにないの?」

「・・・強いて言うならば、市民の避難誘導の手伝いくらいか。」

「そうじゃなくて!!提督だよ!!何かないの!?!」

伊勢がひつうな顔をしながら何かヒイ口に対してできることはないのか尋ねるも長門は無言で首を横に振った。

自分達ではどうしようもない。その現実から伊勢は思い切り壁に拳を打ち付けた。

「本来守るために前に出なきやいけないのは、私達のはずなのに・・・!!どうして、どうして提督が・・・!!」

苦々しい唇を噛みながら、打ち付けた拳を震わせる伊勢の様子に長門達も遣る瀬無い顔を浮かばせる。

「長門!!」「長門さん!!」

「刹那、それにフェネクスか・・・!!」

そのタイミングで外へ買い物に出ていた刹那とフェネクスがやってくる。

驚いた表情をしながらも二人がやってきたことに少なからず感謝するような顔をす
る。

「何か嫌な予感がしたから戻ってきたのだが、どうやらかなり状況は不味いようだな。」

刹那はそういいながら上空でチームの刃がぶつかり合った時に生じる紫電を撒き散
らしているヒイロとエピオンの戦闘を見て、苦い顔を浮かべる。

「あのヒイロの戦い方・・・何かに囚われているのか?」

「囚われている・・・?どういうこと?」

「・・・わからない。今の彼女の戦い方を見て、何故だかそう感じた。」

陸奥の質問に明確な答えを持っていないのか、曖昧な返答をする刹那。そのことに陸
奥はわずかに表情を歪め、はつきりとした解答を求めようとした時――

「いえ、刹那さんの言い方に何ら間違いはありません。ヒイロさんは今、何かに囚われて
います。」

「それは、怒りや憎しみとか、か?」

フェネクスのはつきりとした言葉に長門は疑問気に質問をすると、フェネクスは首を

横に振った。

「正確に言えば、利用されているといえはいいのでしょうか。ともかく似ています。私がNT-Dを暴走させた時の状態と。」

「つまり、今の提督は我を失っているっていうこと？」

「それで済めばいいんですけど・・・。」

伊勢の言葉にフェネクスはヒイロの身を案じるような視線を送る。上空ではヒイロとエピオンが熾烈なドックファイトを繰り広げていた。

だが、幾度とか切り結んだところで、不意にエピオンが地上の鎮守府にその緑色のツインアイを向ける。

「っ!？」

「みんな、離れろっ!!」

刹那が周りの長門達に声を張り上げる。

次の瞬間、エピオンはヒイロのビームサーベルををちあげると彼女のがら空きになつたボディに蹴りを叩き込む。

吹っ飛ばされたヒイロに視線を向けることすらせずにエピオンはビームソードを構えると鎮守府に向かって、正確に言うならば刹那とフェネクスに向けて急降下を始める。

「ヒイロっ!？」

突如、ヒイロが頭を抱えながら聞いているだけでも痛ましくなるような叫び声をあげる。

刹那が思わずヒイロに声をかけるも彼女にその声が届いた様子は見え、悲痛な叫び声を上げ続ける。

「ヒイロさん、自分を保って!!貴方の纏っているソレは危険なものです!!」

フェネクスはニュータイプとしての感性ゆえか、ヒイロの周りをなにやら黒い良からぬものがまとわりついているのを見抜いていた。

しかし、それがなんなのかはフェネクスにそこまで正確しれるほどの力はなかった。

一刻も早くヒイロの元へ駆けつけなければ確実に良くないことが怒る。フェネクスのニュータイプとして直感がまざまざと感じさせていた。

今すぐにでも向かいたいところだが、エピオンがフェネクスに突撃をしかけ、ビームソードを振り下ろしてくる。

咄嗟にフェネクスが出力を上げたビームサーベルでこれを防ぎ、あたりにスパークを撒き散らす。

「このMSの相手は私になります!!刹那さんはヒイロさんを!!」

「っ……………了解!!」

一瞬、フェネクスの方を見やる刹那だったが、すぐさま視線を苦しそうに悶え続けるヒイロの方へ移すと、両肩のGNドライブから緑色の粒子を出しながら飛翔する。

「ヒイロ!! 私の声が聞こえるか!？」

刹那が必死に声をかけるもヒイロは頭を抱えながら絶叫しているだけで、とてもでないが聞こえているようには見えない。

苦虫を噛みしめるような表情を浮かべる刹那だったが――

「……………」

不意にヒイロが金切り声をあげるのをやめると脱力したかのように腕をだらんとおろした。

一瞬、ヒイロが元に戻ったかと思った刹那だったが、次の瞬間には不気味さをヒイロの立ち振る舞いから感じとった。

「刹那さん、離れてっ!!」

エピオンと格闘戦を繰り返していたフェネクスがヒイロの様子が変貌したことに思わずエピオンから視線を外しながら刹那に声をかける。

刹那が一瞬、フェネクスの声を取られた瞬間、ヒイロが握っていたビームサーベルが振るわれる。

その切っ先は、エピオンではなく、目の前の刹那に向けられていた。

「何っ!？」

突如として自身に向けられたヒイ口の攻撃に刹那は驚愕しながらもビームサーベルをGNソードⅢで受け止める。

「ヒイロ!!何の冗談だ!？」

刹那はヒイロと鏑迫り合いをしながらも必死にヒイロに声をかける。刹那の言葉に反応したのか、ヒイロがわずかに視線を刹那に向ける。

そのヒイロの瞳は一寸先すら見通せない闇に包まれていたと言っても過言ではないほど、淀み、荒んでいた。

「……………戦うのイヤなんですか？」

「っ……………!?!お前と戦うのは本意ではない!!」

不意にヒイロから刹那に向けて言葉に紡がれる。その声はいつものヒイロとはかけ離れたようなひどく冷たいものであった。刹那はその冷え切ったヒイロの声に苦い顔を浮かべながらも答える。

「だったら……………戦わなければいいんだよおッ!!!!」

「なっ……………!?!ウワアアアッ!!」

ヒイロは刹那の答えが気に食わなかったのか、表情を怒りに染めながら無理やり刹那を弾き飛ばした。

「くっ……………ヒイロ……………何故だ……………何故戦うっ!! 私たちに戦う理由などないはずだ!!」

「……………」

刹那の問いにヒイロはその冷酷な目で刹那を見下ろしながら、エピオンとの戦闘で落としたはずのバスターライフルを刹那に向ける。

それを見た刹那は咄嗟に回避行動を取ろうとしたが――

「っ……………後ろには鎮守府が……………!!!」

後ろに視線を見やるとバスターライフルの射線にはたくさんの仲間たちがいる。佐世保鎮守府があった。

このままヒイロがバスターライフルの引き金を引けば、もれなく鎮守府は甚大な被害を被るだろう。

「ヒイロっ!! 撃つのをやめろ!! 後ろには鎮守府が――」

刹那はヒイロに声をかけるも彼女は無情にもバスターライフルの引き金を引いた。

バスターライフルから迸る山吹色の爆光が刹那に向かって一直線に突き進む。

「くっ?! GNフィールド、出力全開ッ!!!」

刹那は自身の周囲にGNフィールドを展開し、バスターライフルのビームを鎮守府に落とさせまいとして自ら盾になる。

「うう……………くっ……………!!」

バスターライフルの出力の前に流石のツインドライブを有している刹那でも表情を歪ませてしまう。

だが、刹那が意地でその場に押しとどまったのが功を奏し、バスターライフルの光が鎮守府に届くことはなかった。

「ハア……………ハア……………!!」

バスターライフルを防ぎきった刹那だったが、表情には僅かに疲労の色が見える。

ただ防いだけなのに、バスターライフルの出力は刹那の体力を大幅に削り取っていった。

「くっ……………ヒロ……………一体お前の身に何が……………!!」

刹那が上空でバスターライフルを構えているヒロに険しい視線を送る。ヒロは未だその冷酷な瞳で刹那を見下ろしていたが――

「っ……………う…なんだ……………?」

不意にヒロ口を見上げていた刹那の顔になにかが落ちてきた。刹那がその落ちてきたものを拭くと、その手には水滴が付いていた。

一瞬、雨でも降っているかと思つたが、空は雲がないわけではなかったが、あめが降

るとは思えない晴れ晴れとした空であった。

「……………おかしいな……………なんで、涙なんかが出てくるんだろう……………」

「涙……………」

そう言ったのはヒロだった。鬱陶しそうに顔を拭う彼女の様子を見た刹那は目をよくこらしながらヒロの顔を見つめる。

すると、僅かにだが、ヒロの瞳から涙が出てが零れ落ちているのを垣間見ることができた。

（何故突然涙を流した……………？フェネクスはシステムに囚われているといっていたが……………まだ、自意識が残っているのか？）

刹那はさらなる情報を整理を行うためにヒロの様子を凝視する。

しかし、先ほど涙を流していたはずの目は拭われ、奥が見えない暗く濁った目に戻ってしまっていた。

（……………おそらく、この戦闘はヒロの本意ではないのは確かだ。ならば、私のすべきことは……………!!）

刹那は意を決した表情をするとヒロに向かって一直線に向かっていく。

ヒロは馬鹿正直に突っ込んでくる刹那にバスターライフルを発射しようとするが、それより早く、刹那が動いた。

「トランザムっ!!!」

刹那が虎の子であるトランザムを発動させたことで体が薄い赤に包まれる。

GNソードⅢを構えるとツインドライブから二つの緑色の円を作りながら、残像が見えるほどのスピードで回り込むように接近する。

通常より爆発的な加速を得た刹那だったが、ヒーロはその加速に動じている様子はなく、再度バスターライフルを構え直す。

（トランザムにも付いてくる……!!チャンスは一度しかないと考えるべきか……!!）

「ヒーロ!!少し手荒な方法を取らせてもらおう!!」

刹那はGNドライブの出力はさらにあげるとヒーロの周りを縦横無尽に駆け回る。

攻撃するわけでもなく、ただ自身の周りを飛び回っているだけの刹那の動きにヒーロは鬱陶しそうに表情をゆがめる。

「邪魔しないでよ!!」

（フェネクスが言ったヒーロにまわりついていい良からぬもの……今の私にも何故かそれを知覚することができ……）

ならば、と心の中で刹那が決意すると今まで周囲を飛び回っていた状態から一気にヒーロに詰め寄った。

急激な方向転換だったが、ヒイロはそれを不意をつかれたような様子を見せずにバスターライフルを向ける。

刹那のGNソードⅢが振るわれるよりヒイロがバスターライフルの引き金を引く方が時間的に早い。それを認識しながらも刹那はヒイロへ肉薄する。

ヒイロがバスターライフルの引き金を引く直前に突如として、刹那の体が霧散した。

「っ……………!?!」

予想外の現象にヒイロは思わず驚いた表情をしながら体を硬直させる。

霧散したGN粒子は少しの間、ヒイロを取り囲むように浮いていたが、急激に指向性を持ったかのように一箇所に集合していく。その場所はちやうどヒイロの背後だ。

ヒイロが咄嗟に後ろを振り向いた時には既に時遅く、刹那が次の行動に移っていた。

「トランザムバーストツ!!!」

瞬間、刹那のツインドライブからこれまでとは比べものにならないレベルのGN粒子が放出される。

その輝きは刹那とヒイロを包むこむどころか、鎮守府で行く末を見守っていた長門達すら包む込んだ。